熊本県文化財調査報告第 298 集

新屋敷遺跡３

－国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

熊本県教育委員会

２０１４．３

新屋敷遺跡３

－国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

熊本県教育委員会

２０１４．３

新屋敷遺跡遠景（南西から）

３Ａ区調査区全景

３Ｂ区調査区全景

３Ｃ区調査区全景

３区土層断面

３Ｃ区竪穴建物跡 SI11・SI16 内出土遺物

３Ｃ区溝跡 SD3 内出土遺物

３区竪穴建物跡出土遺物１

３区竪穴建物跡出土遺物２

３区竪穴建物跡出土遺物３

３区出土鉄製品

序文

熊本県教育委員会は、白川河川改修工事に伴い、新屋敷１丁目、白川左岸側の埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。

新屋敷遺跡は、大江遺跡群に近接し、奈良時代から平安時代にかけて、西海道駅路の西、託麻国府が存在したと推定されている出水国府跡の北に位置する遺跡です。このあと、国府は二本木へ遷っていくと考えられています。

このような立地から、新屋敷遺跡は奈良・平安時代の政治的中心地の近隣の集落の様子を垣間見ることができる遺跡です。主に８世紀から９世紀にかけての竪穴建物が多く出土した集落跡が見つかりました。

今回の調査によって出土した遺構、遺物により、その当時の人々の生活の様子の一端を知ることができた反面、地下に保存されていた貴重な遺構等が姿を消し、図面や写真等での記録保存となりました。

この報告が今までの周辺の調査や今後調査される発掘資料と併せて、この地域の歴史の資料の一つとして活用され、皆様の埋蔵文化財に対する理解と保護のために役立てれば幸いに存じます。今後とも、皆様の御指導・御助言を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力をいただきました国土交通省熊本河川国道事務所、熊本市教育委員会及び地元の方々、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成２６年３月３１日

熊本県教育長　田崎　龍一

例言

1　本書は、白川河川改修工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2　発掘調査は、上記工事に伴い、国土交通省熊本河川国道事務所の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、全額国土交通省熊本河川国道事務所が負担した。

3　現地調査は、３Ａ区は平成１８年８月２８日～平成１９年１月１８日に実施し、水上正孝が担当した。（調査区の名称については、本文中に記載）現地での写真撮影は水上・手柴智晴・遠山宏、図面作成は左記の者と現場作業員が行った。３Ｂ区は平成２０年５月１４日～平成２０年１０月３日に実施し、木庭真由子が担当した。現地での写真撮影は前田・橋口剛士、図面作成は左記の者と現場作業員が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。３Ｃ区は平成２２年８月２日～１１月１８日に実施し、上村龍馬が担当した。現地での写真撮影は上村・横田光智・木下勇・島浦健、図面作成は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

4　世界測地系での測量基準杭の設定は、３Ａ区、３Ｃ区を（株）埋蔵文化財サポートシステム、３Ｂ区を長田測量設計（株）に委託した。

5　空中写真撮影は、３Ｂ区を（株）九州文化財研究所、３Ｃ区を九州航空（株）に委託した。

6　整理作業、報告書作成は、熊本県文化財資料室において実施した。

7　出土遺物の整理作業は前田佳代子が担当し、一部を（株）イビソクに委託した。

8　遺構トレースは、前田・唐木ひとみ・坂本貴美子・村田千穂・立石美代子・結城あけみが行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

9　遺物実測、トレースは、坂本・村田・立石・結城が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステム、（株）イビソクに委託した。

10　鉄製品の処理は、今田里枝・大塚トシ子・小野美香・花田美佳が行った。

11　出土遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・蓮池千恵が行い、前田・坂本・村田（千）・立石・結城・川上薫・本田美咲が補助した。

12　本書の執筆は、第４章第２節２を上村、そのほかの文章を水上が行い、文化財資料室長後藤克弘の指導のもとに編集を行った。編集で前田・唐木・坂本・立石・結城・川上・本田が補助した。

13　遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目１６６７）に保管している。

14　本書中での人名はすべて敬称を省略させていただいた。

凡例

1　発掘遺構は遺構の種別を示す以下の記号と一連の番号の組み合わせにより表記した。

ＳＡ：塀、柵列　ＳＢ：建物　ＳＣ：回廊　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＦ：道路　ＳＧ：池

ＳＩ：竪穴建物　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＳ：足場　ＳＴ：墓　ＳＸ：その他、不明遺構等

（本書で使用していない記号も含んでいる）

2　遺構名称は、３Ａ区ＳＩ１というように、区の名称の後に遺構記号と番号で表記した。以下の注意点がある。

(1)　３Ａ、３Ｂ、３Ｃ区は、隣接した区ではあるが、調査時期が異なるため、区ごとに番号を１からカウントして表記した。またがって存在している遺構に関しては、初出で３Ｂ区ＳＩ７（３Ａ区ＳＩ 10）というように遺構名称の後に括弧書きで後の区の遺構名称を表記し、次からは３Ｂ区ＳＩ７とした。

(2)　調査全体をとおして、一度遺構番号を付けたものの、調査の過程において遺構と認められないと判断した番号については空き番としている。そのため遺構名称の最後の番号が、調査区でのその遺構の出土数とは限らない。

3　現地における土層、遺物（土器類）の色調表記は「新版標準土色帖 2004 年版」（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。

4　本書で使用している方位は、座標北を示す。

5　本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。

6　出土遺物実測図において以下の注意点がある。

(1)　縮尺は土器類が３分の１、３分の１で収まらない遺物については図に明記した。

(2)　出土遺物の実測図において、須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。

(3)　赤彩及び黒色土器Ａについては、実測図には表記せず、観察表に表記した。

(4)　土師器甕等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した

本文目次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次

第１章　序章
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の契機となる白川河川改修工事について …… 1
第３節　調査組織 …… 2
第４節　発掘調査の経過 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 13
第２節　歴史的環境 …… 13

第３章　調査の方法
第１節　調査区・グリッド設定 …… 21
第２節　基本土層概略 …… 21
第３節　調査方法 …… 21
第４節　調査の概要 …… 21

第４章　調査の成果
第１節　基本土層 …… 23
第２節　遺構・遺物 …… 23
１．３Ａ・３Ｂ区 …… 23
(1) 3A区
(2) 3B区
２．3C区 …… 72
第３節　遺物観察表 …… 109

第５章　まとめ …… 125

写真図版
あとがき
報告書抄録

挿図目次

第１図　新屋敷遺跡周辺遺跡地図（1 ／ 25000）
第２図　新屋敷遺跡内調査地点図（縮尺任意）
第３図　新屋敷遺跡全調査区位置図（縮尺任意）
第４図　調査区土層断面図及び土層模式図
第５図　３区古代主要遺構配置図（1 ／ 250）
第６図　３区古代遺構配置図１（1 ／ 100）
第７図　３区古代遺構配置図２（1 ／ 100）
第８図　３区古代遺構配置図３（1 ／ 100）
第９図　３区古代遺構配置図４（1 ／ 100）
第 10 図　３区古代遺構配置図５（1 ／ 100）
第 11 図　３区古代遺構配置図６（1 ／ 100）
第 12 図　３区古代遺構配置図７（1 ／ 100）
第 13 図　３区古代遺構配置図８（1 ／ 100）
第 14 図　３A 区 SI1 平面・断面図
第 15 図　３A 区 SI2 平面・断面図
第 16 図　３A 区 SI16･SI32 平面・断面図
第 17 図　３A 区 SI3 平面・断面図
第 18 図　３A 区 SI5･SI6･SI7 平面・断面図
第 19 図　３A 区 SI18･SI19 平面・断面図
第 20 図　３A 区 SI21 平面・断面図
第 21 図　３A 区 SI17･SI25 平面・断面図
第 22 図　３A 区 SI26･SI27･SI28 平面・断面図
第 23 図　３A 区出土遺物実測図 (1)
第 24 図　３A 区出土遺物実測図 (2)
第 25 図　３A 区 SD2[3B区 SD5・3C区 SD1]
平面・断面図
第 26 図　３A 区 SD5 平面・断面図
第 27 図　３A 区 SK2･SK5･SK7･SK8 平面・断面図
第 28 図　３A 区出土遺物実測図 (3)
第 29 図　３A 区出土遺物実測図 (4)
第 30 図　３B 区 SI2 平面・断面図
第 31 図　３B 区 SI2 かまど平面・断面図
第 32 図　３B 区 SI3･SI4･SI5･SI11 平面・断面図
第 33 図　３B 区 SI7 [3A区 S110] 平面・断面図
第 34 図　３B 区出土遺物実測図 (1)
第 35 図　３B 区出土遺物実測図 (2)
第 36 図　３B 区 SB1 平面・断面図
第 37 図　３B 区 SB2 平面・断面図
第 38 図　３B 区 SD1･SD2･SD3 平面・断面図
第 39 図　３B 区 SD4 [3A区 SD7]･SK57 平面・断面図
第 40 図　３B 区出土遺物実測図 (3)
第 41 図　３C 区 SI1 平面・断面図
第 42 図　３C 区 24x･ グリッド
竪穴建物跡集中部１
第 43 図　３C 区 SI5 平面・断面図
第 44 図　３C 区 SI2･SI6 平面・断面図
第 45 図　３C 区 24x･ グリッド
竪穴建物跡集中部２－１
第 46 図　３C 区 SI12･SI14 平面・断面図
第 47 図　３C 区 24x･ グリッド
竪穴建物跡集中部２－２
第 48 図　３C 区 SI26 平面・断面図
第 49 図　３C 区 SI36 平面・断面図
第 50 図　３C 区 24x･ グリッド
竪穴建物跡集中部３－１
第 51 図　３C 区 SI11 平面・断面図
第 52 図　３C 区 SI16 平面・断面図
第 53 図　３C 区 SI35 平面・断面図
第 54 図　３C 区 24x･ グリッド
竪穴建物跡集中部３－２
第 55 図　３C 区 SI55 平面・断面図
第 56 図　３C 区 SI39 平面・断面図
第 57 図　３C 区出土遺物実測図 (1)
第 58 図　３C 区出土遺物実測図 (2)
第 59 図　３C 区出土遺物実測図 (3)
第 60 図　３C 区 SD2･SD3 平面図
第 61 図　３C 区 SD2･SD3 断面図
第 62 図　３C 区出土遺物実測図 (4)
第 63 図　３C 区出土遺物実測図 (5)
第 64 図　３C 区出土遺物実測図 (6)
第 65 図　３C 区出土遺物実測図 (7)
第 66 図　３C 区 SK10（左）･SK11（右）
平面・断面図
第 67 図　３C 区 SK14（左）･SK16（右）
平面・断面図
第 68 図　３C 区 SK24 平面・断面図
第 69 図　３C 区 SX1 平面・断面図
第 70 図　３C 区出土遺物実測図 (8)
第 71 図　座標測地点図

表目次

第１表　新屋敷遺跡周辺遺跡一覧
第２表　新屋敷遺跡内調査地一覧
第３表　３区出土遺物観察表
出土遺物観察表①
出土遺物観察表②
出土遺物観察表③
出土遺物観察表④
出土遺物観察表⑤
出土遺物観察表⑥
出土遺物観察表⑦
出土遺物観察表⑧
出土遺物観察表⑨
出土遺物観察表⑩
出土遺物観察表⑪
出土遺物観察表⑫
出土遺物観察表⑬
出土遺物観察表⑭
出土遺物観察表⑮

巻頭目次

1　新屋敷遺跡遠景（南西から）
2　３A 区調査区全景
3　３B 区調査区全景
4　３C 区調査区全景
5　３区土層断面
6　３C 区竪穴建物跡 SI11・SI16 内出土遺物
7　３C 区溝跡 SD3 内出土遺物
8　３区竪穴建物跡出土遺物 1
9　３区竪穴建物跡出土遺物 2
10　３区竪穴建物跡出土遺物 3
11　３区出土鉄製品

写真目次

図版 1　３A 区 SI1 完掘状況
３A 区 SI2 硬化面出土状況
３A 区 SI2・SI6 完掘状況
３A 区 SI5・SI6・SI7 完掘状況
３A 区 SI17 完掘状況
３A 区 SI18 完掘状況
３A 区 SI19 完掘状況
３A 区 SI21 完掘状況

図版 2　３A 区 SI25 完掘状況
３A 区 SI26・SI27・SI28 完掘状況
３A 区 SI32 完掘状況
３A 区 SD2 完掘状況
３B 区 SI2 かまど遺物出土状況
３B 区 SI2 硬化面範囲
３B 区 SI2 完掘状況
３B 区 SI2 かまど支柱残存状況

図版 3　３B 区 SI3 遺物出土状況
３B 区 SI3 完掘状況
３B 区 SI4 遺物出土状況
３B 区 SI4 完掘状況
３B 区 SI7(3A区 SI10) 遺物出土状況
３B 区 SI7(3A区 SI10) 遺物出土状況
３B 区 SI7(3A区 SI10) 完掘状況
３B 区 SI11 完掘状況

図版 4　３B 区 SB1 検出状況
３B 区 SB1 P4 遺物出土状況
３B 区 SB2 検出状況
３B 区 SK5 鉄鏃出土状況
３B 区 SD1 完掘状況（北東から）
３B 区 SD2・SD3 完掘状況（北東から）
３B 区 SD4 遺物出土状況（北西から）

図版５　３Ｃ区 SI1 かまど検出状況
３Ｃ区 SI6 かまどそで・燃焼部出土状況
３Ｃ区 SI2･SI6 完掘状況
３Ｃ区 SI9 土層断面
３Ｃ区 SI14 遺物出土状況
３Ｃ区 SI26 かまど遺物出土状況
３Ｃ区 SI36 土層断面
３Ｃ区 SI30 かまど粘土出土状況

図版６　３Ｃ区 SI16 遺物出土状況
３Ｃ区 SI11 遺物出土状況
３Ｃ区 SI35 かまど内遺物出土状況
３Ｃ区 SD3 鉄製品出土状況
３Ｃ区 SD3 完掘状況
３Ｃ区 SD2 完掘状況
３Ｃ区 SK6 土層断面
３Ｃ区 SK14 土層断面

図版７　３区出土遺物　1
図版８　３区出土遺物　2
図版９　３区出土遺物　3
図版 10　３区出土遺物　4
図版 11　３区出土遺物　5
図版 12　３区出土遺物　6
図版 13　３区出土遺物　7
図版 14　３区出土遺物　8
図版 15　３区出土遺物　9
図版 16　３区出土遺物　10
図版 17　３区出土遺物　11
図版 18　３区出土遺物　12
図版 19　３区出土遺物　13
図版 20　３区出土遺物　14
図版 21　３区出土遺物　15
図版 22　３区出土遺物　16
図版 23　３区出土遺物　17

第１章　序章

本書は、白川河川改修工事に伴い、熊本県熊本市中央区新屋敷１丁目１－１ほか５筆に所在する「新屋敷遺跡」を熊本県教育委員会が平成１８年（２００６）から平成２２年（２０１０）に発掘調査し、その成果を取りまとめたものである。

新屋敷遺跡の所在する熊本平野は白川の下流域にあたり、熊本市の中心地に位置する。白川は阿蘇中央火口丘の一つである根子岳を源として阿蘇カルデラの南の谷（南郷谷）を流下し、同じく阿蘇カルデラの北の谷（阿蘇谷）を流れる黒川と立野で合流した後、溶岩台地を西に流下し、熊本平野を貫流して有明海に注ぐ、流域面積４８０㎢、幹川流路長７４kmの一級河川である。上流域には、これまで何度となく噴火を繰り返し、大量の火山灰を噴出して、時には流域に甚大な被害を及ぼしてきた阿蘇活火山が位置している。

流域はジョーロ型になっており、流域の約８０％を占める上流域の阿蘇カルデラは、外輪山と火口原及び中央火口丘群を形成して草原及び田畑が多く、また、細長い中流域は河岸段丘及び洪積台地上に田畑が多く、下流域は扇状地及び沖積平野で熊本市街地が広がり、河口域は水田地帯となっている。

流域の地質は、上流域では阿蘇の火山活動によって生成された阿蘇溶岩を基盤とし、地表にはヨナと呼ばれる火山灰土が厚く堆積しており、中流域は段丘砂礫層が黒色ロームで、下流域は沖積層で覆われている。新屋敷遺跡は標高約１４～１５m、遺跡の北東で蛇行する白川の流れが南西に直進する流域の左岸側に位置する。白川下流域は現在河川堤防の整備が進んできているが、大雨の際には河川氾濫が心配される地域である。

第１節　調査に至る経緯

熊本市中央区新屋敷２丁目から１丁目の白川左岸において、国土交通省熊本河川国道事務所による河岸掘削工事と築堤工事が計画された。工事予定地は新屋敷遺跡の南西端側の白川沿いであり、主に、古代～中世の遺跡を包蔵することが予想されたため、平成１５年５月２７日、国土交通省熊本河川国道事務所から熊本県教育庁文化課に埋蔵文化財確認調査が依頼された。これを受けて平成１６年２月１７日から３月１０日にかけて確認調査を行ったところ、古代の埋蔵文化財の残存が確認された。よって、国土交通省熊本河川国道事務所と文化課の間で協議し、平成１７年より、工事によって遺跡が破壊される区域について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の契機となる白川河川改修工事について

白川上流域の阿蘇地方は全国的にも雨の多い豪雨地帯である。降雨は夏期に集中し、梅雨前線による洪水が多く、特に流域面積の約８０％を占める上流域（阿蘇カルデラ）の降水量が多いうえに、雨に流されやすい火山灰土（ヨナ）を多量に含んで濁流となりやすい。

また、中流部の河床勾配がおおむね１／１００～１／３００と他の河川と比べて急であり、扇状地である熊本平野まで一気に洪水が流下することや、熊本市街地を中心とする下流域では川幅が狭いことから、濁流によって多大な洪水被害が発生しやすいといった特徴がある。

昭和２８年６月２６日（１９５３．６．２６）の大洪水では、阿蘇地方各所で山崩れが起き、火山基層を覆う「ヨナ」が洪水で流されてきて熊本市内で氾濫、堆積し、かつてない甚大な被害を被った。

この大水害を契機に、翌昭和２９年（１９５４）、「白川改修基本計画」が国により策定され、昭和３１年（１９５６）にはこの計画に基づき白川の改修工事が、左岸は熊本市中央区大江町渡鹿より河口、右岸は熊本市中央区黒髪町より河口に至る区間について始まった。主な改修工事は子飼、大江地区の特殊堤工事、洪水の阻害となった橋の改築工事、下流部における堆積土砂の浚渫、小島捷水路工事などである。この間、昭和

４２年（１９６７）に「白川改修基本計画」に基づいた「白川水系工事実施基本計画」が策定され、さらに、熊本市を中心とする市街地の拡大、土地利用の高度化が進み、資産の集中が更に進んだことから、昭和５５年３月（１９８０.３）には、「白川水系工事実施基本計画」を全面的に改定した。

その後、昭和５５年（１９８０）８月３０日の洪水の激甚災害対策特別緊急事業により、左岸は十禅寺地区から世安地区を、右岸は蓮台寺地区から二本木地区を対象区間として３ヵ年の緊急的な改修が行われた。その後も築堤工事などを行いながら、流下能力の増大を図ってきたが、平成２年（１９９０）に黒川で洪水・土石流が発生し、下流側の熊本市街部でも氾濫被害をもたらした。

熊本市街部での治水の問題点は、白川が天井川になっており、洪水時の水位は周辺の地盤より高い位置を流れ、十分な川幅も確保されていないため、洪水氾濫の可能性が高く一旦氾濫すると広範囲に氾濫水が流れ込み、都市部に壊滅的な被害をもたらす事である。

調査区が存在する明午橋から大甲橋間は、熊本の「森の都」にふさわしい景観を残す所で、樹木が両岸に繁茂しており、川面に映しだされる樹木や立田山などと相まった景観や公園が熊本市民らから親しまれているところである。しかし、この区間は特に川幅が狭く、堤防も整備されておらず、治水上非常に危険な区間となっており、熊本市中心部を浸水被害から守るうえで重要な箇所となっている。国土交通省は治水と環境の調和を図るべく、用地幅を小さくできる自立式構造の特殊堤を基本とし、堤防のデザインや水辺づくり、樹木の配置について住民の意向を採用しながら検討し、治水整備を進めているところである。

第３節　調査組織

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となり、熊本市教育委員会の協力を得て実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。

以下、当課の調査体制を記すとともに芳名を記し感謝申し上げたい。（敬称略、役職は当時）

平成１５年度（２００３）確認調査

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	成瀬烈大（文化課長）
	島津義昭（教育審議員兼課長補佐）
調査統括	高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査事務局	吉田　惠（課長補佐）
	欄杭正義（主幹兼総務係長）
	天野寿久（主任主事）
	杉村輝彦（主事）
調査担当	岡本真也（参事）

平成１８年度（２００６）本調査

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	梶野英二（文化課長）
	江本　直（課長補佐）
調査統括	高木正文（課長補佐兼調査第１係担当）
調査事務局	吉田　惠（課長補佐）
	高宮優美（主幹兼総務係長）
	塚原健一（参事）
	小谷仁志（主事）
調査担当	坂口圭太郎（参事）
	水上正孝（文化財保護主事）
	遠山　宏（非常勤嘱託職員）
	手柴智晴（非常勤嘱託職員）

平成２０年度（２００８）本調査

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	米岡正治（文化課長）
	江本　直（課長補佐）
調査統括	高木正文（課長補佐兼調査第１係担当）
調査事務局	宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
	川上勝美（主幹兼総務係長）
	山田京子（参事）
	高松克行（主任主事）
調査担当	坂口圭太郎（参事）

木庭真由子（学芸員）
橋口剛士（非常勤嘱託職員）

平成２２年度（２０１０）本調査

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　小田信也（文化課長）
木﨑康弘（課長補佐）
調査統括　村﨑孝宏（文化財調査第１係長）
調査事務局　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
元島茂（高校教育課課長補佐
兼総務係担当）
山田京子（高校教育課参事）
松島英二（高校教育課主任主事）
調査担当　上村龍馬（文化財保護主事）
横田光智（非常勤嘱託職員）
島浦　健（非常勤嘱託職員）
木下　勇（非常勤嘱託職員）

平成２４年（２０１２）調査報告書作成

整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　小田信也（文化課長）
西住欣一郎（課長補佐）
整理統括　村﨑孝宏（文化財調査第１係長）
後藤克博（文化財保護主事・
文化財資料室長）
整理事務局　川上勝美（課長補佐）
中津幸三（施設課課長補佐兼総務係長）
稲本尚子（施設課参事）
天草英子（施設課主任主事）
整理担当　水上正孝（文化財保護主事）
前田佳代子（非常勤嘱託職員）

平成２５年（２０１３）調査報告書作成

整理主体　熊本県教育委員会
整理責任者　小田信也（文化課長）
西住欣一郎（課長補佐）
整理統括　村﨑孝宏（主幹兼文化財調査第１係長）
後藤克弘（参事・文化財資料室長）
整理事務局　馬場一也（課長補佐）
広石啓哉（主幹兼文化・総務係長）
有馬綾子（参事）
天草英子（主任主事）
整理担当　水上正孝（文化財保護主事）
前田佳代子（非常勤嘱託職員）
唐木ひとみ（非常勤嘱託職員）

調査助言・指導及び調査協力者

新屋敷１丁目の方々
国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所
熊本市教育委員会
熊本市立白川小学校

調査・整理に伴う業務委託先

４級基準点測量及びメッシュ杭設置業務
株式会社埋蔵文化財サポートシステム
長田測量設計株式会社

空中写真撮影業務
株式会社九州航空
株式会社九州文化財研究所

遺構実測業務（一部）
株式会社埋蔵文化財サポートシステム

出土遺物一次整理業務（一部）
株式会社イビソク

出土遺物実測及びデジタルトレース業務（一部）
株式会社埋蔵文化財サポートシステム
株式会社イビソク

遺構実測図デジタルトレース業務（一部）
株式会社埋蔵文化財サポートシステム

第４節　発掘調査の経過

現地調査は、3A区は平成１８年8月２８日～平成１９年1月１８日、3B区は平成２０年5月１４日～１０月３日、3C区は平成２２年８月２日～１１月１８日に実施した。その間の経過は以下のとおりである。（調査日誌より抜粋）

調査日誌

平成１８年度　２００６年　［３A区］

8月２８日～３１日　３A区表土剥ぎ開始。古代の土師器破片が多く出土する。

9月１日　壁清掃、土のう作り、撹乱の掘削を始め、調査区周辺を土のうで補強する。

9月４日～５日　撹乱掘削。㈱埋蔵文化財サポートシステム（以降略称）、４級基準点設置、５m×５mのメッシュ杭設置を行う。

9月６日　雨のため現場作業中止。

9月７日　撹乱掘削を行う。撹乱内から井戸が出土する。

9月８日　撹乱掘削終了。

9月１１日　坂口参事来跡。北東側より清掃し、包含層掘り下げ開始をするが、包含層と考えていた下層から撹乱が出土したため、掘削する。

9月１２日　清掃し、撹乱を確認しながら撹乱掘削をする。撹乱壁面観察より上から、表土→暗褐色土層→黒褐色土層→褐色土層の層序の場所と、表土→暗褐色土層→褐色土層の層序の場所が確認される。黒褐色土層が堆積しない場所は暗褐色土が堆積する前に削平されたと思われる。

9月１４日、１５日　撹乱掘削。撹乱内から移動式かまどの破片、縄文後晩期の土器、布目瓦、土錘が出土する。夕方より台風養生を行う。

9月２０日～２２日　調査区北側を清掃し、暗褐色土層を掘り下げる。厚さは５～１０㎝、遺物の量は１グリッドにつき１１号ポリ袋１袋程度である。古代から近世、現代のものまで幅広い時代の遺物が出土する。

9月２５日　２１A、２１B、２２Aグリッドの黒褐色土層掘り下げを行う。２１Bグリッドから縄文土器が出土する。

9月２６日～２８日　２２Bウ～２３Aア・グリッドにかけてのＳＤ２を底まで掘削する。井戸周辺部を掘っていくと、近世の遺物が出土する。溝の底部より白磁が出土する。

１０月２日　ＳＤ２掘削を進める。ＳＥ１とＳＤ２の前後関係は、溝が埋まった後に井戸が掘られたのではと思われる。２３Aウ・エ・グリッド、１層掘り下げでかなりの量の土器が出土する。

１０月３日　ＳＤ２撮影のため、底まで掘り下げ、壁の清掃等を行う。調査区 1/20 の遺構実測図の作成開始。

１０月４日　ＳＤ２全景、ＳＤ２壁面、ＳＤ２底部硬化面、ＳＥ１写真撮影。硬化面はＳＥ１に対し直線的にはつながっていないため、ＳＥ１に向かうためにできた硬化面とは考えにくい。

１０月１０日　２４ｚ、２３ｚ、２層掘り下げ。ＳＥ１実測。

１０月１１日　高木補佐来跡。調査指導をいただく。２４ｚ・グリッドで竪穴建物跡とかまど跡が出土する。

１０月１２日　２４ｙイ・グリッドからかまど跡が出土する。南側に黒い方形が見えるので竪穴建物跡と思われる。北東方向の範囲は黒土の混ざりがあり、プランの確定できなかった。昨日の竪穴建物跡は南西側に５m程の広がりがあるように思われるが、かまど跡との方形プランを考えるとやや大きい。竪穴建物の切り合いがあると思われる。包含層掘削で南西側に進むにつれ、遺物の量が多くなってきている。

１０月１３日　南西側の２層掘削を進める。

１０月１６日　２６ｘア・グリッド、調査区隅に方形の竪穴建物跡と思われる遺構が見られる。また、２５ｘウ・グリッドに竪穴建物跡の切り合いが見られる。２３ｚア・２４Aエに南西側に向かって溝状遺構が残存すると思われる。

１０月１７日　２３ｚア・グリッド付近の３層土が西側に向かって急に落ちている。土は１層のものであるため、溝の残存と考え掘り下げていく。２３Aエ・グリッドの杭の南西側とその南側に硬化面が残存する。２３ｚア・グリッド杭の南側に方形の竪穴建

物跡の一部が２箇所見られる。ただ広がりが特定できない。２３Ａア･グリッドの壁面にかまど跡と焼土、移動式かまどの遺物が出土する。

１０月１８日　２３ｚア・グリッドで溝と想定していた遺構を掘り下げていったところ、硬化面が出土する。この硬化面は範囲が広いため、竪穴建物跡の切り合いと思われるが、確定できない。この硬化面が１層にあり、１層が西側に向かって厚くなる。竪穴建物跡横にトレンチを掘り、断面を確かめると、３層を削って１層の土を入れ整地しているようである。

１０月１９日　２４ｚエ・グリッド付近、２４ｙイ・グリッド、２４ｚウ・グリッド付近に竪穴建物跡を検出する。他に多くのピットを検出する。

１０月２０日　中央部付近を清掃し遺構検出を行う。竪穴建物跡などは検出できなかったが、多くのピットが検出された。ピットを掘り下げ測量していく。

１０月２５日～１１月２１日　作業員任用期間の関係で、作業停止する。調査員で図面、写真の整理等を進めていく。

１１月２２日　作業再開、南側ピットの掘削を行う。ピット内から石鏃が出土する。

１１月２４日　調査区南側掘削を行い、中央部、北側とレベルを合わせる。

１１月２７日、２９日、３０日　雨のため、土器の整理を行う。これまでの掘り下げから出土した遺物には、墨書土器、縄文土器がかなりの数出土している。墨書土器では、杯の底部外側に『榎本』(?) と書かれているものが多い。２１B・グリッド、２４z・グリッド、２３A・グリッド付近で縄文土器が多く出土している。

１２月１日　２５ｙ、２５ｚから南側を清掃、遺構検出を行う。２６ｙウ・グリッド付近に円形の遺構が検出される。２４ｘア・グリッドの竪穴建物跡を掘削すると、浅いところで硬化面が出土する。

１２月４日　ＳＩ１、ＳＩ２、ＳＩ３のかまどを残して掘削する。

１２月５日　ＳＩ１について、グリッドに分けて掘り下げを行う。西側には５㎝程埋土が残っているが東側はほとんど埋土が残存しない。東側から北側壁にかけて溝が確認され、溝に囲まれた中心部にはピットが検出された。主柱穴の可能性が考えられる。ＳＩ２について、グリッドに分けて掘り下げを行う。西側にかまどの痕跡が確認できるものの、粘土塊が散在しており、破壊されたものと考えられる。ＳＩ１、ＳＩ２、ＳＫ１、ＳＫ２、不明遺構の実測。ＳＫ１、ＳＫ２完掘状況写真撮影。

１２月６日　ＳＩ５、硬化面を外すとその下に硬化面が出土する。ＳＩ２、ＳＩ３土層断面実測、ＳＩ１、ＳＩ２土層断面写真撮影。

１２月８日　ＳＩ１は土層断面観察用のベルトを外す。壁際溝はベルトを残して掘削を進め、溝の土層断面を実測する。ＳＩ２は出土遺物のポイントを記録し、実測を行う。ＳＩ３、実測を行う。

１２月１２日　ＳＩ１、ＳＩ２完掘。ＳＩ２の下から竪穴建物跡が検出される。不明遺構のベルト外しを行う。３区中央付近、竪穴建物跡では、南側は輪郭を確認できるが、北側への広がりは確定が難しい。ＳＩ２、かまど跡、完掘状況の写真撮影を行う。

１２月１３日　坂田参事に来ていただいて、先日の中央付近の竪穴建物跡の北側の広がりを見ていただく。竪穴建物跡の上に１層土が残っているため、１層土を落とさないと見えないとのことであった。しかし中央部付近の１層土からは硬化面が出るため、迂闊には下げられない難しさがある。

１２月１５日　ＳＩ３、ＳＩ４、ＳＩ５を掘り下げる。２４ｚ付近に複数の竪穴建物跡があるが、切り合いは分からない。

１２月１８日　ＳＩ４建物内Ｐ１、Ｐ２ベルト外し。２３Ａア付近で硬化面が出土する。ＳＩ４硬化面範囲、ＳＩ５、ＳＩ６、ＳＩ７土層断面を実測する。ＳＩ５、ＳＩ６、ＳＩ７土層断面写真撮影。２３Ａエ付近に硬化面が出土し、竪穴建物跡があると思われるが、平面だけでは切り合いが追えない。ＳＩ１のかまど跡は、土層注記、断面図が終わらなかった。

１２月１９日　ＳＩ１かまど跡土層断面、ＳＩ５土層断面、ＳＩ７土層断面実測図作成。ＳＩ１住居内かまどのベルトも外す。

１２月２０日　ＳＩ５、ＳＩ６、ＳＩ７の切り合いを、硬化面を外し、平面で土の色から判断すると、新しい順にＳＩ５、ＳＩ７、ＳＩ６と考えられる。Ｓ１１

土層断面、硬化面範囲、ＳＩ５硬化面範囲実測図作成。ＳＩ５硬化面範囲、ＳＩ６完掘状況、ＳＩ１１土層断面、ＳＩ１０土層断面、硬化面遺物出土状況写真撮影。２３ｚア・グリッド付近の硬化面の南側、１層を残していたところを掘り下げていく。

１２月２２日　２３ｚ付近を西側に掘り下げていく。

１２月２５日　ＳＩ１４硬化面を外す。北側にＳＩ１６を検出する。２３ｚア・グリッド付近で西側を掘り下げていくと硬化面が出土する。ＳＩ１完掘状況、ＳＩ５完掘状況、ＳＩ７完掘状況、ＳＩ１４硬化面出土状況写真撮影。

１２月２６日　雨のため遺物の整理、図面チェック等を行う。

１２月２７日　ＳＫ５、ＳＫ６、ＳＫ７検出及び掘削。ＳＫ５より鉄鏃が出土する。ＳＩ１６ベルト外し。その際、剥片石器が出土する。ＳＩ２実測。Ｓ１６、ＳＩ１７土層断面写真撮影。ＳＩ2、ＳＩ１４、ＳＩ１６の切り合いについて、硬化面の高さから、新しい順にＳＩ２、ＳＩ１６、ＳＩ１４と考えられる。熊本市の諸富氏が来跡され、熊本市の調査では新屋敷遺跡は縄文の遺物は多いが遺構は見えないことが多いこと、墨書土器も多く出土するとのお話を伺った。

１２月２８日　雨のため遺物の整理、図面チェック等を行う。

1月4日　ＳＤ４、環状になっていて、深さは上端より５０㎝程である。性格は不明。ＳＩ１６完掘。ＳＩ１６完掘状況写真撮影。

1月5日　ＳＩ１５、ＳＩ１６、ＳＩ１７主柱穴検出及び掘削を行う。ＳＩ１６は他の竪穴建物跡に比べやや小ぶりである。四隅に近い位置に主柱穴（４本）を確認する。ＳＩ１４に削平され残りは悪いが、かまど跡の残存と思われるものがあり、焼土片、炭化物、砂岩の残存を確認できる。ＳＩ１４はＳＩ１６よりも主柱穴（４本）は内に入り、ピットもやや大きい。ＳＩ２のかまど跡付近に炭化物、焼土片の混じるところがある。ＳＩ２のかまどに壊されたＳＩ１４のかまど跡の残存部分であろうか。ＳＩ１４はＳＩ１６を壊す。掘方はＳＩ１４がやや深い。

1月9日　ＳＩ１２、ＳＩ１３付近、遺構検出後掘り下げていく。ＳＩ１７完掘状況。ＳＤ４土層断面(東、南、西）写真撮影。

1月１０日　ＳＩ１８、ＳＩ１９、ＳＩ２０遺構掘削を行う。ＳＩ１８では主柱穴(４本)を確定できたが、ＳＩ１９は建物内ピットの配置がやや中央寄りのため主柱穴と確定できなかった。ベルトを外した後に確認するようにする。ＳＩ１４、ＳＩ１６完掘状況、ＳＩ１８、ＳＩ１９土層断面写真撮影。

1月１１日　ＳＤ２より東側、精査を行う。ＳＩ１８、ＳＩ１９土層断面実測。ＳＩ１８、ＳＩ１９完掘状況写真撮影。

1月１２日　ＳＩ２１掘削。ＳＩ１７、ＳＩ１８平面実測。中央付近ベルト断面、ＳＩ２１かまど付近焼土散布状況写真撮影。中央付近より北側では竪穴建物跡が切り合っているようである。

1月１５日　南側ピット掘削。ＳＩ２１掘削、ベルト外し。調査区中央付近ベルト断面、ＳＩ２１ベルト断面実測。ＳＩ２１ベルト写真撮影。

1月１６日　ＳＩ21、ＳＩ26、ＳＩ27、ＳＩ25掘削。ＳＩ２１完掘状況、ＳＩ２５完掘状況、ＳＩ２６、ＳＩ２７完掘状況写真撮影。

1月１７日　ＳＩ１６北東側がまだ３層土が出土していなかったため、トレンチ１を入れると、かまど跡と思われる焼土が見られたので、トレンチ２を掘って、断面を確認する。断面の立ち上がり等から建物の範囲を確定し掘り下げていく。ＳＩ３２を３層上で検出し、写真撮影、実測を行う。トレンチ２では縄文土器が出土するが、同じトレンチ内で須恵器、土師器も出土するため、縄文の遺構は壊されていると考えらえる。高所作業車での全体写真撮影のため、北東側より清掃を始める。

1月１８日　朝から全体写真撮影のための清掃を行い、午後より全体写真撮影を行う。高所作業車より調査区と明午橋、白川を入れた写真と調査区のみの写真を撮影する。

平成２０年度　２００８年　[３B区]

5月１４日、１５日　表土剥ぎ開始、撹乱が少なく残りが良い。遺物は土師器が多い。撹乱の中にはコンクリート等はあるが、建物の基礎等ではない。煉瓦の柱なども深く入ってはいなかった。

5月１６日　調査区北および東壁を出しながら土のうを作り、調査区の周囲に並べる。

5月１９日～２２日　清掃、撹乱を掘削する。

5月２３日　大溝の北東側のへりを出していく。

5月２６日　撹乱掘削終了後に清掃をしながら遺構を検出する。大溝より南側に竪穴建物跡が４、５軒切り合って残存する。かまどを持つものも残存する。時期差はあまりないかもしれない。大溝より北側に掘立柱建物１軒確認できる。１区の調査のため、一時調査が後回しになるためブルーシートを張る。

7月１１日　遺構検出。掘立柱建物跡１軒、竪穴建物跡または土坑が２０軒程切り合うようである。検出状況の写真撮影を行う。

7月１４日　ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＫ３、ＳＫ４、ＳＤ１、ＳＤ２遺構掘り下げ。検出時点では、竪穴建物跡が切り合いながら調査区一面に広がっているように考えていたが、大きさも小さく、床面らしきものの痕跡も見られないことから、方形の土坑である可能性が高いようである。つまり、竪穴建物跡と土坑が入り混じっている。特にＳＫ３からは御領式や阿高式などの縄文土器が多数出土しており、遺構の性質を検討する必要がある。ＳＫ１、ＳＫ２、ＳＫ４も同様に遺構の性格が今一つ不明である。

7月１５日　ＳＫ３、ＳＫ４、ＳＫ５、ＳＫ６、ＳＫ７、ＳＫ８掘削。柱穴掘削。ＳＫ４土層断面実測。ＳＫ４遺物出土状況、ＳＫ２遺物出土状況、ＳＫ７土層断面、ＳＫ７完掘状況、ＳＫ５土層断面の写真撮影を行う。

ＳＫ４は土層断面図作成後ベルトを外す。土坑内下面から、ピットが円を描くように検出された。どのような性格を持つものなのか検討する必要がある。ＳＫ５は断面ベルトを残して半截。ＳＫ３と同様に縄文土器が多く出土している。土師器も２割程度出土する。現在の調査面下に縄文の層が残存するかもしれない。ピットを３㎝程掘り下げ、柱痕の検出を行い掘立柱建物跡の検討を行う。現在大溝北側に１軒確認する。

7月１７日　ＳＢ１土層断面図、平面上端作成後完掘。ＳＢ１Ｐ４から土師器皿、Ｐ４隣にもう一つピットがある模様。Ｐ３から石鏃が出土する。ＳＫ４内部遺構では、Ｐ２、Ｐ６は遺物が出土する。ＳＫ５では掘り過ぎた下面から縄文後期中葉から晩期前半の遺物が多量に出土する。

7月１８日　ＳＤ１は昨日に引き続きベルトを残しながら掘り下げていく。調査区北壁付近のＳＤ内から円礫が多く出土する。しかし特に並んで検出される訳ではない。ＳＤ下面からも離れている。ＳＫ１０はベルトを残して半截する。埋土内から土師器の皿が出土する。ＳＫ８土層断面実測、完掘。ＳＫ９、ＳＫ１０土層断面実測。

7月２２日　ＳＢ１Ｐ４及びそれと切り合うピットから出土した土師器皿が接合（ＳＢ１Ｐ４ＲＰ１、ＳＢ１Ｐ４ＲＰ２）。ＳＫ９、ＳＫ１０下より内部遺構検出される。特にＳＫ１０下の内部遺構は、ＳＫ１０と切り合った土坑下にも広がっている様子である。ＳＫ１２、断面ベルトから土師器が多く出土する。

7月２３日　ＳＫ１２、ベルトはずしを行い、SK1とともに実測し写真撮影を行う。

7月２４～２５日　現状で記録できる平面図を作成する。ピットの色分けを行い掘立柱建物跡の検討を行う。

7月３０日　遺構掘削。

7月３１日　夏休み発掘体験のため、掘削用ピットを半截し、土層断面の実測を行う。

8月１日　発掘体験のための現場の清掃、その他準備を行う。

8月２日　午前中は発掘体験、午後は遺構内埋土の掘削を行う。

8月６日　ＳＢ４完掘写真撮影後、断面図作成と注記が終わっていたＳＰ１の完掘を行い、その現状を撮影した後、ＳＩ１のベルトを外した。ベルト直下付近にあった床を掘り込む黒い層がＳＤ３のものであることが分かり、ＳＩ１周辺の遺構埋土が今一つ判然としない原因は内部にＳＤ３が走っているためと考えられる。東側の土坑群はある程度目途がついてきた。掘立柱建物跡とならなかったピット群については、西側へシフトした際に並行して調査していくことになる。

8月７日　東半部で遺構掘削がまだ終わっていない部分を中心に精査、半截、断面、完掘（一部）の作業を行った。しばらくは既存の遺構調査と並行して、東半部

で精査をかけ、見落としていた遺構を掘削していく。東半部西側は３層上面まで削平されているため、新たな遺構を確認することはないと思う。遺構調査が済んだ東半部東端で複数のピットが確認され、半截すると、柱痕が残ったピットであることが分かった。配置状況が不明確なので、光波で座標を確認しつつ調査していく。

８月１１日　午後から雨が降り、作業を中止し、遺物等の整理を行う。埋文サポートの椎葉氏ら２名が来跡し、遺構実測委託の打ち合わせを行った。１８日から入ることになる。先週に引き続き遺構掘削と並行して遺構検出を行い、残っていた東半部西側でいくつかのピットと土坑を新たに確認した。東半部東側は建物跡等一部の遺構を除いては、ほぼ完掘している状況で、平面図作成に着手した。埋文サポートとの分担を考えて、自前で行うものと依頼する分を分けておかねばならない。

８月２１日　埋文サポート、調査区枠の測定のため来跡。主に昨日半截したピットの断面写真を撮影し、単層のものは略図、複層及び柱痕が認められたものは実測図を取るものとし、実測図が完了したものから完掘し、その状況を撮影した。西半部の調査に着手し、新しい順に遺構掘削を開始した。４～５軒切り合う密集部と、単独か２軒程度と密度が低い部分との間に溝が確認され、ＳＤ４とした。方形の遺構をいくつかトレンチ掘削後、半截してみたが、硬化面や焼土片の散布等は認められず、住居である可能性は低いと判断し、ＳＫ～という呼称を付けた。付近に２箇所かまど跡が確認されており、それらは粘土粒が混じる埋土を持つ方形プランの遺構に属すると思われる。

８月２２日　雨のため、３時以降の作業を中止し、遺物などの整理を行う。半截済みピットの記録と完掘を行い、全体の９割程度完了した。残りは実測が必要なもの、ピット色分け未了のものが残っている。ＳＩ１かまどの埋土掘削及び記録作業がほぼ終了した。粘土塊が露出している土坑をＳＫ３９とし、トレンチ掘削後半截した。部分的には硬化面が認められるなど住居のような要素を持っている。ただし、ＳＤ３や埋設管坑によってほとんどを破壊されているため全容を掴むのは不可能である。

８月２５日　ＳＩ１かまど、ＳＫ３６、ＳＫ３７、ＳＩ３掘削。ＳＩ１かまど内より甑の把手部分が出土する。

８月２６日　ＳＤ４、ＳＩ３、ピット、土坑掘削、ＳＤ４内北東壁付近から、土師器、須恵器、縄文土器が集中して出土する。写真撮影を行い、遺物出土状況の実測図を作成する。

８月２７日　ＳＩ３、ＳＤ４、ピット、土坑を掘削する。ＳＫ４６より焼土が出土、範囲を実測する。午後から雨が激しくなったため、土器整理の作業に切り替える。

８月２８日　ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＩ４、土坑、ピット掘削。ＳＩ２は、かまど跡北隣より、割と大きめの土器片（１個体分）が出土する。南隣からも土器片が多く出土する。硬化面も検出する。ＳＩ３は遺物を点上げし、内部遺構の検出まで行う。ＳＩ４は検出状況の写真撮影を行う。ＳＫ４７と大溝の間にもう１個土坑があるようである。深さはあるが、炭、焼土などはまだ検出していない。

８月２９日　図面や写真等の記録作業を中心に行う。昨日検出状況を撮影したＳＩ４、ＳＫ５４、ＳＫ５６の調査に着手した。ＳＩ４はベルトを設定してトレンチを横に掘り、層別に半截した。ＳＫ５４、ＳＫ５６は半截後、写真撮影、断面図作成、完掘を行う。また、ＳＫ３６は内部遺構の調査を終了し、その状況を撮影した。いくつかの遺構から遺物が出土していたため、その状況を実測した。ＳＩ２のプランは予想以上に大きく、南北４～５ｍ×東西３ｍ程度と推測される。かまど跡もよく残存しており、その周囲から壺と甑と思われる大型の土器片が確認された。廃絶時そのままの良い状態で残っているものと思われる。

９月１日　ＳＩ２のかまど跡両脇で検出していた甑、壺は、図面を書いている時に、さらに土器片が埋まっていることを確認したため、すべて検出し実測している。明日点上げし、かまど跡調査へ移る。甑、壺、アップの遺物出土状況写真を撮影する。ＳＩ３で、柱穴と想定していたピットは浅いことから柱ではないと判断する。明日完掘写真を撮影し調査終了。Ｓ

Ｋ５９～６３は土層図を明日実測し、完掘させる。

9月2日　最も竪穴建物跡が密集している部分の検出。５軒切り合っているようである。検出写真撮影後、ＳＩ６から調査に入る。ＳＩ４は完掘写真を撮ったので内部遺構の検出を行う。ＳＩ３は内部遺構を処理し完堀写真撮影。その後下面検出遺構の調査を行う。

9月3日　ＳＩ２はかまどから多量の土器片が集中して出土している。焼成前に穿孔（Φ１０㎜程、６箇所残り）を施した土器片出土する。甑底部と思われるが、器厚が１㎝にも満たないため、器種は要検討である。ＳＩ６はかまど跡の調査に入る。ＳＫ４６は、かまど跡の土をサンプリングする。

9月4日　午後から埋文サポートによる遺構実測が行われるため、調査終了した箇所の完掘写真を撮影し該当箇所を引き渡した。ＳＩ２及びＳＩ６のかまど部分の調査を進め、ＳＩ２は煙道部分を除く殆どの部分で、そで残存部位を確認した。部分的に壊れているものの、かまど本体の形状がおおよそ把握できると思われる。なお、そで石としていた部分は支柱の可能性があり、そで石が存在していたであろう場所にはなく、崩壊後移動したものと思われる。付近に砂岩状の塊が転がっており、そで石の可能性がある。ＳＩ６は基部を残してほとんどの部分が消失していることがトレンチ調査で分かった。よって、残存状況と設置状況の確認に切り替え、近日中に完掘する予定。

9月5日　ＳＩ２のかまど壁と思われる粘土塊及びその周辺でおびただしい量の土器が出土したため、その状況を写真撮影し、実測後土器は取り上げた。それによって土器で隠されていた粘土部分を確認でき、よりはっきりとした構造を知ることができそうである。ＳＩ７は遺物出土状況を記録した後、内部遺構調査に着手した。ＳＩ１１、ＳＩ８に新たに着手し、未着手はＳＩ９、ＳＩ１０を残すのみとなった。ＳＩ６かまど跡部分は残存部分の構造を記録することに着手した。新たにＳＰ９０～９２を確認し、９０、９１は完掘、９２は半截の状態である。

9月9日　大溝以南、竪穴建物跡、ピット等の調査に終日取りかかる。ＳＩ２のかまど跡は依然として土器が集中して出土。かまど東から出土した土器（甑底部か）を熊本大学の杉井准教授、熊本市林田氏に見ていただいたところ、器種は甑胴部片で胴部付近まで穿孔が入る。このような土器は古墳時代前期頃に見られる。例：福岡市西新町遺跡（古墳前期）。朝鮮半島系に多く見られる形。器厚は十分、むしろ薄い方が熱伝導がよい。他に出土している土器類例を集める必要あり。

9月１０日　ＳＩ２内部の硬化面及びかまどそでの残存状況を実測している間、ほかの遺構の処理を進め、残る遺構はＳＩ２のみとなった。ＳＩ２内部の硬化面は意外に広範囲に渡っており、残存している床面の６０％以上において確認された。また、かまどそで部分で崩壊している部分は記録後取り除いた為、硬化面の範囲を確定させ、記録写真を撮影したい。

9月１１日　残る遺構がＳＩ２のみであったこと、ＳＩ２もかまどを除いてほとんどが終了していたことから、周辺整備を進めながら断面図や平面図の実測作業を行った。作図終了後土層に合わせて埋土を掘削し、出た排土はサンプルとして層ごとに袋づめした。ある程度掘削が進行して土層観察用ベルトを撮影できる状態になったため、清掃し写真撮影した。撮影後ベルトを撤去し、かまど構築時の掘方を平面で確認できる状態になった。米岡文化課長、高木課長補佐等が視察され、現場の状況を説明した。

9月１２日　ベルト撤去が一部残っていたＳＩ２かまど跡で上部の粘土を取り払ったところ、焼けた砂岩状塊が頭を出し、そで石との位置関係から支柱であると断定できたので、検出状況を撮影した。このことから一部（煙道のほとんど）が消失しているとはいえ、ほとんどの部分が破壊されずに残っていたことが明らかになった。加えてかまど周辺の土器が残置されていた状況から、廃絶が突如として起き、その後何も手を加えられず埋没したことを示すことは興味深い。ＳＩ２の記録が終了した時点で３Ｂ区２層の調査が終了し測量杭の撤去や土柱の掘削等行った。

9月２０日　空撮のため清掃を行う。

9月２１日　ラジコンヘリでの空撮を行う。

9月２２日　３層を下げ、縄文時代の遺構検出を行う。

土坑、ピットが検出されるが、現状では縄文時代と思われる遺構は検出されていない。縄文土器が集中して検出されたところもあるが、遺構に絡んだものではない。

9月２４日　３層下げを行った際に検出した土坑、ピットの調査を行う。

１０月１日～３日　壁面の実測。３Ｂ区調査終了。

平成２２年度　２０１０年　[３Ｃ区]

8月２日～６日　表土剥ぎ。落ち込み部分があると考えていたが、そんなに広い範囲ではなさそうである。北側から実施。極端な落ち込みは見られず、客土のすぐ下から３層が表れる。また、オリーブ層が出てくるところもあり、撹乱に壊されているところが多い。今のところ遺構らしきものは見られない。

8月９日　表土剥ぎ６日目。朝から撹乱の土を除去し、根回し跡の壁を出す作業を行う。ある程度撹乱のラインが分かるので表土除去状況での写真を撮る予定である。

8月１０日　写真前の清掃を行い、表土除去状況写真撮影を行う。

8月１２日、１７日～２０日　撹乱撤去を行う。

8月２１日　夏休み発掘体験。

8月２３日　撹乱撤去を行う。

8月２４日　１Ｄ区高所作業車での撮影の際、３Ｃ区も入れて撮影を行う。

9月１日　溝周辺の撹乱掘削を行う。村﨑係長、長谷部参事来跡。これからの調査について３Ｃ区の表土剥ぎの際に撹乱をスコップ２杯分取る。今後の調査について国交省との協議の必要性があると指示を受けた。

9月２日　溝周辺の撹乱掘削と北側の撹乱の取り残し、南東側の１層掘削を実施する。ＳＤ１の土層断面写真撮影。

9月３日　土層断面の清掃と１層包含層掘削、撹乱掘削を実施する。

9月６日　朝から中央部川側の撹乱を掘削する。台風養生、シートを畳んでおく。ベルトコンベアの配置を決める。

9月７日　雨天のため現場作業を中止する。

9月８日　撹乱掘削と古代のピットを半截する。ＳＤ１はスコップで上層から中層までを掘削し、その後は移植ゴテで掘削を行う。

9月９日　３Ｃ区の南東側を拡張して、遺構の出土状況を調べる。ＳＤ１は最下層の掘削を進める。白川側が浅く、宅地側が深くなるのは白川の水位が高かった時期に掘られた可能性が高い。

9月１０日　包含層の残りがいい所から遺構が出土している。竪穴建物跡２、３軒の重なりが分かる。調査区の端なのでプランが分かりにくいため、来週トレチなどから考察して掘り始める予定である。
また、今度表土を剥ぐところからも建物のかまどらしきものが見える。意外と残りがよいのかもしれない。

9月１３日　３Ｃ区の拡張部分の表土剥ぎを行う。撹乱を取ってみると今までより包含層の残りがいい所がある。

9月１４日　表土剥ぎ２日目。撹乱を底まで抜くとかなり深くなるため、バケット１個分で止める。ベルトコンベアを並べ替えて、溝から道の部分を下げ始めた。また、表土の浮き土や撹乱部分の周りの壁を出し始めた。ＳＤ１完掘状況写真撮影を行う。

9月１５日　表土剥ぎ３日目。拡張して表土を剥いだ部分の約１００㎡に包含層（２層）が黒々と残っており、大きな撹乱を除去した断面からもかまど跡が数個検出できる。ただし、平面での切り合いが分からないことと、密度が高いこともあって、２層を除去してからでないと分かりづらい。ただ、川側に２層らしき包含層が厚くなっており、元地形が下がっているからなのかを判断するためにトレンチを入れて確認しないと分からない。もし、その厚い層がすべて建物の埋土なら、とんでもない数になる。

9月１６日　撹乱掘削とピットの半截を行う。ピット類は掘立柱建物跡になるものは少なく、埋土の土質でＡ、Ｂ、Ｃに分類している。

9月１７日　撹乱掘削と遺構検出のための清掃を行い、建物類の検出を行う。その後、検出状況の写真撮影を行い、ＳＩ１を掘削を進めると、硬化面が出土する。硬化面検出状況の写真撮影を行う。

9月２１日　ＳＩ１、ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＩ４埋土掘

削を行う。どの竪穴建物跡もかまどの位置が不確かであり、硬化面が薄くて分からないものもある。

9月22日　雨のため現場作業を中止する。

9月24日　ＳＩ１、ＳＩ３、ＳＩ４ベルト掘削。ＳＩ２、ＳＩ３、ＳＩ５土層断面写真撮影。

9月28日　ＳＩ３の完掘状況の写真に向けて清掃を実施し完掘状況の写真撮影を行う。その後、ＳＩ１やＳＩ２、ＳＩ５の掘削を行い、かまど跡の土層断面の写真撮影を行う。

9月29日　ＳＩ１かまど検出状況、ＳＩ２かまど土層断面撮影を行う。

10月1日　ベルトコンベアを移動して、川側の様子を見るためにトレンチを入れた。ほとんどベルトコンベアの下で撹乱は止まっていた。かまど跡が撹乱の断面からも検出できるのでまだあるのだと分かる。

10月5日　撹乱掘削を進める。ＳＩ８ベルト除去。ＳＩ９掘削。ＳＩ１、ＳＩ５かまど土層実測。ＳＩ８土層断面、ＳＩ６かまど断面、ＳＸ１土層断面、ＳＩ６かまど写真撮影。

10月6日　写真撮影、遺構検出のために清掃を実施する。ＳＩ５完掘状況、ＳＸ１遺物出土状況、ＳＩ８完掘状況、ＳＩ９土層断面、ＳＩ５土層断面写真撮影。

10月7日　ＳＩ１１清掃、ＳＩ１完掘、ＳＩ５かまど、ＳＫ５土層断面、ＳＸ１上端、ＳＩ９遺物出土点上げ実測。ＳＩ１０完掘状況、ＳＩ６かまど完掘状況、ＳＩ９遺物出土状況、ＳＩ１かまど完掘状況、ＳＫ５遺物出土状況、ＳＫ１完掘状況写真撮影。建物の切り合いが多く、立ち上がりがよく分からない部分がある。

10月8日　ＳＩ１２、ＳＩ１３、ＳＩ１４掘削、ＳＫ５完掘、ＳＫ６掘削。ＳＩ１完掘状況、ＳＫ５完掘状況、ＳＩ１１土層断面写真撮影。

10月12日　ＳＫ６、ＳＫ７、ＳＸ２、ＳＩ１１ベルト外し、ＳＩ１２完掘、ＳＩ１４完掘、写真前清掃。ＳＩ１１、ＳＩ１２、ＳＩ１４、ＳＩ１５土層断面、ＳＩ１２、ＳＩ１４平面、ＳＫ６土層断面、ＳＩ１１、ＳＩ１２、ＳＩ１４遺物出土状況実測図作成。ＳＩ１１、ＳＩ１２、ＳＩ１４遺物出土状況、ＳＩ１２、ＳＩ１４、ＳＩ１５土層断面、ＳＩ１２、ＳＩ１４、完掘状況写真撮影。

10月13日　ＳＩ１３完掘、ＳＩ１８、ＳＩ１６、ＳＩ１７、ＳＸ２掘削。ＳＫ５、ＳＫ６実測。ＳＩ１１、ＳＸ２、ＳＩ１３完掘状況。ＳＩ１３、ＳＩ１５土層断面写真撮影。

10月14日　ＳＫ６、ＳＫ７掘削。ＳＩ１９、ＳＩ１８完掘。ＳＫ６、ＳＫ７、ＳＩ１６土層断面、ＳＩ１７かまど跡、ＳＩ１８土層断面、ＳＩ１９平面、ＳＩ１８平面、ＳＩ１土層断面。ＳＩ１３、ＳＩ１５完掘状況、ＳＩ１６土層断面、ＳＩ１７かまど跡、ＳＩ１８土層断面、ＳＩ１８完掘状況写真撮影。

10月15日　ＳＤ２トレンチ掘削。ＳＩ２１、ＳＩ２２掘削。ＳＩ１６遺物出土状況。ＳＫ８、ＳＫ９、ＳＫ１０、ＳＩ１７かまど、ＳＩ２０土層断面、ＳＫ６完掘状況写真撮影。ＳＩ２２遺物出土状況、ＳＩ２１土層断面、ＳＩ２３土層断面、ＳＩ２２完掘状況、ＳＩ２１完掘状況、ＳＩ２０完掘状況。ＳＩ２３土層断面（修正）写真撮影。

10月19日　ＳＩ２３かまど、ＳＩ２４、ＳＩ２５、ＳＩ２６掘削、ＳＤ２掘削。ＳＩの土層及び平面、ＳＩ２３かまど、ＳＩ１６かまど実測。ＳＩ２３かまど土層、ＳＩ２５、ＳＩ１７完掘状況、ＳＩ１６かまど粘土出土状況、ＳＩ２４土層断面、ＳＤ２土層断面写真撮影。ＳＤ２からの出土遺物が多く、建物跡群がＳＤ２によって切られている。しかも、ＳＤ２は不自然な曲がり方を見せて、白川の方に流れている（落ち込んでいる）様子。

10月20日　ＳＤ２トレンチ２掘削。ＳＩ２３かまど、ＳＩ２４平面実測。ＳＩ２４、ＳＩ２３完掘状況、ＳＩ２３かまど、ＳＩ１６燃焼部、ＳＤ２骨出土状況写真撮影。ＳＤ２のトレンチ２を開ける。大きめの土器や骨（獣骨）が出土する。分層してもＳＤ２の下の土が明るく焼土や炭化物が混じるのでよく分からない。溝の形成過程がどうなっているのかがポイントである。

10月21日　ＳＤ２、ＳＩ２７、ＳＩ２８掘削。ＳＤ２土層断面１、ＳＩ２７かまど、ＳＩ１６かまど実測。ＳＩ２７かまど、ＳＩ１６かまど完掘状況。ＳＩ２６土層断面、ＳＩ２８土層断面、ＳＩ２７かまどそで石写真撮影。

１０月２２日　ＳＤ２完掘。ＳＩ２９かまど土層断面、ＳＩ２７かまど燃焼部、ＳＫ１１土層断面、ＳＩ２６かまど土層、ＳＤ２土層断面写真撮影、実測。ＳＤ２は、土層断面を３つ残して完掘の状態にしている。写真と図面を入れて、その下を掘り出さないといけない。

１０月２６日　写真前清掃。ＳＩ２６かまど粘土出土状況、ＳＤ２完掘、ＳＩ２８、ＳＩ２６かまど遺物、燃焼部、ＳＩ３１、ＳＩ２６完掘、ＳＩ３０完掘、ＳＩ３３土層断面写真撮影、実測。

１０月２７日　ＳＫ１３、ＳＫ１４完掘、ＳＩ３３、ＳＩ３４完掘、ＳＩ３１かまど土層、ＳＩ２９かまど完掘、ＳＩ３１かまど燃焼部、ＳＩ３５土層断面写真撮影、実測。

１０月２８日～１１月１日　ＳＩ３５、ＳＩ３６、ＳＩ３８、ＳＩ４０、ＳＩ４１、ＳＩ４２、ＳＩ４３の調査を進める。

１１月２日～１１月１８日　ＳＤ２下に掘ったトレンチ断面と、建物の広がりを確認するためのトレンチから、ＳＤ２と建物群下部にＳＤ２と別のもう１つの溝（ＳＤ３）が掘られていることを確認した。ＳＤ２下に掘ったトレンチ断面から層位を確認し、層位の大きなまとまりごとに掘削を行う。

それと並行して、ＳＩ３５、ＳＩ３９、ＳＩ４０、ＳＩ４２、ＳＩ４４、ＳＩ４５、ＳＩ４６、ＳＩ４７、ＳＩ４８、ＳＩ４９、ＳＩ５０、ＳＩ５１、ＳＩ５２、ＳＩ５３、ＳＩ５４、ＳＩ５５、ＳＩ５６、ＳＩ５７の調査を進める。ＳＤ３は埋土が１１層からなり、埋５層まで土器の流れ込みがある。掘削当初は白川の氾濫によるものと考えていたが、断面形がＶ字型であることから、人為的に掘り込まれた白川に下る切り通しと思われる。ＳＤ３土層断面の記録、写真撮影、ベルトを外し完掘、平面図への記録と調査区東側の土層断面を記録し、写真撮影。３Ｃ区調査を終了する。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

新屋敷遺跡は、熊本市のほぼ中央部に位置する。東には阿蘇外輪山を望み、市内北部には立田山、北西部は金峰山から連なる京町台地に挟まれ、三方を山に囲まれた半盆地的な地形である熊本平野北側の白川下流左岸に位置する。熊本市の北部から東部にかけ台地が分布する。この台地は、火砕流台地と河岸段丘からなる。火砕流台地は、ほとんどが約９万年前に阿蘇火山の大噴火の際発生した火砕流による堆積物（Ａｓｏ－４火砕流堆積物）である。これを取り囲むように分布するのが、河岸段丘の堆積物である。河岸段丘の堆積物は、託麻砂礫層と保田窪砂礫層に区分できる。託麻砂礫層は、約９万年前から３万年前の間に形成され、託麻台地一帯に分布し中心街の地下にも広く伏在している。また、保田窪砂礫層は、約２万５千年前から６千３百年前に形成され、託麻台地を縁取るように龍田付近から木山付近まで分布している。さらに、熊本市の中央を流れる白川地帯には、海抜２０ｍ以下の低地（沖積平野）が分布している。この低地には自然堤防と後背湿地が発達し、自然堤防は、源流路沿いのほか、離れたところ（①平田町から川尻方面、②南熊本から田迎方面、③八王子から画図町、④江津から下江津）でも見ることができる。このことは白川が現在の流路をとる以前に、過去に多方面に流れていたことを示唆している。これらの自然堤防の多くは、現在、市街地化して平坦な低地に見えるが、その中には集落等を形成するのに都合のよい自然堤防が伏在していることを意識しなければならない。しかし、これらの自然堤防の形成時期や白川の変遷等は十分解明されていない。

白川は、阿蘇カルデラを源にし、南阿蘇村立野において黒川と合流し、熊本市に向かって小刻みに蛇行を繰り返し、その両岸に河岸段丘を作っていく。子飼橋を過ぎるところからその蛇行は緩やかになり、その両岸はほぼ平坦な地形へと変わっていく。白川は豪雨時には上流の土砂を削り、多量の泥流となって氾濫し、河川流域に大量の泥土をもたらし、自然堤防と後背湿地を形成することもたびたびであった。その堆積の繰り返しで熊本平野の白川下流域は形成されている。

今回報告する調査区は、新屋敷遺跡の南西端に位置し、熊本市電が通っている大甲橋より上流の白川左岸緑地帯に隣接、またはその延長線上に位置している。

第２節　歴史的環境

新屋敷遺跡は、南東の江津湖にかけては大江遺跡群、北東は大江白川遺跡と接する。特に大江遺跡群は国府、国分寺、国分尼寺などの中央からの律令支配の広がりによる造営とそれに伴う巨大な周辺集落の様相を呈す。白川下流域の左岸から、江津湖にかけては多くの遺跡が分布しているが、いずれの遺跡も奈良時代から平安時代の遺構・遺物が多く出土し、元来はこの地域一帯が当時の大集落であったと考えられる。新屋敷遺跡と大江遺跡群、大江白川遺跡など現在別々の遺跡として取り扱っているが、これは現在の町名による区分に過ぎない。

周辺の遺跡について、時代毎に見ていく。

【旧石器時代】

龍田陳内遺跡、新南部遺跡群から石器が出土している。

【縄文時代】

早期は押型文、撚糸文、塞ノ神式土器などが、新屋敷遺跡、大江遺跡群、黒髪町遺跡群、カブト山遺跡、大江白川遺跡などから出土している。新屋敷遺跡では、遺跡範囲東端付近において、押型文土器を伴う集石遺構が検出されている。後期の資料では、渡鹿貝塚（渡鹿遺跡群）、北久根山遺跡（新南部遺跡群）が有名である。

新屋敷遺跡では、遺跡範囲南西付近で辛川式土器が出土している。その他の遺跡では後期末から晩期前半の土器が主体で、新屋敷遺跡、大江遺跡群、大江白川遺跡などに多い。

【弥生時代】

前期の資料は、江津湖遺跡群、新屋敷遺跡、黒髪町遺跡群で検出されている。新屋敷遺跡では、遺跡範囲北東側の調査区において前期の濠が検出されている。中期の資料は大江白川遺跡、黒髪町遺跡、新南部遺跡群、神水遺跡などで集落、甕棺墓群が形成される。

【古墳時代】

立田山山麓に横穴群が形成され、辻遺跡、新南部遺跡群では集落が営まれている。６世紀後半になると、本庄遺跡、大江遺跡群南西部にも集落が形成され始めている。新屋敷遺跡では、中央付近の範囲において、６世紀末～７世紀代の竪穴建物群を検出している。

【歴史時代】

奈良時代から平安時代にかけては、託麻郡の政治的中心である託麻郡衙が大江遺跡群内の渡鹿Ａ遺跡、託麻郡寺が渡鹿Ｂ遺跡に存在したと推定されている。また、太宰府から肥後国府へと延びる西海道駅路も大江遺跡群内を通っている。これらの公的施設の周囲には大規模な溝や道路が意識して配置された。大江遺跡群の北西側に接する新屋敷遺跡でも大規模な溝が多数検出されている。それとともに集落域も大きく拡大し７世紀前半から９世紀前半にかけて肥後国内におけるもっとも大規模な集落が形成されている。特に８世紀末に近づくと建物の数は急増する。新屋敷遺跡でもこの期の竪穴建物が多数検出される。９世紀中頃になると、大江遺跡群周辺では集落規模が縮小し、道路、溝等が維持管理されずに埋没していく。

その後、長らくはこの地帯がどのような土地利用がなされていたか不明な点が多い。

江戸時代、熊本城が築城され、幕藩体制の中で新屋敷一帯は農村落が形成される。江戸時代末、白川に安巳橋が架けられると新屋敷には武家屋敷が形成される。国学者中島広足の居地も置かれている。明治１３年に命名された町名も、新しく設置されたことから名づけられている。そして現在まで閑静な住宅街として発展しているところである。

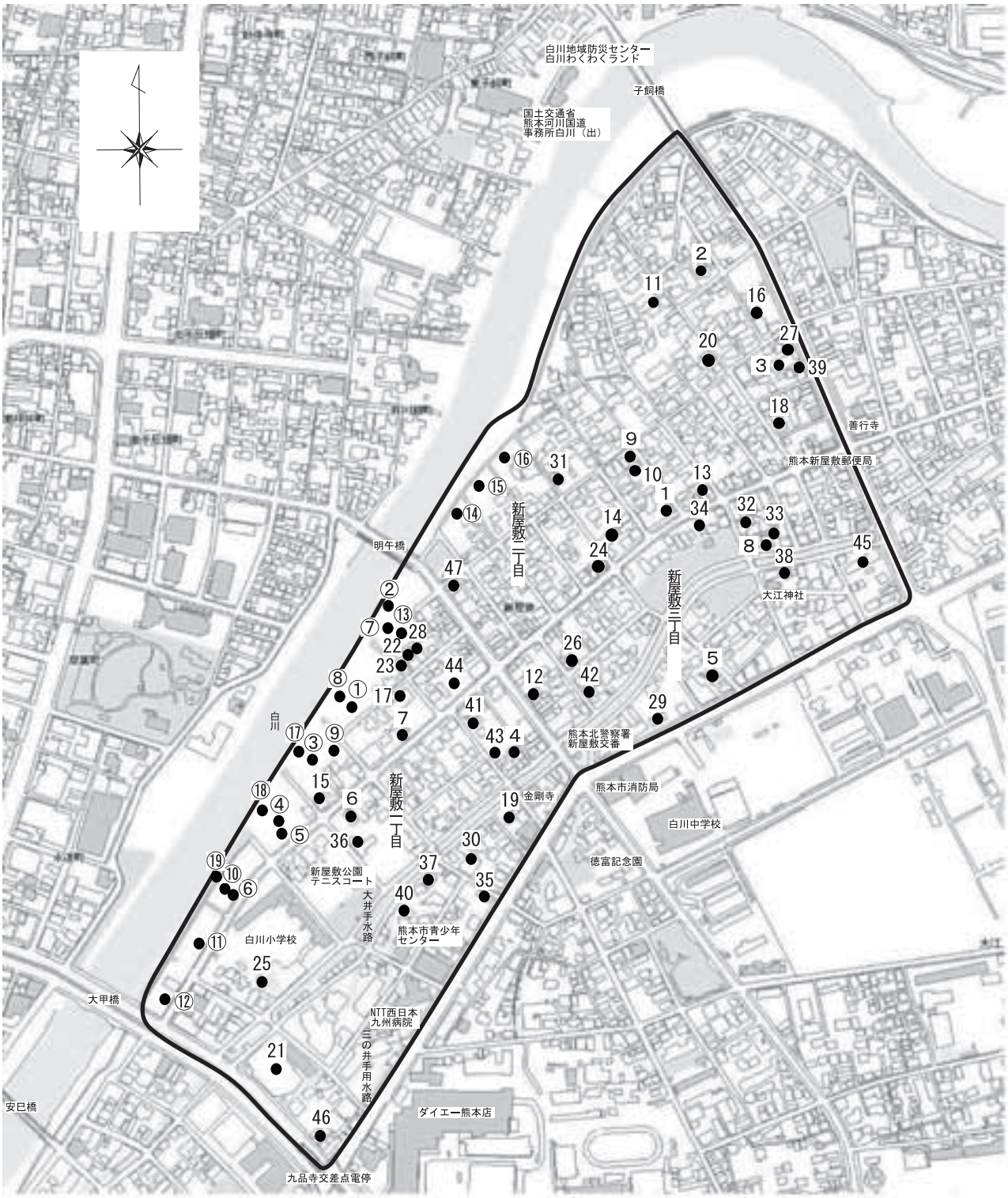
新屋敷遺跡は、平成２２年３月末現在、熊本市教育委員会事務局生涯学習部文化財課（当時、平成２３年度より熊本市観光文化交流局文化スポーツ交流部文化振興課）で計 48 回、平成２５年３月末現在、熊本県文化課で計２３調査区の発掘調査が実施されている。熊本市の調査の大部分は個人住宅の建て替え又は、共同住宅の建設に伴うもので、比較的狭い面積の調査が多い。しかしながら遺跡の特徴を窺い知ることができる調査であり、成果を着々と積み重ねている。県の調査は白川河川改修事業に伴うものであり、古代の集落跡の様子を知ることができる。

第１図　新屋敷遺跡周辺遺跡地図　(1/25000)

第１表　新屋敷遺跡周辺遺跡一覧

熊本県（43）熊本市（201）

県地図遺跡番号	熊本市地図遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
201-225	8-32	池田山伏塚遺跡群	池田２丁目、清水町高平	弥生・古墳	包蔵地		電通石棺箱式珠文鏡、長迫横穴式石室
201-228	8-35	永浦遺跡群	清水町打越、永浦	古墳・中世	包蔵地		
201-230	8-37	池田町（池田小学校）	池田町１丁目	弥生～平安	包蔵地		池田小学校庭甕棺墓
201-231	8-38	津浦一ノ谷横穴群	清水町津浦字補迫	古墳	古墳		6 基以上
201-232	8-39	一ノ谷	清水町津浦字中寄	古墳・平安	包蔵地		
201-233	8-40	稗田横穴群	池田町稗田字猪迫	古墳	古墳		6 基以上
201-234	8-41	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵地		
201-235	8-42	舟場山古墳	清水町津浦	古墳	古墳		円墳、石棺
201-236	8-43	打越遺跡群	清水町打越	弥生・中世	包蔵地		
201-237	8-44	打越貝塚	清水町打越	縄文	貝塚		北久根山式
201-238	8-45	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	包蔵地		
201-239	8-46	寺原横穴群	京町	古墳	古墳		多数の横穴
201-240	8-47	京町２丁目遺跡	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地		
201-241	8-48 伝大道寺跡遺跡群	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地		伝大道寺跡を含む
201-242	8-49	内坪井遺跡	内坪井町	弥生	包蔵地		
201-245	8-52	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地		甕棺群あり
201-246	8-53	熊本城跡遺跡群	古城、古京、千葉城町	古墳～近世	包蔵地		
201-247	8-54	熊本城跡	古城・古京町・千葉城町	近世	城	国	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長 12 年
201-250	8-58（新町 2 丁目甕棺遺跡）	船場町遺跡	新町２丁目、鍛冶屋町	弥生	包蔵地		甕棺群
201-253	8-62	辛島町遺跡	辛島町	弥生・古墳	包蔵地		
201-254	8-63（中唐人町遺跡）	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治	包蔵地		
201-272	8-82	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	包蔵地		
201-274	8-84	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地		
201-275	8-85、9-10	黒髪町下立田遺跡群	黒髪町	古墳～江戸	包蔵地		
201-276	8-86、9-12 熊本藩主細川家墓所（泰勝寺跡）	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪４丁目	江戸	寺社	国	細川家霊廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
201-277	8-87、9-17	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地		
201-278	8-88	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		一帯に甕棺墓群
201-280	8-90	子飼遺跡	子飼町	縄文～中世	包蔵地		
201-281	8-91	大江白川遺跡	大江１丁目	縄文～平安	包蔵地		甕棺
201-282	8-92	新屋敷遺跡	新屋敷１丁目	古代	包蔵地		住居跡 2 基（古代 8c ～ 10c）ピット（古代：8c ～ 10c）須恵器（古墳）土師器･須恵器（古代：8c ～ 9c）緑釉陶器･黒色土器 A 類（古代：9c ～ 10c） H 16.4.21 範囲修正
201-283	8-93、9-55	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	包蔵地		
201-285	8-95	本庄（熊大病院敷地）	本荘２丁目	古墳～平安	包蔵地		熊本大学埋蔵文化財調査室調査
201-290	8-100	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	包蔵地		
201-291	番号未記載	西水前寺町遺跡	水前寺１丁目	縄文～中世	包蔵地		
201-292	8-102、9-72	国分寺跡	出水１丁目	縄文～中世	包蔵地		県・市による多数の調査あり
201-293	8-103、9-75、13-1	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世	包蔵地		H16.2.24 範囲修正
201-296	9-4	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵地		夜臼式土器
201-297	9-5	秣野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地		
201-300	9-8	立田山山頂	黒髪町	古墳～平安	包蔵地		
201-301	9-9	万石茶山古墳	清水町万石（通称）茶山	古墳	古墳		横穴式石室
201-302	9-13	立田山東中腹	黒髪町	古代・中世	包蔵地		
201-303	9-14	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町７丁目	縄文～平安	墓地		
201-306	9-18	桜山中学校校庭遺跡	黒髪町５丁目	古墳～平安	包蔵地		
201-307	9-19	カブト山遺跡	黒髪町宇留毛字甲山	縄文	包蔵地		早期、轟 B、北久根山、黒川、山の寺
201-308	9-20	宇留毛Ａ遺跡	黒髪町６丁目	縄文	包蔵地		
201-309	9-21	宇留毛Ｂ遺跡	黒髪町６丁目	縄文～平安	包蔵地		
201-310	9-22	浦山第２横穴群	黒髪７丁目浦山	古墳	古墳	県	
201-316	9-28	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪町６・８丁目	古墳・中世	包蔵地		立田山南麓古墳円墳２基横穴式石室
201-332	9-48	新南部遺跡群	熊本市新南部町	旧石器～平安	包蔵地		県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり　H 16.2.24 範囲修正
201-335	9-51	渡鹿遺跡群	熊本市渡鹿５丁目	縄文・古代	包蔵地		縄文土器（後～晩期）弥生土器（中期後半）土師器・須恵器（古代：8c ～ 9c）陶磁器（近世以降）　H 16.4.21 範囲修正
201-336	9-52	渡鹿菅原神社境内遺跡	熊本市渡鹿６丁目		寺社	市	市指定史跡
201-337	9-53	辻遺跡	熊本市渡鹿７丁目	縄文～平安	包蔵地		縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
201-338	9-54	新南部西原遺跡	熊本市新南部町	縄文～平安	集落		
201-339	9-56	南平上遺跡	熊本市新大江３丁目南平上	奈良・平安	包蔵地		
201-340	9-57	帯山遺跡群	熊本市帯山１丁目	縄文～平安	包蔵地		布目瓦、曽畑、阿高、竹崎 H 21.7.22 範囲縮小
201-347	8-107、9-64	北水前寺遺跡	熊本市水前寺３丁目	奈良・平安	包蔵地		
201-348	9-66 水前寺廃寺（面）	水前寺廃寺跡	熊本市水前寺公園	奈良・平安	包蔵地		
201-350	9-68	水前寺成趣園	熊本市水前寺公園	江戸	庭園	国	国指定史跡及び名勝、細川忠利、山水式 H 21.7.22 範囲拡大
201-352	9-70 陳山廃寺	陳山廃寺跡	熊本市水前寺公園	奈良・平安	寺社		国分尼寺推定地
201-355	9-74	神水遺跡	熊本市神水本町・出水２丁目	縄文～平安	包蔵地		県・市調査、報告書あり
201-469	8-108	池田城跡	池田町岩立	中世	城		
201-481	8-106	お薬園跡	薬園町	近世	包蔵地		藩主重賢開園
201-556	8-111	水道町遺跡	熊本市　水道町	古代	包蔵地		H 20.10.1 新規記載（白川河川改修工事に伴う試掘調査結果による）



第２図の調査地点番号は第２表の番号に対応する。
なお、
・数字は熊本市教育委員会文化財課による調査地点
・丸囲み数字は熊本県教育委員会文化課による調査地点を示す。
調査個所は、平成２３年３月末現在であわせて６６地点である。

第２図　新屋敷遺跡内調査地点図（縮尺任意）

第２表　新屋敷遺跡内調査地一覧

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
1	第１次調査区	1988	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居など	土師器・須恵器	1
2	第２次調査区	1989	熊本市教育委員会	弥生前期 奈良・平安	溝（弥生）・竪穴住居 道路など	弥生土器・石器 土師器・須恵器	3
3	第３次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑・溝 道路	土師器・須恵器 縄文土器	9
4	第４次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安 江戸	竪穴住居・土坑 水路など	土師器・須恵器 陶磁器・石器など	1
5	第５次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	水田・溝	土師器・須恵器 白磁・青磁・緑釉陶器など	9
6	第６次調査区	1991	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴住居・土坑・溝	土師器・須恵器 白磁	9
7	第７次調査区	1994	熊本市教育委員会		竪穴住居・土坑 柱穴群	土師器・須恵器 緑釉陶器片・青磁 軒丸瓦など	10
8	第８次調査区	1995	熊本市教育委員会		柱穴		10
9	第９次調査区	1996	熊本市教育委員会		竪穴住居・溝	土師器・須恵器	10
10	第 10 次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴住居・溝	土師器・須恵器・青磁片・鉄製品・石鏃	10
11	第 11 次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器 獣脚硯・墨書土器 ヘラ描き土器	2
12	第 12 次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	溝など	土師器・須恵器	3
13	第 13 次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	柱穴列	土師器・須恵器	4
14	第 14 次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑 柱穴	土師器・須恵器 鉄製品	11
15	第 15 次調査区	1997	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴住居・土坑	縄文後期土器 土師器・須恵器	7
16	第 16 次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器	4
17	第 17 次調査区	1999	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物・土坑墓・小穴群 不明遺構	土師器・須恵器 鉄製品・銅製品 縄文土器	11
18	第 18 次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 柱穴	土師器・須恵器	12
19	第 19 次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	溝	土師器・須恵器	12
20	第 20 次調査区	1999 ～ 00	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴	土師器・須恵器 縄文土器	12
21	第 21 次調査区	2000 ～ 01	熊本市教育委員会	古代	水田・竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝 柱穴	土師器・須恵器 青磁・白磁片・耳環	13
22	第 22 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	柱穴・小穴・溝 道路	土師器	13
23	第 23 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・柱穴群	土師器・須恵器 青磁水注片	13
24	第 24 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・土坑・溝 井戸・柱穴	土師器・須恵器 陶磁器	13
25	第 25 次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・柱穴	土師器・須恵器 馬の骨・歯	13
26	第 26 次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居	土師器・須恵器	6
27	第 27 次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居など	土師器・須恵器	3
28	第 28 次調査区	2001	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・溝	土師器・須恵器 金銅製耳環	13

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
29	第 29 次調査区	2001 ～ 02	熊本市教育委員会	古代・中世	水田・溝	土師器・須恵器 弥生土器・縄文土器	13
30	第 30 次調査区	2002 ～ 03	熊本市教育委員会	古墳 ～平安	竪穴住居・溝・小穴	土師器・須恵器 馬骨	14
31	第 31 次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・土坑・溝	土師器・須恵器 風字硯・縄文土器	15
32	第 32 次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴	土師器・須恵器 黒色土器・鉄製品	15
33	第 33 次調査区	2003	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器	6
34	第 34 次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	4
35	第 35 次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴住居・溝	縄文土器・土師器 須恵器	4
36	第 36 次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	竪穴住居・溝	土師器・須恵器 陶磁器	4
37	第 37 次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近代	溝・道路・小穴 井戸	縄文土器・土師器 須恵器・鉄斧・獣骨	16
38	第 38 次調査区	2004	熊本市教育委員会	古代	土坑・柱穴など	土師器・須恵器など	16
39	第 39 次調査区	2005	熊本市教育委員会	縄文・古代	集石遺構・柱穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器	17
40	第 40 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代・近代	竪穴住居・土坑・溝 柱穴・小穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器 陶磁器	17
41	第 41 次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑・溝 小穴	土師器・須恵器	5
42	第 42 次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器	6
43	第 43 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 小穴	縄文土器・土師器 須恵器・青磁片	17
44	第 44 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 小穴など	縄文土器・土師器 須恵器・石製紡錘車	17
①	１Ａ区	2005 ～ 06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 道路状遺構など	土師器・須恵器	
②	２Ａ区	2005 ～ 06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 柱穴など	土師器・須恵器	
45	第 45 次調査区	2006	熊本市教育委員会	古代・中世・ 近世	溝・柱穴・竪穴状遺構・掘立柱建物	土師器・須恵器 瓦質土器・陶磁器	18
③	３Ａ区	2006 ～ 07	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑 井戸・掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	今回
④	４Ａ区・４Ｂ区	2006 ～ 07	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・井戸 土坑・掘立柱建物	土師器・須恵器	21
46	第 46 次調査区	2007	熊本市教育委員会	古墳・古代 中世	水田・竪穴住居 土坑・柱穴群	土師器・須恵器	19
⑤	４Ｃ区	2007 ～ 08	熊本県教育委員会	縄文・古代 近代	竪穴建物・溝・井戸 土坑・掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	21
⑥	５Ａ区	2007 ～ 08	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・井戸 土坑・掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	21
⑦	２Ｂ区	2007 ～ 08	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	
47	第 47 次調査区	2009	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑 小穴・不明遺構	土師器・須恵器 縄文土器 近世陶磁器	8
⑧	１Ｂ区・１Ｃ区	2009 ～ 10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
⑨	３Ｂ区	2009 ～10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	縄文土器・土師器 須恵器	今回
⑩	５Ｂ区	2009 ～10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	21
48	第 48 次調査区	2010	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑・柱穴群	土師器・須恵器	20
⑪	６Ａ区・６Ｂ区	2010 ～11	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・畝 土坑・掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	22
⑫	７区	2010 ～11	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	22
⑬	２Ｃ区	2010 ～11	熊本県教育委員会	近代	近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器・石鏃・石斧	
⑭	８区	2010 ～11	熊本県教育委員会	古代・近世	溝・土坑	縄文土器・土師器 須恵器	
⑮	９区	2010 ～11	熊本県教育委員会	縄文・古代 近世	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器	
⑯	１０区	2010 ～11	熊本県教育委員会	縄文・古代	竪穴建物・土坑	縄文土器・土師器 須恵器・石鏃・石斧	
⑰	３Ｃ区	2011 ～12	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器 陶磁器	今回
⑱	４Ｄ区	2011 ～12	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
⑲	５Ｃ区	2011 ～12	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
⑳	１１区	2012 ～13	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	
㉑	７Ｂ区	2012 ～13	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	

参考文献（番号は第２表　新屋敷遺跡内調査地一覧の参考文献番号と一致する）

1 網田龍生・美濃口雅朗1999　「新屋敷遺跡第１次調査区」「新屋敷遺跡第4次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成10年度－』　熊本市教育委員会

2 林田和人2003「新屋敷遺跡第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成13･14年度－』 熊本市教育委員会

3 網田龍生2004「新屋敷遺跡第2次調査区」「新屋敷遺跡第12次調査区」「新屋敷遺跡第27次調査区」「熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成15年度－』熊本市教育委員会

4 松村真紀子2005「新屋敷遺跡第13次調査区」「新屋敷遺跡第16次調査区」「新屋敷遺跡第34次調査区」「新屋敷遺跡第35次調査区」「新屋敷遺跡第36次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成16年度－』熊本市教育委員会

5 岩谷史記2006「新屋敷遺跡第41次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成17年度－』 熊本市教育委員会

6 美濃口雅朗2007「新屋敷遺跡第26次調査」「新屋敷遺跡第33次調査」「新屋敷遺跡第42次調査」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成18年度－』　熊本市教育委員会

7 美濃口雅朗2008「新屋敷遺跡第15次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成19年度－』 熊本市教育委員会

8 美濃口雅朗2010「新屋敷遺跡第47次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成21年度－』 熊本市教育委員会

9 熊本市教育委員会編1995『熊本市埋蔵文化財年報第1号－昭和63年度～平成3年度－』熊本市教育委員会

10 熊本市教育委員会編1999『熊本市埋蔵文化財年報第2号－平成4年度～平成8年度－』熊本市教育委員会

11 熊本市教育委員会編2000『熊本市埋蔵文化財年報第3号－平成9年度～平成10年度－』熊本市教育委員会

12 熊本市教育委員会編2001『熊本市埋蔵文化財年報第4号－平成11年度－』熊本市教育委員会

13 熊本市教育委員会編2003『熊本市埋蔵文化財年報第5号－平成12年度～13年度－』熊本市教育委員会

14 熊本市教育委員会編2004『熊本市埋蔵文化財年報第6号－平成14年度－』熊本市教育委員会

15 熊本市教育委員会編2005『熊本市埋蔵文化財年報第7号－平成15年度－』熊本市教育委員会

16 熊本市教育委員会編2006『熊本市埋蔵文化財年報第8号－平成16年度－』熊本市教育委員会

17 熊本市教育委員会編2007『熊本市埋蔵文化財年報第9号－平成17年度－』熊本市教育委員会

18 熊本市教育委員会編2008『熊本市埋蔵文化財年報第10号－平成18年度－』熊本市教育委員会

19 熊本市教育委員会編2009『熊本市埋蔵文化財年報第11号－平成19年度－』熊本市教育委員会

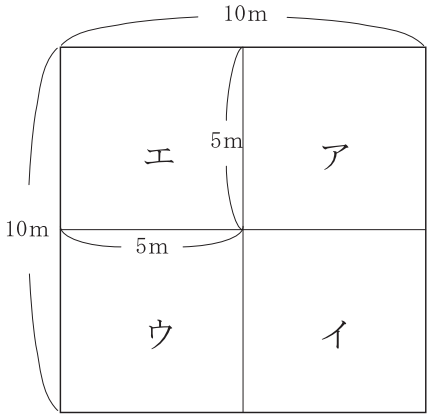
20 豊崎晃一2011「新屋敷遺跡第48次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成23年度－』熊本市の文化財　第12集 熊本市教育委員会

21 水上正孝2012「新屋敷遺跡１」熊本県文化財調査報告第270集　熊本県教育委員会

22 水上正孝2013「新屋敷遺跡２」熊本県文化財調査報告第286集　熊本県教育委員会

第３章　調査の方法

第１節　調査区・グリッド設定



３区調査は、同一の建築工事を原因としている。したがって、両調査区は隣接・連続する。３Ａ区調査は平成 18 年８月～平成１９年１月、３Ｂ区調査は平成 20 年５月～ 10 月、３Ｃ区調査は平成 22 年８月～ 10 月に行った。

各調査区の位置、10 ｍグリッドを、第３図に記す。細長い調査区が多く、調査区にグリッド杭が設定しにくいため、10 ｍグリッドを５ｍ×５ｍを１単位に右図のように右上から時計回りにア・イ・ウ・エとした。グリッドの標記は 27xｴ（南北軸の数字・東西軸のアルファベット・５ｍグリッドの記号）と表すようにした。

第２節　基本土層概略

層位について、遺構外と遺構内の層の区別を行うため遺構外の層については、算用数字で表土層（近現代の整地・撹乱層）の下の層から、０層、１層、２層と標記し、遺構内の層はそれと区別するため、算用数字の前に「埋」を付け、埋１層、埋２層 …と標記した。０層は、３Ａ区、３Ｂ区調査の際には設定していなかったが、近代の整地層と思われるため６区調査より設定した。分層詳細は各調査区の成果において報告するが、本項では大略を記す。

０層：暗褐色土層　この面から近現代の栗石地業等が検出される。

１層：暗褐色土層　近世、古代遺物を含む。中世以降の整地層と思われる。

２層：黒褐色土層　古代遺物を含む。後世の削平を受けたのか総じて薄い。
場所によっては堆積が見られない。

３層：褐色土層　この層位の上面で古代の遺構を確認した。

第３節　調査方法

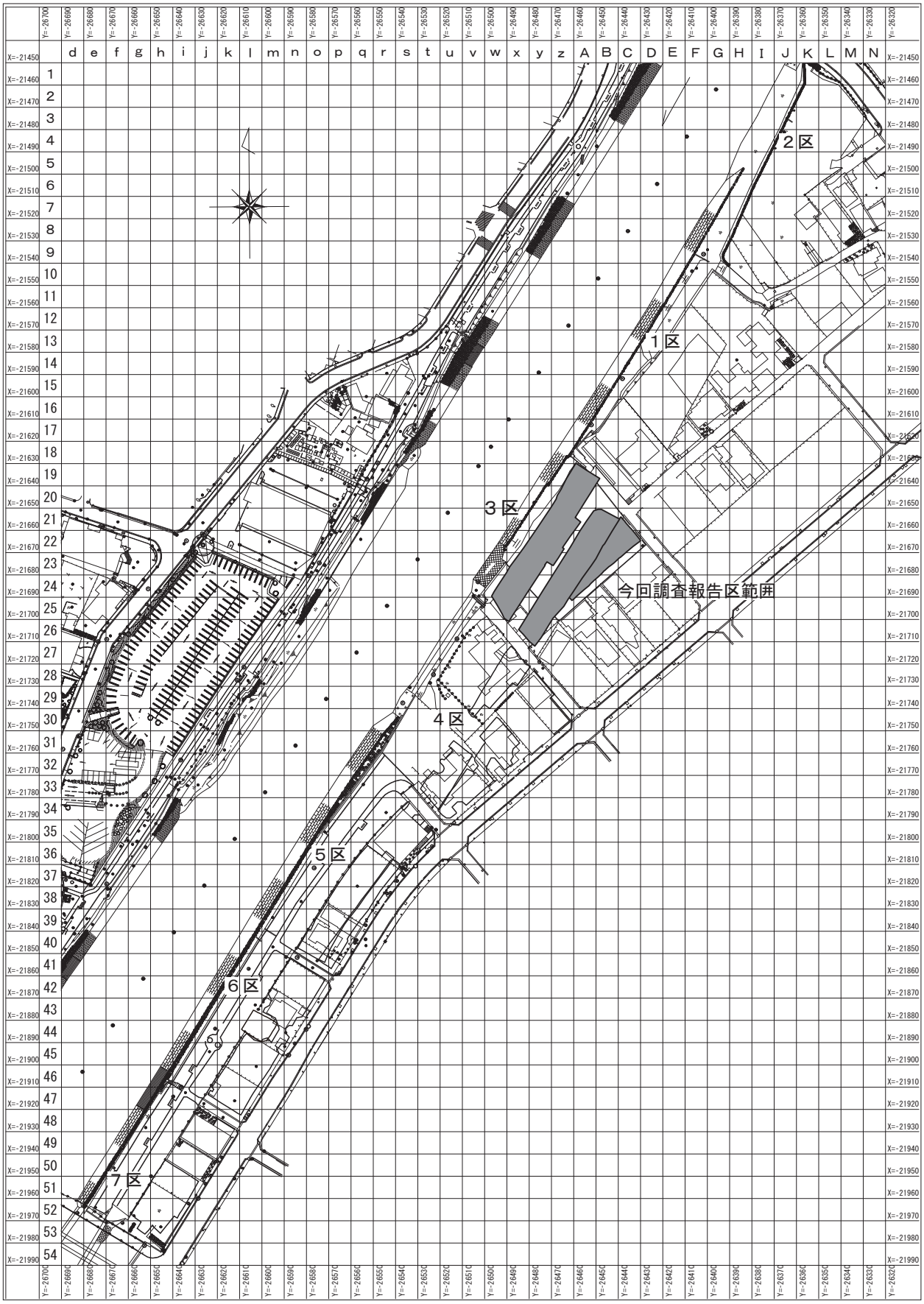
表土、０層、１層は重機により掘削し、２層、３層、遺構は手掘りしている。３層以下は未調査である。埋戻しは、派生土を用い重機にて行った。

実測は調査担当者・作業員で、１／ 20 の縮尺で断面図、平面図を作成した。遺物出土状況、かまどについては１／ 10 の縮尺で作成した。なお、遺構の実測図作成にあたっては、一部実測の迅速化を図るため光波測距儀を活用したデジタル図化を行った。デジタル図化にはＣＵＢＩＣ社製の遺構実測支援ソフト「遺構くん」を使用した。

写真は、検出時、遺物出土時、使用時（使用当時の状態）、掘方時の各段階において、適宜、モノクロフイルムとリバーサルフイルムで、小型カメラ（35㎜）と中型カメラ（６㎝×７㎝）を使用し、撮影した。

第４節　調査の概要

調査区には現代の撹乱に壊されながらも主に古代の遺構が残存していた。第５図に主要遺構を記す。



第３図　新屋敷遺跡全調査区位置図（縮尺任意）

第４章　調査の成果

第１節 基本土層

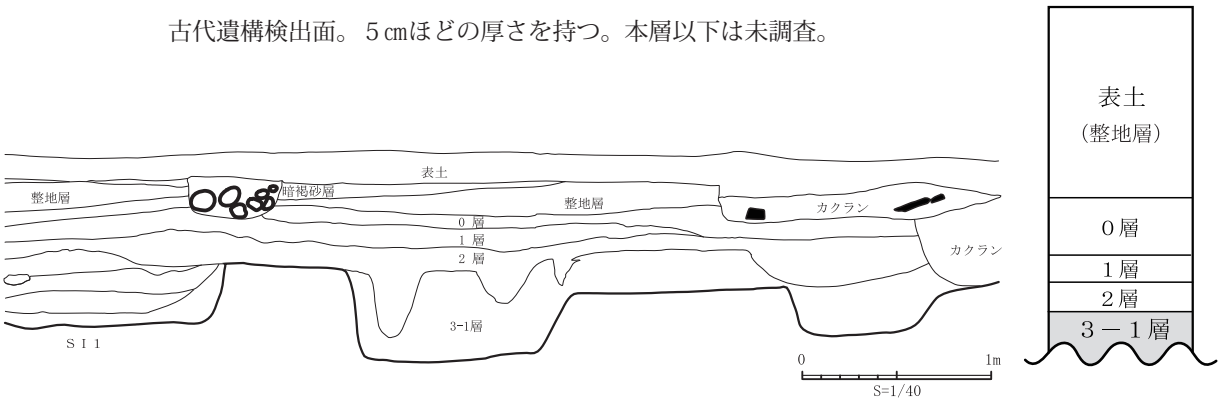
調査区の基本土層は、現代の整地層を除き、第４図に示したとおり、大きく４つの層に分けられる。０層は、４区調査の際には設定していなかったが、近代の整地層と思われるため、設定している。この基本土層図は調査地区、地点によって層序が異なるところを含めたうえで再編したものである。

０層　：　暗褐色（１０ＹＲ　３／３）、粒子の細かい砂層。１、２㎜の小礫、２㎝大の炭化物、 赤褐色焼土ブロック含む。しまりややあり。粘質ややあり。この面から近現代の建物の基礎である栗石等が検出される。15 ～ 35㎝ほどの厚さを持つ。

１層　：　暗褐色（１０ＹＲ　３／４）、極細砂混じりシルト層。１㎝大のオレンジ粒、赤色粒、炭化物を少量含む。しまりややあり。粘質ややあり。近世、古代遺物を含む。５～ 20㎝ほどの厚さを持つ。

２層　：　黒褐色（１０ＹＲ　３／２）、極細砂混じりシルト層。１～２㎜大の赤色粒が少量混入する。しまりあり。粘質ややあり。場所によっては堆積が見られない。古代遺物を含む。５～ 10㎝ほどの厚さを持つ。

３－１層：　褐色（１０ＹＲ　４／６）、細砂混じりシルト層、上層の黒褐色シルト層、下層のローム混じる。炭化物少量含む。しまりややあり。粘質あり。古代遺構検出面。５㎝ほどの厚さを持つ。本層以下は未調査。



第４図　調査区土層断面図及び土層模式図

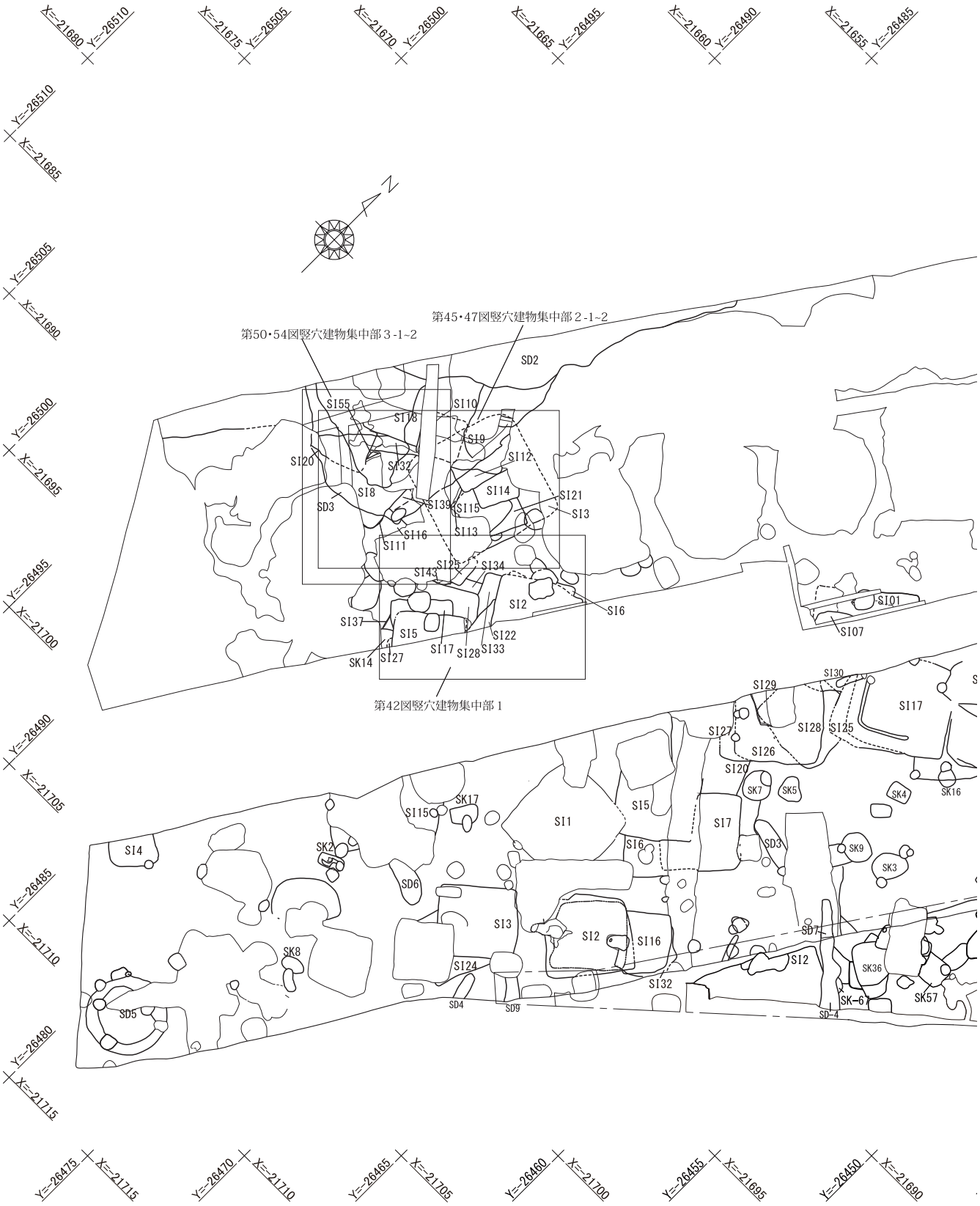
第２節　遺構・遺物

１．３Ａ・３Ｂ区

調査区の遺構は、既存の建物より破壊を受けているものが多い。検出した遺構も残存状況が悪いものが多い。Ａ区の調査面積は約 756㎡、調査は平成 18 年９月～平成 19 年１月に行った。Ｂ区の調査面積は約 320㎡、調査は平成 20 年７月～１０月に行った。標高約 16 ｍで地形は平坦である。

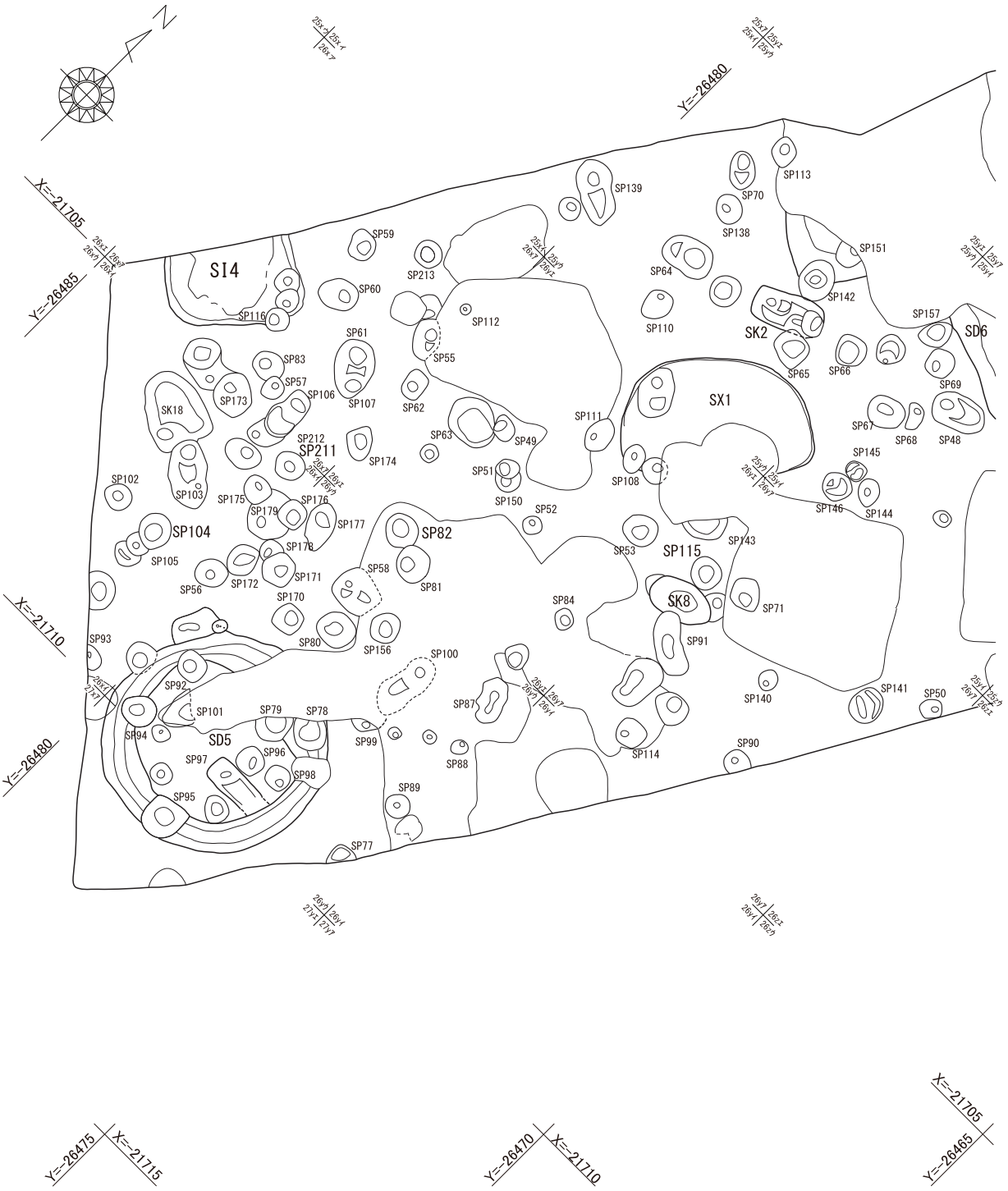
古代の遺構は３層上面で検出を行った。概観すると、３Ａ、３Ｂ区は３Ａ区ＳＤ２（３Ｂ区ＳＤ５）を境に、北側は遺構は少ないが、南側は竪穴建物が建つ集落跡であると言えよう。竪穴建物４０軒、掘立柱建物２軒を検出した。

以下、主要遺構について報告するが、他に土坑、柱穴など、これに漏れる遺構もある。その存在状況については３区古代遺構配置図（第６図～第 13 図）を参照していただきたい。



第５図　３区古代主要遺構配置図（1/250）

X=-21655 Y=-26485
X=-21650 Y=-26480
X=-21645 Y=-26475
X=-21640 Y=-26470
X=-21635 Y=-26465
X=-21630 Y=-26460
Y=-26455 X=-21630
Y=-26450 X=-21635
Y=-26445 X=-21640
Y=-26440 X=-21645
Y=-26435 X=-21650
Y=-26430 X=-21655
Y=-26425 X=-21660
Y=-26450 X=-21690
Y=-26445 X=-21685
Y=-26440 X=-21680
Y=-26435 X=-21675
Y=-26430 X=-21670
Y=-26425 X=-21665
3C区SD1
3A区SD2
3B区SD5
SI01
SI07
SI22
SI23
SI30
SI21
SI31
SI17
SI25
SI18
SI19
SD10
SE1
SK14
SK15
SK12
SK13
SK14
SK58
SD1
SB1
SB2
SI8
SI10
SI11
SI3
SI6
SI7
SI4
SI5
SK57
SK-67
SD4
SK-10
SK-3
SK-29
SK-43
SI1
SK-9
SK-15
SK4
SK-44
SD2
SD3
SK-48

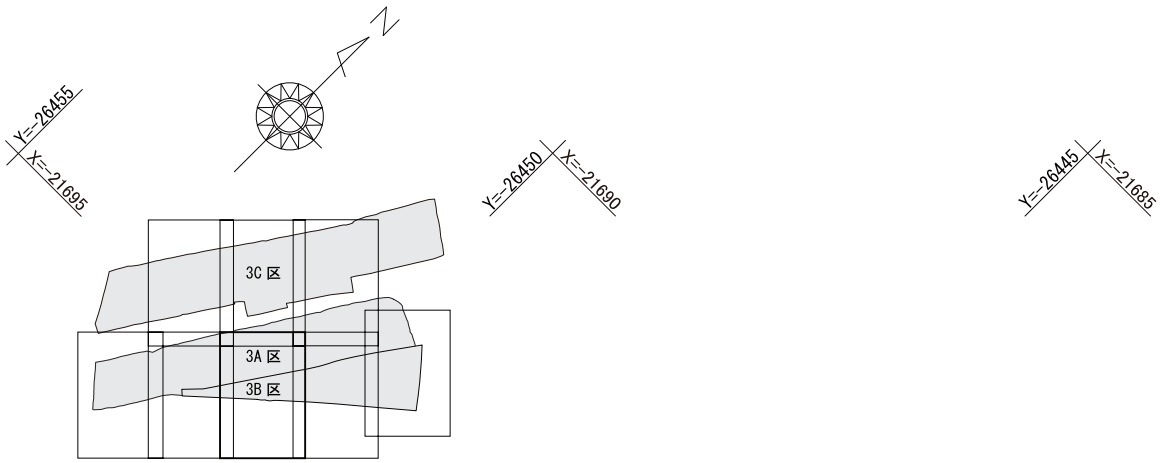


第 6 図

第 6 図　3 区古代遺構配置図 1 (1/100)

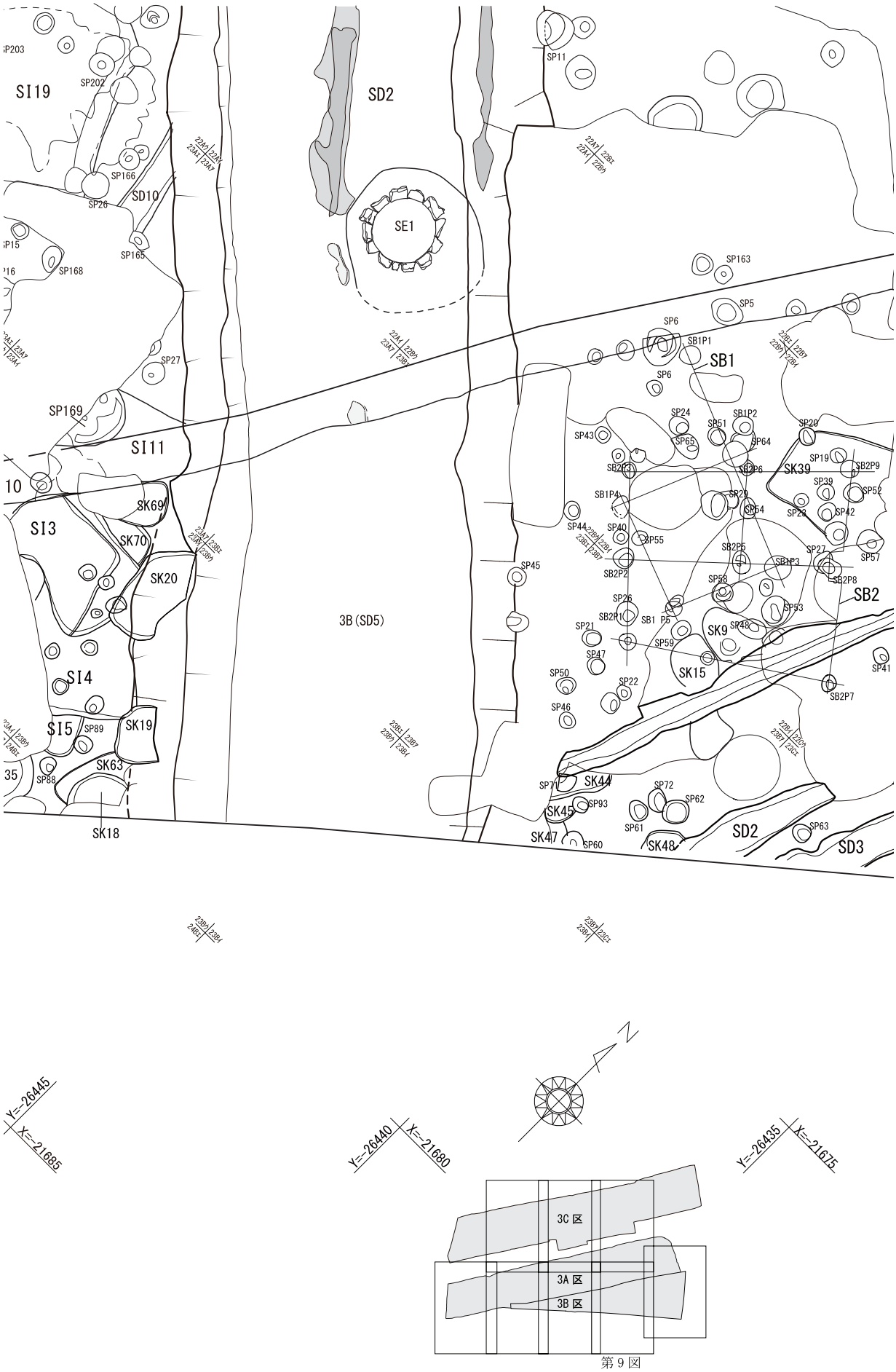
第 7 図

第 7 図　3 区古代遺構配置図 2(1/100)



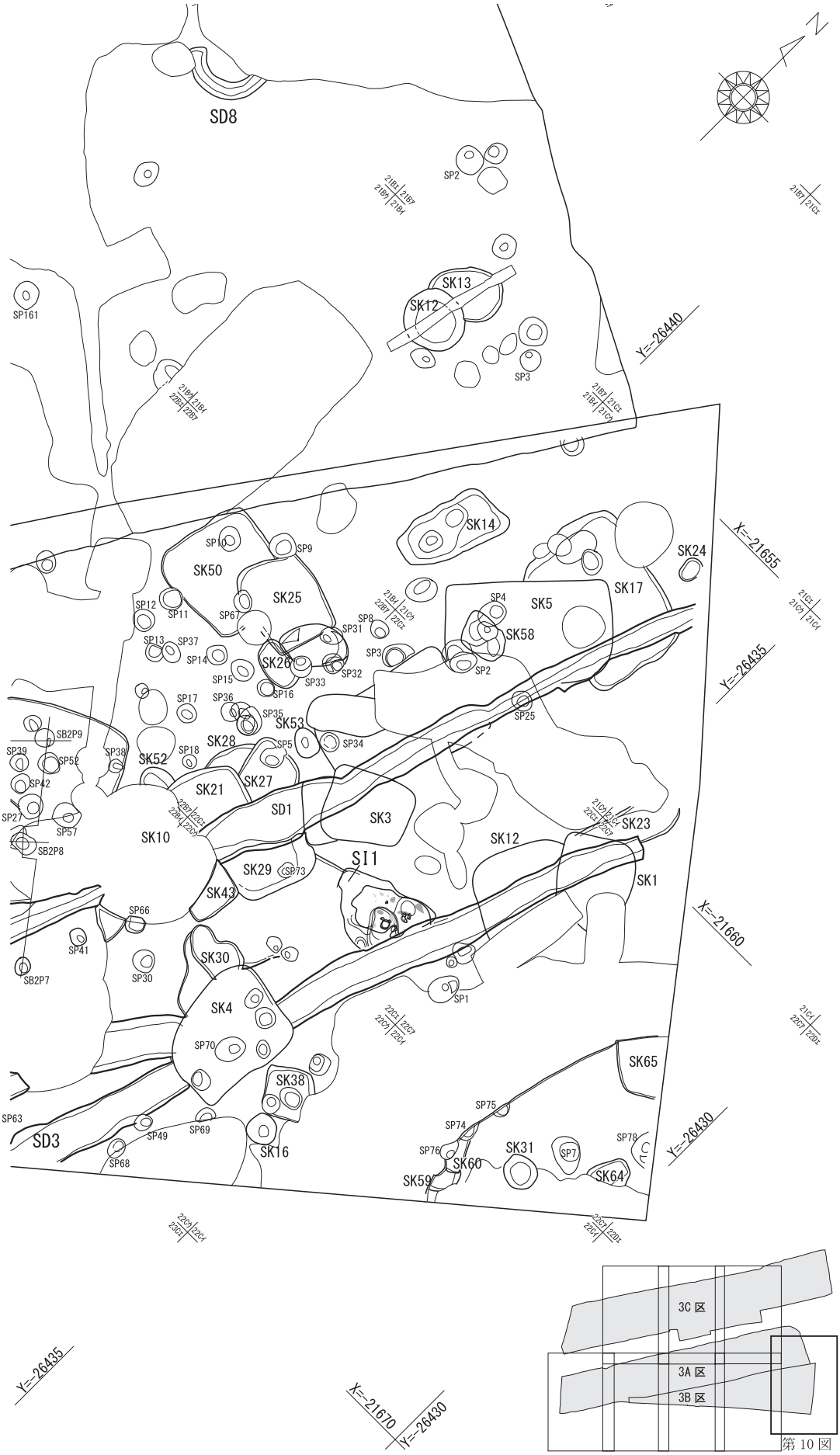
第 8 図

第 8 図　3 区古代遺構配置図 3(1/100)

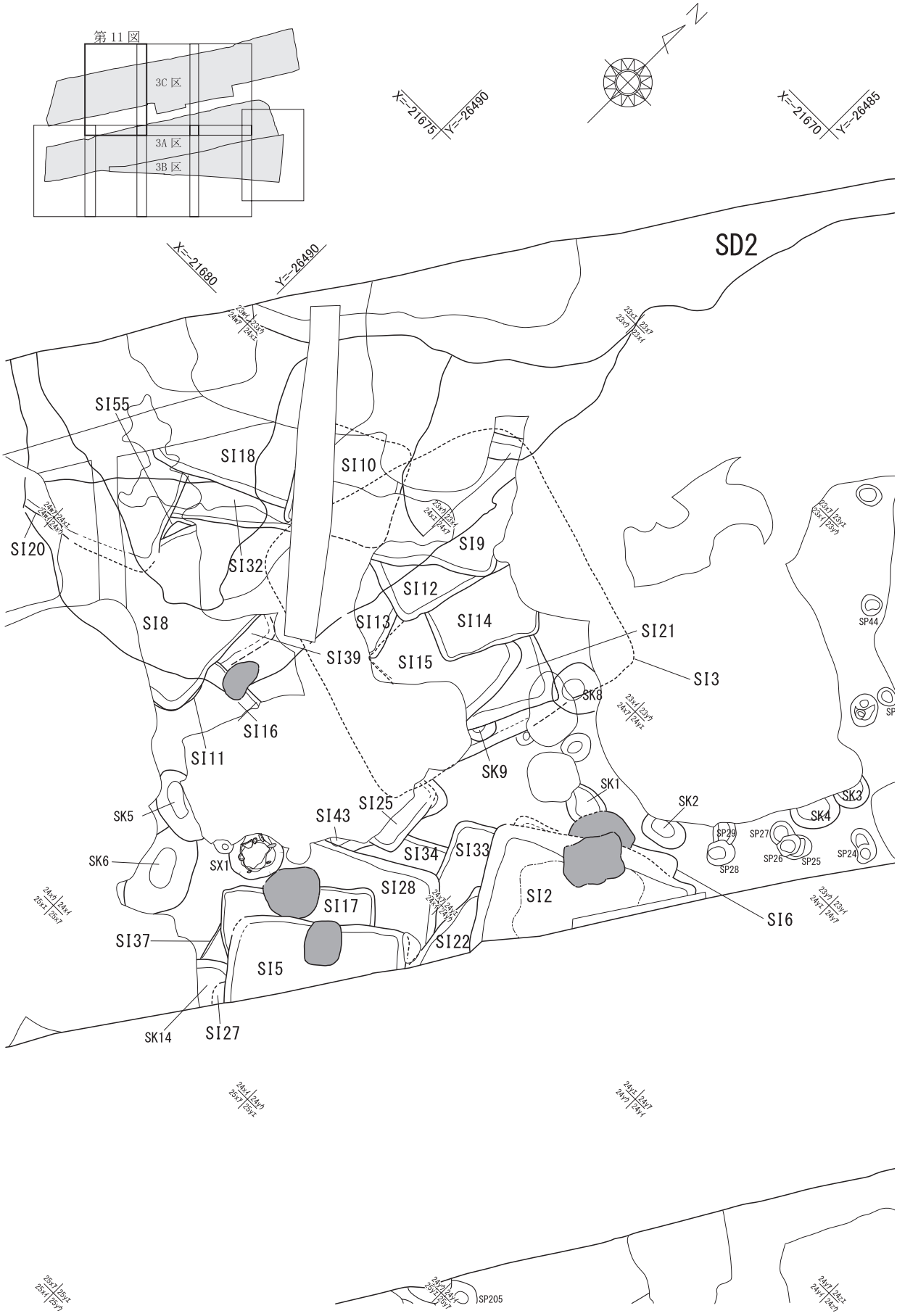


第９図

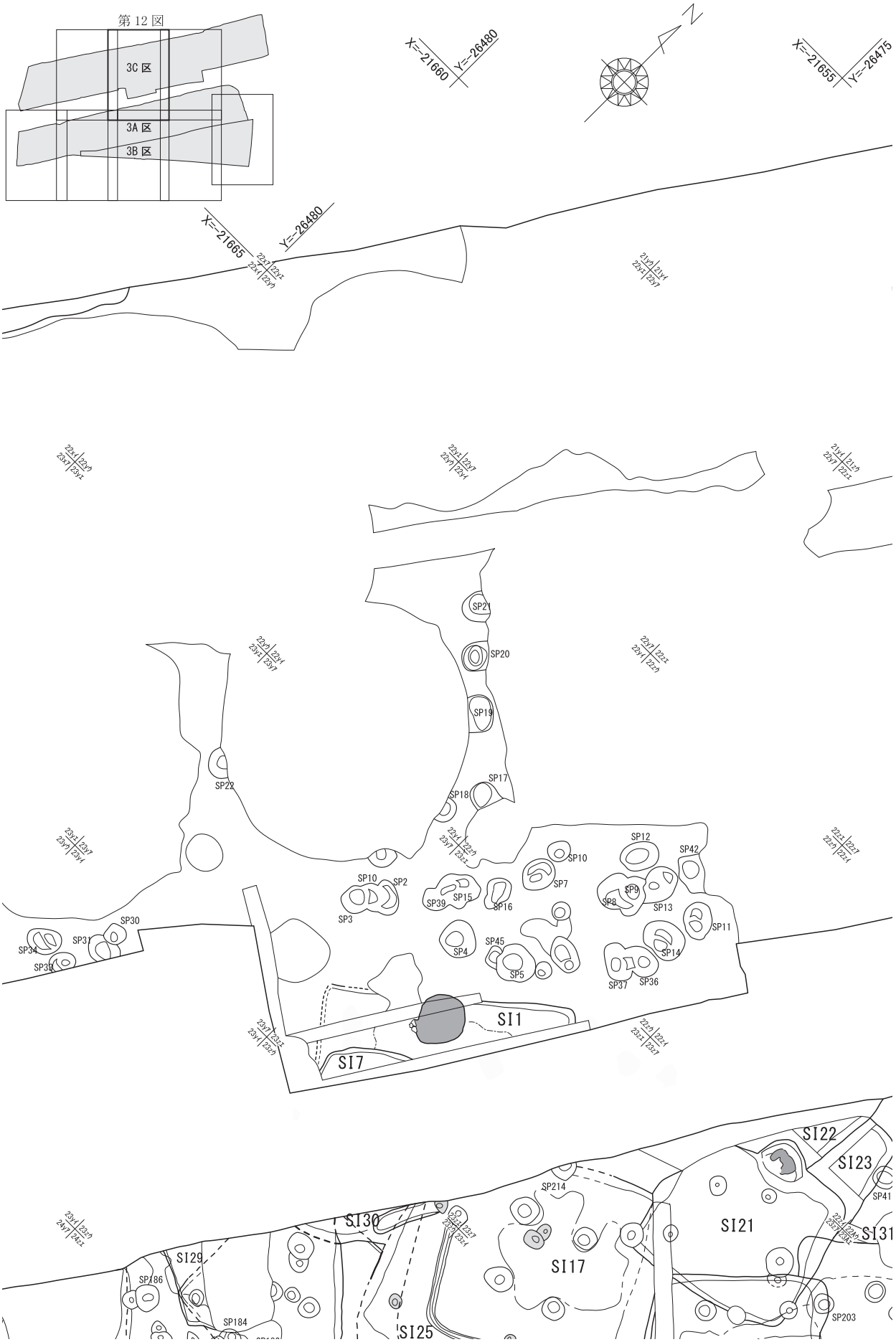
第９図　３区古代遺構配置図４(1/100)



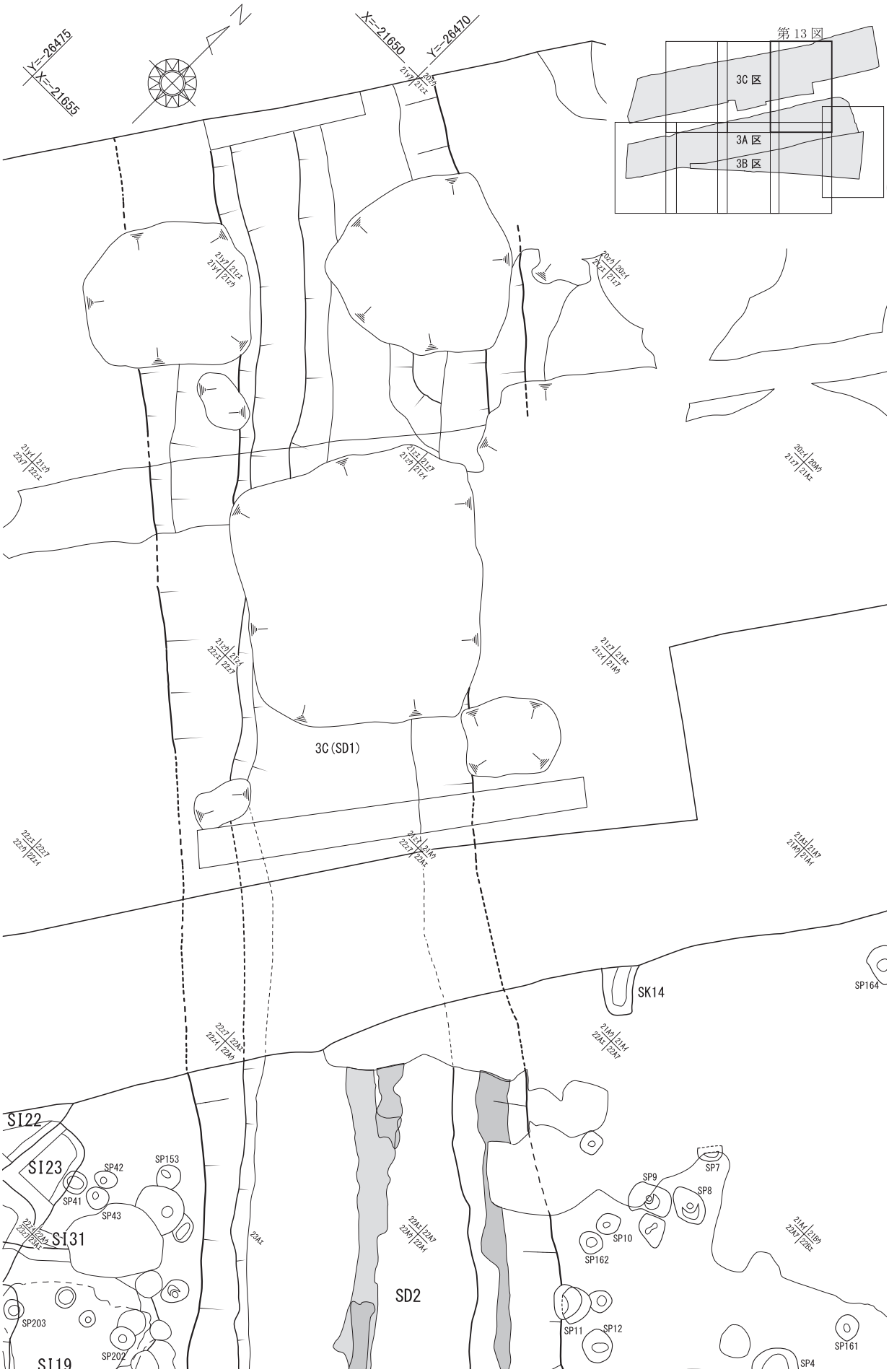
第 10 図　3 区古代遺構配置図 5(1/100)



第 11 図　3 区古代遺構配置図 6(1/100)



第 12 図　3 区古代遺構配置図 7(1/100)



第13図　3区古代遺構配置図8(1/100)

（1）３A区

竪穴建物

３A区ＳＩ１（第 14 図）

24y ィ・24z ゥ・25z ェ・25y ァ・グリッドに位置する。ＳＩ５を壊す。ＳＩ５との新旧は、ＳＩ５（古）→ＳＩ１（新）である。ＳＩ１の壁際溝が、ＳＩ５の掘方面を壊していることから判断した。

南北約 4.4 m、東西約 4.2 mを測り、主軸はＮ－ 87°－Ｗである。

土層掘り下げの際に掘り過ぎてしまい、検出時には床面が表出している状況となってしまった。そのため、埋土の状況は記録できていない。床面には硬化面、壊されたかまどとそれに伴うと思われる焼土が出土している。床面上でピットを６基検出できたが、主柱穴かどうかははっきりしない。貼床埋土の厚さは約８㎝程であり、３層土の混じりが多くみられる。かまど掘方が建物の掘方上に形跡が見られないことから、建物製作時に先に貼床をしてかまどを作ったと思われる。貼床埋土を外すと、13 基のピットと建物内を囲む壁際溝が検出される。壁際溝断面ｂ－ｂ’を観察すると、壁際溝埋土は貼床埋土と異なるため、前述の床面の時期より前の時期の溝と考えられる。掘方面は硬化した跡は見られなかったが、床面であった可能性がある。

遺物は掘方面検出ピットより土師器杯（第 23 図６）、須恵器杯（第 23 図 16）、かまど埋土中から須恵器杯（第 23 図 17）が出土した。23 － 6 は底部から口縁部に向かい直線的に伸び、内外面に赤彩を施される。23 － 16、23 － 17 は体部上半が開き、中位に２本の凹線帯を持つが、23 － 17 は凹線帯がはっきりしない。

３A区ＳＩ２（第 15 図）

25z ァ・25z ェ・グリッドに位置する。ＳＩ 16 を壊す。ＳＩ 16 との新旧は、ＳＩ 16（古）→ＳＩ２（新）である。ＳＩ２掘方がＳＩ 16 の床面を壊していることから判断した。

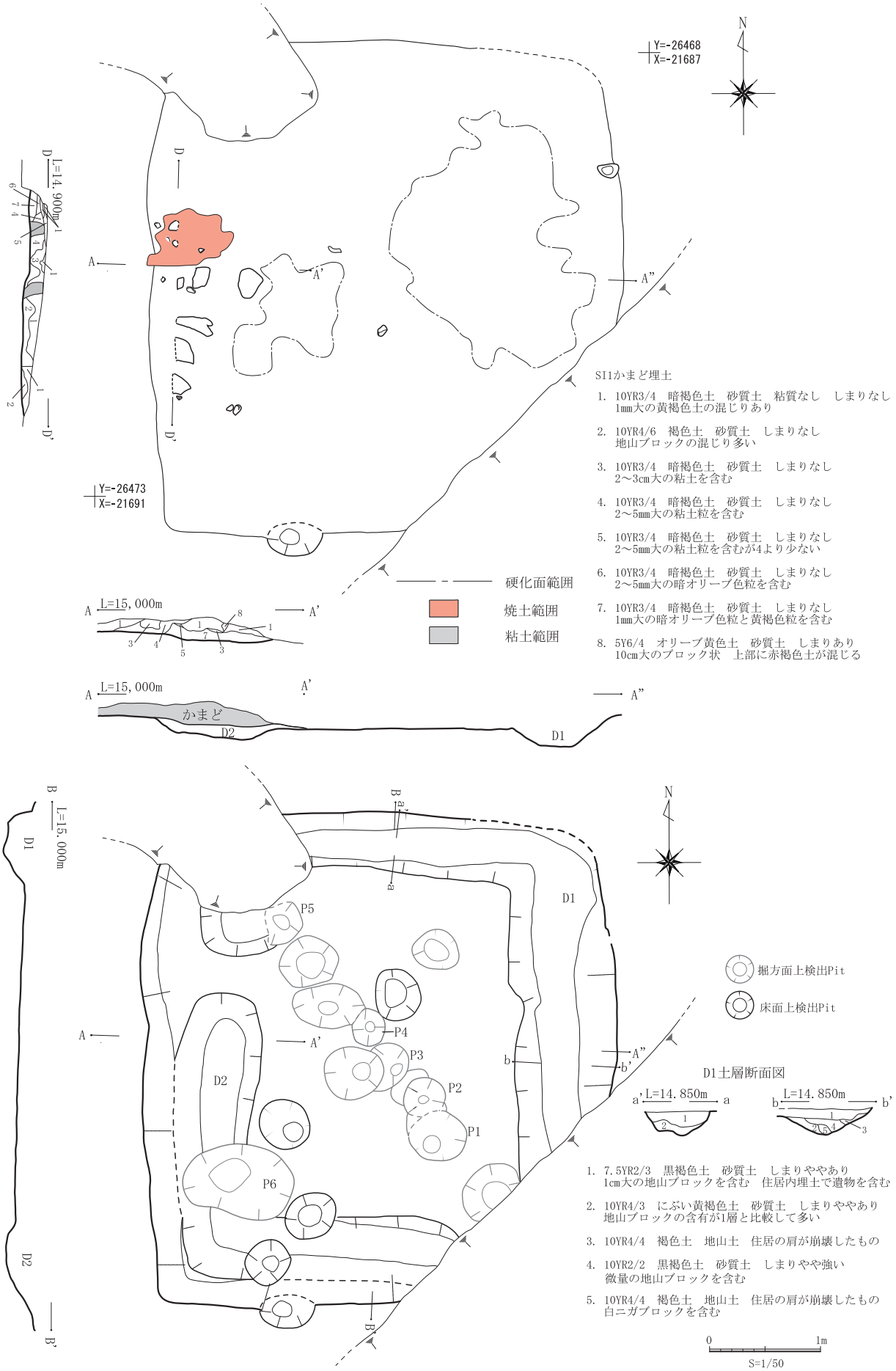
南北約 3.9 m、東西約 3.9 m、検出面から床面までの深さは約 25㎝を測る。主軸はＮ－ 142°－Ｗである。

南西壁にかまどが付いているが壊されていて、埋２層の南西側に粘土が散乱している状況であった。床面は埋８層上面で、中央部付近に硬化面が出土する。柱穴は床面上でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４を検出した。柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約 1.4 m、Ｐ２－Ｐ３間が約 1.0 m、Ｐ３－Ｐ４間が約 1.2 m、Ｐ４－Ｐ１間が約 1.2 mを測る。

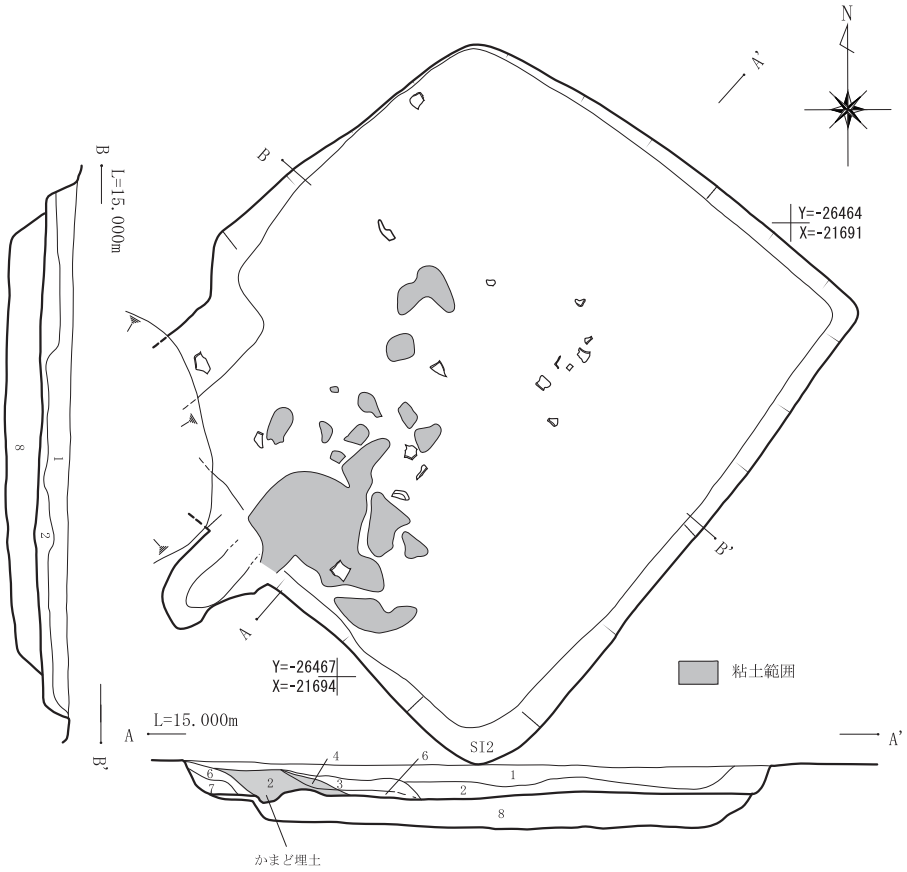
建物掘方は、埋８層下で埋１、２層までの掘方よりやや小さくなり、軸がずれる。主柱穴位置は竪穴壁の上端の四辺から見るとやや傾いていたが、埋８層から下の掘方での四辺と傾きが合うことから、当初、埋８層下の掘方の規模で建物を作り、その後、柱位置を変えず拡張をしたのではないかと思われる。

遺物は埋２層中から、土師器杯（第 23 図１）（第 23 図 12）、土師器鉢の口縁部（第 24 図６）、土師器甕（第 24 図２）、須恵器椀（第 23 図 20）、かまど埋土から土師器杯（第 23 図２）が出土した。23 － 1 は体部と底部の境がはっきりせず、やや内側に湾曲しながら口縁部に向かう。内外面に赤彩を施される。23 － 12 は体部は直線的に口縁部に伸びる。底部外面には墨書で『男』の文字が見られる。２方向の板状圧痕が認められる。24 － 6 は内面は口縁部にハケメ後ナデ、体部はヘラケズリ、外面は口縁部にハケメ後ナデ、体部はハケメ調整され、内外面にススが付着する。24 － 2 は体部外面はヨコナデ後ハケメ、内面はヘラケズリ調整され、指頭圧痕が残る。23 － 20 は底部境から体部中位にかけてやや内側に湾曲し、中位から口縁部にかけてやや外反する。高台の断面形は下底が短い台形であり、底部端に付く。底部外面に墨書があり、はっきりとしないが『榎本』または『複本』と記されているように思われる。23 － 2 は体部は開き気味であり、口縁部付近でやや外反する。

埋８層中から須恵器蓋（第 23 図 23）、埋８層上面の硬化面下より土師器杯の底部（第 23 図 14）が出土した。23 － 23 は扁平なボタン状のつまみを持ち、天井部はやや丸みを持つ。口縁の断面形は端部が小さい三角形の形状である。23 － 14 は内外面ともに赤彩を施され、外底面に『榎』と思われる文字の墨書が入る。



第 14 図　3 A 区 SI1 平面・断面図



1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土
しまりややあり　粘質なし
0.5～2mm大の黄褐色粒を多量に含む
0.5～1mm大の赤褐色粒を微量に含む
1層と2層の間(2層直上)から土器片出土

2．10YR2/3　黒褐色土　砂質土
しまりややあり　粘質なし
黄褐色粒を含むものの 1層ほど量が多くない
赤褐色粒を微量に含む
かまどに使用されていた粘土の塊が混入する

3．10YR2/3　黒褐色土
2層と同様の土であるがかまどの粘土が
多量に含まれる
微量ではあるが2mm大の赤褐色粒を含む

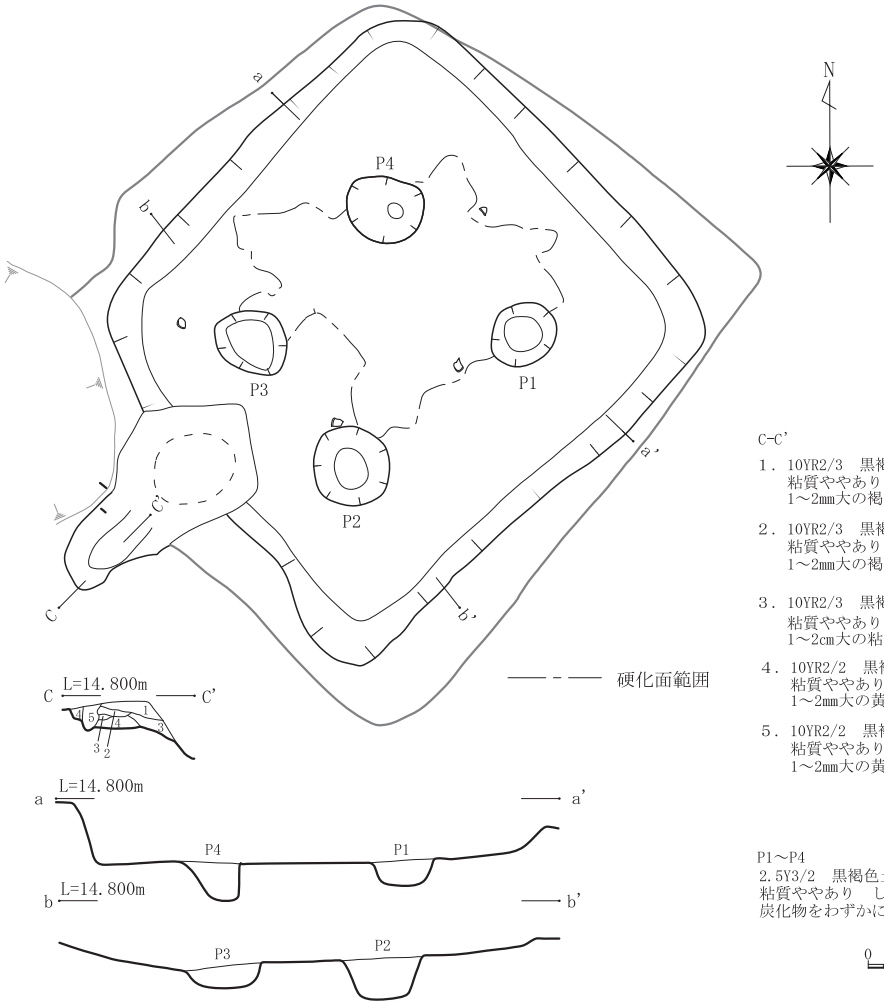
4．10YR5/4　にぶい黄褐色土　粘土質
しまり強い　かまどに用いられた粘土

5．10YR2/3　黒褐色土　砂質土
しまりややあり
1、2層の基本土と同様に、黄褐色粒、
赤褐色粒は含まない

6．10YR3/4　暗褐色土　砂質土
しまりややあり　地山黄褐色ブロックを含む
0.5～2mm大の少量の黄褐色粒を含む

7．10YR3/4　暗褐色土　砂質土
しまりややあり　6層よりもやや暗い
極微量の黄褐色粒を含む

8．7.5YR3/4　暗褐色土　砂質土
しまりややあり　ほとんど混じりがない



C-C'
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
1～2mm大の褐色土粒を少し含む

2．10YR2/3　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
1～2mm大の褐色土粒を少し含むが１より少ない

3．10YR2/3　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
1～2cm大の粘土(赤褐色粒)を多く含む

4．10YR2/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
1～2mm大の黄褐色土が西側に少しある

5．10YR2/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
1～2mm大の黄褐色土を多く含む

P1～P4
2.5Y3/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
炭化物をわずかに含む　地山ブロック(3層)混じる

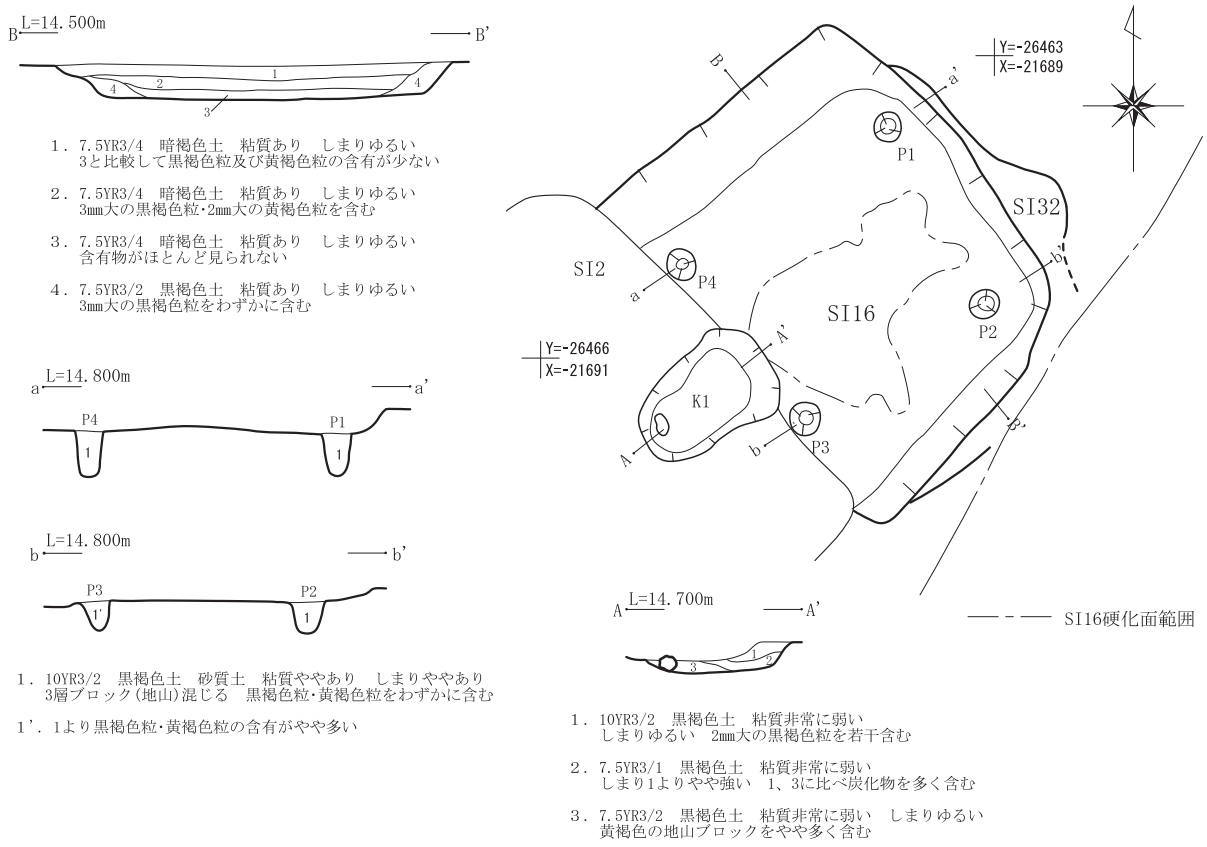
0　1m
S=1/50

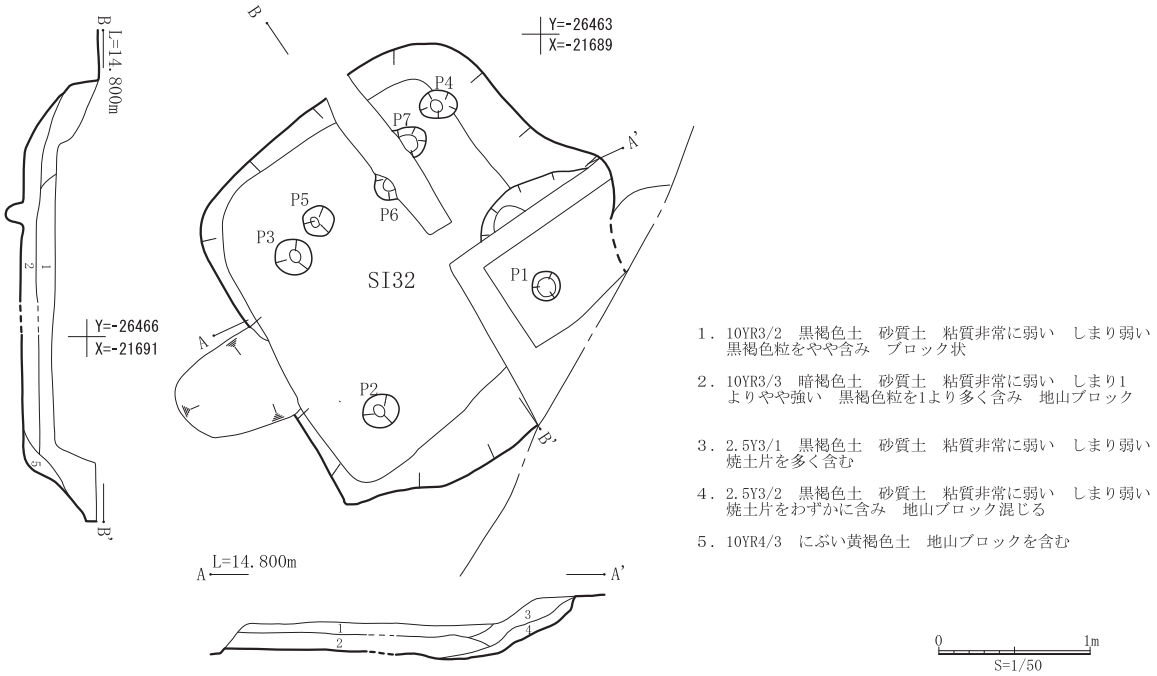
第 15 図　3 A 区 SI2 平面・断面図

３A区ＳＩ 16（第 16 図）

24zィ・25zァ・グリッドに位置する。ＳＩ 32 を壊し、ＳＩ２に壊される。ＳＩ 32 との新旧は、ＳＩ 32（古）→ＳＩ 16（新）である。ＳＩ 32 は、ＳＩ 16 の掘方面下から検出され、ＳＩ 32 のかまどをＳＩ 16 の掘方が壊していることから判断した。

南北約 2.7 m、東西は現況で 2.0 m以上、検出面から床面までの深さは約 23㎝を測る。主軸はＮ－ 128°－Ｗである。





第 16 図　３A 区 SI16･SI32 平面・断面図

床面は掘方面で、中央部付近に硬化面が出土する。柱穴は床面上でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４を検出した。柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約 1.4 m、Ｐ２－Ｐ３間が約 1.4 m、Ｐ３－Ｐ４間が約 1.3 m、Ｐ４－Ｐ１間が約 1.6 mを測る。かまど跡が南西側にＳＩ２掘方面で確認された。掘方面にそで石を据えるための凹みは見られなかった。

遺物は掘方面上に須恵器杯（第 23 図４）、埋２層中に須恵器蓋（第 23 図 22）が出土した。23 － 4 は体部がやや直立気味であり、底部との境に丸みを持つ。口縁部はやや外反する。23 － 22 は扁平な擬宝珠形つまみを持ち、天井部はやや丸みを持つ。口縁端部の断面形ははっきりしない三角形で、内面に僅かな凹みがつけられている。

３A区ＳＩ 32（第 16 図）

ＳＩ 16 掘方面で検出した。24z ィ・25z ァ・グリッドに位置する。

南北約 2.3 m、東西約 2.6 m、検出面から床面までの深さは約 20㎝を測る。主軸はＮ－ 31°－Ｗである。

床面は埋２層上面でしまりが強くなかったことから掘方面であると考えられる。検出時、北東辺にかまど跡を検出したが、ＳＩ 16 に削平されているため構造は不明である。埋４層は焼土片の混入が少ないことから、かまど部分の貼床と思われる。埋３層土に焼土片を多く含む。柱穴は７基検出し、主柱穴は配置からＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４と考えられる。柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約 1.4 m、Ｐ２－Ｐ３間が約 1.2 m、Ｐ３－Ｐ４間が約 1.4 m、Ｐ４－Ｐ１間が約 1.4 mを測る。

遺物は埋土中に須恵器杯（第 23 図８）が出土した。23 － 8 は底部が丸く突出気味で、体部はやや直立気味である。

３A区ＳＩ３（第 17 図）

25y ァ、25y ィ、25z ゥ、25z ェ、グリッドに位置する。ＳＫ１に壊され、ＳＩ 24 を壊す。ＳＩ 24 との新旧は、ＳＩ 24（古）→ＳＩ３（新）である。検出時、ＳＩ３の埋土は暗褐色土、ＳＩ 24 の埋土は黒褐色土であり、ＳＩ３がＳＩ 24 を壊していること、また掘方面がＳＩ 24 より、５㎝程浅いことから判断した。

南北約 3.2 m、東西約 3.6 m、検出面から床面までの深さは約 10㎝を測る。長軸はＮ－ 49°－Ｅである。

床面は掘方面で、平坦にするために埋２層土を一部貼っているようである。柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３を検出した。配置より主柱穴と思われる。柱穴間はＰ１－Ｐ３間が約 1.1 m、Ｐ２－Ｐ３間が約 1.5 mを測る。掘方面上で、４本目の主柱穴位置と予想される場所を探したが、柱穴跡、または柱の当たるところの土の硬化は見られなかった。建物内南西側に建物内土坑Ｋ１を検出した。Ｋ１は長軸の長さ約 112㎝、深さは約 16㎝を測る。Ｋ１内には建物埋２層土が入っているため、建物の貼床整地の際に埋められたと思われる。

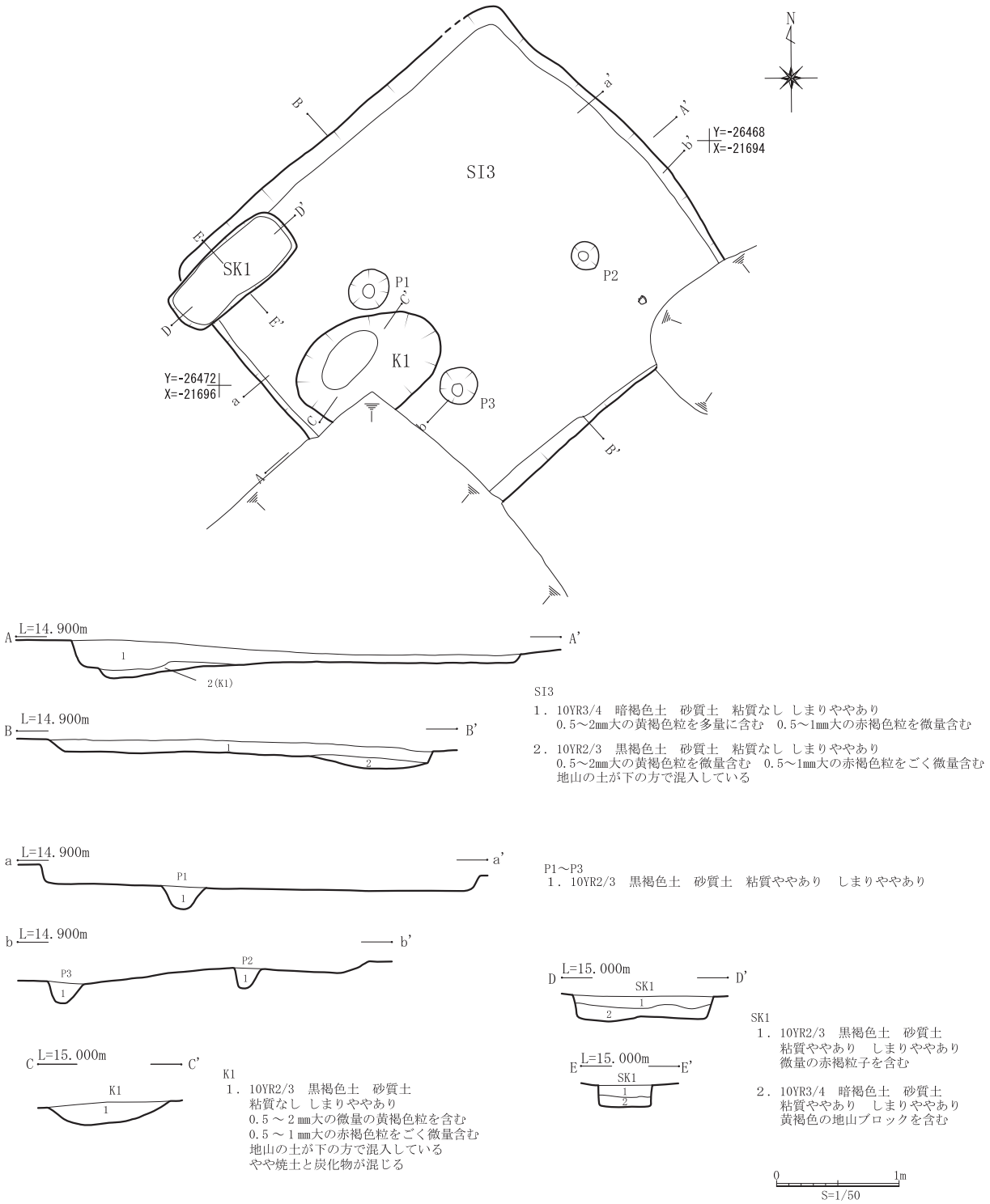
遺物は埋土１層中に須恵器蓋（第 24 図４）が出土した。天井部が平坦であり、内外面にヒダスキが見られる。口縁部端は断面三角形の形状であるが、あまり大きくなく内面に僅かな凹みがつく。

３A区ＳＩ４（第６図 ３区古代遺構配置図参照）

26x ァ・グリッドに位置する。北西側が調査区外に伸びるため、現況では、南北約 2.1 m、東西 1.4 m以上、検出面から床面までの深さは約８㎝を測る。長軸はＮ－ 35°－Ｅである。

床面は掘方面で、中央部に広く硬化面を検出した。建物北東側隅に柱穴Ｐ１、Ｐ２を検出したが、対になる柱穴を検出できなかった。

遺物は実測できるものは見られなかった。

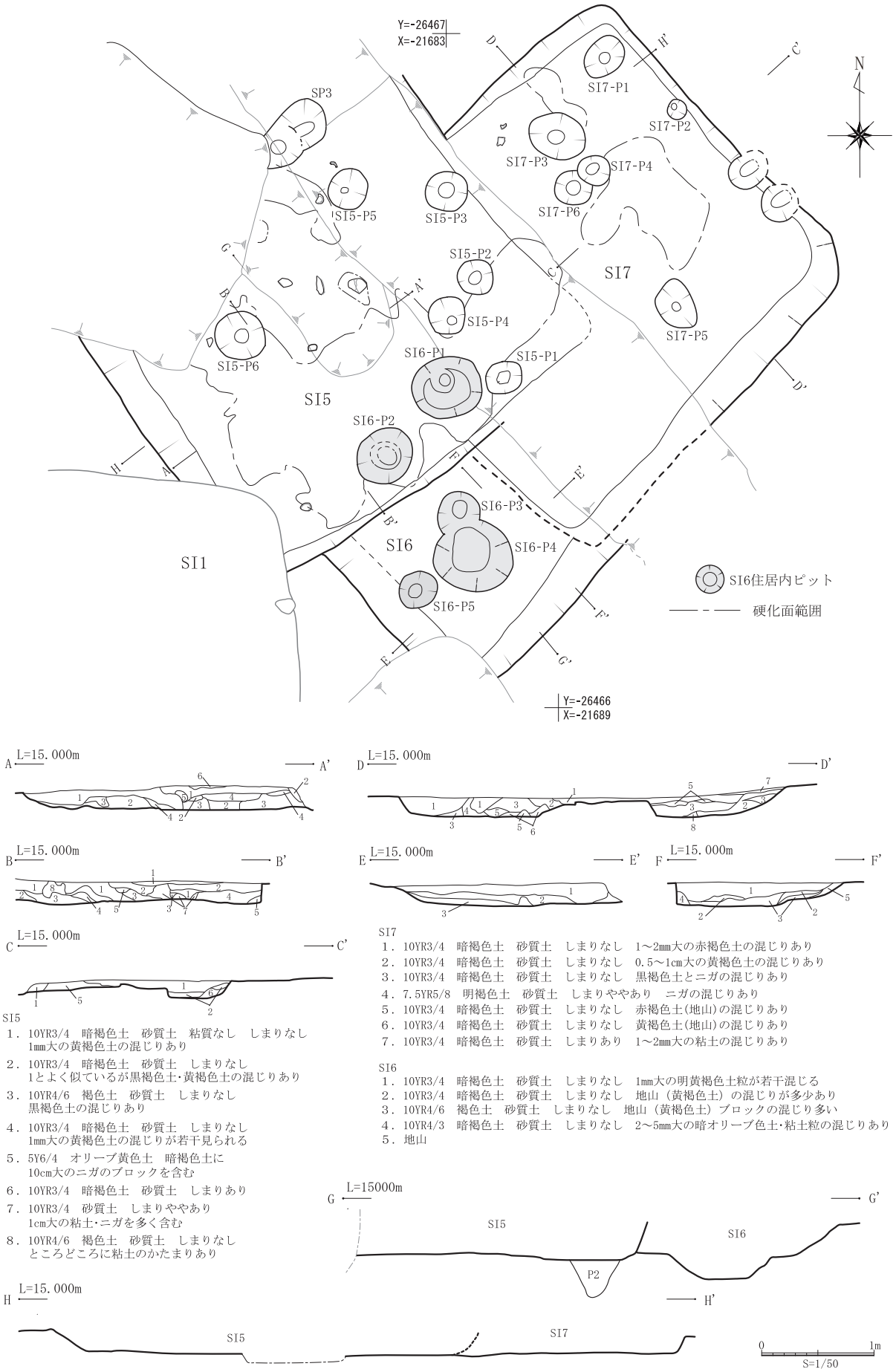


第 17 図　３A 区 SI3 平面・断面図

３A区ＳＩ５(第１８図)

24zウ・24zェ・グリッドに位置する。ＳＩ１に壊され、ＳＩ７、ＳＩ６を壊す。ＳＩ７、ＳＩ６との新旧は、ＳＩ６（古）→ＳＩ７→ＳＩ５（新）である。ＳＩ５とＳＩ７では、切り合い部分が撹乱で壊されていたため最初判断がつかなかったが、撹乱底部に残存している硬化面がＳＩ５の床面上の硬化面とつながることから、ＳＩ５が新しいと判断した。ＳＩ５とＳＩ６では、ＳＩ５の床面がＳＩ６の床面を壊すことからＳＩ５が新しいと判断した。

南北は撹乱で壊されているが現況で 3.1 m以上、東西は約 3.7 m、検出面から床面までの深さは約 20㎝を



SI5

1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまりなし
　1mm大の黄褐色土の混じりあり

2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし
　1とよく似ているが黒褐色土･黄褐色土の混じりあり

3．10YR4/6　褐色土　砂質土　しまりなし
　黒褐色土の混じりあり

4．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし
　1mm大の黄褐色土の混じりが若干見られる

5．5Y6/4　オリーブ黄色土　暗褐色土に
　10cm大のニガのブロックを含む

6．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりあり

7．10YR3/4　砂質土　しまりややあり
　1cm大の粘土･ニガを多く含む

8．10YR4/6　褐色土　砂質土　しまりなし
　ところどころに粘土のかたまりあり

SI7

1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　1～2mm大の赤褐色土の混じりあり

2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　0.5～1cm大の黄褐色土の混じりあり

3．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　黒褐色土とニガの混じりあり

4．7.5YR5/8　明褐色土　砂質土　しまりややあり　ニガの混じりあり

5．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　赤褐色土(地山)の混じりあり

6．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　黄褐色土(地山)の混じりあり

7．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりあり　1～2mm大の粘土の混じりあり

SI6

1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　1mm大の明黄褐色土粒が若干混じる

2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　しまりなし　地山（黄褐色土）の混じりが多少あり

3．10YR4/6　褐色土　砂質土　しまりなし　地山（黄褐色土）ブロックの混じり多い

4．10YR4/3　暗褐色土　砂質土　しまりなし　2～5mm大の暗オリーブ色土･粘土粒の混じりあり

5．地山

第 18 図　3 A 区 SI5･SI6･SI7 平面・断面図

測る。長軸はＮ－ 55°－Ｗである。

床面は掘方面上で、建物内南東側に広く硬化面が広がる。建物内埋土が層状ではなくブロック状であることから、廃棄後はすぐに埋められたものであると思われる。柱穴は掘方面上でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６を検出した。その中で主柱穴は配置からＰ４、Ｐ５と思われ、柱穴間は約 1.5 mを測る。西側では柱穴を検出できなかった。

遺物は床面上で土師器椀の底部（第 23 図 15）、須恵器蓋（第 23 図 25）、須恵器小鉢（第 24 図５）、土師器甕（第 24 図３）が出土した。23 － 15 は高台が底部と体部との境に付き、高台断面形状は三角形である。底部外面にヘラ書きが入る。23 － 25 は口径が 19.0㎝を測る。天井部はやや膨らみを持ち、器高はやや高い。口縁部は下方に屈折する。つまみの有無については不明である。24 － 5 は底部端から体部にかけて丸みを持って立ち上がる。24 － 3 は外面に指頭圧痕、ミガキ痕が見られ、内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

３Ａ区ＳＩ７（第 18 図）

24z ァ・24z ィ・24z ゥ・24z ェ・グリッドに位置する。ＳＩ５に壊され、ＳＩ６を壊す。ＳＩ６との新旧は、ＳＩ６（古）→ＳＩ７（新）である。ＳＩ７の掘方面がＳＩ６の床面を壊すことから、ＳＩ７が新しいと判断した。

南北は撹乱で壊されているが、現況で 3.5 m以上、東西は約 3.5 mである。検出面から床面までの深さは約 16cm を測る。長軸はＮ－ 42°－Ｗである。硬化面が埋１層下から出土する。土層断面を記録する際に硬化面を残したままであったため硬化面下の土層の記録を漏らした。硬化面周辺の埋土がブロック状であり、硬化面上で平坦になっていないことから、この硬化面はＳＩ７に伴うものではないと思われる。この硬化面はＳＩ５の硬化面とはつながっていないが、レベルがほぼ同じため、ＳＩ５に伴うものの可能性がある。床面は硬化面は出土しないが掘方面と思われる。柱穴は掘方面でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６を検出した。主柱穴は配置からＰ３とＰ５と考えられ、柱穴間は約 1.9 mを測る。

遺物は埋土中より土師器杯（第 23 図 13）が出土した。体部は直線的に口縁部に向かい口縁部端はやや外反する。外面にヘラ書きが入る。

３Ａ区ＳＩ６（第 18 図）

24z ゥ・グリッドに位置する。ＳＩ５、ＳＩ７に壊されるため、一部しか残存していない。

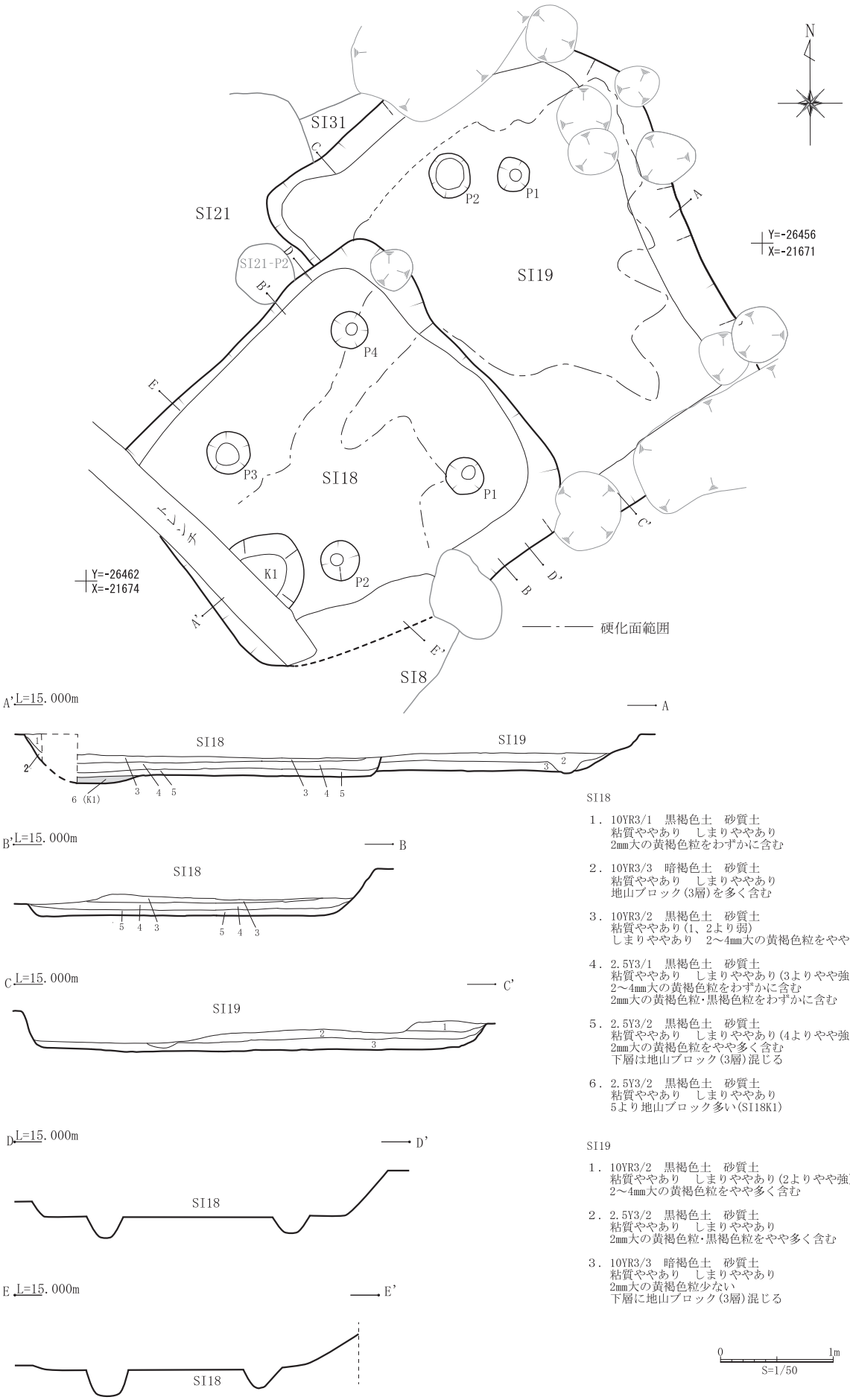
南北は現況で 1.8 m以上、東西は 1.7 m以上、検出面から床面までの深さは約 20cm を測る。長軸はＮ－ 44°－Ｗである。

床面は掘方面で、明確な硬化面は見られなかったが、土がややしまり、硬化した箇所が一部、ＳＩ５に近い側で見られた。柱穴は掘方面上からＰ３、Ｐ４、Ｐ５を、ＳＩ５掘方面からＰ１、Ｐ２を検出し、Ｐ１、Ｐ２は最初、ＳＩ５のピットと考えていたが、埋土がＳＩ６で検出したピットに近いため、ＳＩ６に付随するピットとした。主柱穴等は特定できなかった。

遺物は埋土中より須恵器蓋（第 23 図 26）、須恵器杯（第 23 図７）が出土した。23 － 26 は天井部がやや膨らみを持ち、口縁端部の断面形状は大きい三角形であるが、端部は不明瞭である。一部に光沢のある自然釉が着き、また、斑状に灰オリーブ色の付着物が見られる。23 － 7 は土師質須恵器で底部端から体部下部にかけて丸みを持ち、口縁部に直線的に向かう。

３Ａ区ＳＩ 11（第９図３区古代遺構配置図参照）

23A ァ・23A ィ・グリッドに位置する。ＳＩ 10 を壊し、西側を撹乱、北東側をＳＤ２、南側は３Ｂ区ＳＫ 69、３Ｂ区ＳＫ 70、３Ｂ区ＳＩ３に壊される。そのため、建物の規模ははっきりとしない。ＳＩ 10 との新旧は、ＳＩ 11 の掘方面でＳＩ 10 の一部を検出したが、ＳＩ 11 検出時に切り合いが見えなかったこと、ＳＩ 11 掘



SI18

1．10YR3/1　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
2mm大の黄褐色粒をわずかに含む

2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
地山ブロック(3層)を多く含む

3．10YR3/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり(1、2より弱)
しまりややあり　2～4mm大の黄褐色粒をやや多く含む

4．2.5Y3/1　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり(3よりやや強)
2～4mm大の黄褐色粒をわずかに含む
2mm大の黄褐色粒・黒褐色粒をわずかに含む

5．2.5Y3/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり(4よりやや強)
2mm大の黄褐色粒をやや多く含む
下層は地山ブロック(3層)混じる

6．2.5Y3/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
5より地山ブロック多い(SI18K1)

SI19

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり(2よりやや強)
2～4mm大の黄褐色粒をやや多く含む

2．2.5Y3/2　黒褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
2mm大の黄褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む

3．10YR3/3　暗褐色土　砂質土
粘質ややあり　しまりややあり
2mm大の黄褐色粒少ない
下層に地山ブロック(3層)混じる

第19図　3A区SI18・SI19平面・断面図

方面でＳＩ 10 の検出ラインが直線的でなく、歪みなどがあることから、ＳＩ 10（古）→ＳＩ 11（新）と判断した。

南北は現況で 2.5 m以上、東西は 1.5 m以上、検出面から床面までの深さは約 10cm を測る。
長軸はＮ－８°－Ｗである。

床面は掘方面で一部硬化面が残存する。掘方面より住居内ピットＳＰ 169、Ｐ１を検出した。ＳＰ 169 は西側を撹乱に壊されている。長軸は約 1.5 m、深さは約 65㎝を測る。東側に中端テラスがあり、そこから瓢箪形に掘り込まれる。

遺物は床面上で土師器椀（第 23 図 11）、土師器杯（第 23 図５）、須恵器蓋（第 23 図 28）が出土した。
23 － 11 は反転復元値であるが、底径が 12.0cm と比較的大きい椀である。内面体部、底部、外面体部に回転ヘラミガキされ、また赤彩を施される。高台は底部端に付き、高台高は約８㎜を測る。体部はやや内湾する。
23 － 5 は体部から口縁部に向かって直線的である。内面は底部、体部ともに、外面は体部にヘラミガキされる。
23 － 28 は天井部は膨らみを持たず、つまみも付かない。口縁部端は断面三角形の形状であるが、三角形が小さく内面に僅かな凹みが入る。

３Ａ区ＳＩ 18（第 19 図）

23zァ・23Aェ・グリッドに位置する。３Ａ区ＳＩ 19、３Ａ区ＳＩ８、３Ａ区ＳＩ 21 を壊す。ＳＩ 19 との新旧は、Ａ－Ａ’の土層断面よりＳＩ 18 掘方面がＳＩ 19 床面を壊していることから、ＳＩ 19（古）→ＳＩ 18（新）と判断した。ＳＩ８との新旧もＳＩ 18 の掘方面がＳＩ８床面を壊していることから、ＳＩ８（古）→ＳＩ 18（新）と判断した。ＳＩ 21 との新旧は、ＳＩ 18 検出時にはＳＩ 21 の検出ラインが見えず、ＳＩ 18 掘方面で検出できたことからＳＩ 21（古）→ＳＩ 18（新）と判断した。

南北約 3.2 m、東西約 3.1 m、長軸はＮ－ 50°－Ｅである。最初、遺構埋土と１層土の見分けがつかず、掘削を進めていたが、硬化面が出土したこと、建物の南西側の３層土が竪穴建物の壁面と思われるような落ち込み方であることから、竪穴建物と認識した。貼床の厚さは約 18㎝を測る。床面は埋３層上面で硬化面が残存する。貼床埋土が３層に分層できることから、床面は複数あった可能性も考えられる。柱穴は掘方面でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４検出した。配置から主柱穴と思われる。柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約 1.4 m、Ｐ２－Ｐ３間が約 1.3 m、Ｐ３－Ｐ４間が約 1.6 m、Ｐ４－Ｐ１間が約 1.6 mを測る。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３の埋土は黒褐色砂質土、Ｐ４の埋土は他のピットよりやや暗い。掘方面で建物内土坑Ｄ１を検出した。トレンチで壊してしまったため、長軸は不明、短軸は約 75㎝、ＳＩ 18 掘方面からの深さは約８㎝を測る。

遺物は、埋土中から土師器杯（第 23 図９）が出土した。23 － 9 は内外面ともに回転ヘラミガキされ、赤彩を施される。底部境から体部下部にかけて丸みを持つ。

３Ａ区ＳＩ 19（第 19 図）

22Aゥ・23Aェ・グリッドに位置する。３Ａ区ＳＩ 18 に壊され、３Ａ区ＳＩ 21、３Ａ区ＳＩ 31 を壊す。ＳＩ 21 との新旧は、ＳＩ 19 検出時にＳＩ 21 の検出ラインは見えなくて、ＳＩ 19 掘方面で検出できたことから、ＳＩ 21（古）→ＳＩ 19（新）と判断した。

南北約 4.1 m、東西は壊されているためはっきりとしないが、推定で 2.5 ～ 3.1 mを測り、東西方向にやや歪んだ台形の形状であると思われる。長軸はＮ－ 41°－Ｗである。

１層掘り下げ時、建物北東部に硬化面を検出した。硬化面の範囲を元に、建物のプラン検出を試みたが検出できなかった。そこで、硬化面を外し数センチ下げると硬化面の南西部に別の硬化面を検出した。この硬化面の範囲を元に、建物の検出を試みたが検出できなかった。そこで、この硬化面も外して検出を行い、ＳＩ 18

とＳＩ 19を検出した。

床面は建物上部に残存していた硬化面の可能性があるが判然としない。硬化面は掘方面より約16㎝の高さであった。柱穴は、掘方面上でＰ１、Ｐ２を検出したが、配置から主柱穴とは言えない。

遺物は土師器、須恵器が出土したが、実測できるものは見られなかった。

３Ａ区ＳＩ 21（第20図）

23zァ・グリッドに位置する。３Ａ区ＳＩ 17、３Ａ区ＳＩ 22、３Ａ区ＳＩ 23、３Ａ区ＳＩ 31を壊し、上部を撹乱、３Ａ区ＳＩ 18、３Ａ区ＳＩ 19に壊される。ＳＩ 17との新旧は、23zァ・グリッドに掘ったトレンチ土層断面で、ＳＩ 21の掘方が、ＳＩ 17の床面を壊していることから、ＳＩ 17（古）→ＳＩ 21（新）と判断した。

南北約2.9ｍ、東西約3.3ｍ、検出面から床面までの深さは約32㎝を測る。主軸はＮ－ 16°－Ｗである。

床面は埋４層上面と思われるが、はっきりとした硬化は見られなかったため、その上層が床面だった可能性がある。柱穴は埋３層上面でＰ５、掘方面でＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４を検出したが、主柱穴を特定するまでには至っていない。北側に壊されたかまど跡があり、軟質砂岩が確認できたが、原位置を保っていない。焼成部は焼土チップを多く含む埋５層と思われる。掘方は無く、床面上に作っているようである。

遺物は埋土２層中から須恵器蓋（第23図24）（第23図27）、須恵器杯（第23図18）、須恵器椀（第23図19）が出土した。23 － 27は天井部はやや膨らみ、つまみは付かない。口縁部は断面三角形で小さい。内面にわずかな凹みが付けられている。23 － 24は天井部は丸みを持ち、輪状つまみが付く。口縁部は断面三角形の形状で内側にわずかな凹みが付けられている。23 － 18は体部は底部より直線的に伸び、口縁部でやや外反する。23 － 19は高台は底部端に付き、高台形は下底が短い台形である。体部は直線的に口縁部に向かい、口縁部端で外反する。外面には自然釉が付き、斑状に灰オリーブ色の付着物が見られる。

３Ａ区ＳＩ 17（第21図）

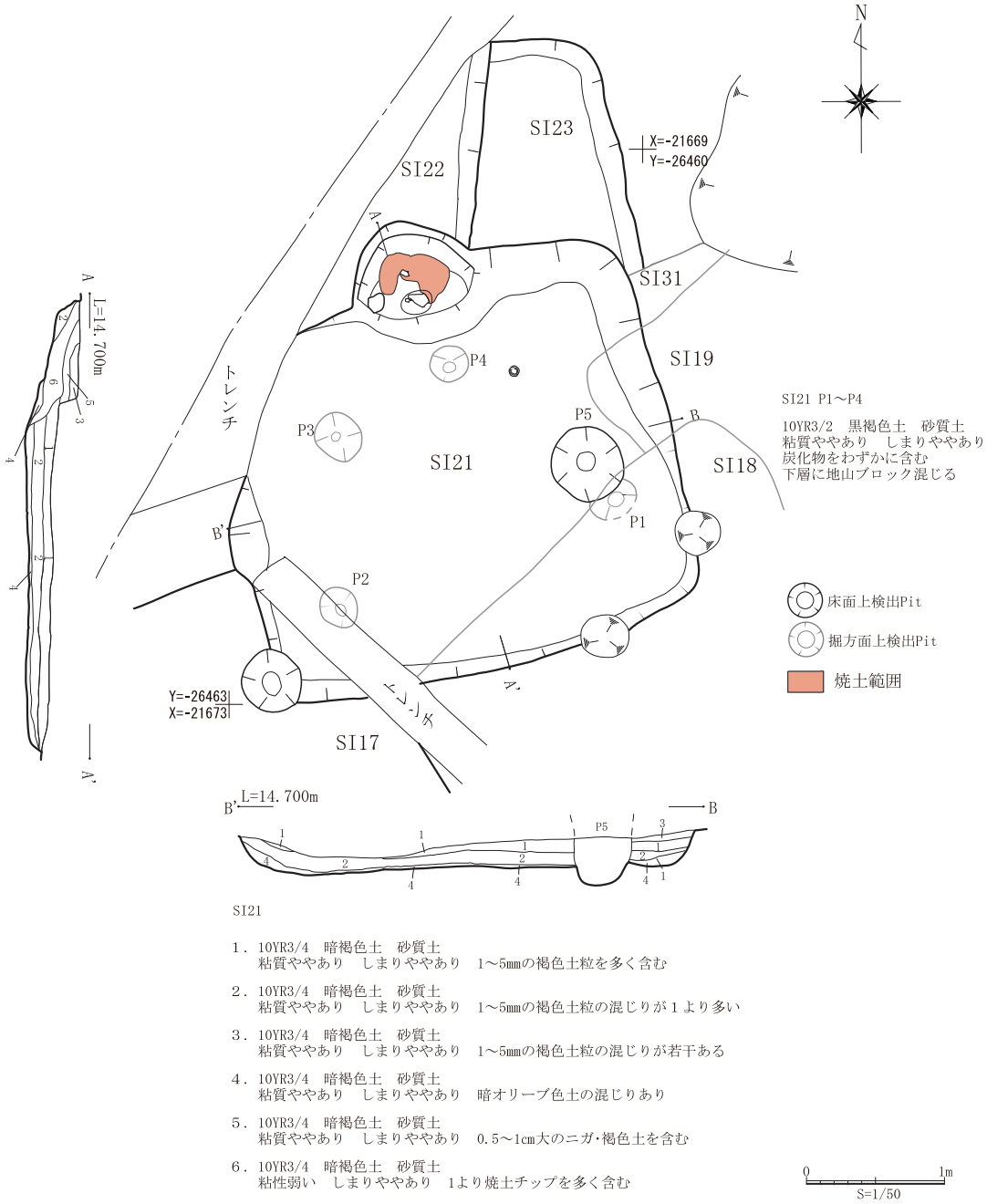
23zァ・23zィ・23zゥ・23zェ・グリッドに位置する。３Ａ区ＳＩ 21、上部を撹乱で壊され、３Ａ区ＳＩ 25、３Ａ区ＳＩ８を壊す。ＳＩ 25との新旧は、調査区北西壁でＳＩ 17の土層がＳＩ 25の土層を切っていることから、ＳＩ 25（古）→ＳＩ 17（新）と判断した。ＳＩ８との新旧は、ＳＩ８の床面をＳＩ 17の掘方が壊していることからＳＩ８（古）→ＳＩ 17（新）と判断した。

最初、建物埋土と１層土の見分けがつかず、調査区北西側には白川が流れているため地形が北西側に下がっていると考えた。掘削時には遺構という認識が無く、掘り下げを行っていたところ、硬化面が出土し、また、３層土の落ち込みが竪穴建物の立ち上がりに近かったため、竪穴建物と判断した。

南北約4.4ｍ、東西は現況で4.0ｍ以上、上端から床面までの深さは約37㎝を測る。長軸はＮ－ 33°－Ｗである。

前述のとおり、掘削途中で竪穴建物と認識したため詳細な断面図は録れていない。床面には硬化面が中央部に残存する。硬化面より５㎝ほど掘削した面で、南側に壁際溝Ｄ１、柱穴Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５を検出した。壁際溝Ｄ１はＬ字に掘られ北西端には柱穴Ｐ５が位置する。Ｄ１の埋土は、柱穴Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４の埋土とほぼ同じであることから、同時期に埋まったと考えられる。主柱穴は配置からＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４と思われる。柱穴間は、Ｐ１－Ｐ２間が約1.4ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が約1.1ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が約1.3ｍ、Ｐ４－Ｐ１間が約1.2ｍを測る。

遺物は埋土中から須恵器蓋（第23図29）が出土した。23 － 29は円盤状で天井部の膨らみは見られない。口縁部端は断面三角形の形状で内側にわずかな凹みが付けられている。

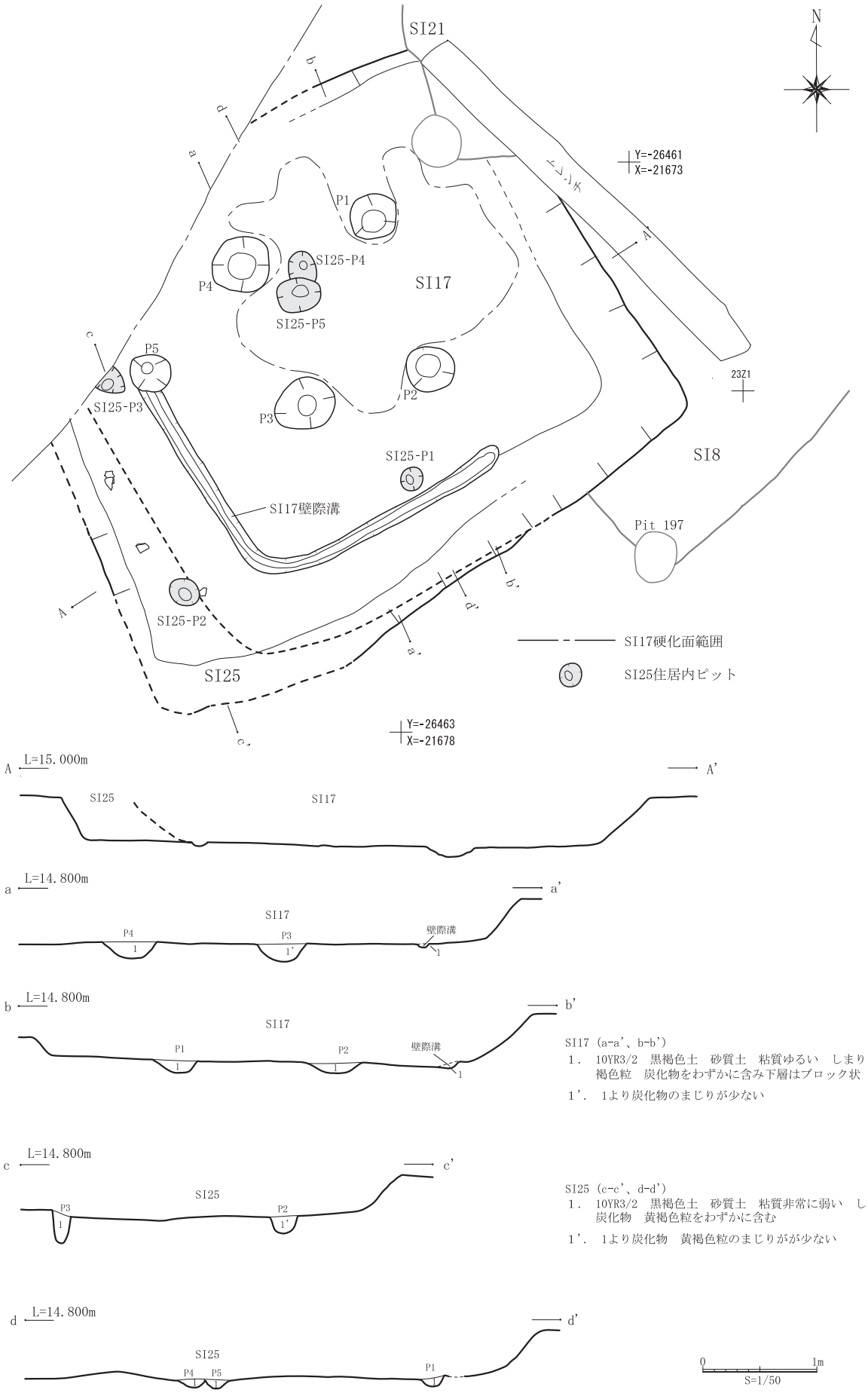


第20図　３Ａ区SI21 平面・断面図

３Ａ区ＳＩ 25（第21図）

23zウ・ェ・グリッドに位置する。３Ａ区ＳＩ 17に壊され、３Ａ区ＳＩ 28を壊す。ＳＩ 28との新旧は、第22図Ｃ－Ｃ’の土層断面より、ＳＩ 25の掘方面がＳＩ 28の床面を壊すことからＳＩ 28（古）→ＳＩ 25（新）と判断した。大部分をＳＩ 17に壊されるため規模は不明である。前述のＳＩ 17と同様、掘削途中で竪穴建物と気づいたため、詳細な断面図は録れていない。床面はＳＩ 17に壊されているため不明である。

掘方面上で柱穴Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５を検出した。主柱穴は、配置からＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４と



第21図 3A区SI17・SI25平面・断面図

考えられる。柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約 2.2 m、Ｐ２－Ｐ３間が約 1.9 m、Ｐ３－Ｐ４間が約 2.0 m、Ｐ４－Ｐ１間が約 2.1 mを測る。

遺物は土師器、須恵器が出土したが、実測できるものは見られなかった。

３Ａ区ＳＩ 28（第 22 図）

23zィ・ゥ・グリッドに位置する。３Ａ区ＳＩ 25 に壊され、３Ａ区ＳＩ 26、３Ａ区ＳＩ 29、３Ａ区ＳＩ 30 の上部を壊す。ＳＩ 26 との新旧は、Ｂ－Ｂ’の土層断面より、ＳＩ 28 がＳＩ 26 の埋土上部を壊していることからＳＩ 26（古）→ＳＩ 28（新）と判断した。ＳＩ 29 との新旧は、ＳＩ 28 の掘方面でＳＩ 29 を検出したことからＳＩ 29（古）→ＳＩ 28（新）と判断した。

南北約 3.5 m、東西約 3.8 m、検出面から床面までの深さは約 17㎝を測る。長軸はＮ－ 90°－Ｅである。

ＳＩ 28、ＳＩ 26、ＳＩ 27 は、遺構埋土と１層土の見分けがつかず、検出できずにベルトを残して掘り下げを行ってしまった。、残したベルトに土層断面を書いている際に建物と気づいたため、土層断面はベルトの断面に残っているものしか上げられなかった。また、平面図でも推定線が多くなってしまった。床面は土層断面より掘方面と思われる。

遺物は上記の状況であり、グリッドで取り上げたため、はっきりとしない。

３Ａ区ＳＩ 26（第 22 図）

23zゥ・24zェ・グリッドに位置する。3Ａ区ＳＩ 28、ＳＩ 29 に壊され、ＳＩ 27 を壊す。ＳＩ 29 との新旧は、Ａ－Ａ’の土層断面に、掘方面の高さはほとんど変わらないが、ＳＩ 29 の立ち上がりがＳＩ 26 の埋土断面中に見られたことからＳＩ 26（古）→ＳＩ 29（新）と判断した。ＳＩ 27 との新旧は、Ｂ－Ｂ’の土層断面より、ＳＩ 26 掘方面がＳＩ 27 掘方面よりやや深く、ＳＩ 27 の床面を壊していることから判断した。

南北約 3.9 m、東西は現況で 3.7 m以上、上端から床面までの深さは約 25㎝を測る。長軸はＮ－ 43°－Ｗである。

床面は埋３層上面で、建物南側に硬化面を検出した。建物に伴う主柱穴は、掘方面でＰ１、Ｐ２、Ｐ３を検出した。柱穴間はＰ１－Ｐ２間が約 2.1 m、Ｐ２－Ｐ３間が 2.2 mを測る。

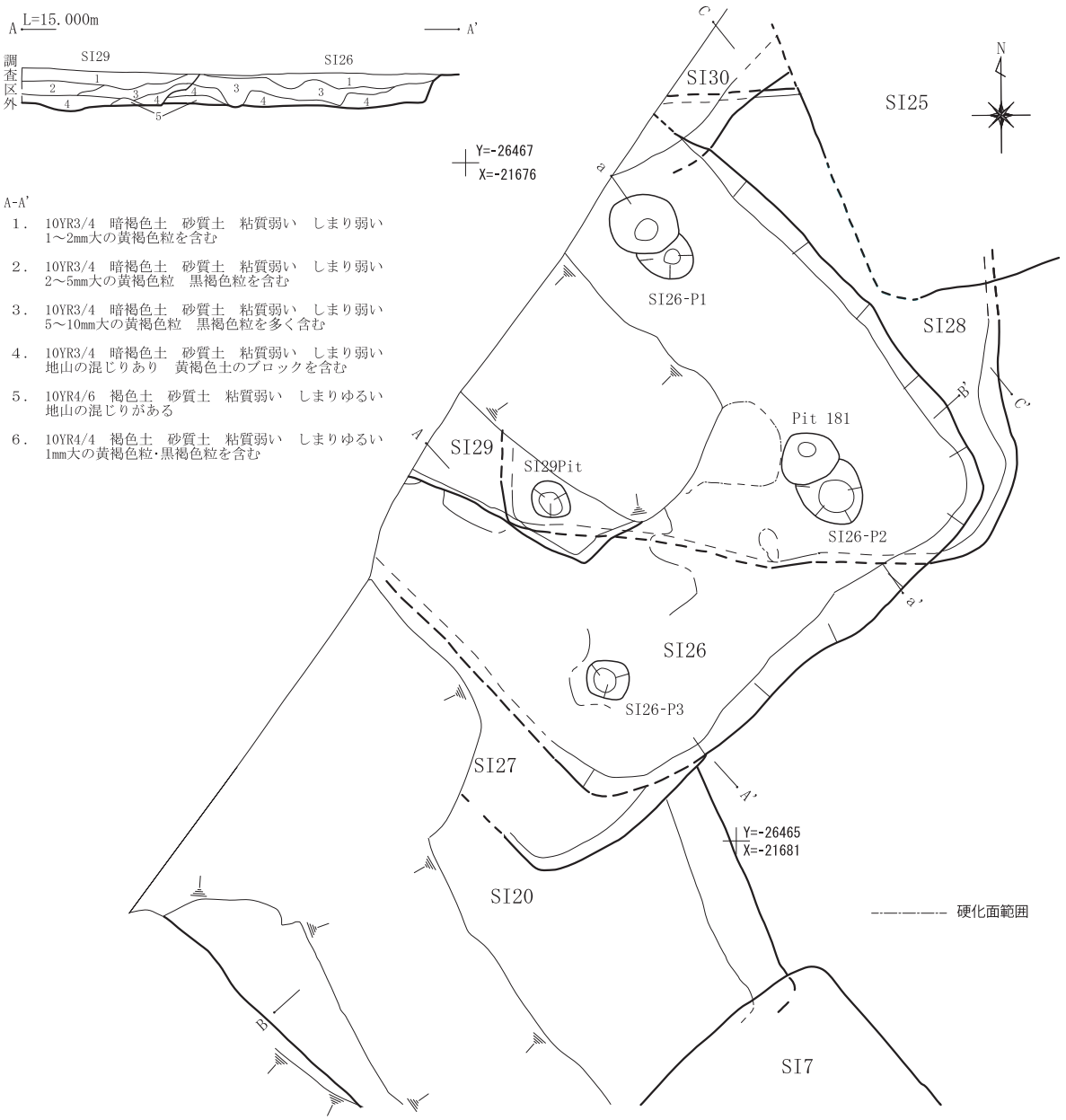
遺物は埋土中から土師器椀（第 23 図 10）が出土した。23 － 10 は底径が小さいため体部は開き、体部下部から口縁部へ直線的に伸びる。口縁部でやや外反する。高台は底部境にやや斜め下向きに付く。

３Ａ区ＳＩ 27（第 22 図）

24zェ・グリッドに位置する。建物の大部分をＳＩ 26 に壊され、ＳＩ 20 を壊す。ＳＩ 20 との新旧は、Ｂ－Ｂ’の土層断面から、ＳＩ 20 の埋土中にＳＩ 27 の立ち上がりが見られるため、ＳＩ 20（古）→ＳＩ 27（新）と判断した。

この建物も、掘り下げ時に建物を認識したため、一部推定の箇所があるが、現存で南北は 0.7 m以上、東西は 2.7 m以上、上端から掘方面までの深さは約 26cm を測る。長軸はＮ－ 43°－Ｗである。

床面は硬化面の残存より埋４層上面と思われるが、硬化面が一部しか出土しなかったため判然としない。



A-A'

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
1～2mm大の黄褐色粒を含む

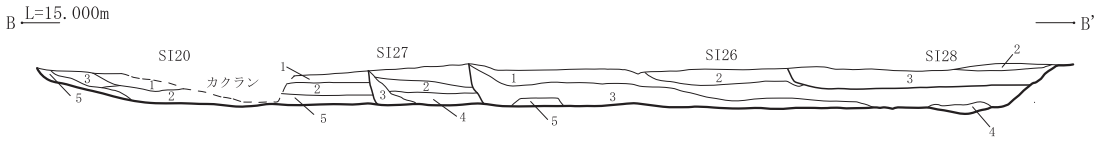
2. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
2～5mm大の黄褐色粒 黒褐色粒を含む

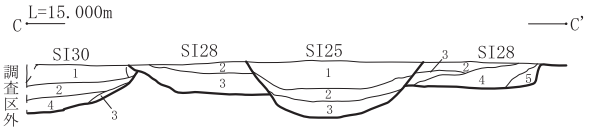
3. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
5～10mm大の黄褐色粒 黒褐色粒を多く含む

4. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
地山の混じりあり 黄褐色土のブロックを含む

5. 10YR4/6 褐色土 砂質土 粘質弱い しまりゆるい
地山の混じりがある

6. 10YR4/4 褐色土 砂質土 粘質弱い しまりゆるい
1mm大の黄褐色粒・黒褐色粒を含む





B-B'

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
1～2mm大の黄褐色粒を含む

2. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
2～5mm大の黄褐色粒 黒褐色粒を含む

3. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
5～10mm大の黄褐色粒 黒褐色粒を多く含む

4. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
褐色土の混じりあり 黄褐色土のブロックを含む

5. 10YR4/6 褐色土 砂質土 粘質弱い しまりゆるい
地山の混じりがある

C-C'

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
1～2mm大の黄褐色粒を含む

2. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
2～5mm大の黄褐色粒を含む

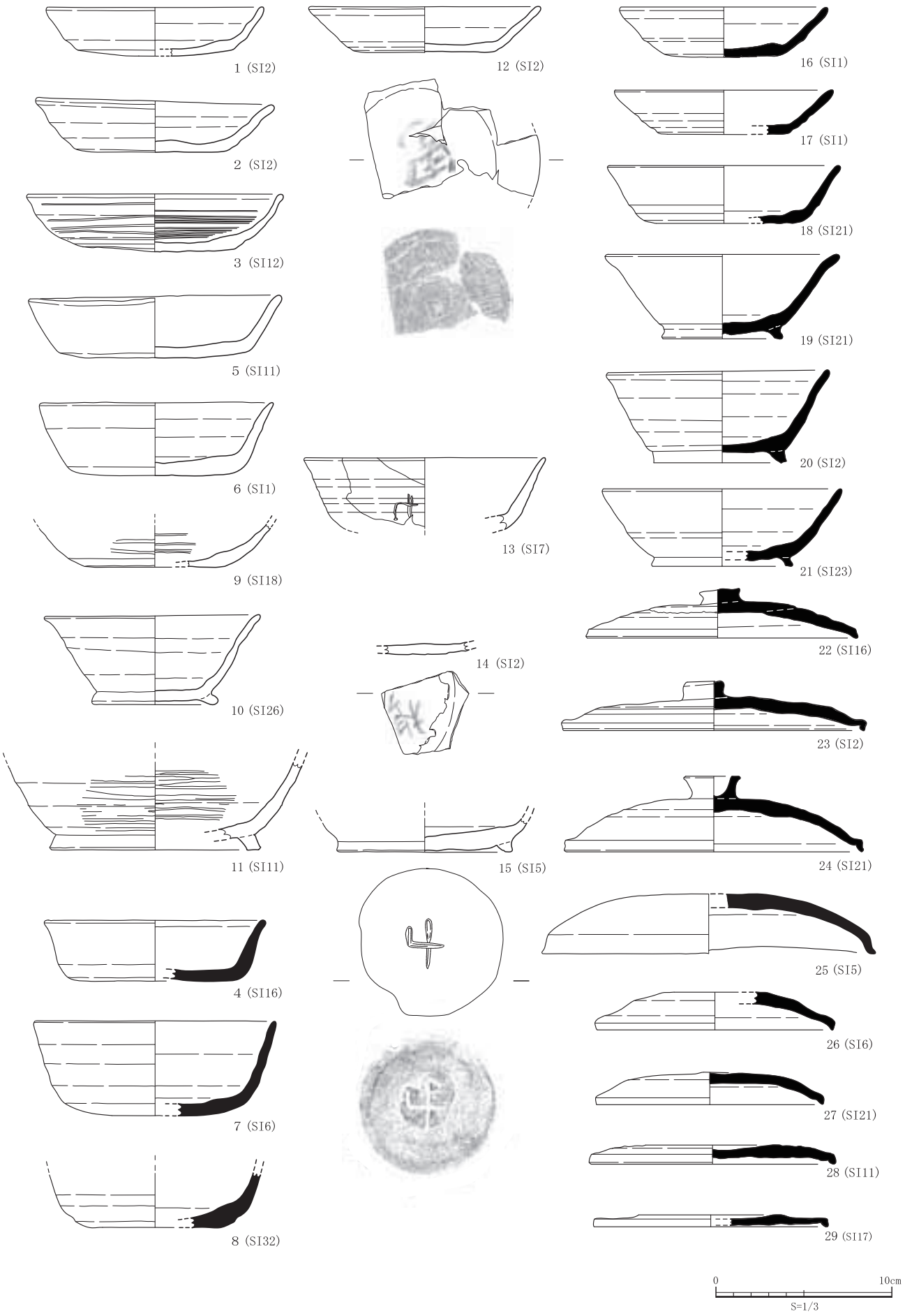
3. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
5～10mm大の黄褐色粒・黒褐色粒を多く含む

4. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土 粘質弱い しまり弱い
褐色土の混じりあり 黄褐色土のブロックを含む

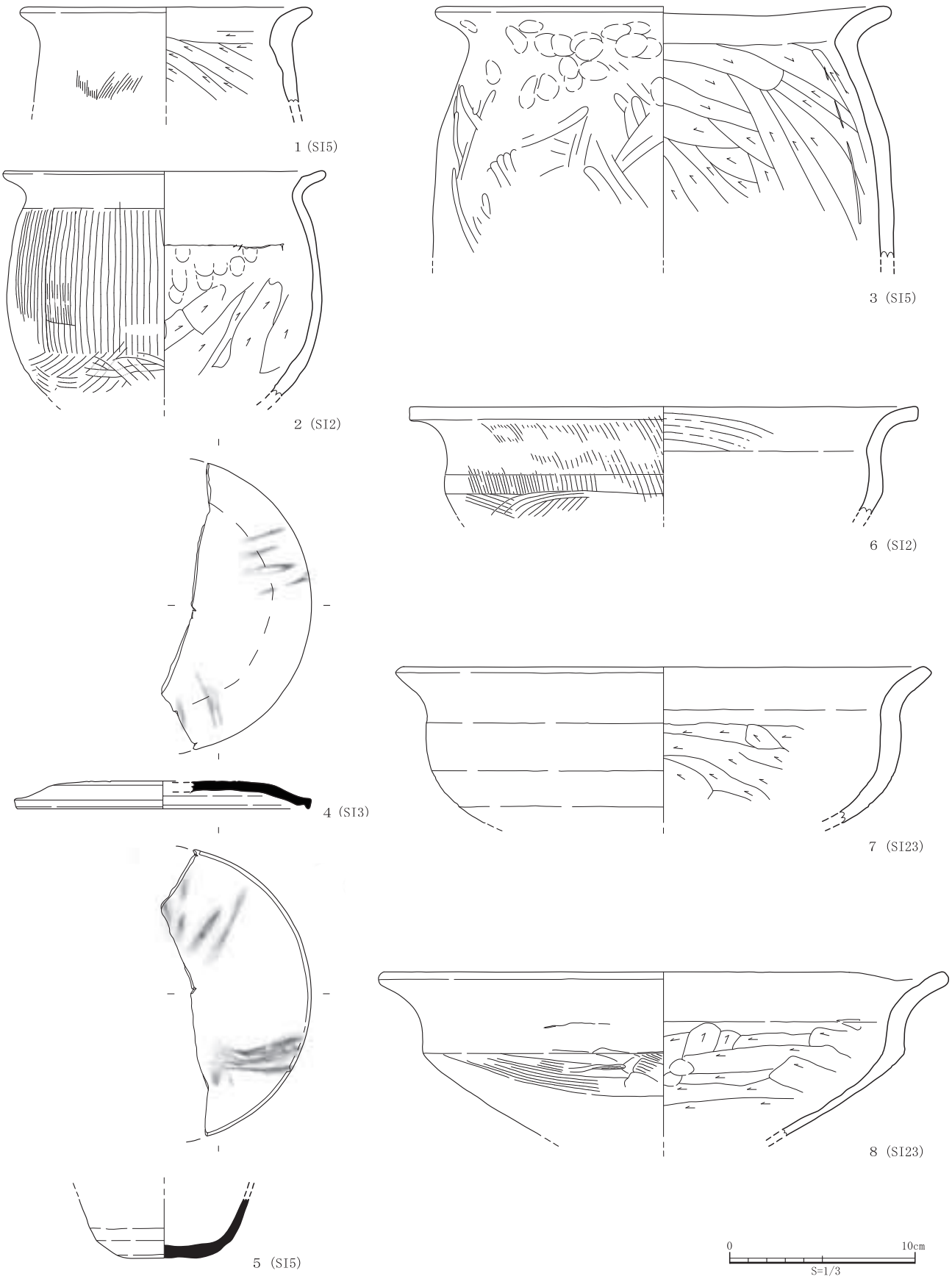
5. 10YR4/6 褐色土 砂質土 粘質弱い しまりゆるい
地山の混じりがある

0 1m
S=1/50

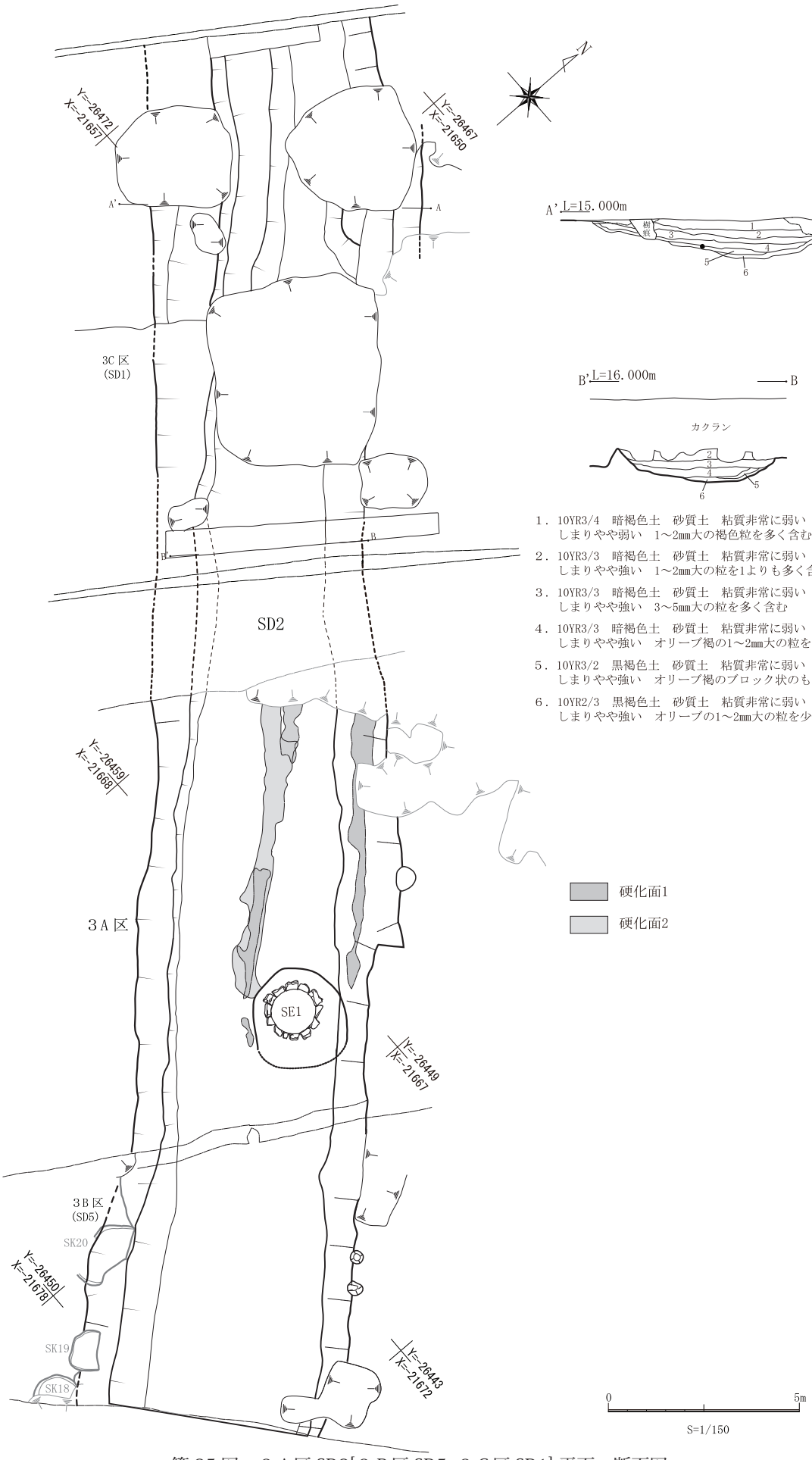
第22図 3A区SI26・SI27・SI28平面・断面図



第23図　３Ａ区出土遺物実測図（１）



第24図　３Ａ区出土遺物実測図（２）



1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い
　しまりやや弱い　1～2mm大の褐色粒を多く含む

2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い
　しまりやや強い　1～2mm大の粒を1よりも多く含む

3．10YR3/3　暗褐色土　粘質土　粘質非常に弱い
　しまりやや強い　3～5mm大の粒を多く含む

4．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い
　しまりやや強い　オリーブ褐の1～2mm大の粒を少量含む

5．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い
　しまりやや強い　オリーブ褐のブロック状のものを多く含みだす

6．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い
　しまりやや強い　オリーブの1～2mm大の粒を少量含む

第25図　3A区SD2[3B区SD5・3C区SD1]平面・断面図

溝跡

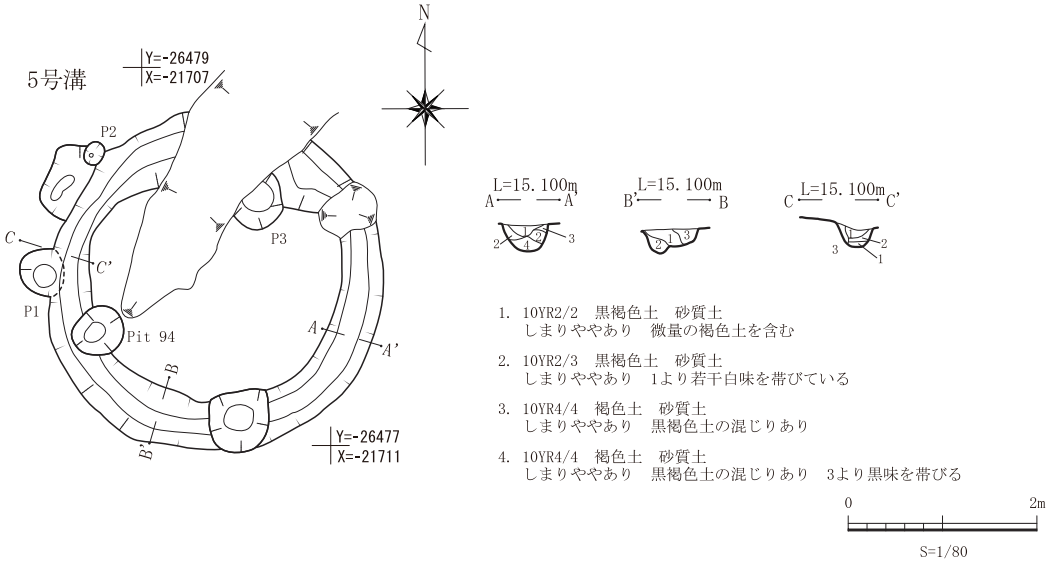
３Ａ区ＳＤ２[３Ｂ区ＳＤ５、３Ｃ区ＳＤ１]（第 25 図）

３Ｂ区から３Ｃ区にかけて調査区を南西－北東に横切る溝で、長さ 37 m、幅６～７m、検出面からの深さ約１mを測る。長軸はＮ－ 45°－Ｗである。現在の道路の方向と同じことであることから、区画の役割を持っていたと思われる。また、底部の一番低い箇所と、北東側の底部付近に硬化面が２面残存することから、通路として使用していた可能性がある。ＳＤ２内に円形で切石積の井戸（ＳＥ１）が出土した。ＳＥ１の掘方内からの出土遺物が近世磁器のかけらであったこと、ＳＥ１に使われていた石は内側が円形になるように加工されていることから近世～近代の井戸であると思われる。

遺物は溝内埋土の上層（埋１～４層）と下層（埋５、６層）に分けて説明する。

上層からは土師器杯（第 28 図１）、土師器椀（第 28 図 13）（第 28 図 16）（第 28 図 19）、土師器蓋（第 29 図 15）、鉄製品（第 28 図 21）が出土した。28 － 1 は内外面に赤彩を施されている。体部は直線的で開きが大きい。28 － 13、28 － 16 はどちらとも内外面に赤彩を施されている。体部は直線的に伸びるがやや開き気味で、口縁部付近で外反する。高台は断面形が台形で底部端に付く。28 － 13 の外底部には板状圧痕が見られる。28 － 19 は内外面に赤彩を施されるが、外底部には赤彩がない。高台は底部端に付き断面形は台形である。体部は開きが小さくやや内湾する。外底面に墨書で『榎本』または『複本』と思われる文字が見られる。29 － 15 は内外面に赤彩を施され、天井部に扁平な乳頭状つまみがあり、口縁部端はやや厚くなる。天井部に墨書で『榎本』の文字が見られる。28 － 21 は残存部の全長が 7.7cm、全幅が 3.2cm である。

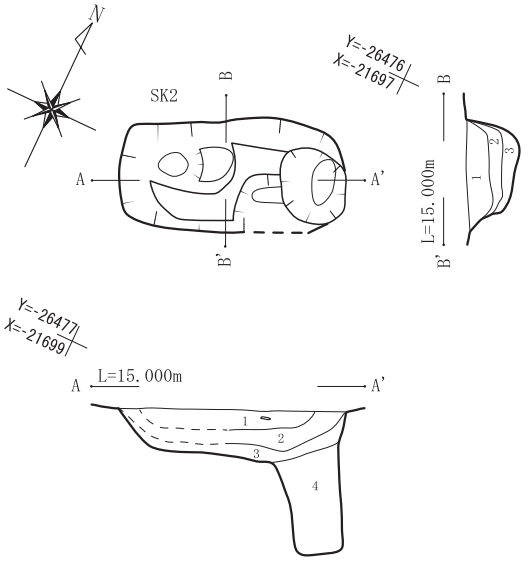
下層からは土師器杯（第 28 図２）（第 28 図４）（第 28 図５）が出土した。28 － 2 は体部は立ち気味で口縁部付近でやや外反する。28 － 4 は外底面に墨書で『複』または『榎』の文字が見られる。28 － 5 は内外面に赤彩を施されているが、外底面には赤彩はない。外底面に板状圧痕、２文字の墨書が見られ、１文字目は「きへん」の文字と思われるが、はっきりしない。



第 26 図　３Ａ区 SD5 平面・断面図

３Ａ区ＳＤ５（第 26 図）

26y ウ・27y ェ・グリッドに位置する。一部を撹乱に壊される。幅 40 ～ 60cm、検出面からの深さ約 24cm の円形状に掘られた溝である。用途は不明であり、掘方面などに硬化する箇所は見当たらない。埋土は黒褐色砂質土で、遺物等は出土しなかった。



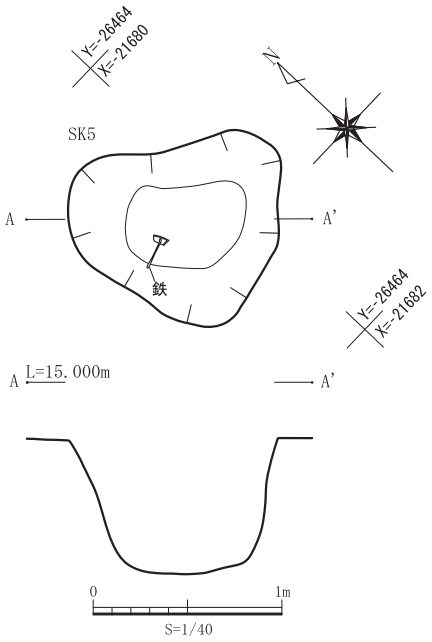
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまりなし
　5mm大の地山(黄褐色)ブロックを含む　遺物を含む

2．10YR4/4　黒褐色土　砂質土　粘質なし　しまりゆるい
　1～2cm大の地山ブロックを含む　1mm大の白色粒をわずかに含む

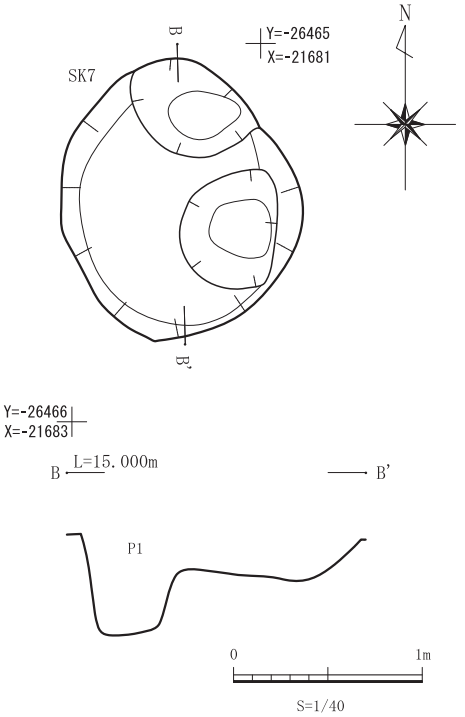
3．7.5YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質なし　しまりゆるい
　2よりも地山ブロックの数が多い

4．7.5YR4/4　褐色土　砂質土　粘質なし　しまりなし
　1mm大の白色粒を含む

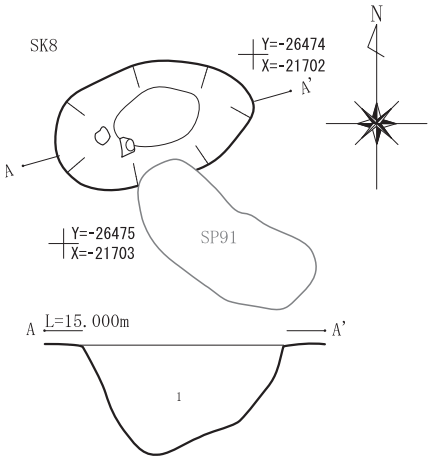
0　1m
S=1/40



0　1m
S=1/40



0　1m
S=1/40



1．7.5YR2/2　黒褐色土　粘質なし　しまりなし
　上層～下層にかけて丸い小礫及び土器片を含む

0　1m
S=1/40

第27図　3A区SK2･SK5･SK7･SK8平面・断面図

土坑

３Ａ区ＳＫ２（第 27 図）

25y ウ・グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸 120cm、短軸 58cm、検出面からの深さは 22 ～ 28cm を測る。土坑基底は平坦ではなく、東西端に凹みがある。特に東側は土坑内ピットがあり、土坑基底からの深さは 50 ～ 60cm を測る。

３Ａ区ＳＫ５（第 27 図）

24z ァ・グリッドに位置する。平面不整楕円形を呈し、長軸 110cm、短軸 100cm、検出面からの深さは約 70cm を測る。土坑埋土中から須恵器杯（第 28 図 11）、土坑基底部から、雁又鏃（第 28 図 23）、南西側の基底部から刀子（第 28 図 20）が出土した。28 － 11 は底径と口径の差が大きいため、底部から口縁部にかけて開きが大きい。28 － 23 は全長 19cm、雁股の幅 5 cm、抉りの深さは 3.6cm を測る。28 － 20 は先端部に木片が付着する。基底部から金属製品が出土することから、土坑墓の可能性もある。

３Ａ区ＳＫ７（第 27 図）

24z ェ・グリッドに位置する。平面楕円形を呈し、長軸 148cm、短軸 126cm、検出面からの深さは約 16 ～ 22cm を測る。土坑内にピットがあり、深さは 30cm である。埋土中から須恵器杯（第 28 図３）が出土した。厚手であり、底部から体部にかけて丸みを持つ。体部から口縁部にかけて開きはあまりない。色はにぶい橙色で、一見土師器のように思われるが、焼成が良好であるため須恵器とした。

３Ａ区ＳＫ８（第 27 図）

26y ァ・グリッドに位置する。平面楕円形を呈し、長軸 107cm、短軸 52cm、検出面からの深さ 58cm を測る。土坑内埋土は黒褐色土で丸い小礫や土器片が入る。土坑埋土中から土師器椀（第 28 図 14）（第 28 図 15）（第 28 図 18）が出土した。28 － 14 は口縁部にススが付着する。体部はやや膨らみを持ち、口縁部端で外反する。断面形は三角形に近い台形の高台が底部端に付く。外底部には板状圧痕が２面見られることから、乾燥中に置き直した可能性がある。28 － 15 は底部から体部にかけてほんの少し膨らみを持ち、体部から口縁部へは直線的に伸びる。高台は底部端から体部の境目に付く。外底部には板状圧痕が見られる。28 － 18 は底径が 6.2cm と小径で、底部端に断面形が三角の高台が付く。

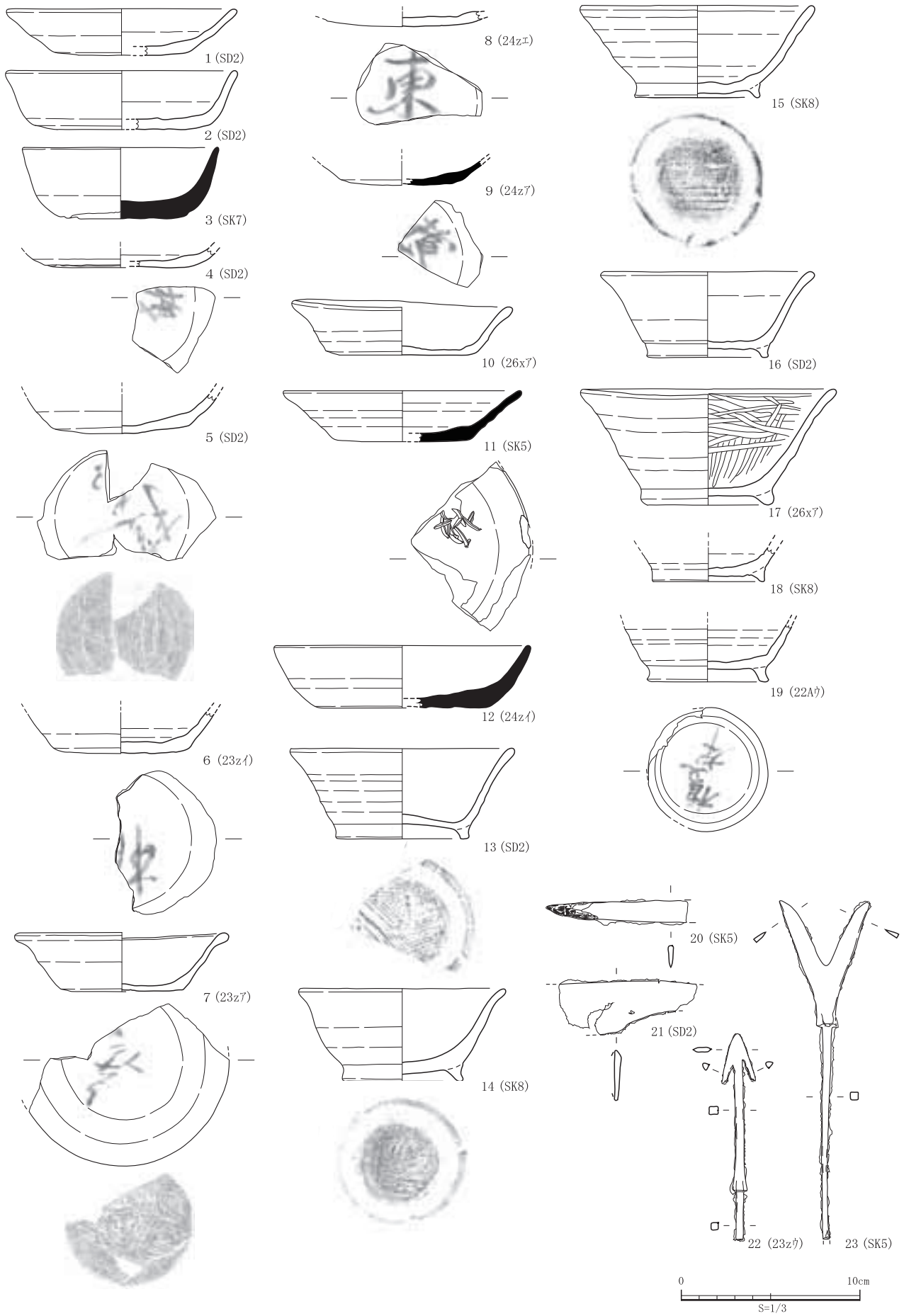
ピット（３区古代遺構配置図：第６図～ 13 図参照）

３Ａ区ＳＰ 12（第 13 図）

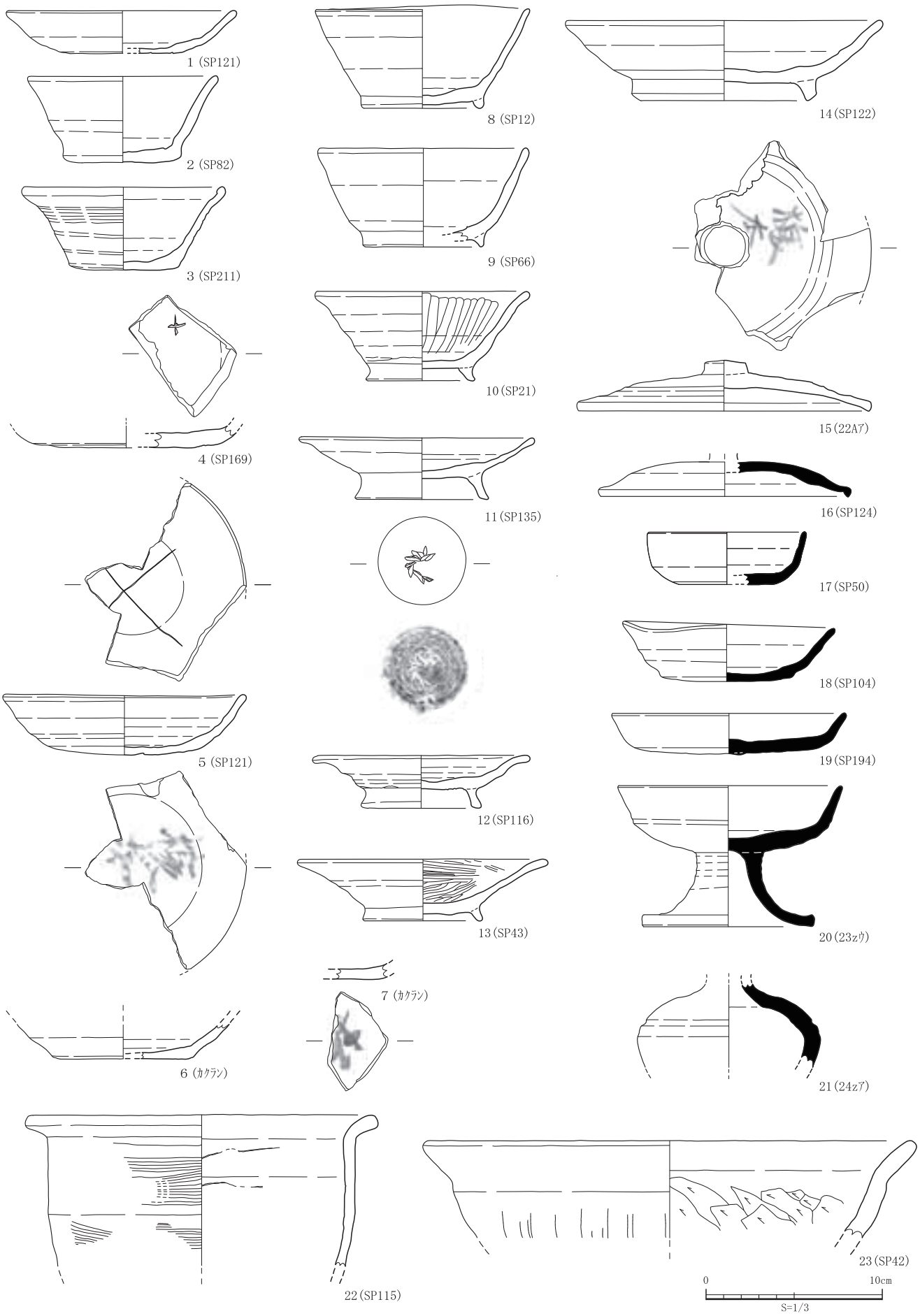
22A ァ・グリッドに位置する。長径 58cm、短径 54cm、検出面からの深さ 60cm を測る。埋土中から土師器椀（第 29 図８）が出土した。器高は高く、体部は直線的に伸びる。高台は底部端に付き、先端は丸く、比較的小さめである。

３Ａ区ＳＰ 21（第 12 図）

23z ィ・グリッドに位置する。 長径 48cm、短径 35cm、検出面からの深さ 20cm を測る。埋土中から土師器椀（第 29 図 10）が出土した。この椀は黒色土器Ａであり、内面はヘラミガキされる。高台は底部端に付き、やや外向きである。体部は直線的であり、口縁部端でやや外反する。



第 28 図　3 A 区出土遺物実測図（3）



第 29 図　3 A 区出土遺物実測図（4）

３A区ＳＰ 42（第 12 図）

22z ィ・グリッドに位置する。 長径 43cm、短径 30cm、検出面からの深さ 32cm を測る。埋土中から土師器鉢（第 29 図 23）が出土した。口縁部から体部中位までであるが、口径は 28cm と大きい。外面はハケメが磨滅していてはっきりしない。内面はヘラケズリされる。

３A区ＳＰ 43（第 12 図）

22z ィ・グリッドに位置する。長径、短径ともに 44cm、検出面からの深さ 25cm を測る。埋土中から土師器椀（第 29 図 13）が出土した。黒色土器Ａであり、内面はヘラミガキされる。高台は底部端に付き、やや小さめである。器高は低めで、体部は直線的で大きく開く。

３A区ＳＰ 50（第７図）

26y ァ・グリッドに位置する。 長径 45cm、短径 30cm、検出面からの深さ 86cm を測る。埋土中から須恵器杯（第 29 図 17）が出土した。底部端から体部中位にかけて丸みがあり、中位から口縁部にかけてほぼ直立する。

３A区ＳＰ 66（第７図）

25y ゥ・グリッドに位置する。長径 54cm、短径 53cm、検出面からの深さ 33cm を測る。埋土中から土師器椀（第 29 図９）が出土した。器高は高く、体部はほんの少し内湾する。高台は底部端に付き、断面は三角形で比較的小さめである。

３A区ＳＰ 82（第６図）

26y ェ・グリッドに位置する。長径 57cm、短径 50cm、検出面からの深さ 56cm を測る。埋土中から土師器杯（第 29 図２）が出土した。器高が高いが口径は小さいため、体部の開きは小さい。体部は直線的で口縁部がやや外反する。

３A区ＳＰ 104（第６図）

26x ィ・グリッドに位置する。長径 58cm、短径 52cm、検出面からの深さ 36cm を測る。埋土中から須恵器杯(第 29 図 18)が出土した。体部は開き､口縁部に向かって直線的である。口縁部の一部で湾曲が見られる。

３A区ＳＰ 115（第６図）

26y ェ・グリッドに位置する。 長径 54cm、短径 49cm、検出面からの深さ 53cm を測る。 埋土中から土師器甕（第 29 図 22）が出土した。外面は回転ナデ後ハケメ調整、内面は回転ナデ後ヘラケズリ調整される。内外面にススが付着する。

３A区ＳＰ 116（第８図）

23z ィ・グリッドに位置する。長径 47cm、短径 42cm、検出面からの深さ 26cm を測る。 埋土中から土師器高台付皿（第 29 図 12）が出土した。内面、外面に赤彩を施されている。体部は下半がやや丸みを持ち、口縁部にかけて外反する。高台は 29 － 11 よりも小さく、高台端はやや丸みを持ち、高さ 1 cm、幅 0.6cm を測り、やや外向きに付く。

３Ａ区ＳＰ 121（第８図）

23z ィ・24z ァ・グリッドに位置する。長径 97cm、短径 60cm、検出面からの深さ 38cm を測る。埋土中から土師器杯（第 29 図１）（第 29 図５）が出土した。29 － 1 は内外面に赤彩を施され、体部は直線的で、開きが大きい。29 － 5 も体部が直線的で開くが、29 － 1 に比べて器高が高く、底径と口径の差も小さいため、開きは小さい。内外面に赤彩を施され、内底面には『×』の掘りの浅い線刻が入る。外底面には墨書が見られ、墨書は『複本』という字と思われる。

３Ａ区ＳＰ 122（第８図）

23z ィ・グリッドに位置する。長径 69cm、短径 60cm、検出面からの深さ 23cm を測る。南側に検出面からの深さ 9 cm の低まりがあり、２つのピットを一つとして掘削した可能性がある。埋土中から土師器高台付皿（第 29 図 14）が出土した。口径が 18cm、底径が 10.5cm と大きめの皿で、高台高が 1 cm、高台厚が 0.9cm と、しっかりした高台が付く。断面形は高台端部外側を削っているため台形であり、接地面は線状である。内外面に赤彩を施されている。

３Ａ区ＳＰ 124（第８図）

23A ゥ・グリッドに位置する。長径 57cm、短径 45cm、検出面からの深さ 52cm を測る。埋土中から須恵器蓋(第 29 図 16)が出土した。天井部はやや膨らみ、中央につまみの貼付痕が残る。口縁部の断面は三角形で、内面に線状の凹みがある。

３Ａ区ＳＰ 135（第８図）

24z ィ・グリッドに位置する。ＳＰ 132 に壊されるため、現況で長径 50cm、短径 25cm、検出面からの深さ 45cm を測る。埋土中から土師器高台付皿（第 29 図 11）が出土した。内外面に赤彩を施される。体部は直線的で口縁部端でやや外反する。高台高は 1.2cm、高台厚は 0.6cm と、比較的大きめの高台が「八の字」に付く。外底面に長さ４～８㎜、幅２㎜の線状の爪跡痕が、時計回りに 10 箇所入る。

３Ａ区ＳＰ 169（第９図）

23A ァ・グリッドに位置する。ＳＩ 11 の掘方面上で検出された。長径 152cm、短径は西側を撹乱に壊されるため現況では 68cm、検出面からの深さ 66cm を測る。埋土中から土師器杯（第 29 図４）が出土した。内底面の中心から 1.5cm ほどずれた箇所に『＋』のヘラ記号がある。

３Ａ区ＳＰ 194（第８図）

24z ァ・グリッドに位置する。ＳＫ５に西側を壊されるため現況では長径 75cm、短径 53cm、検出面からの深さ 39cm を測る。埋土中から須恵器皿（第 29 図 19）が出土した。内底面が擦れていることから転用硯の可能性もある。

３Ａ区ＳＰ 211（第６図）

26x ィ・グリッドに位置する。長径 48cm、短径 48cm、検出面からの深さ 35cm を測る。埋土中から土師器杯（第 29 図３）が出土した。器高が高く口径が小さいため、体部の開きは小さい、体部は直線的であるが上位でやや外反し、口縁部端で内側に入る。

包含層出土遺物

23z ァ・グリッドから土師器杯（第 28 図７）が出土した。内外面に赤彩を施される。体部は直線的に伸び、口縁部端で外反する。外底面に板状圧痕と墨書が見られるが、文字の解読はできなかった。

23z ィ・グリッドから土師器杯（第 28 図６）が出土した。体部はやや開き気味である。外底面に墨書が見られる。「きへん」の文字と思われるが、はっきりとはしない。

23z ゥ・グリッドから鉄鏃（第 28 図 22）と須恵器高杯（第 29 図 20）が出土した。28 － 22 は長さ 11.6cm、幅 1.9cm を測る。先端が→の形である。29 － 20 は杯部では底部は丸く、体部から口縁部にかけて直線的である。底部と体部の境に凹線が入る。

24z ァ・グリッドから須恵器杯（第 28 図９）、須恵器壷（第 29 図 21）が出土した。28 － 9 は外底面に墨書が見られ、一文字目が「きへん」の文字と思われる。29 － 21 は小型で胴部に凹線が入る。

24z ィ・グリッドから須恵器杯（第 28 図 12）が出土した。内外面とも橙色である。底部から体部への屈曲は丸みを持つ。内底部に『榎』のヘラ書きが見られ、焼成前に刻まれている。

24z ェ・グリッドから土師器杯の底部（第 28 図８）が出土した。外底面に墨書が見られ、『東』と書かれている。内外面に赤彩を施されているが、外底面の墨書部分には赤彩はない。

26x ァ・グリッドから土師器杯（第 28 図 10）と土師器椀（第 28 図 17）が出土した。28 － 10 は内外面に赤彩を施される。体部は直線的で開き、口縁部付近で外反する。外底面に墨書が見られるが、文字の判別はできなかった。28 － 17 は黒色土器 A で内面がヘラミガキされる。高台は底部端に付き、高台端は丸く仕上げられる。体部は直線的で体部上位でやや外反する。

撹乱出土遺物

第 29 図 6 は土師器杯で内外面に赤彩を施されている。外底面に墨書が見られる。２文字で 1 文字目は、へんが右払いの字のようであるがはっきりとしない。

第 29 図 7 は土師器杯の底部で内外面に赤彩を施されている。外底面に墨書が見られ、『榎』または『複』の字と思われる。

（２）３Ｂ区

竪穴建物

３Ｂ区ＳＩ２（第30図・31図）

24Aゥ・24zィ・グリッドに位置する。北東側をＳＤ４に壊され、南側は調査区外に広がるため、現況では南北2.7 m以上、東西5.3 m以上を測る。主軸はＮ－61°－Ｗである。

床面は埋２層上面で、北西側に焼土、粘土粒が出土する。掘り下げていくと、土師器甕などの大量の土器片が出土する。それとともに原位置を留めている支柱やそで石も出土することから、かまどは一部（上部構造と煙道のほとんど）壊されているが、比較的残りは良いと思われる。掘方面においても、両そで石下部には小穴、支脚下部には凹みが見られる。

かまど作成の手順として、まず建物の掘方を掘り、埋２層土を入れ建物の床面を造る。それからかまどの範囲を掘って、かまど埋土の埋３土・埋２土を入れ、小穴を掘り、そこに支柱やそで石とする軟質砂岩を埋めているようである。焼土はかまど埋１層上面に残存する。

柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４が床面上から、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９が掘方面上で検出されるが主柱穴は確定できなかった。

遺物は埋２層から土師器甑（第34図５）（第34図６）（第34図７）、土師器甕（第35図１）（第35図２）（第35図３）（第35図５）が出土した。34－５は甑の底部の厚さが３㎜と薄く、穿孔は残存で６箇所である。穿孔時の工具痕がある。外面は赤彩を施され、ハケメが多く入る。内面はケズリ後部分的にミガキが入る。
34－６は甑の底部が筒抜けの底部中央に一条の桟が貼り付けてある。胴部の上位で器厚が厚くなっている箇所があることから把手が付いていた可能性がある。外面はハケメ、内面はケズリ後粗いミガキが入る。
34－７は底部は無く胴部から口縁部である。外面はヨコナデ後ハケメ、口縁部ではヨコナデし、ハケメを消している。35－１、35－２、35－３、35－５は外面はハケメ調整、内面はケズリ調整される。35－１、35－３は口縁部に刻み目痕が、35－１は内面に工具痕が数箇所残る。

３Ｂ区ＳＩ３（第32図）

23Aィ・グリッドに位置する。北東側をＳＫ20に壊され、ＳＩ４、ＳＩ11を壊す。ＳＩ４との新旧は、ＳＩ３掘方面がＳＩ４の床面を壊していることから判断した。ＳＩ11との新旧は、ＳＩ３埋１層上ではＳＩ11は検出できず、ＳＩ３掘方面でＳＩ11を検出したことかから判断した。

南北約1.5 m、東西約2.6 m、検出面から床面までの深さは約18cmを測る。長軸はＮ－75°－Ｗである。

床面は埋２層上面で硬化面は確認できなかった。柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ５が検出されるが主柱穴は特定できなかった。

遺物は埋２層中に土師器甕（第35図４）、土師器杯（第34図１）が出土した。35－４は頸部から胴部にかけての張りは少ない。外面はハケメを入れヨコナデ調整される。内面はケズリ調整される。破片はＳＩ１１の埋土中からも出土したが、ＳＩ３貼床の際に混入した可能性がある。34－１は内外面に赤彩を施され、体部は開きやや内湾する。

３Ｂ区ＳＩ４（第32図）

23Aィ・24Bゥ・グリッドに位置する。北西側をＳＩ３、北東側、南西側を撹乱に壊され、ＳＩ５を壊す。ＳＩ11との新旧ははっきりとしない。ＳＩ５との新旧関係は、検出の際、平面でＳＩ４の埋土とＳＩ５の埋土では黄褐色土の混じりはＳＩ５が多いこと、南西側撹乱断面から、ＳＩ４の立ち上がりが確認できたことからＳＩ４をＳＩ５が壊していると判断した。ＳＩ11との新旧は、ＳＩ４完掘の際に、平面でＳＩ11の埋土

と思われる土は認識できたが、黄褐色土の混じりが多く、ＳＩ 11 の埋土とはできなかったため、新旧をはっきりさせることができなかった。

現況で南北 1.7 m以上、東西 1.5 m以上、床面は削平されていると思われる。長軸はＮ－ 47°－Ｗである。

柱穴は検出面でＰ１、掘方面でＰ２、Ｐ３、Ｐ４が検出されたが、主柱穴は確定できなかった。

遺物は埋２層から土師器杯（第 34 図２）（第 34 図３）が出土した。34 －２は内外面に赤彩を施されている。底部は膨らみを持ち、体部は底部端からやや内湾して開き気味に口縁部に伸びる。34 －３は底部のみであるが、内外面に赤彩を施され、体部は開き気味と思われる。34 －２、34 －３の外底面には墨書が見られるが、内容については判別できなかった。

３Ｂ区ＳＩ 11（第 32 図）

23Aィ・グリッドに位置する。南側撹乱に、上部をＳＩ３、ＳＩ４に壊され、ＳＩ７を壊す。

南側が撹乱に壊され、西側は調査区外のため、現況では南北 1.8 m以上、東西 2.1 m以上、検出面から掘方面までの深さは約 12㎝を測る。長軸はＮ－ 105°－Ｗである。

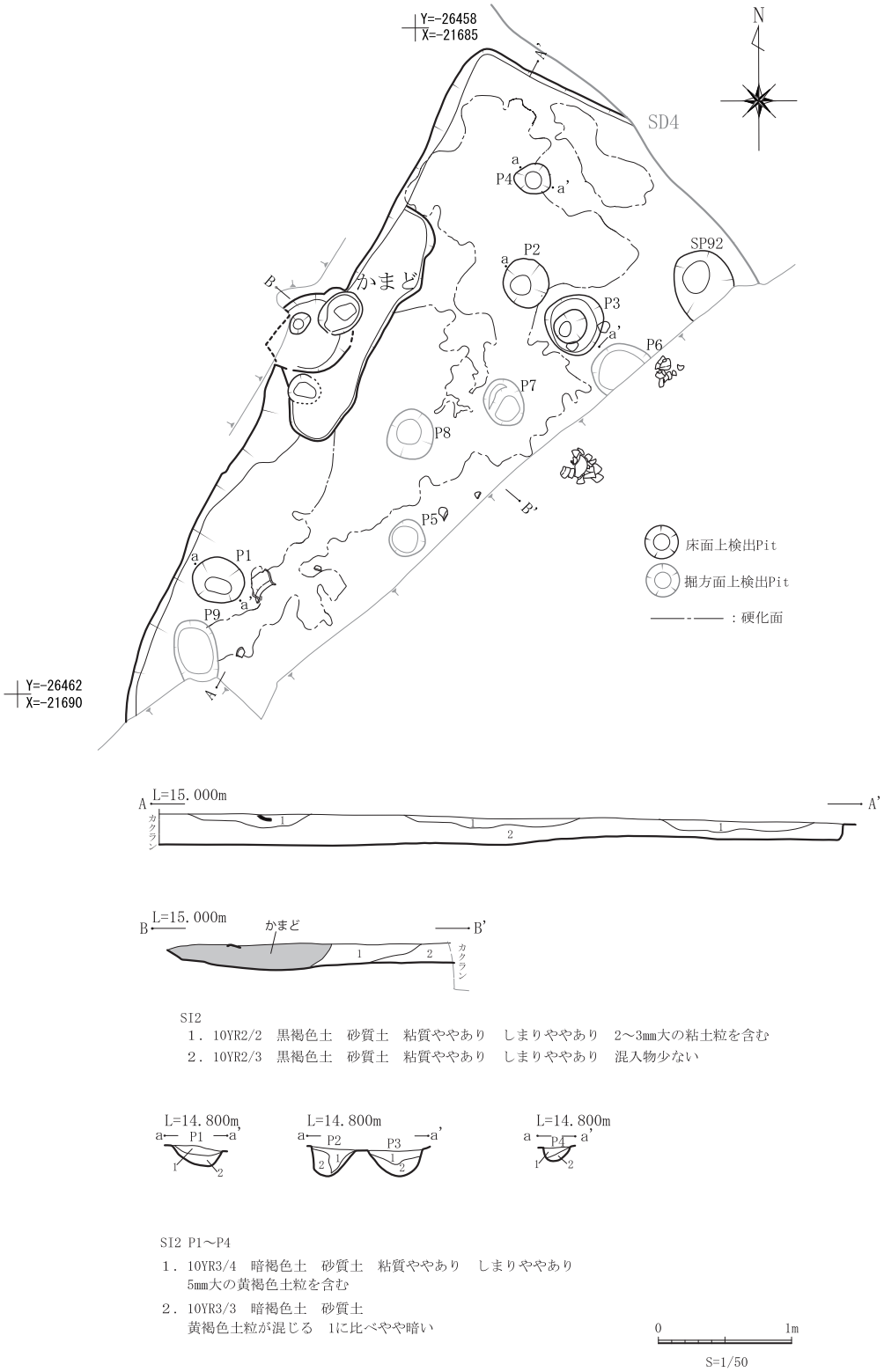
柱穴は検出できなかった。

３Ｂ区ＳＩ７[３Ａ区ＳＩ 10]（第 33 図）

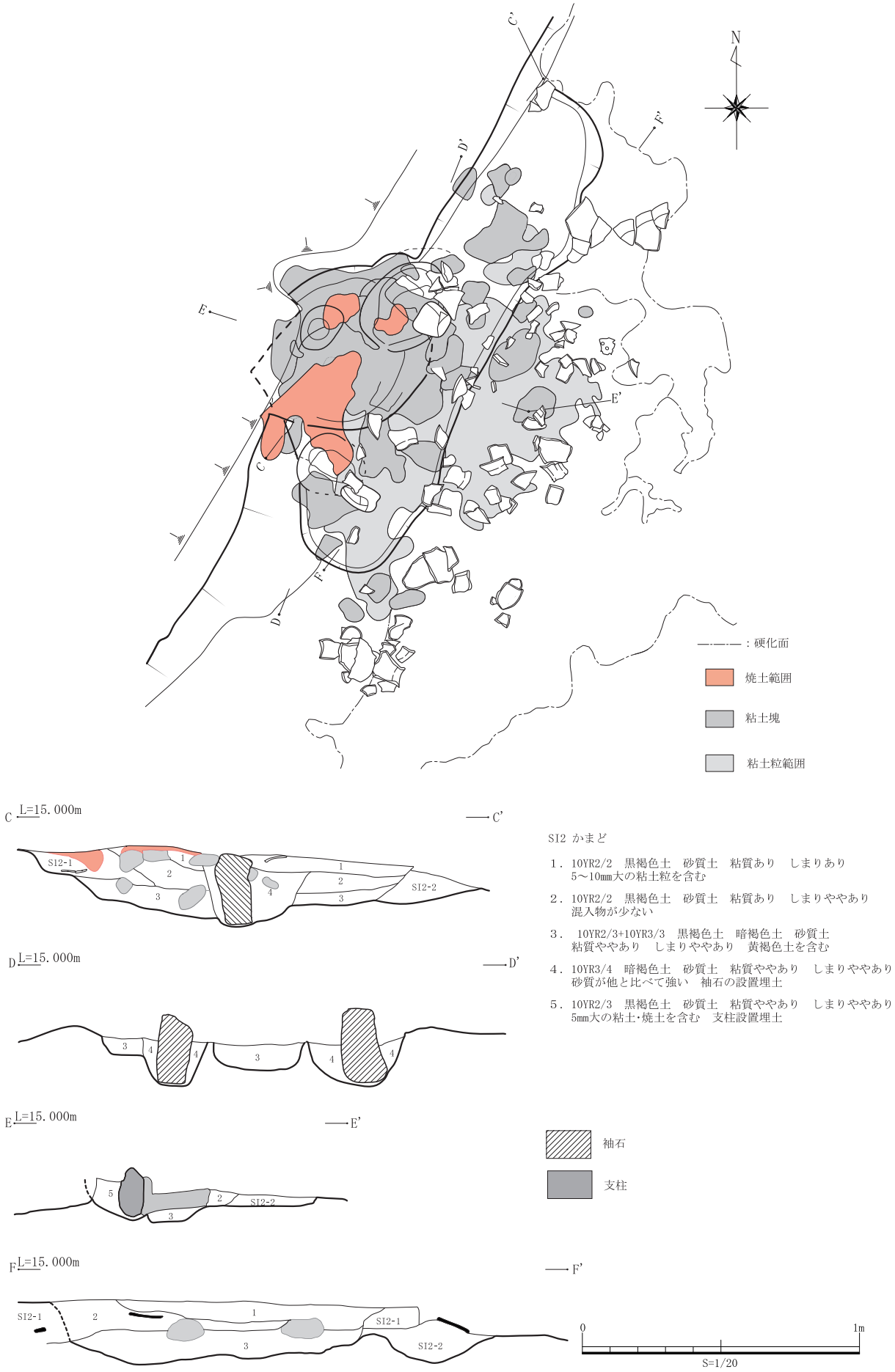
23Aァ・グリッドに位置する。 中央部を撹乱、北東部を３Ａ区ＳＩ 11、３Ｂ区ＳＩ３、３Ｂ区ＳＩ 11 に壊され、ＳＩ８、ＳＫ 71 を壊す。

現況では南北約 3.9 m、東西は不明、検出面から床面までの深さは中央部が撹乱で壊されているためはっきりとしないが、残存部では約 20cm を測る。主軸はＮ－ 115°－Ｗである。南西部に上部が削平されたかまど跡が検出された。焼土塊、焼土の散らばりは確認できたが、それ以外の残存は確認できなかった。

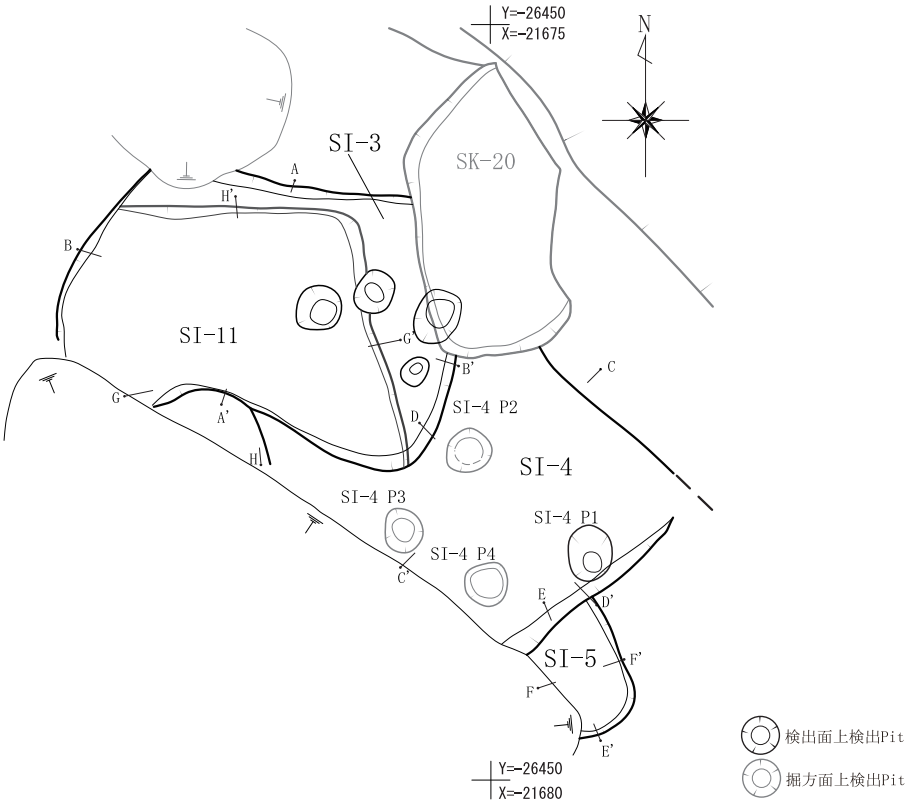
遺物は、埋土２層中から須恵器蓋の口縁部（第 34 図 8）、土師器甕の口縁下部から胴部（第 35 図 6）が出土した。34 －８は天井部が膨らみ、口縁部は小さい断面三角形で内面に凹みがつけられている。35 －６は外面がハケメ調整で、内面はヘラケズリされ、口縁部境に指頭圧痕が残る。

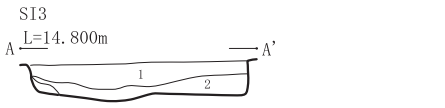


第30図　3 B区SI2平面・断面図

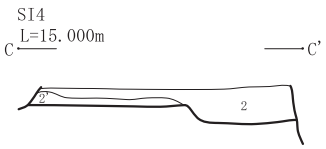


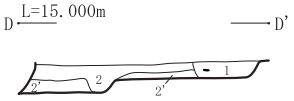
第 31 図　3 B 区 SI2 かまど平面・断面図



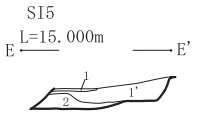


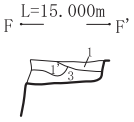
SI3
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　5mm大の焼土片･3mm大の粘土片を含む
2．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　黄褐色土が混ざる以外は
　混入物が少ない



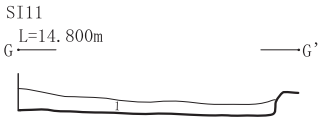


SI4
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質やや強い　しまりやや強い
　2mm大の黄褐色ブロックを少し含む
2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質やや強い　しまりやや強い
　2～50mm大の黄褐色ブロックをわずかに含む
3．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質やや強い　しまりやや強い
　2～30mm黄褐色ブロックを2より含む

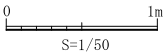




SI5
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　黄褐色ブロック6割ほど含む
1'．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　黄褐色ブロック8割ほど含む
2．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりやや強い
　黄褐色ブロック8割ほど含む
3．10YR4/6　褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりやや強い
　地山に黒褐色土がわずかに入る



SI11
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質やや強い　しまりあり
　混入物なく純層に近い

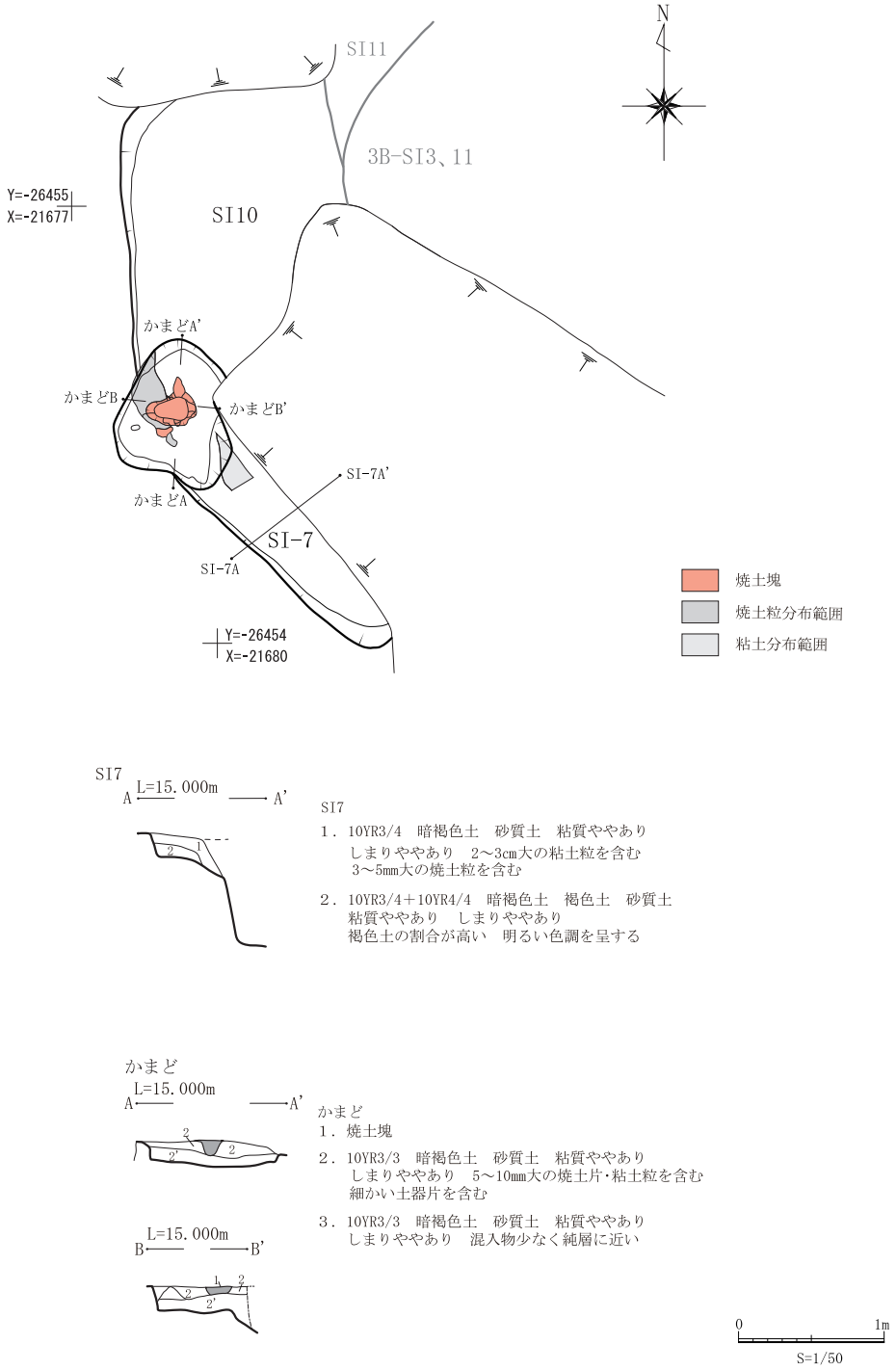


第 32 図　3 B 区 SI3･SI4･SI5･SI11 平面・断面図

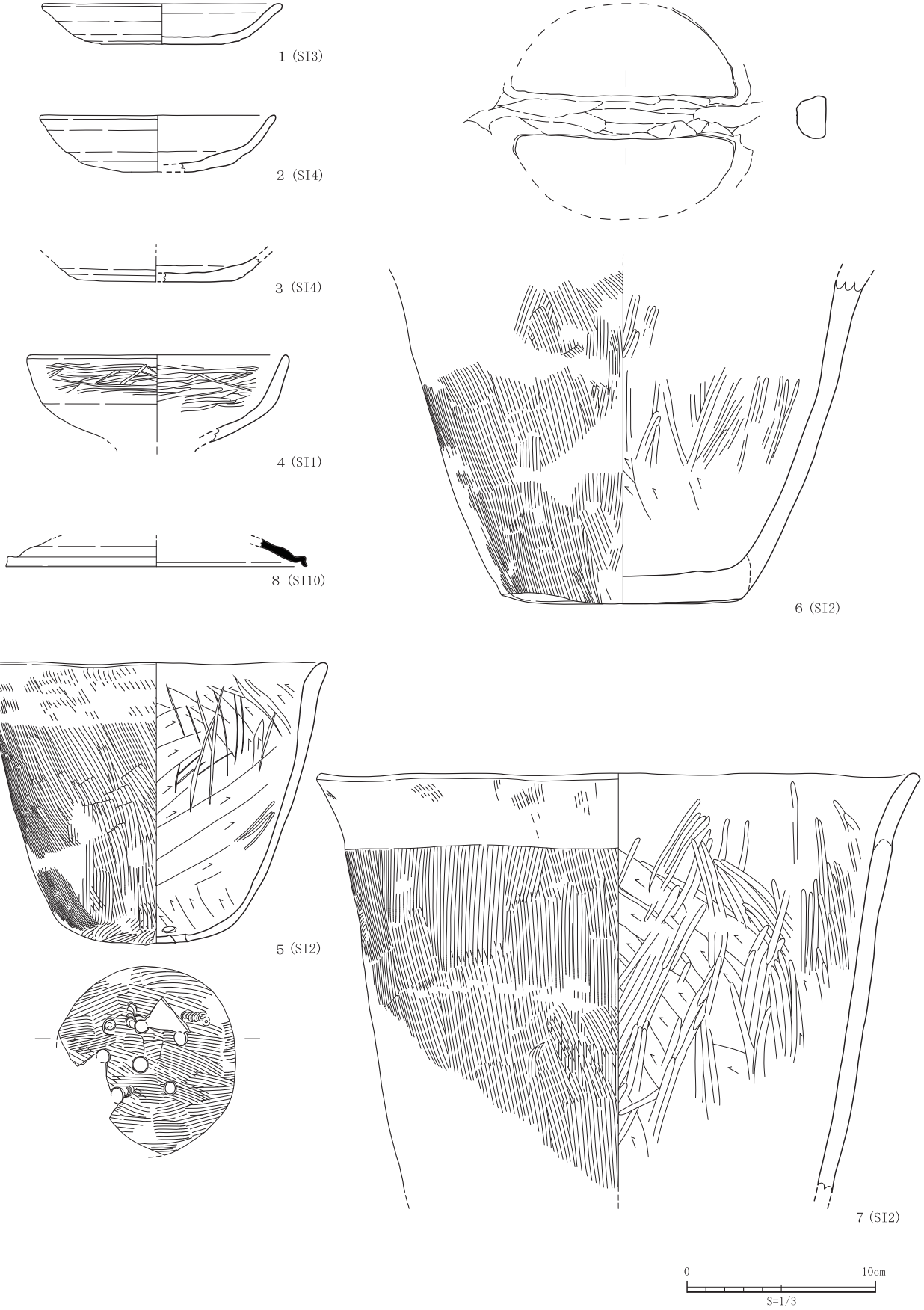
３B区ＳＩ１・ＳＩ６・ＳＩ８（第８･10図３区古代遺構配置図参照）

ＳＩ１は22Cェ・グリッドに位置する。南西側をＳＤ３に壊される。建物のかまど部分の残存であり、建物のプランは検出できなかった。ＳＩ６、ＳＩ８は23Aィ・ゥ、24A・ァ・ェに位置する。北側をＳＩ７、東側をＳＫ71、ＳＫ41、南側をＳＫ57、ＳＫ37、ＳＫ56に壊される。西側は３Ａ区調査の際に建物の広がりを検出できなかった。ＳＩ６はかまどとピット、ＳＩ８はピットのみで、ＳＩ１と同様に建物のプランは検出できなかった。そのため、この３軒の竪穴建物については、詳細な報告は差し控えたい。

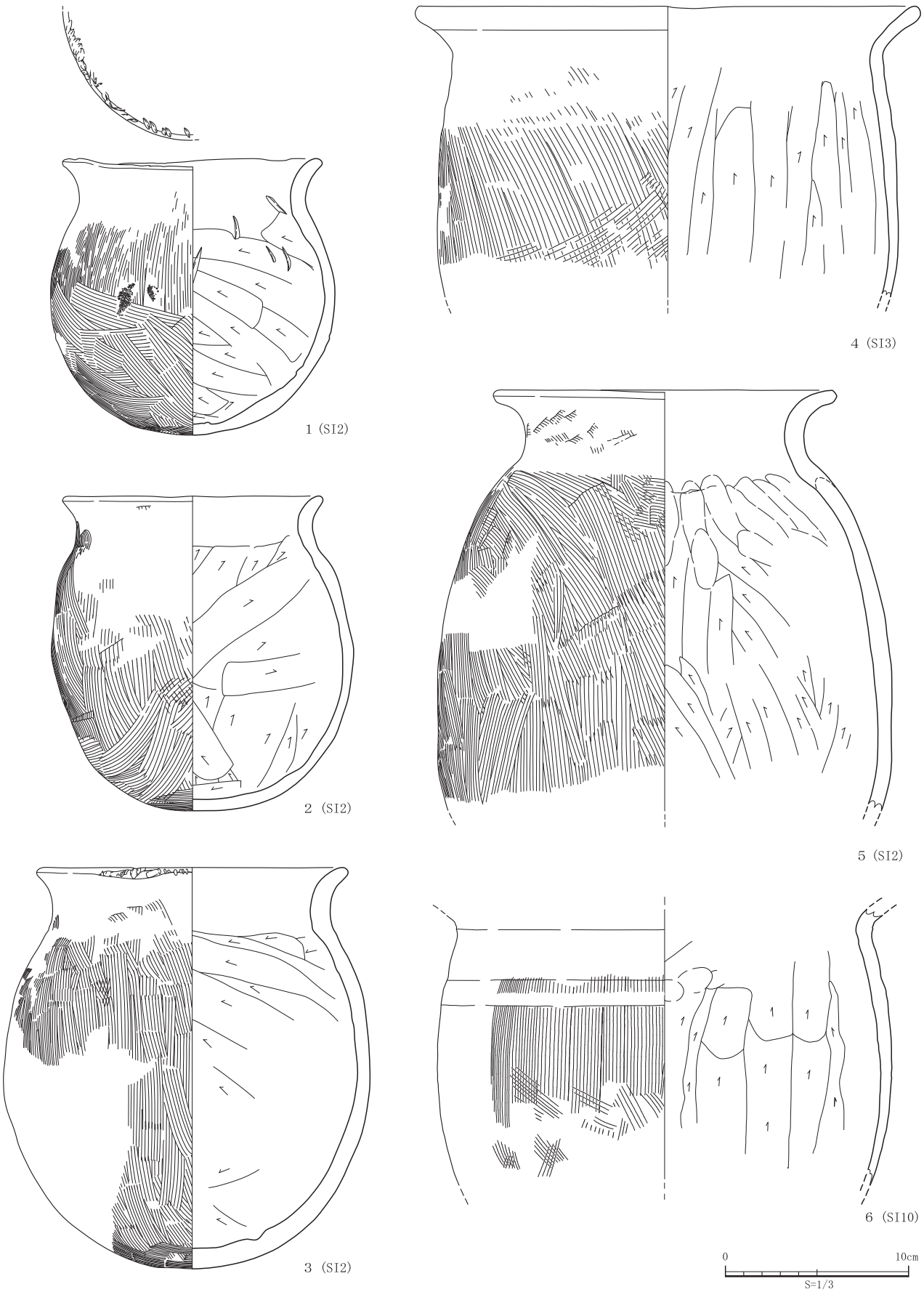
遺物はＳＩ１かまど内から土師器高杯の杯部（第34図４）が出土した。内外面はヘラミガキされ、赤彩を施される。体部中位に稜を持ち口縁部に向けて直線的に伸びている。



第33図　３Ｂ区SI7[3A区SI10]平面・断面図



第 34 図　3 B 区出土遺物実測図（1）



第35図　3 B区出土遺物実測図（2）

掘立柱建物

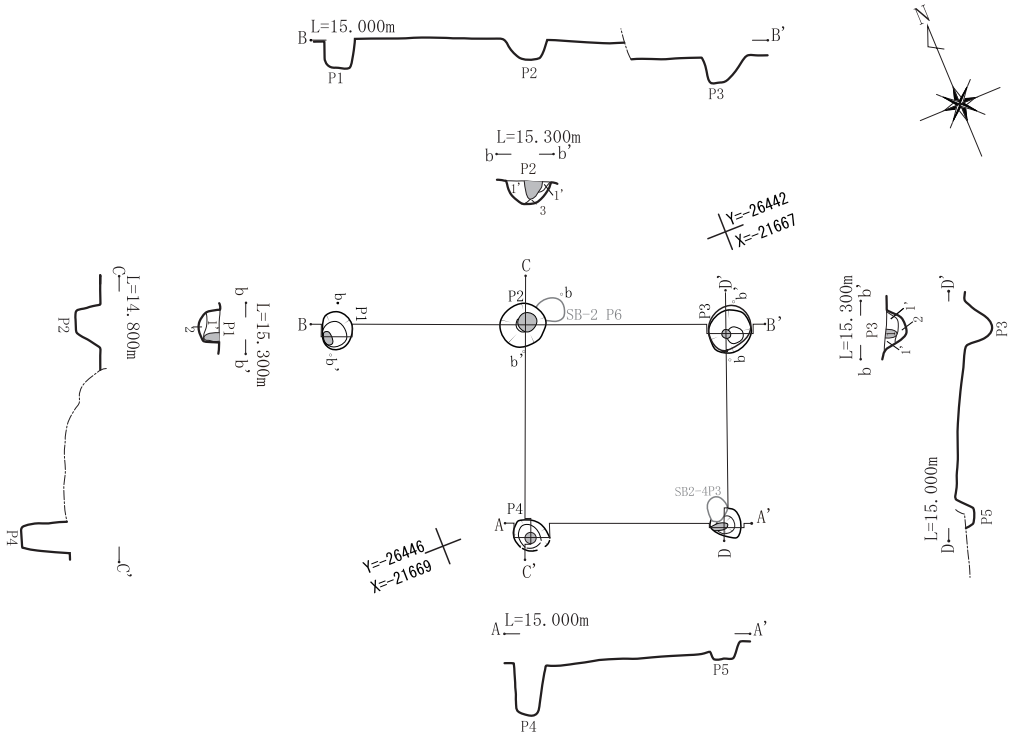
３Ｂ区ＳＢ１（第 36 図）

21Cウ・22Cウ・ェ・グリッドに位置する。桁行は２間で北側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）は約 4.2 m、南側柱列（Ｐ４－Ｐ５）は約 2.1 m、Ｐ６が想定される箇所は撹乱内であり、壊されていると思われる。梁行は１間で東側柱列（Ｐ３－Ｐ５）は約 2.1 m、中央部柱列（Ｐ２―Ｐ４）は約 2.2 mを測る側柱建物である。桁行方向はＮ－ 67°－Ｗである。

柱間は桁行 2.08 ～ 2.12 m、梁行は 2.05 ～ 2.22 mを測る。柱掘方は平面円形で、径は 32 ～ 44cm、深さは検出面より 22 ～ 60cm を測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５において柱痕を確認した。柱痕位置はＰ２、Ｐ３、Ｐ４では、柱穴のほぼ中央に位置するが、Ｐ１、Ｐ５では柱穴の西側に寄る。

遺物はＰ４より土師器杯（第 40 図４）が出土した。内外面に赤彩を施され、外底面に墨書『□本』の文字が見られる。一文字目は「つくり」の下部が右払いであることが確認できた。体部は開き気味で直線的に伸びる。口縁部端でやや外反する。



P1

1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　柱痕　2mm大の焼土片･黄褐色土粒を含む

1'.10YR2/3　黒褐色土　砂･黄褐色砂の混土　粘質ややあり　しまりややあり
　主体を占める土は1と同じだが、黄褐色砂が混じるため明るく見える

2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　1'よりも黄褐色土の混入率が高く明るい

P2

1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　柱痕　2mm大の焼土片　2～4cm大の黄褐色土を含む

1'.10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
　黄褐色土を多く含み明るい色調を呈する

P3

1．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり　柱痕
　やや固くしまった暗褐色砂に土壌化した黄褐色土ブロックが混じる

1'.10YR3/4　暗褐色土　砂質土　1に比べて黄褐色土の割合が高く明るい

2．10YR3/3　暗褐色土　粘質あり　1と色調は似るが
　砂ではなく土である　黄褐色土がブロック状に混ざる

0　2m
S=1/80

第 36 図　３Ｂ区 SB1 平面・断面図

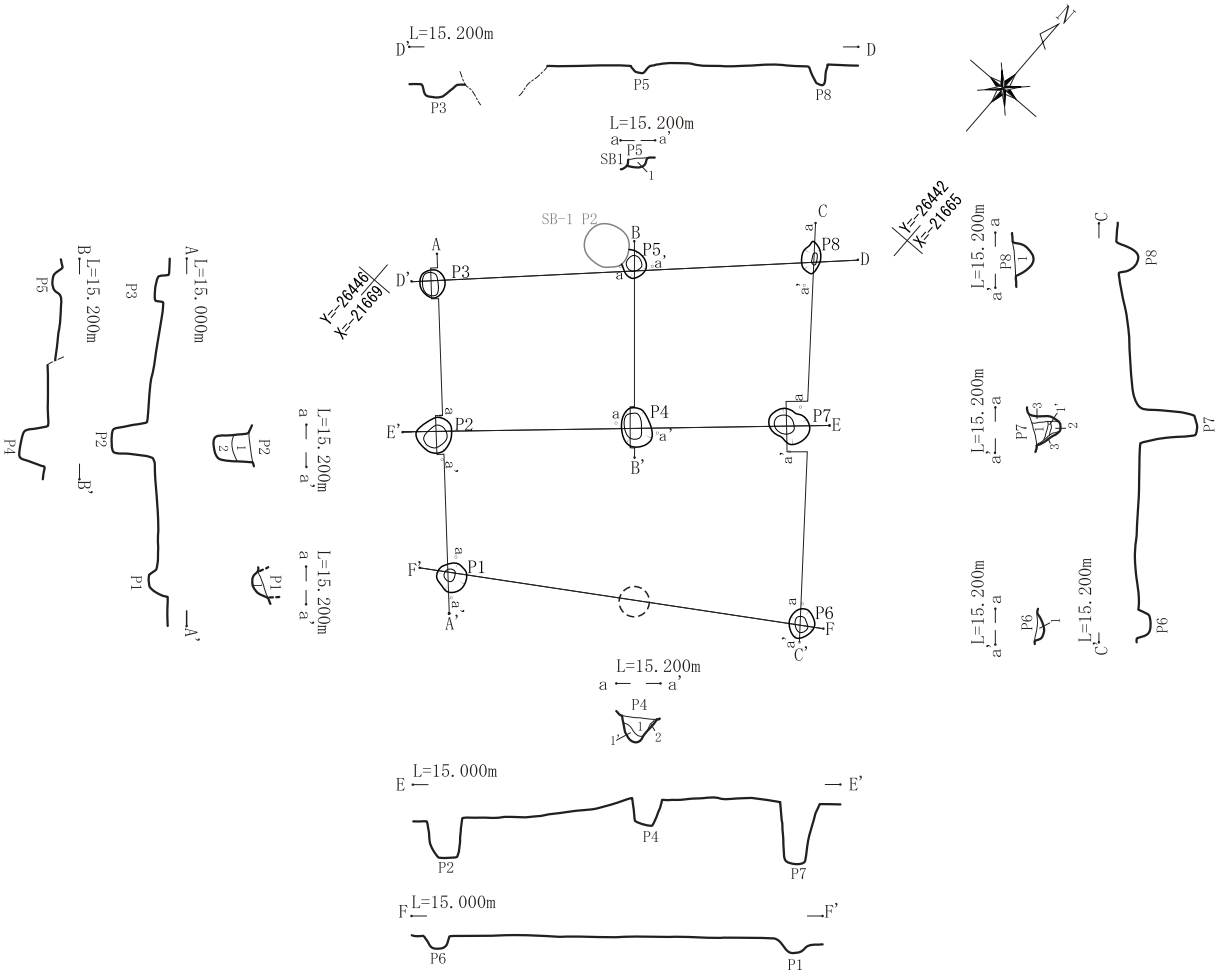
３Ｂ区ＳＢ２（第 37 図）

23B ァ・ィ・グリッドに位置する。桁行は２間で南西側柱列（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）は 3.1 m、中央部柱列（Ｐ４－Ｐ５）は 1.68 m、北東側柱列（Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）は 3.86 mを測る。梁行も２間で北西側柱列（Ｐ３－Ｐ５－Ｐ８）は 4.02 m、中央部柱列（Ｐ２－Ｐ４－Ｐ７）は 3.7 m、南東側柱列（Ｐ１－Ｐ６）は 3.74 mを測る。やや北東側が広い総柱建物である。Ｐ１－Ｐ６の間に想定されるピットの箇所は撹乱内であり、壊されていると思われる。桁行方向はＮ－ 37°－Ｗである。

柱間は桁行 1.5 ～ 2.12 m、梁行は 1.62 ～ 2.13 mを測る。柱掘方は平面円形または楕円形で、径は 32 ～ 40cm、深さは検出面より 12 ～ 64cm を測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

遺物は土師器片が出土したが、実測できるものではなかった。

Ｐ５は、ＳＢ１（P2）に一部壊されることから、ＳＢ１よりも古い建物と思われる。



P1
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　黄褐色土を多く含む

P2
1．10YR3/3＋10YR5/6　暗褐色土　黄褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　混土層　黄褐色土を多く含む
2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　1と異なり黄褐色土を含まない

P4
1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　混入物少なく純層に近い
1'.10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　1に比べやや明るい
2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　黄褐色土ブロックが混じるため明るい

P5
1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　暗褐色土ブロックを含む

P6
1．10YR4/4　褐色土　砂質土　わずかに黒褐色土を含む
　大半を撹乱で消失する

P7
1．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　黄褐色土を20%程度含む
1'.10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　黄褐色度を40%程度含む
2．10YR5/6　黄褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　混入物少なく純層に近い
3．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　黄褐色度の割合が低くやや暗い

P8
1．10YR2/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり
　しまりややあり　3～4mm大の黄褐色土粒を含む

0　2m
S=1/80

第 37 図　３Ｂ区 SB2 平面・断面図

溝跡・土坑

３Ｂ区ＳＤ１（第 38 図）

21C ゥ・22C ェ・22B ィ・23B ァ・グリッドに位置する。長さ 18 m、幅 40 ～ 76cm を測る。溝の最下点レベルは標高 14.4 ～ 14.8 mで一定せず、中央部付近が高く、両端は低くほぼ直線に伸び、軸はＮ－ 20°－Ｅである。埋土は暗褐色土でしまりは強い。

遺物は埋土中から土師器の高台付皿（第 40 図６）が出土した。内外面に回転ヘラミガキされ、赤彩を施される。高台は断面形は台形である。他に土師器、須恵器の破片が出土した。

３Ｂ区ＳＤ２（第 38 図）

22C ゥ・23C ェ・グリッドに位置する。長さ 5.6 m、幅 42 ～ 84cm を測る。溝の最下点レベルは標高 14.7 ～ 14.8 mでほぼ一定であるが、南側向かって若干低くなっている。

やや右曲がりに伸び、ＳＤ３へと向かう。ＳＤ３と交わると想定されるが、その箇所をＳＫ４が壊すため、はっきりしない。軸はＮ－ 23°－Ｅである。埋土は暗褐色土でしまりはややある。

遺物は埋土中から土師器、須恵器の破片が出土した。

３Ｂ区ＳＤ３（第 38 図）

22C ァ・ェ・ゥ・23C ェ・グリッドに位置する。長さ 12.16 m、幅 54 ～ 74cm を測る。溝の最下点レベルは標高 14.6 ～ 14.7 mでほぼ平坦であるが、北に向かって若干低くなっている。

ＳＤ３は、ほぼ直線に伸び、軸はＮ－ 18°－Ｅである。埋土は暗褐色土でしまりはややある。

遺物は埋土中から須恵器高杯の杯底部と脚の一部（第 40 図８）が出土した。杯底部は平坦で脚部の開きから底脚であると思われる。

３Ｂ区ＳＫ４（第 38 図）

22C ゥ・グリッドに位置する。ＳＤ２、ＳＤ３を壊し、ＳＰ 70 に壊される。平面形はやや歪んだ隅丸方形を呈し、長軸 206cm、短軸 140cm、検出面からの深さ約 28cm を測る。長軸はＮ－２°－Ｅである。

埋土は黒褐色砂質土である。掘方面で土坑内ピットＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６を検出した。柱穴が床面周辺に配置されているため、壁構造建物の可能性がある。

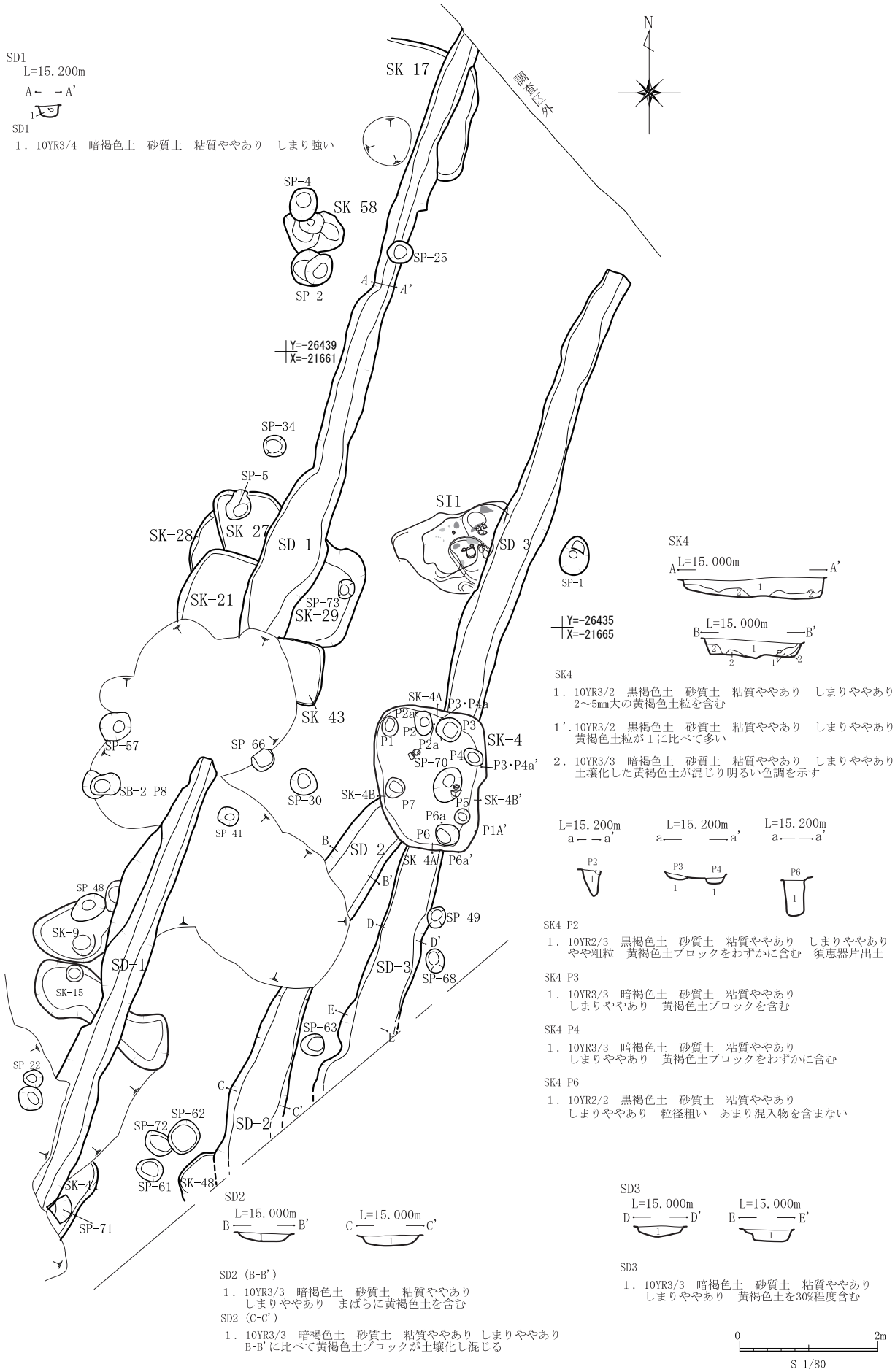
遺物は石器、土師器が検出面近くで出土したが実測できるものではなかった。

３Ｂ区ＳＤ４[３Ａ区ＳＤ７]（第 39 図上）

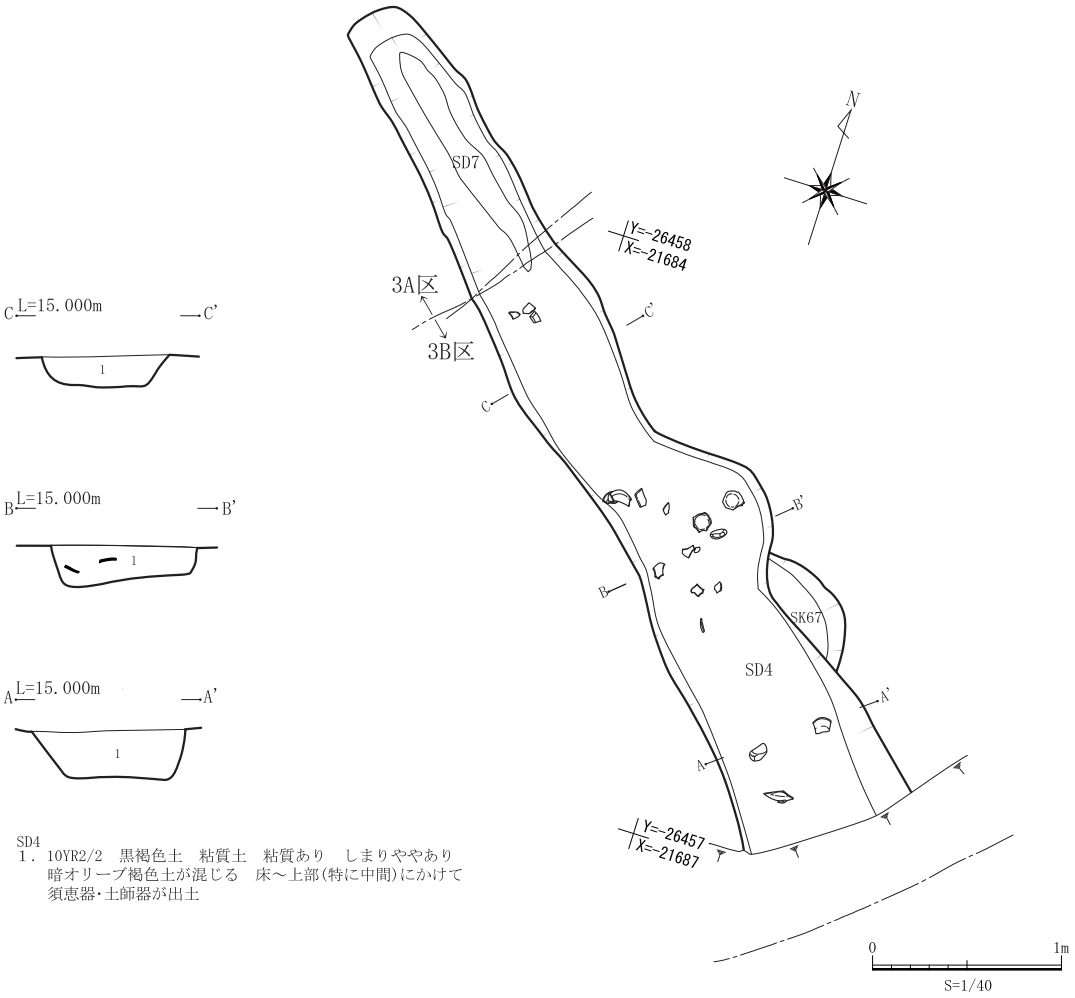
24A ゥ・ェ・グリッドに位置する。長さ 4.97 m、幅 43 ～ 90cm、検出面からの深さ約 27cm を測る。溝の最下点レベルは標高 14.6 ～ 14.7 mでほぼ一定であるが、北西側に向かって若干低くなっている。

ほぼ直線に伸び、軸はＮ－ 49°－Ｗである。埋土は黒褐色粘質土である。

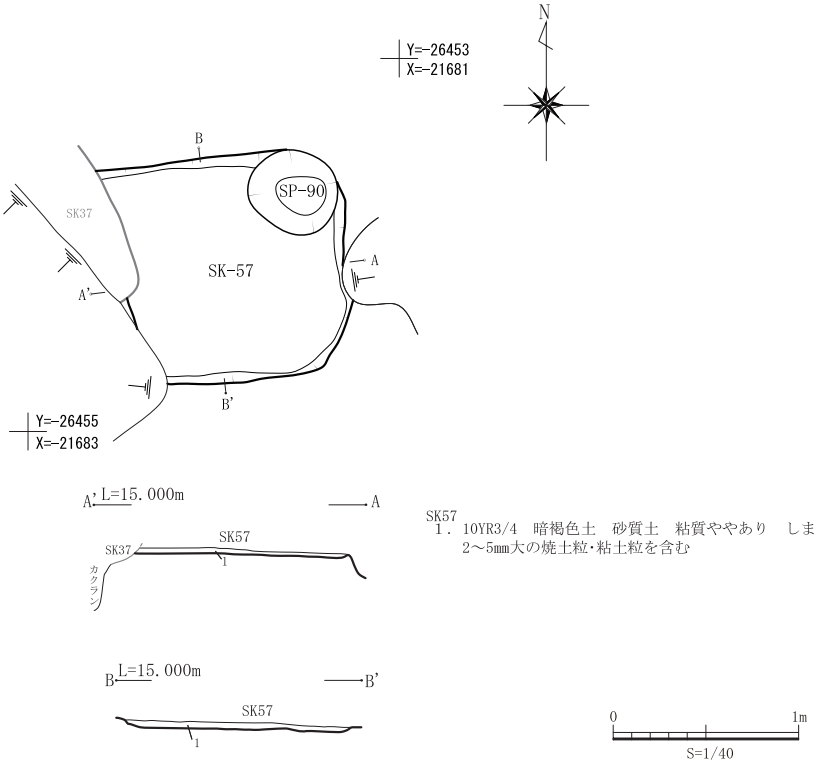
遺物は掘方面から上部にかけて出土するが、特に中間で土師器、須恵器が出土する。土師器杯（第 40 図２）は内外面に赤彩を施される。体部はやや内湾し口縁部に向かう。



第38図　3 B区 SD1・SD2・SD3 平面・断面図



SD4
1．10YR2/2　黒褐色土　粘質土　粘質あり　しまりややあり
暗オリーブ褐色土が混じる　床～上部(特に中間)にかけて
須恵器・土師器が出土



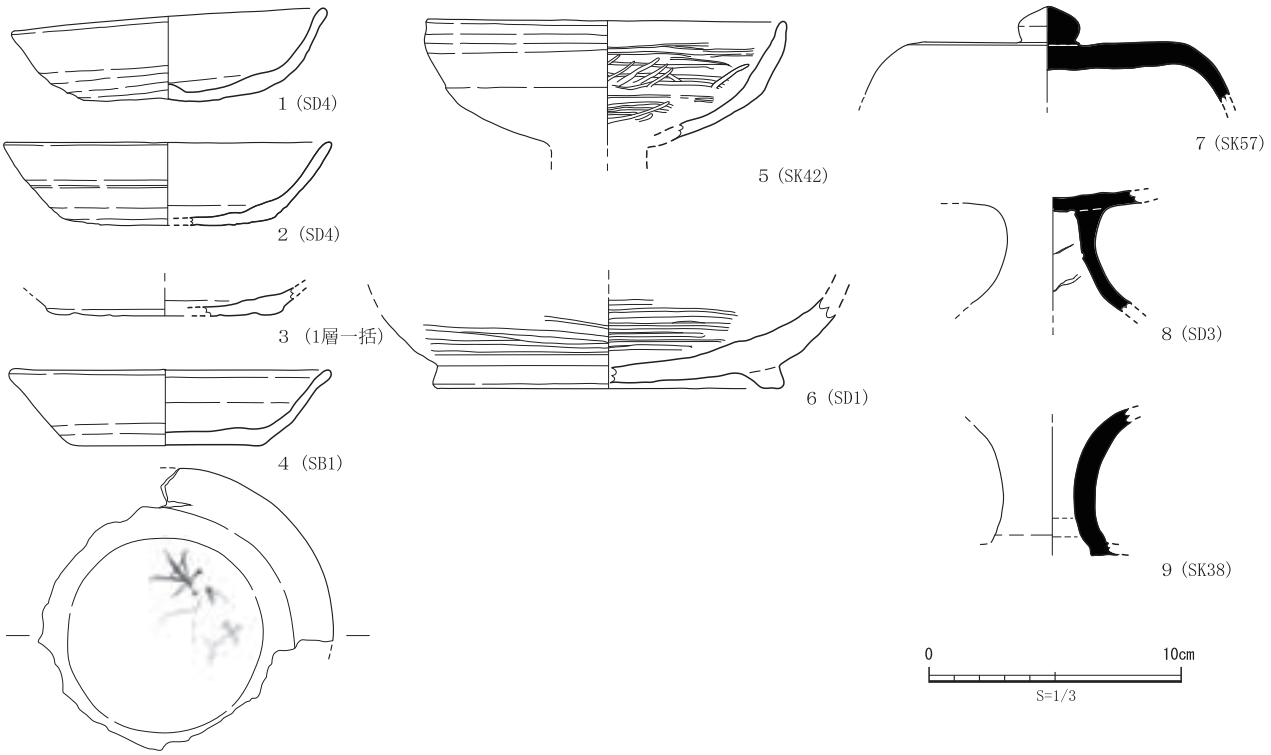
SK57
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりややあり
2～5mm大の焼土粒・粘土粒を含む

第39図　3 B区SD4 [3ASD7]（上）・SK57（下）平面・断面図

３Ｂ区ＳＫ５７（第 39 図下）

24Aァ・グリッドに位置する。ＳＩ６、ＳＩ８、ＳＫ 41 を壊し、ＳＫ 37、ＳＰ 90 から壊される。平面形は隅丸方形で西側をＳＫ 37 で壊されているため、現況で長軸は 128cm 以上、短軸は 122cm、検出面からの深さ約６cm を測る。埋土は暗褐色砂質土で焼土粒、粘土粒などを含む。

遺物は須恵器蓋（第 40 図７）が出土した。天井部は平坦で、口縁部は残っていないが、途中から下方に長めに屈折すると思われる。中央部に宝珠つまみがつく。



第 40 図　３Ｂ区出土遺物実測図（３）

2. ３Ｃ区

３Ｃ区の調査面積は約 980㎡である。調査は平成 22 年８月～ 11 月に行った。調査当時は標高約 16 ｍで平坦な地形である。

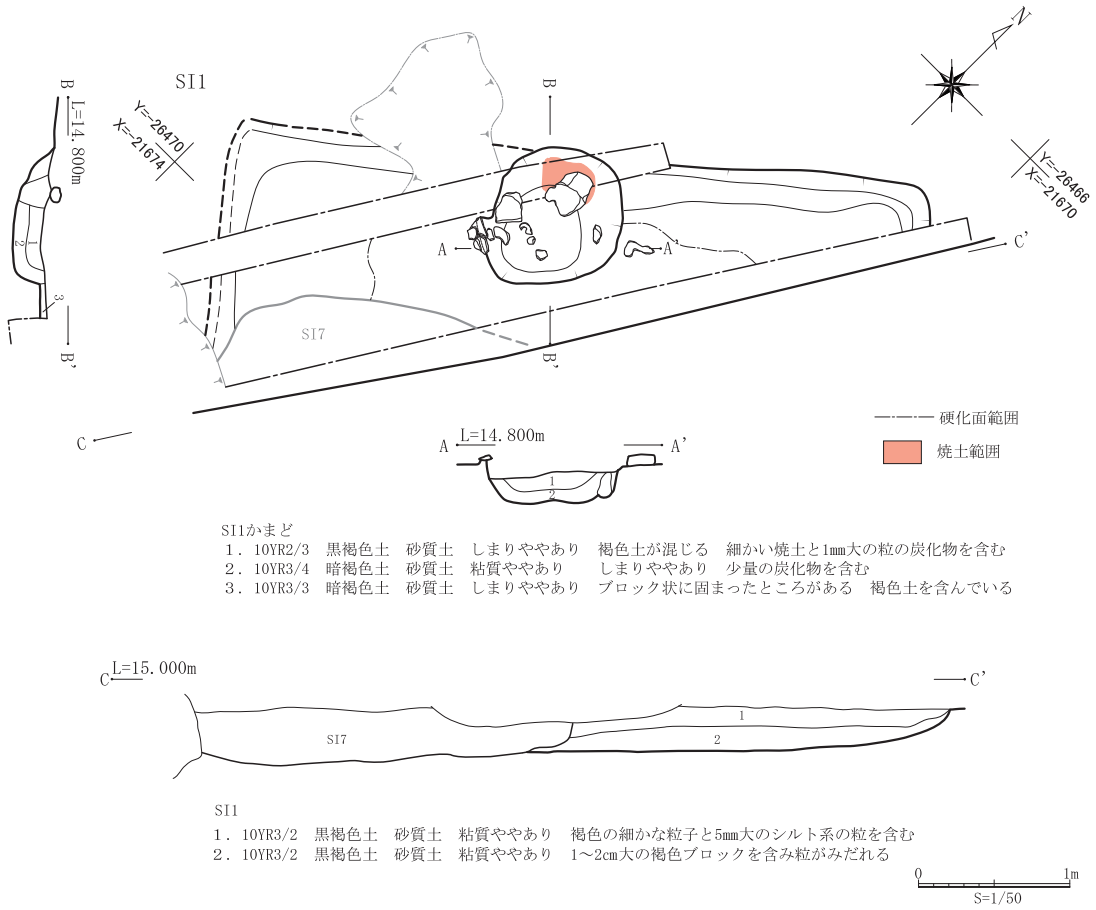
３Ｃ区の遺構は、既存の建物、樹木移設準備の根回し工事のためその多くを壊され、ＳＤ１溝より南側にのみ遺構が残存していた。しかし、撹乱に壊されていない箇所での遺構密度は高く、竪穴建物 61 軒を検出した。特に 24x・グリッドに集中する。

このグリッドでは竪穴建物の重なりが激しく、３区古代遺構配置図（第６図～第 13 図）でも重なりが分かりづらい。そのため、重なりの激しい箇所の図を、24x・グリッド竪穴建物跡集中部１、２、３と分け、個別の竪穴建物図の前に配置した。

又、24x・グリッド竪穴建物跡集中部２と集中部３では、竪穴建物跡が、２は９軒、３は 12 軒の重なりがあり、図面の線がどの建物か分かりづらい。そこで、プランが判然としない建物を整理し、建物掘方面の高さがほぼ揃う標高 14.3 ｍから掘方面が上にある建物の図面を１、下にある建物を２と枝番号を付け、２つの図に分けた。そして、一つの建物で上端、下端、エレベーションでの埋土範囲を同一の色で表し、建物毎に色を変え、重なりを分かりやすくした。下に記載建物を記すが、前述のとおり建物を整理したため、建物等の個別図に記載されても集中部の図面に記載しなかった建物もある。

○３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部１（第 42 図）
　…ＳＩ５、ＳＩ 28、ＳＩ 34、ＳＩ 38、ＳＩ 45、ＳＩ２、ＳＩ６、ＳＩ 22、ＳＩ 33
○３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部２－１（第 45 図）
　…ＳＩ３、ＳＩ９、ＳＩ 12、ＳＩ 14、ＳＩ 15、ＳＩ 21
○３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部２－２（第 47 図）
　…ＳＩ 26、ＳＩ 36、ＳＩ 42、ＳＫ 13、ＳＫ 24、ＳＫ 25、ＳＤ２
○３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部３－１（第 50 図）
　…ＳＩ８、ＳＩ 16、ＳＩ 11、ＳＩ 18、ＳＩ 24、ＳＩ 35
○３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部３－２（第 54 図）
　…ＳＩ 39、ＳＩ 32、ＳＩ 49、ＳＩ 52、ＳＩ 54、ＳＩ 55、ＳＤ２、ＳＤ３

以下、主要遺構について報告する。遺構の重複、また、土坑、小穴、柱穴など、これに漏れる遺構について、24x・グリッド竪穴建物跡集中部は上記の図を、それ以外の遺構の残存は３区古代遺構配置図（第６図～第 13 図）を参照していただきたい。



第41図　３Ｃ区SI1平面・断面図

竪穴建物

３Ｃ区ＳＩ１（第41図）

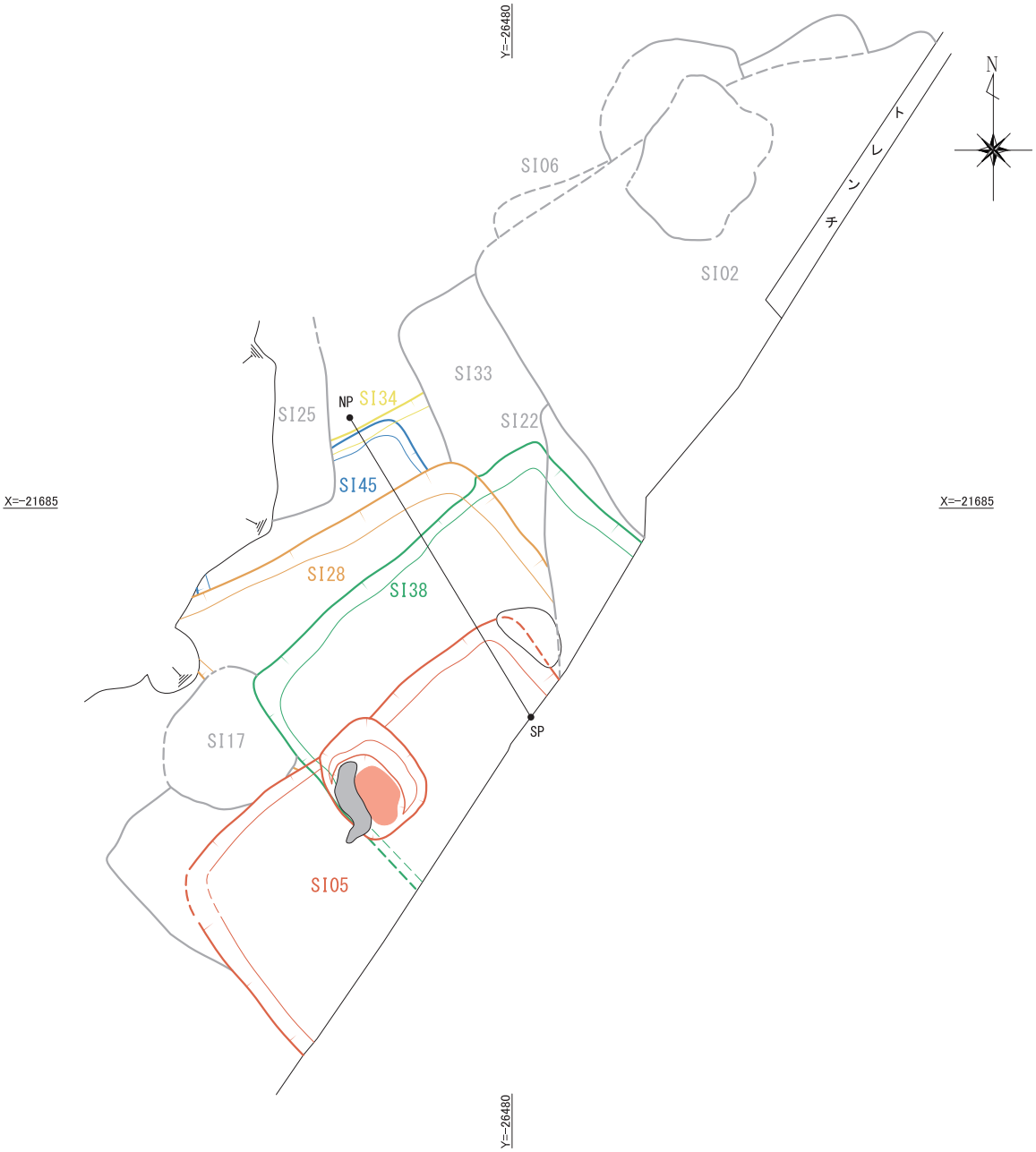
３層上面で検出した。23zェ・グリッドに位置する。北西部分が撹乱に壊される。また、南東部分が調査区外にかかるため、現況では南北約4.7 m、東西約1.7 m以上、検出面から床面までの深さが約30cmを測る。主軸はＮ－46°－Ｗである。

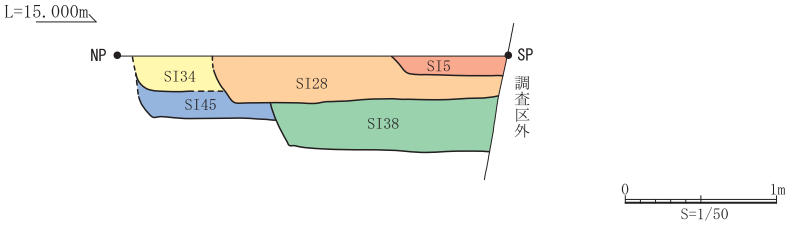
壊されたかまどが残存し、その中に壊れたそで石も埋められて原位置を保っている。

床面は埋土２層上面で、かまどの両そでがあったと思われる脇から建物中央にかけて硬化面が残存する。柱穴は検出できなかった。

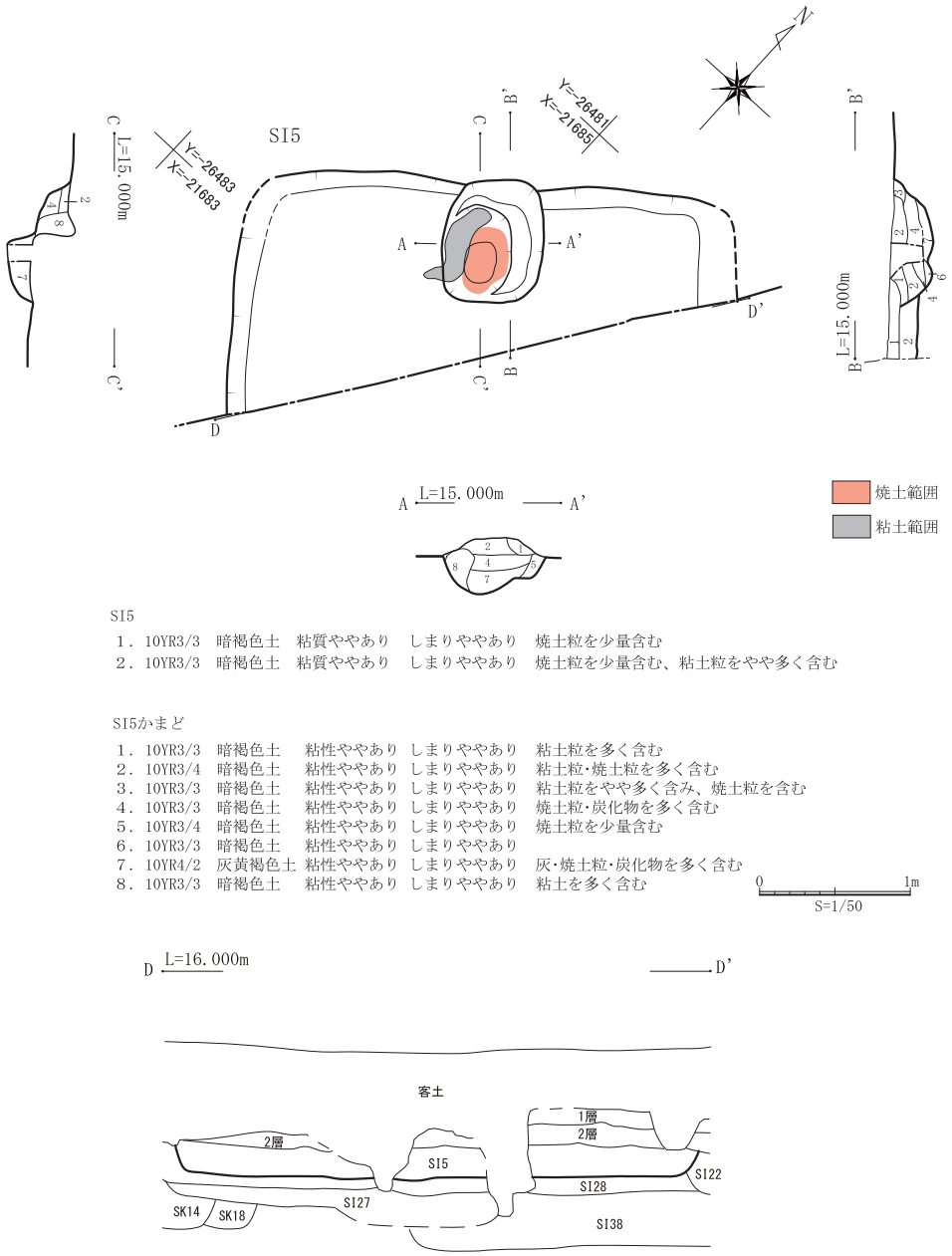
かまどの埋土は３層に分層できる。掘方時に深く掘り込み、かまどの機能面としている。かまど埋１層には30cm×25cm大の粘土塊をはじめ、こぶし大の粘土塊が散乱していた。かまど埋３層には使用した際の焼土が含まれて、褐色土となっている。

検出時にこの遺構の南壁にトレンチを入れて土層を確認した。掘方の立ち上がりや機能面を確認しようとしたが、ＳＩ１の埋土とは明らかに異なる層があった。褐色の砂質ブロック塊を多く含むため、別遺構の切り合いであると判断した。ＳＩ７については調査区外にあたるため調査に及んでいない。





第 42 図　3 C 区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部 1



第 43 図　３Ｃ区 SI5 平面・断面図

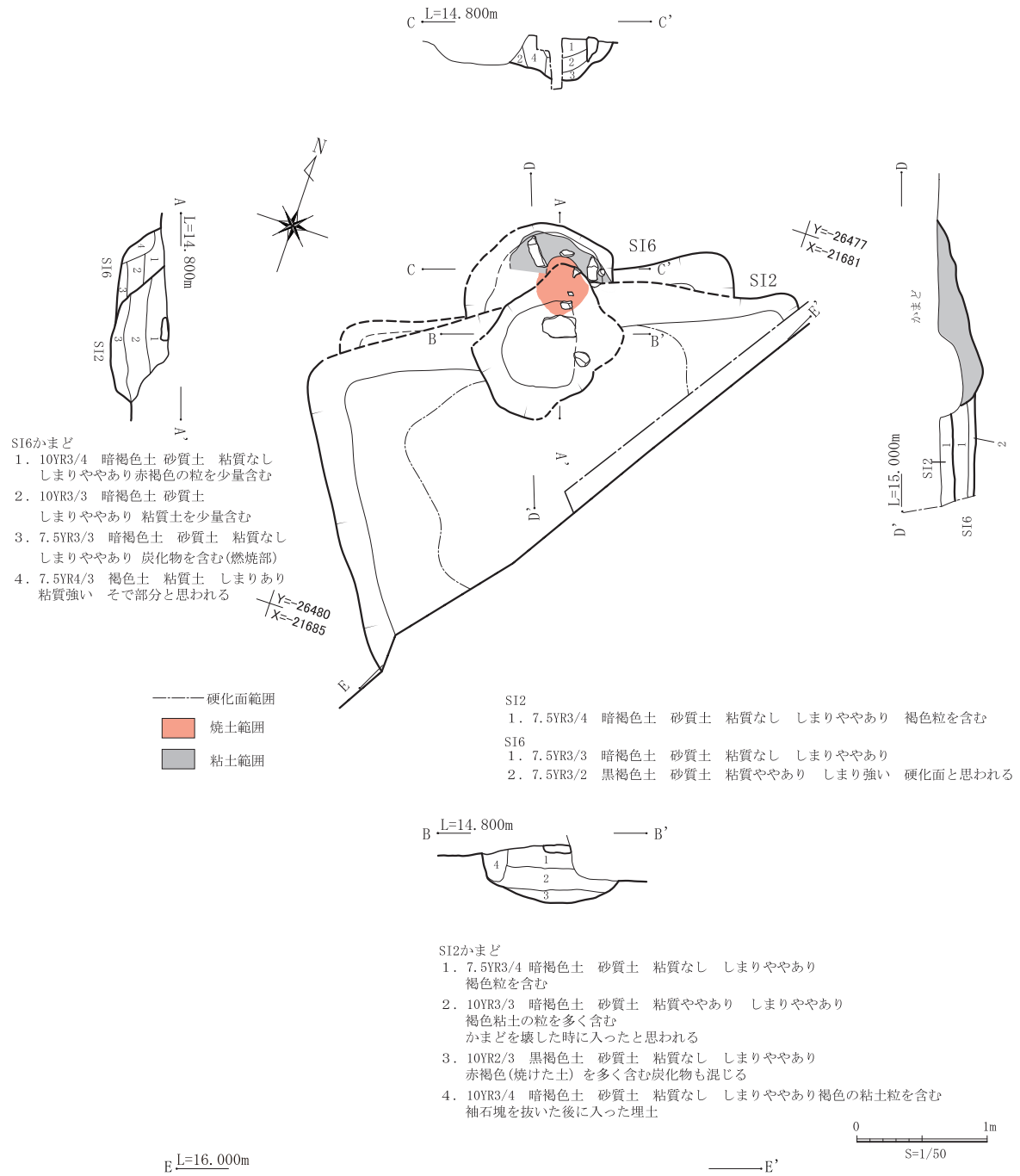
３Ｃ区ＳＩ５（第 43 図）

３層上面で検出した。24xィ・グリッドに位置する。ＳＩ 22、ＳＩ 28 を壊す。D－D' 土層断面から、ＳＩ５とＳＩ 22 は、ＳＩ５の掘方面が一部ＳＩ 22 を掘り込んでいる。ＳＩ 28 の掘方面をＳＩ 22 が壊すことから、ＳＩ 28（古）→ＳＩ 22 →ＳＩ５（新）と判断した。

南東部分は調査区外にかかるため、現況では南北 1.3 m以上、東西約 3.2 m、検出面から掘方面までの深さは約 20㎝を測る。主軸はＮ－ 43°－Ｗである。

埋土は２層に分層できる。床面は掘方面上に形成し、柱穴や硬化面は確認できなかった。

かまどは８層に分層できる。かまどそで部分としての粘土が一部残存しているが、壊されていて原形を留めていない。



第 44 図　3 C 区 SI2・SI6 平面・断面図

３Ｃ区ＳＩ２（第 44 図）

３層上面で検出した。24y ェ・グリッドに位置する。ＳＩ６を壊す遺構である。ＳＩ６との新旧関係は、ＳＩ２のかまどがＳＩ６のかまどの掘方面を壊していることや、Ｄ－Ｄ’の土層断面からＳＩ６の埋没後にＳＩ２が建てられたと判断した。

南東部分は調査区外にかかるため、現況では南北 2.2 m以上、東西約 3.8 m、検出面から床面までの深さは約 16㎝を測る。主軸はＮ－ 27°－Ｗである。

埋土は単層で、床面は掘方面上に形成し、かまどの手前から建物中央にかけて硬化面が残存する。柱穴は検出できなかった。

かまど埋土は４層に分層でき、壊された粘土塊（25㎝× 16㎝）が埋土中に含まれる。そで石として使われていた可能性が高い。かまどは全体的に原形を留めていない。ＳＩ６のかまどを破棄した後に、位置を南にずらして使用した可能性が高い。

遺物は埋土中より土師器椀（第 58 図１）が出土した。 体部は直線的にやや立ち気味である。高台は高さが約 0.8㎝あり、底部端にやや立ち気味に貼り付けられている。断面形状は長方形である。内外面に赤彩が施される。

３Ｃ区ＳＩ６（第 44 図）

ＳＩ２の掘方面で確認した。ＳＩ２に竪穴壁の上部を壊されるが、掘方面まで深く掘り込まれていない。そのため、ＳＩ６の硬化面が残存し、掘方面を床面として使用している。

かまどの両そで跡からＳＩ６の掘方面が確認できたことで、２軒の建物跡が南北にずれるように検出された。ＳＩ６は２層に分層できる。

現況では南北 2.3 m以上、東西約 3.1 mを測る。主軸はＳＩ２と同じく、Ｎ－ 27°－Ｗである。

かまどの埋土は４層に分層できる、かまどそで部分として使用された褐色粘質土塊が原位置を保っている。かまど埋３層は燃焼部である。

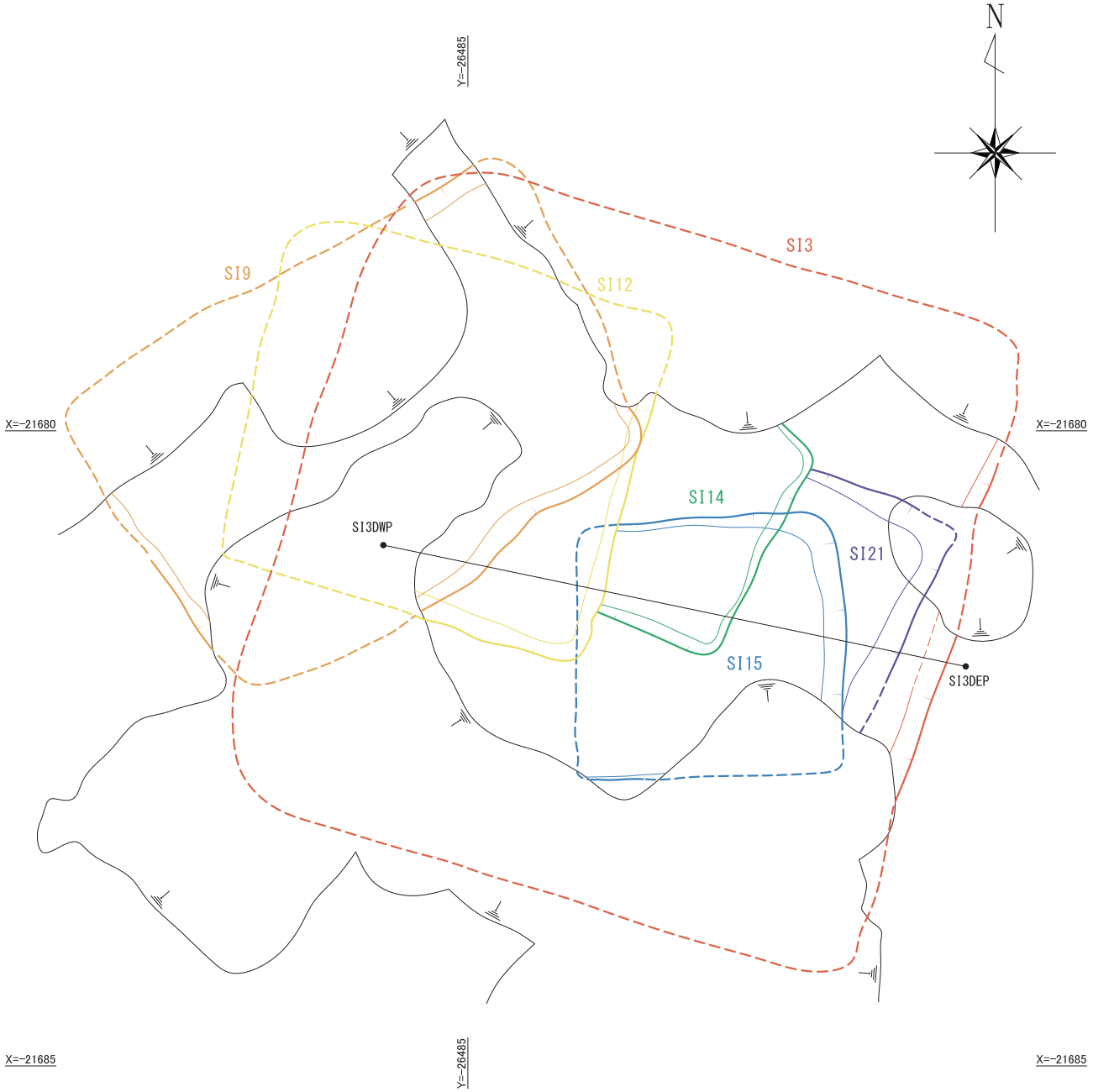
３Ｃ区ＳＩ 12（第 46 図）

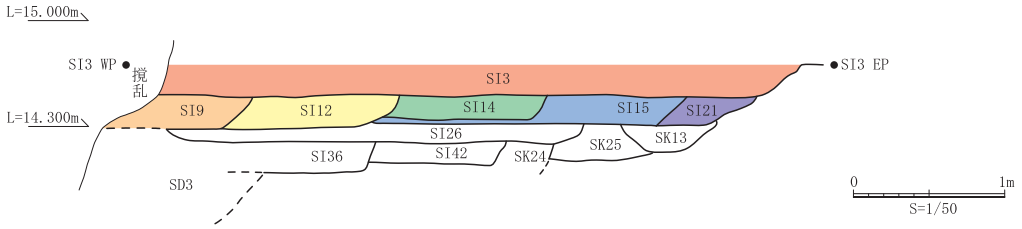
ＳＩ３の掘方面で確認した。23x ィ・24x ァ・グリッドに位置する。ＳＩ９に壊され、ＳＩ 14 を壊す。ＳＩ 12 とＳＩ 14 では、ＳＩ 12 の掘方面がＳＩ 14 の掘方面より深く掘り込んでいることから、ＳＩ 14 が古いと判断した。

近現代の撹乱とＳＩ９に壊されているため､現況では南北約 2.2 m以上､東西約 1.3 m以上であると推測され、長軸はＮ－ 14°－Ｅである。検出面から掘方面までの深さは約 20㎝を測る。

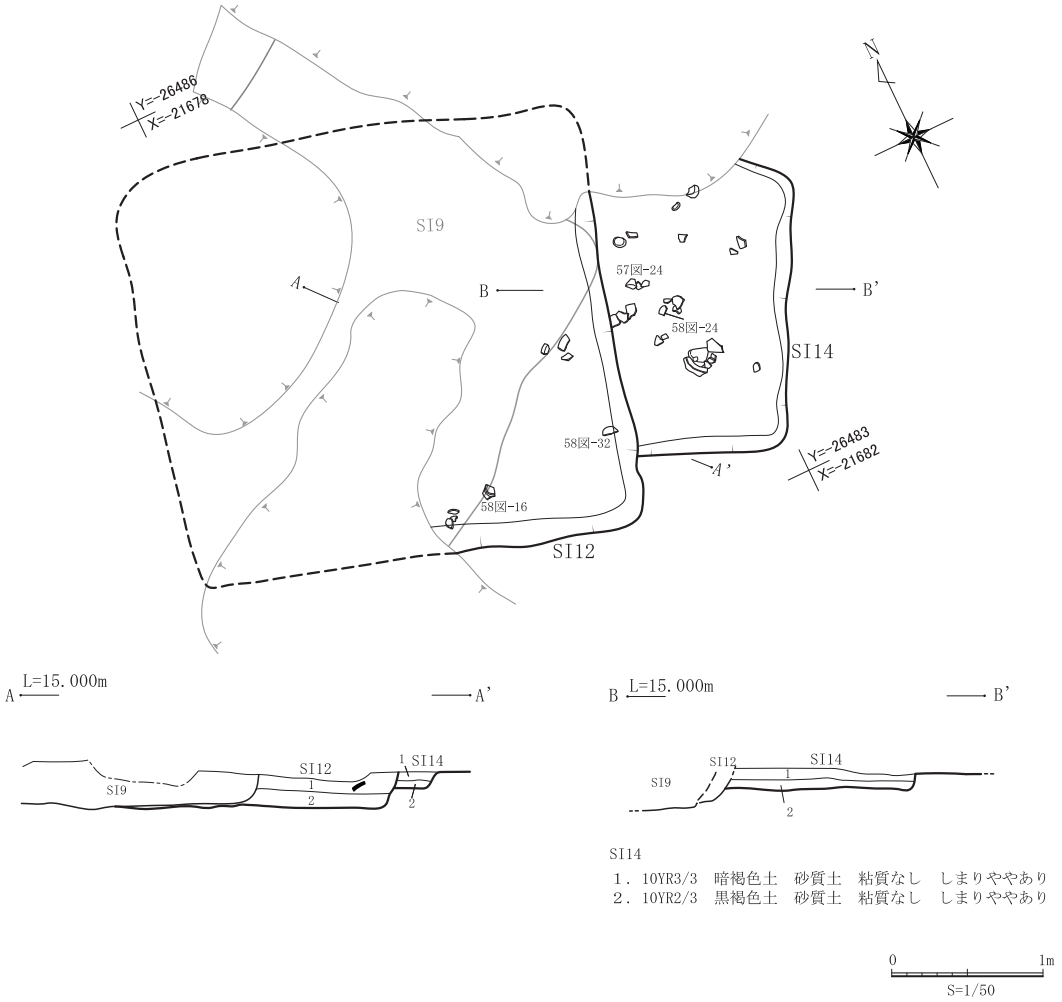
埋土は２層に分層でき、床面は掘方面上に形成される。かまど、柱穴、硬化面は確認できなかった。

遺物は検出時に埋土中より、須恵器椀（第 58 図 14）（第 58 図 16）、須恵器蓋（第 58 図 32）が出土した。58 － 14 は体部下部が丸味を持ち、口縁部は外反する。高台は台形で底部端に付き、内側の角をヘラで削られ､三角形に近い形に仕上げられている。58 － 16 は体部が直線的に伸び､高台は底部端よりやや内側につく。内外面に回転ナデが施され、外面底部には板状圧痕がある。58 － 32 は口縁端部の断面形が三角形を呈する。天井部は中心がくぼみ、自然釉がかかっている。つまみの有無はわからない。口縁部にやや歪みがある。口縁部内側に重ね焼き痕がある。





第 45 図　３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部２－１



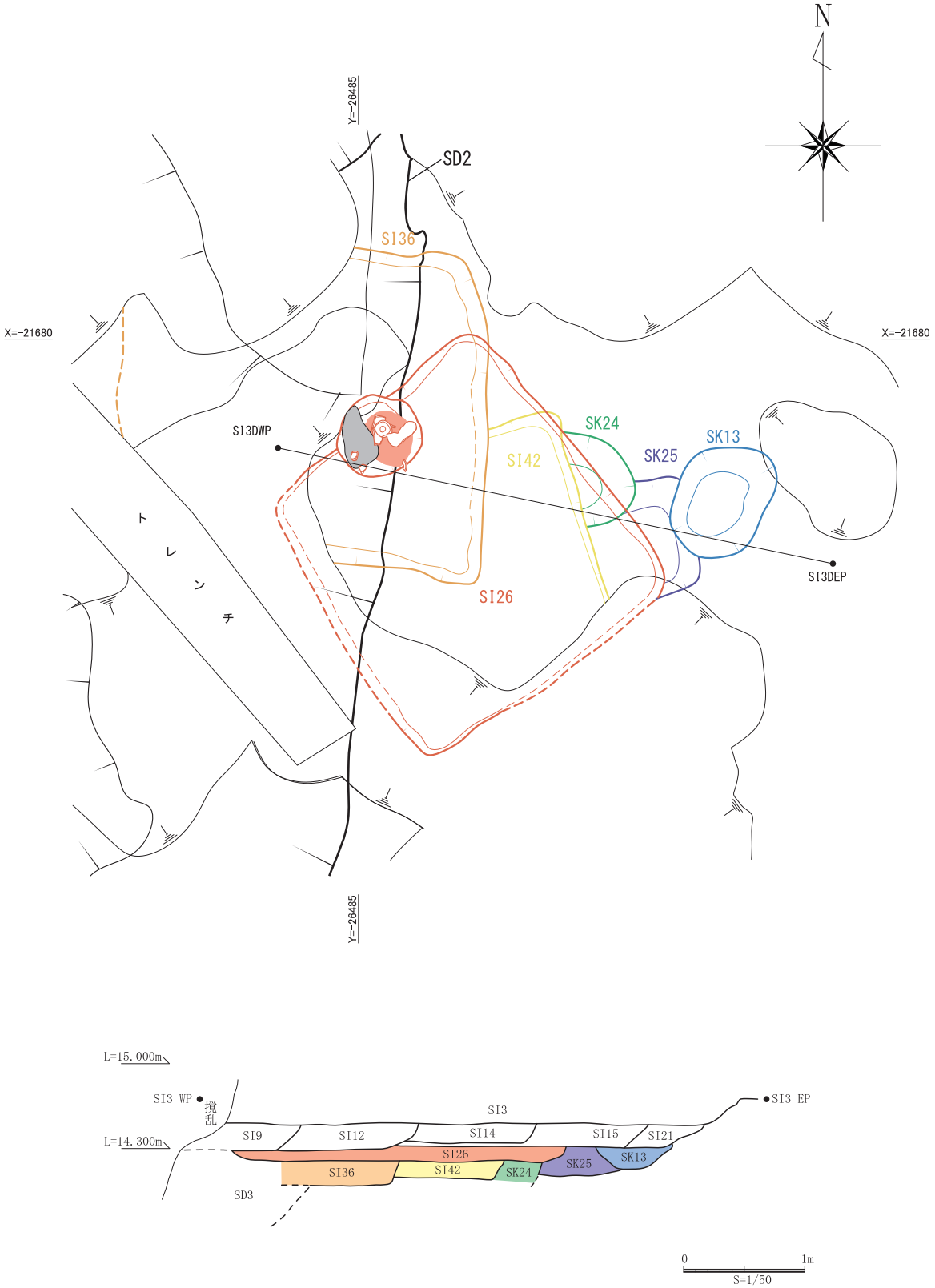
第 46 図　３Ｃ区 SI12･SI14 平面・断面図

３Ｃ区ＳＩ 14（第 46 図）

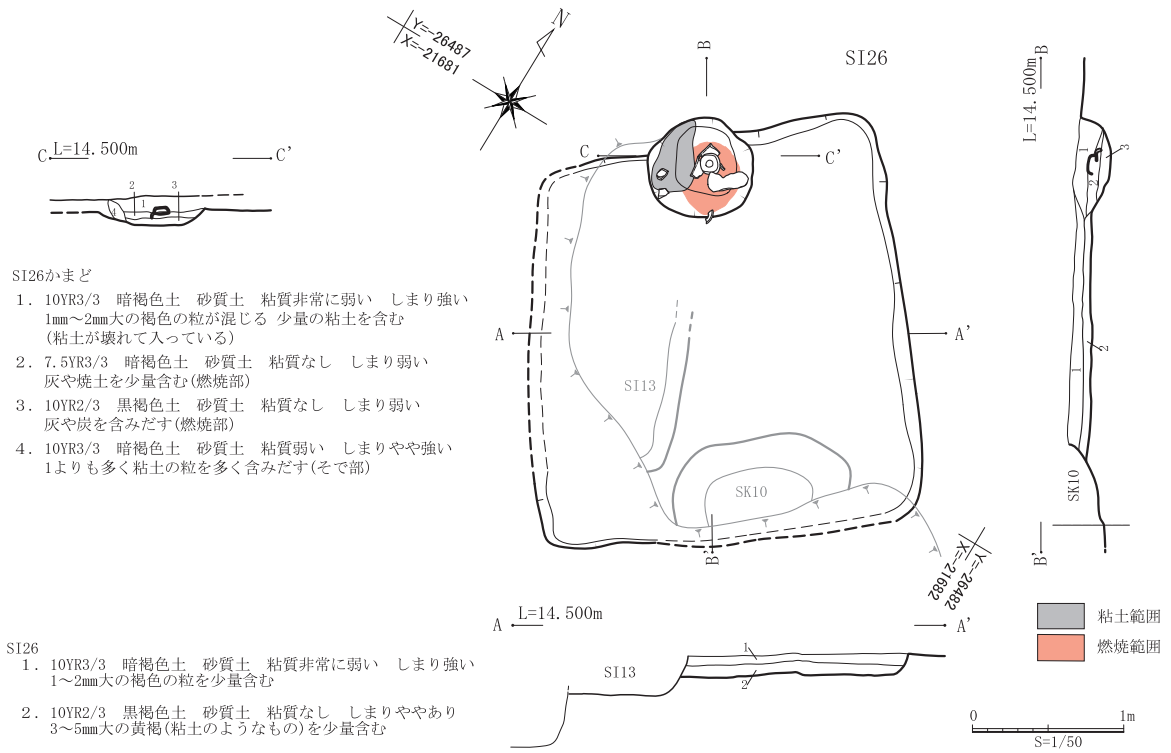
ＳＩ３の掘方面で確認した。24xァ・グリッドに位置する。ＳＩ 12 に壊され、ＳＩ 15 を壊す。ＳＩ 15 の床面まで壊していることからＳＩ 15 より新しい。北側を近現代の撹乱に壊されているが、掘方面の隅が確認できることから、現況では南北 1.9 m以上、東西約 1.3 m以上で、検出面から掘方面までの深さは約 12㎝を測る。長軸はＮ－ 30°－Ｅである。

埋土は２層に分層できる。床面は掘方面上に形成する。かまど、柱穴、硬化面などは確認できなかった。ＳＩ 12 と同一面で検出をかけた際に、掘方面の隅が曲がるような平面プランを確認した。小型の建物であるが、新屋敷遺跡では他にも検出例があるため建物跡と判断した。ＳＩ 12 と同一検出面であるため、多少遺物の混入が見られた。

遺物は埋土より須恵器杯（第 57 図 24）、須恵器蓋（第 58 図 24）が出土した。57 － 24 は体部が直線的に伸び、口縁部で細くなっている。58 － 24 は天井部に扁平なボタン状のつまみがつく。体部は丸みを持ち、口縁端部の断面形は三角形というより小さな長方形に近い。また、口縁端部外面には降灰が見られる。



第 47 図　３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部２－２



第 48 図　３Ｃ区 SI26 平面・断面図

３Ｃ区ＳＩ 26（第 48 図）

ＳＩ９、ＳＩ 12、ＳＩ 15 の掘方面で確認した。24x ァ・グリッドに位置する。ＳＩ 13 や撹乱、ＳＫ 10 に壊される。ＳＩ 13 の掘方がＳＩ 26 より深く掘り込んでいることからＳＩ 13 より古い。

現状では南北約 2.8 m、東西約 2.5 mで検出面から掘方面までの深さは約 14㎝を測る。主軸はＮ－ 31°－Ｗである。

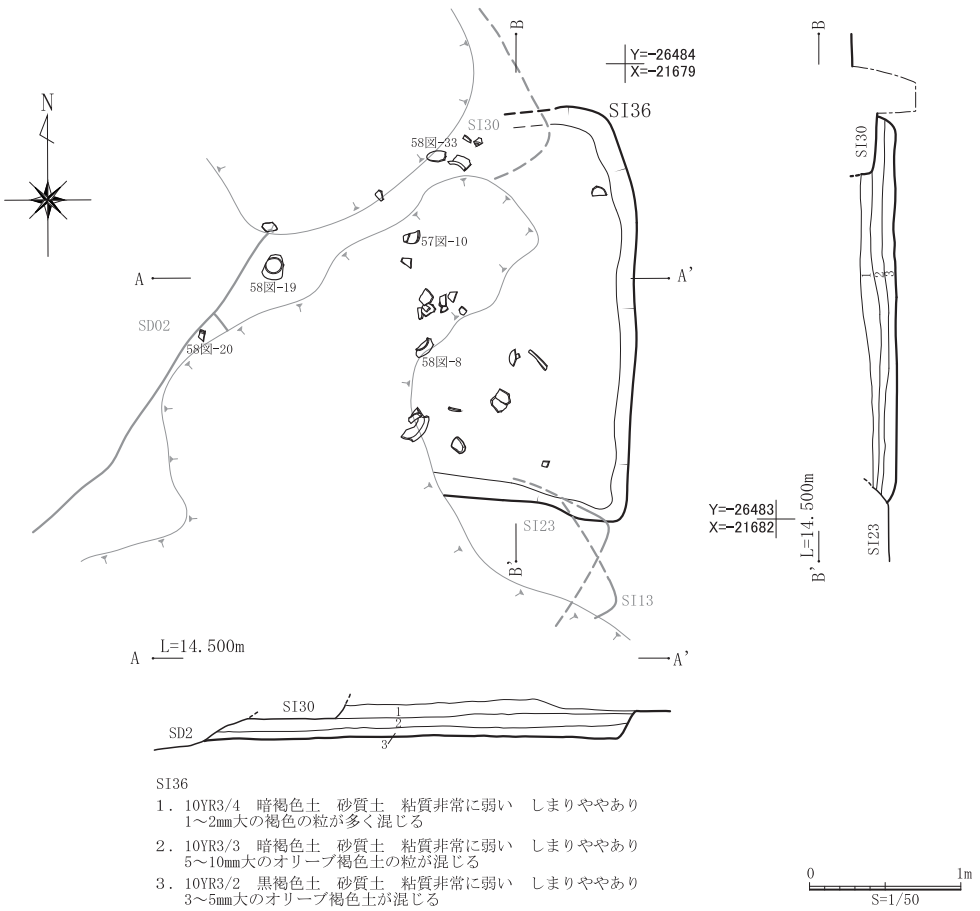
埋土は２層に分層できる。床面は掘方面上に形成される。柱穴や硬化面は確認できなかった。

かまどは埋土が４層に分層できる。かまど掘方時に深く掘り込み機能面として使用している。かまど埋２・３層は燃焼部としての痕跡を残す。また、かまどそでとして使われていた粘土が壊されて埋土の中に入り込んでいる。かまど埋２層の燃焼部中央に蓋をするように須恵器杯（第 57 図８）（第 57 図９）が折り重なるように出土した。かまど埋１層には、28㎝× 10㎝の砂岩が横たわっていた。

遺物はかまど埋２層より須恵器杯(第 57 図８)(第 57 図９)、埋土中より土師器杯(第 57 図 16)、須恵器蓋(第 58 図 28)（第 58 図 31）が出土した。57 － 8 は内外面とも回転ナデが施され、体部下半から底部にかけて丸みを持っている。口縁部はやや外反し、一部黒色化している。57 － 9 は 57 － 8 同様に内外面とも回転ナデが施され、57 － 8 より一回り大きい。57 － 8 より体部が立ち、下半から底部にかけて丸みを持っている。

57 － 16 は内面に回転ナデ、外面にナデが施され、底部内面に『大』の刻書がある。外底面に圧痕がある。

58 － 28 は口縁端部の断面は長方形に近く、下方に屈曲する。天井部は稜をなし、径は小さい。回転ヘラ切り後にやや粗いナデを施している。つまみ部分は欠損している。58 － 31 は天井部に回転ヘラ切りが施され、中心部にはヘラ切り痕が見られる。口縁端部の断面形状はかろうじて三角形を呈している。



第 49 図　3 C 区 SI36 平面・断面図

３C区ＳＩ 36（第 49 図）

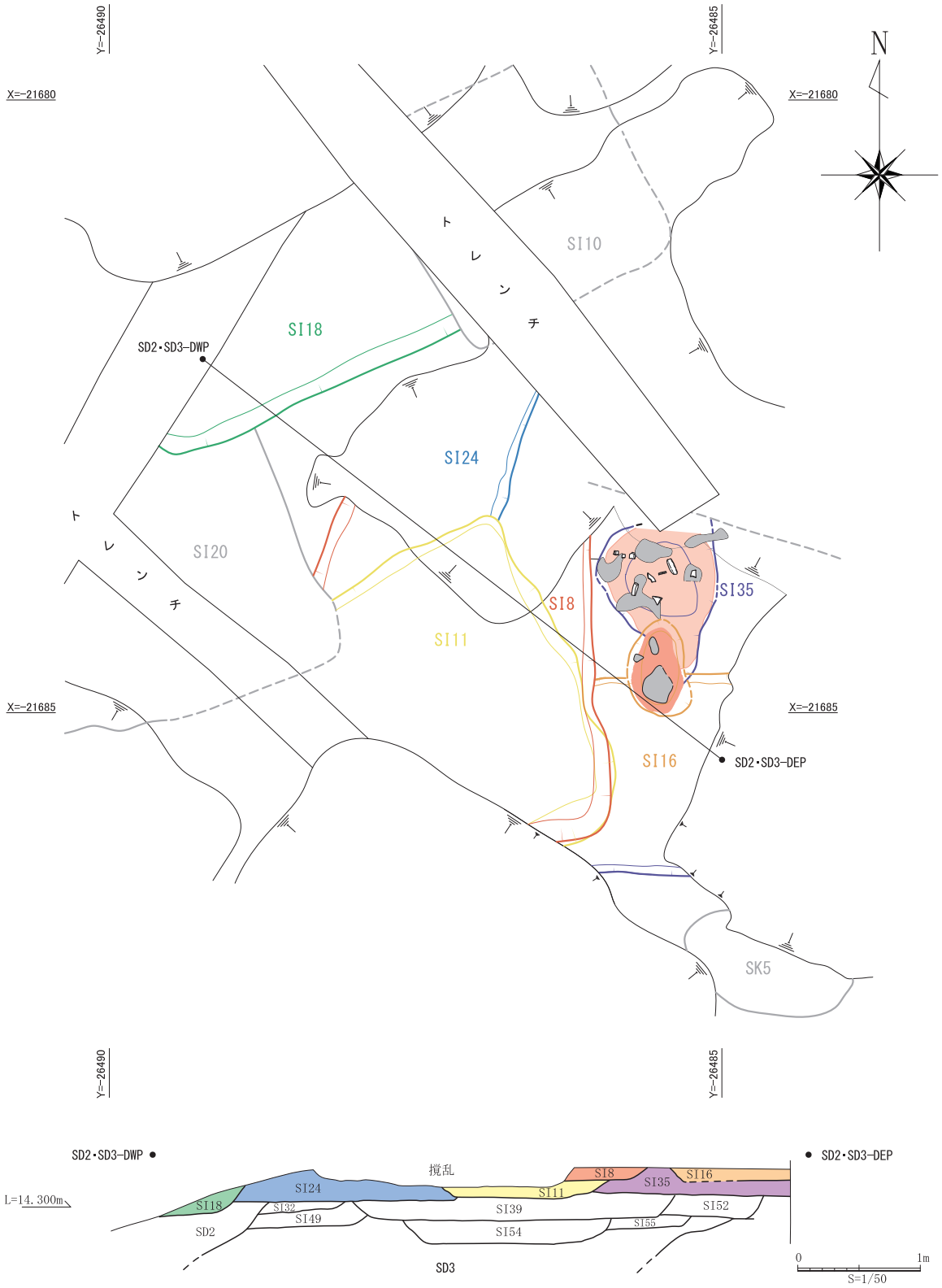
ＳＩ 26 の掘方面で確認した。23x ィ・24x ァ・グリッドに位置する。ＳＩ 23、ＳＩ 30、ＳＤ２に壊され、ＳＩ 42 を壊す。ＳＩ 23、ＳＩ 30 とＳＩ 36 の新旧は、ＳＩ 36 の北側の掘方面をＳＩ 30 が壊し、ＳＩ 36 の南側の掘方面をＳＩ 23 が壊していることから、ＳＩ 23、ＳＩ 30 よりＳＩ 36 が古いと判断した。平面プランでは掘方面の端の部分が少し残存している。

現況では南北約 2.7 m で東西は不明である。検出面から掘方面までの深さは約 22㎝を測る。主軸はほぼ南北軸と一致する。

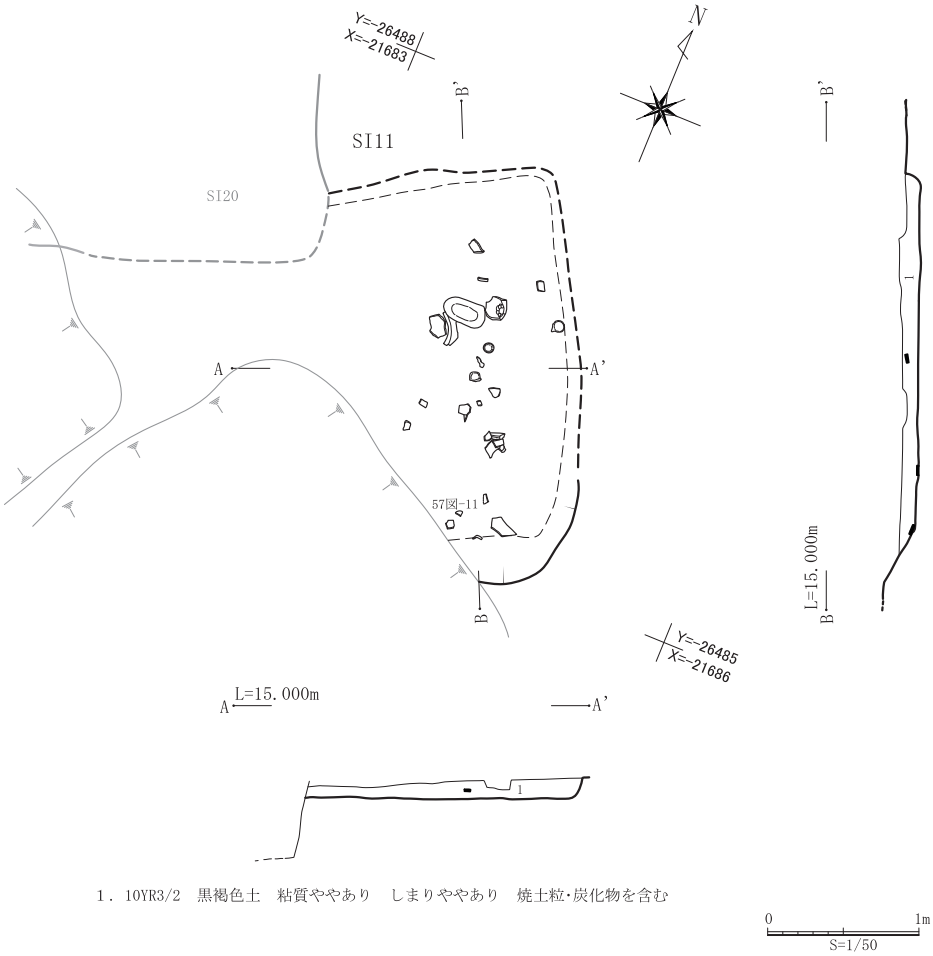
埋土は３層に分層でき、床面は掘方面上に形成される。かまど、柱穴硬、硬化面などは検出できなかった。

遺物は土師器杯（第 57 図 12）（第 57 図 17）、須恵器杯（第 57 図 10）須恵器椀（第 58 図８）（第 58 図 10）（第 58 図 15）（第 58 図 19）（第 58 図 20）、須恵器蓋（第 58 図 33）が建物の床面に広がるように出土した。57 － 12 は内外面は回転ナデが施され、外底面に焼成前に記銘された『七』のヘラ書きがある。57 － 17 は内外面はナデの調整があり、外底面に『七』のヘラ書きがある。57 － 10 は体部が口縁にかけやや外反する。底部は全体的に丸みを持ち、外底面にヘラケズリ痕が見られる。内器面には工具痕がある。58 － 8 は体部下部が丸みを持ち、体部は直線的に伸びる。高台は底部端よりやや内側につき、断面形はひし形を呈する。外底面に板状圧痕がある。58 － 10 は体部は内湾し、底部端に高台がつく。高台の断面形はほぼ三角形を呈する。外面に自然釉がかかる。底部に焼成時の膨らみによる変形が見られる。58 － 15 は体部は直線的に伸び、高台は底部端より内側に付く。高台の断面形状は背の低い方形である。58 － 19 は口径が 17.4㎝、底部径が 11.6㎝の比較的大きな椀である。体部は直線的に伸び、口縁端でやや外反する。高台は底部端に付き、断面形はほぼ三角形を呈する。外底面から体部にかけてヒダスキ痕がある。

58 － 20 は体部が直線的である。体部下半にほんの少し膨らみを有する。高台は底部端に付き断面形は方形を呈している。58 － 33 は天井自体が扁平化し、口縁部も歪みがある。内器面に使用による研磨痕があることから転用硯の可能性が高い。



第 50 図　3 C 区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部３―1



第51図　３Ｃ区SI11平面・断面図

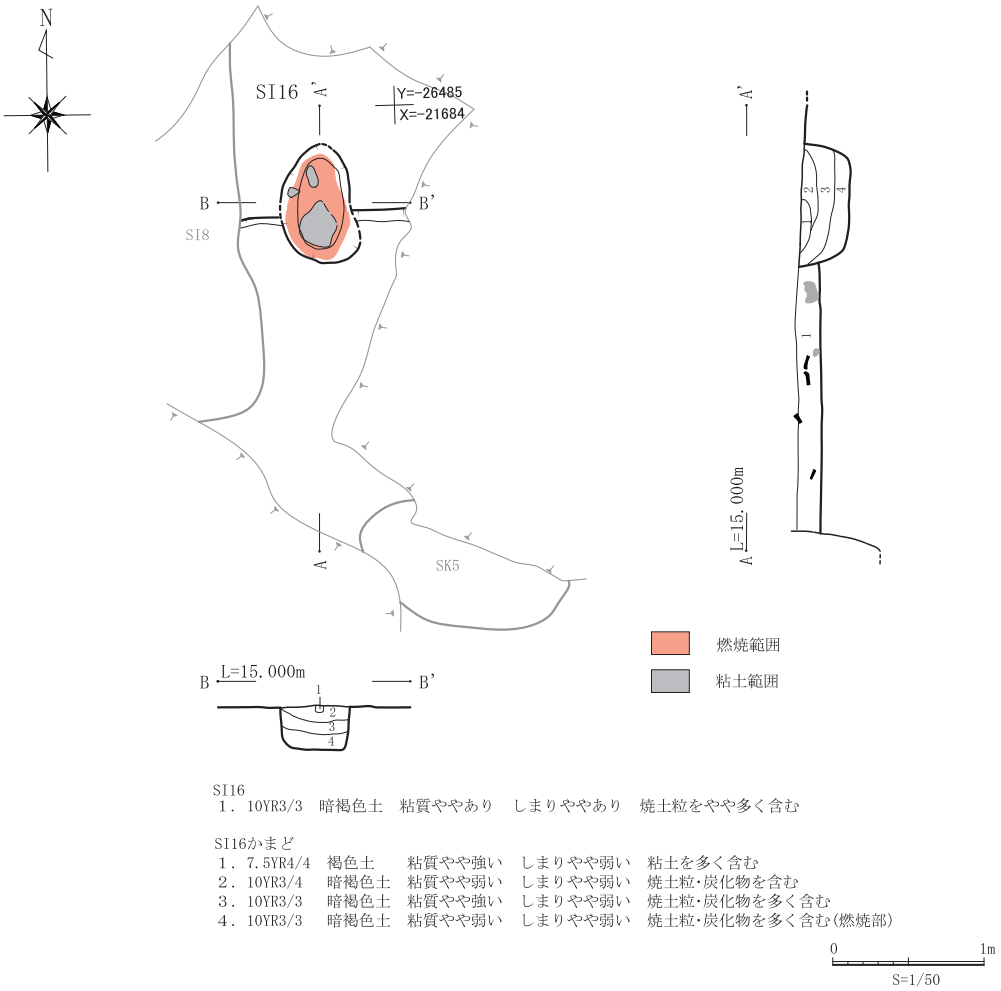
３Ｃ区ＳＩ 11（第51図）

ＳＩ８の掘方面で確認した。24xウ・グリッドに位置する。ＳＩ 20に壊され、南側を撹乱によって壊されている。

現況では南北約2.7 m、検出面から掘方面までの深さは約12㎝を測る。主軸はＮ－ 25°－Ｗである。

埋土は単層で、柱穴、硬化面などは検出できなかったため床面の層は分からない。掘方の立ち上がりは南側が緩やかに上がる。検出時に土器の破片や焼土粒が広がっている部分を確認し、炭化物を多く含み基本土層とは明らかに異なっていたことから建物跡と判断した。

遺物は埋土から須恵器杯(第57図11)が出土した。体部が立ち気味で体部下半から底部にかけて丸みを持っている。回転ヘラ切り後にナデが施され、内外面とも回転ナデが見られる。また、内外面にヒダスキ痕が見られる。



第 52 図　３Ｃ区 SI16 平面・断面図

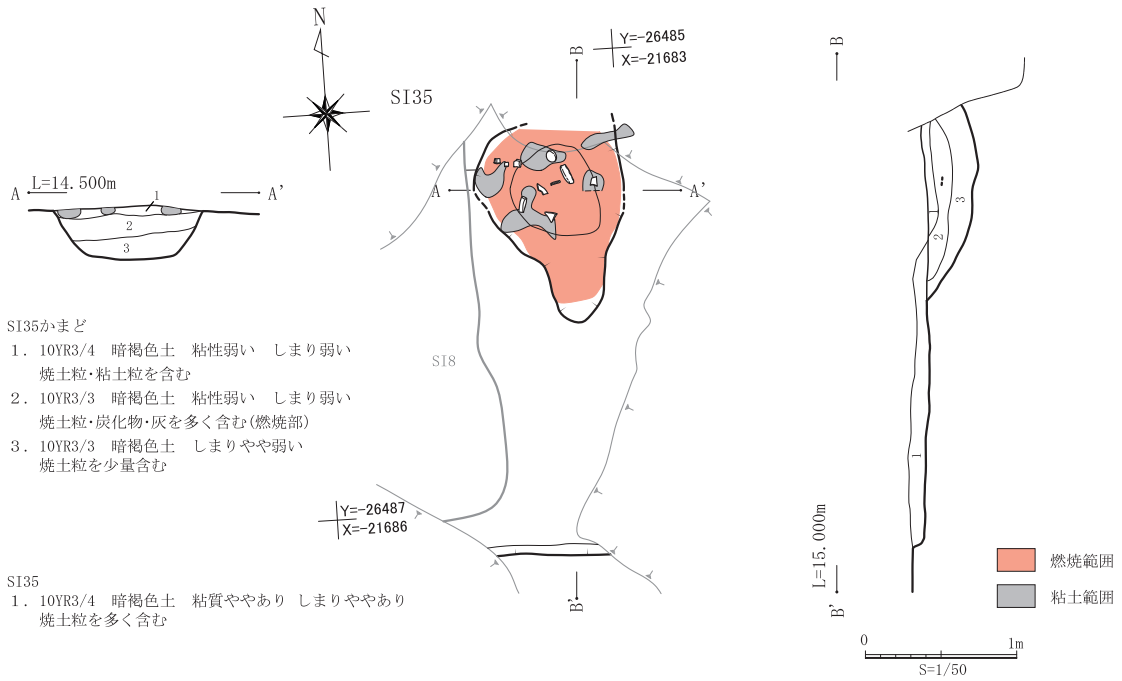
３Ｃ区ＳＩ 16（第 52 図）

３層上面で検出した。24x ゥ・ェ・グリッドに位置する。この遺構の西側をＳＩ８に壊され、東側と南側を撹乱に壊される。残存部分が少なかったが、検出時からしっかりとしたかまど跡があり、その両そで部分から建物の掘方が確認できた。現況から平面プランは分からない。

埋土は単層で、硬化面などは検出できなかったため、床面の層位は分からない。

かまどの埋土は４層に分層できる。掘方時に深く掘り込まれ、かまどの機能面としての十分な深さを持つ。かまど埋１層はかまどそでに使用された粘土塊（30㎝× 25㎝）の一部であり、かまど破棄時に埋もれたものと言える。かまど埋４層が燃焼部として機能していたと言える。

遺物は埋土より（第 57 図４）（第 59 図１）（第 59 図２）が出土した。57 － 4 は土師器杯で、全面に回転ヘラミガキの調整が見られ、内外面に赤彩が施されている。体部はやや丸みを持つ。外器面に摩耗による赤彩の消失が見られる。59 － 1 は土師質の移動式かまどである。焚口のまわりに幅約 5.7㎝の庇が取り付けられ、庇の裏手には、下向きの把手が取り付けられている。焚口正面からみて右手の部分だけの残存である。庇の部分にススの付着が見られる。59 － 2 は須恵器大甕で、約半分の残存でＳＩ 11 にも破片が混入していた。反転復元口径 23㎝、最大胴径 44㎝、器高 51㎝を測る。外器面は格子目タタキ後にナデ調整が施され、内器面の上部は同心円文当具痕が、下部は平行当具痕が見られる。内外面ともに口縁から胴部下位にかけて自然釉が見られる。



第 53 図　３Ｃ区 SI35 平面・断面図

３C 区ＳＩ 35（第 53 図）

ＳＩ８と同一検出面で確認した。24x ゥ・24x ェ・グリッドに位置する。平面プランの大部分を近現代の撹乱によって壊されている。残存部分は少なかったが、検出時からしっかりしたかまど跡があり、建物の掘方面よりも深く掘り込まれていたため、この建物に伴うかまどであると判断した。

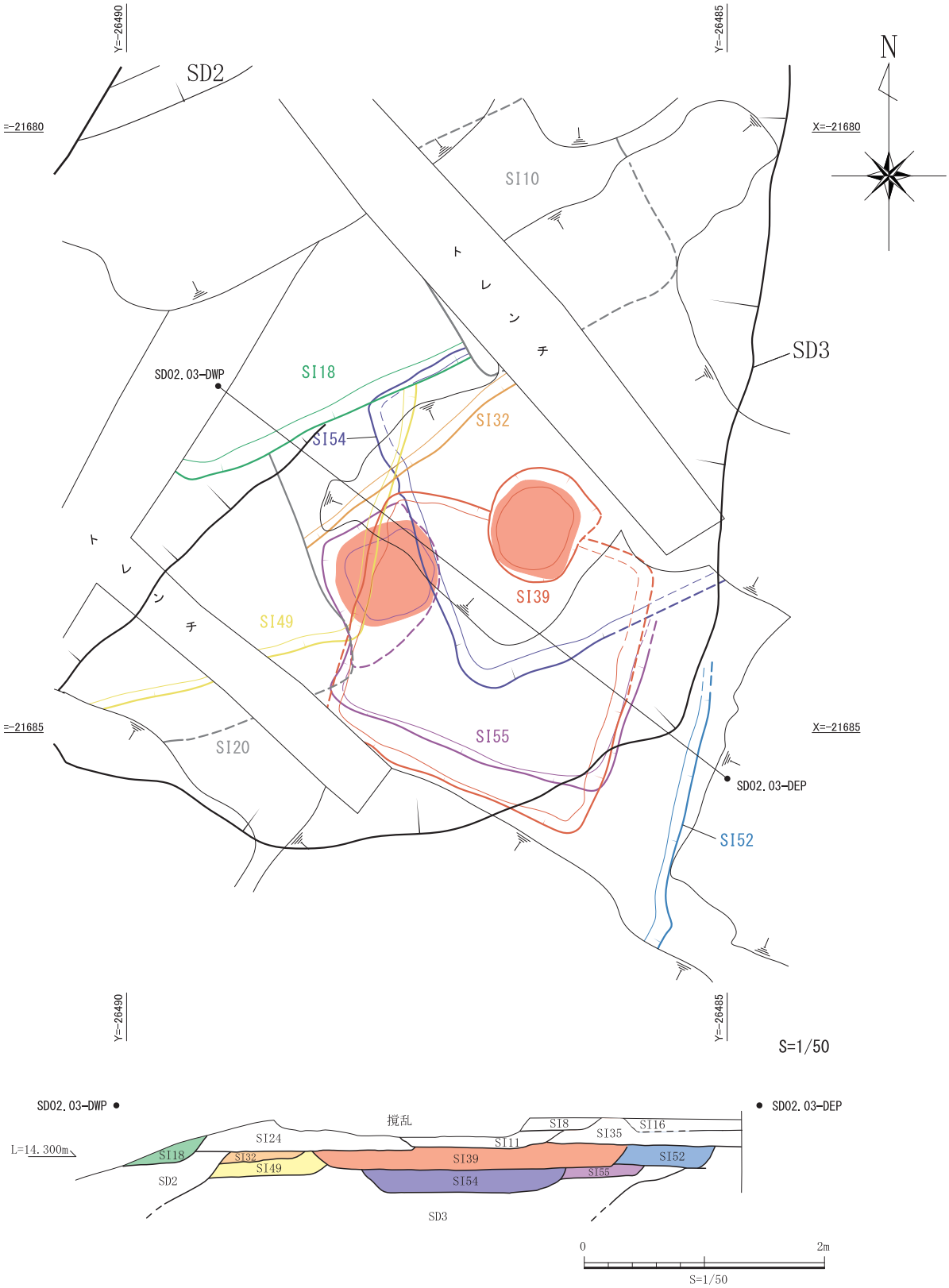
現況では平面のプランは判然としない。埋土は単層で硬化面などは検出できなかったため、床面の層位は分からない。

かまどの埋土は３層に分層できる。かまど掘方時に深く掘り込み、機能面として使用している。かまど埋２層は燃焼部としての痕跡を残す。かまど成形時の粘土塊（20㎝～ 30㎝）がかまど埋１層に含まれていて、かまどが壊されたことを表している。かまどを中心に須恵器杯（第 57 図７）が立った状態で埋められていた。

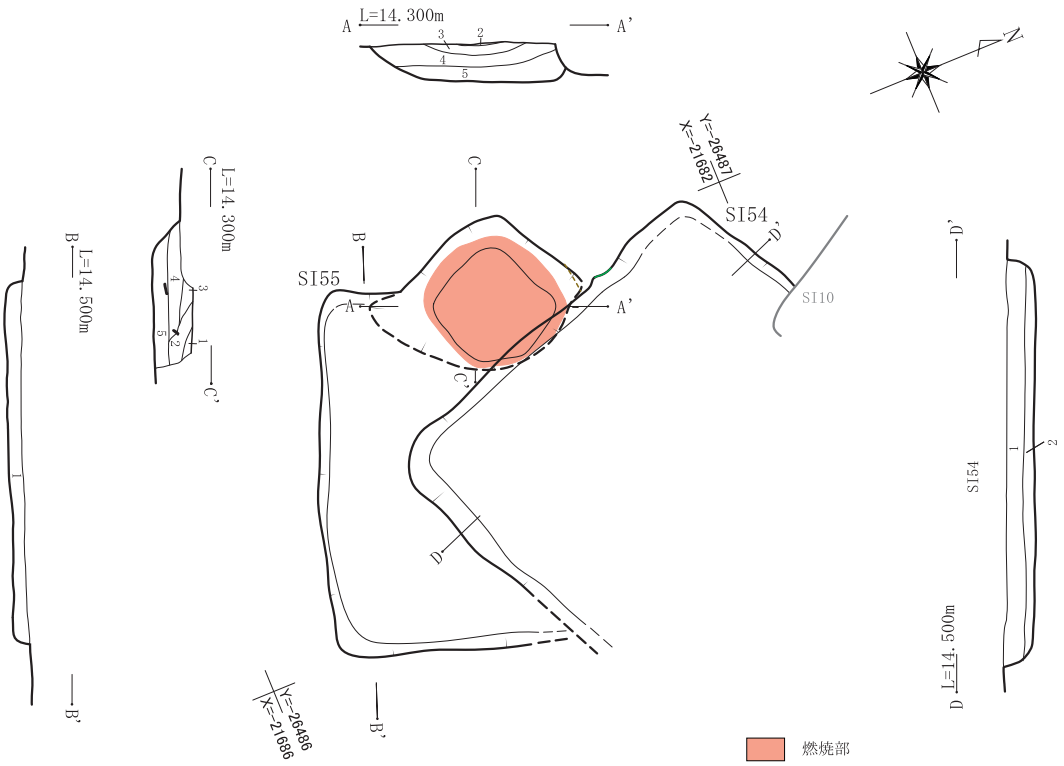
遺物はかまど埋土から須恵器杯（第 57 図７）、土師器皿（第 58 図 22）、建物埋土から須恵器杯（第 57 図 19）（第 57 図 20）（第 57 図 25）、須恵器椀（第 58 図３）（第 58 図 11）、須恵器蓋（第 58 図 27）が出土した。

57 － 7 は体部が直線的に伸び、体部下半から底部にかけて丸みを持っている。内外面は回転ナデが施され、底部内面には一方向のナデが見られる。58 － 22 は外面に赤彩が見られる。体部は口縁にかけ少し外反している。57 － 19 は口縁にかけやや外反し、体部下半から底部にかけて丸みを持つ。内外面は回転ナデが施され、暗灰色のヒダスキ痕が内外面ともに見られる。外底面に圧痕がある。57 － 20 は体部が直線的に伸び、やや開き気味である。内外面に回転ナデが施されている。57 － 25 は体部が直線的に伸び、口縁部でやや外反する。底部は丸みを持つ。内外面にヒダスキ痕が見られる。焼成が不十分で色調が異なる。

58 － 3 は体部が直線的に伸び、高台は底部端より内側に付く。断面形はひし形を呈している。内外面に回転ナデが施され、外面に自然釉がかかる。58 － 11 は体部がやや内湾し、高台が底部端に付く。断面形はひし形を呈する。内外面に回転ナデを施し、底部外面は回転ヘラケズリが見られる。58 － 27 は口縁部端の断面形が小さな三角形を呈する。天井部の径はやや大きくて平らである。外面上部に自然釉がかかる。上部につまみ欠損の痕跡がある。内器面に研磨が認められ、転用硯の可能性がある。



第 54 図　３Ｃ区 24x・グリッド竪穴建物跡集中部３－２



SI55
1．10YR2/3　黒褐色土　粘質ややあり　しまりやや弱い　焼土粒･炭化物･粘土粒を多く含む

SI55かまど
1．10YR3/2　黒褐色土　粘質弱い　しまり弱い　焼土粒を含む
2．10YR2/3　黒褐色土　粘質弱い　しまり弱い　焼土粒･炭化物･粘土を含む
3．10YR2/3　黒褐色土　粘質弱い　しまり弱い　焼土粒･炭化物を含む
4．10YR3/2　黒褐色土　粘質弱い　しまり弱い　焼土粒･炭化物を少量含む
5．10YR2/3　黒褐色土　粘質弱い　しまり弱い　焼土粒･炭化物を多く含む(燃焼部)

SI54
1．10YR3/2　黒褐色土　粘質ややあり　しまりややあり　焼土粒･炭化物を少量含む
2．10YR3/3　暗褐色土　粘質ややあり　しまりややあり　焼土粒･炭化物･粘土粒を含む

第 55 図　３Ｃ区 SI55 平面・断面図

３Ｃ区ＳＩ 55（第 55 図）

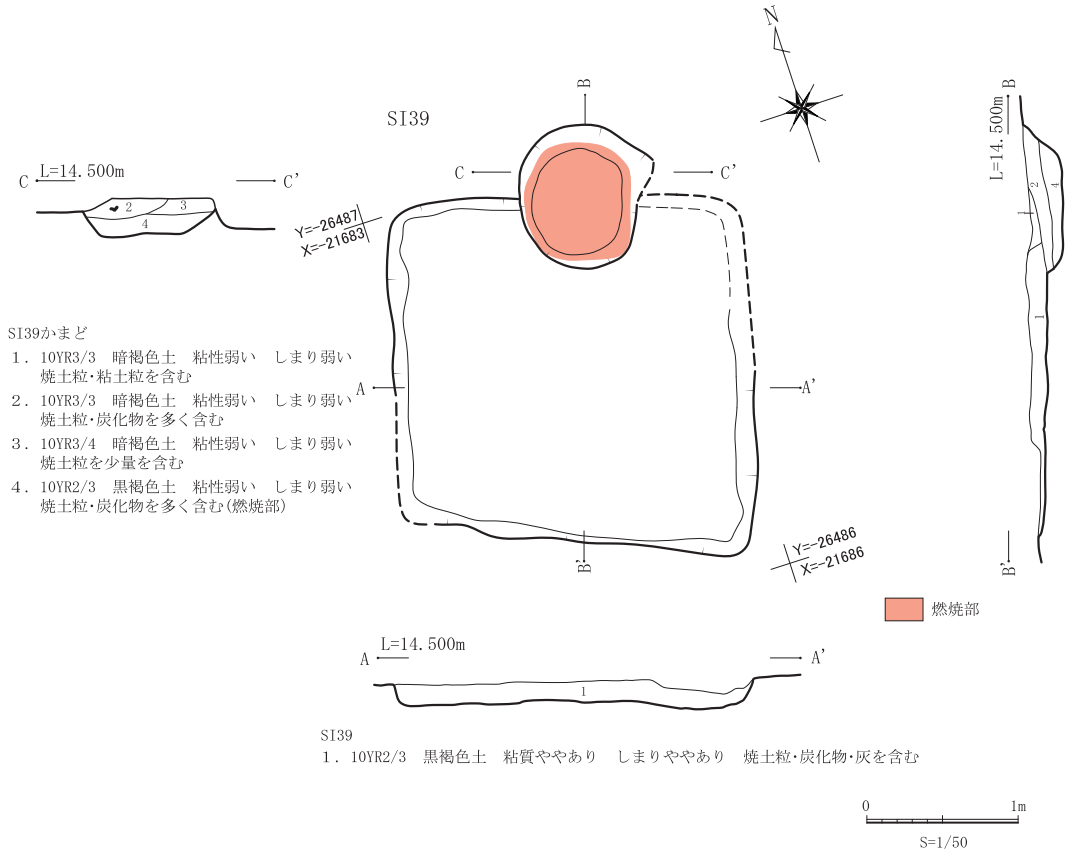
ＳＩ 39 の掘方面で確認した。24x ゥ・24x ェ・グリッドに位置する。ＳＩ 54 に壊される。平面プランでＳＩ 54 が壊しているため残存部は少なかったが、検出面にしっかりしたかまど跡があり、かまど跡から建物の掘方面が確認できたことで建物と判断した。

現況から、東西は約 2.4 ｍで、検出面から掘方面までは約 10㎝を測る。主軸はＮ－ 67°－Ｗである。

埋土は単層で硬化面、柱穴などは検出できなかったため床面はわからない。

かまどの埋土は５層に分層できる。掘方時に深く掘り込み、機能面として使用している。かまど埋５層は燃焼部として使用していた。かまどそでの部分にあたる粘土や石は確認できなかった。

遺物は埋土から須恵器椀（第 58 図５）（第 58 図６）（第 58 図 13）が出土した。58 －５は体部が少し歪曲し、中位から丸みを持つ。口縁端は外反する。高台は底部端に付き、断面形は方形である。体部外面下部にヘラケズリの調整が見られる。58 －６は体部が直線的に伸び、高台は底部端に付く。高台の断面形は方形を呈している。体部下部に高台貼り付け時の粘土のはみ出しが見られる。58 － 13 は体部下部から底部にかけて丸みを持つ。高台が底部端に付き、断面形は三角形を呈する「萩尾型」椀である。



第 56 図　３Ｃ区 SI39 平面・断面図

３Ｃ区ＳＩ 39（第 56 図）

ＳＩ 24 の掘方面でＳＩ 32、ＳＩ 49 と同一検出面で確認した。24x ウ・24x ェ・グリッドに位置する。ＳＩ 39 の掘方面がＳＩ 49、ＳＩ 55 の掘方面を壊している。

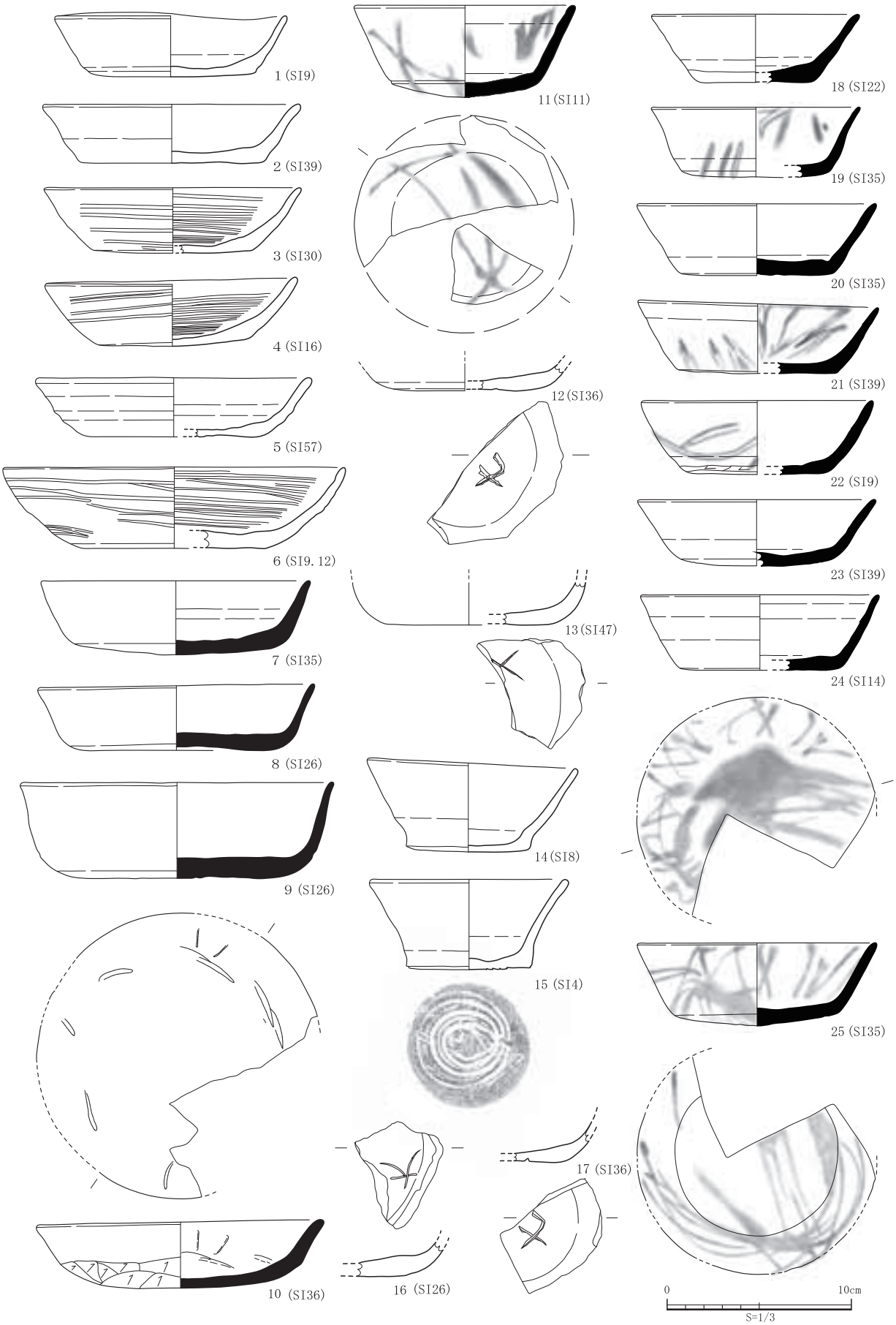
現況では南北約 2.2 m、東西約 2.4 mで検出面から掘方面までの深さは約 10㎝を測る。主軸はＮ－ 18°－Ｅである。

埋土は単層で、硬化面や柱穴は検出できなかったため、床面は分からない。

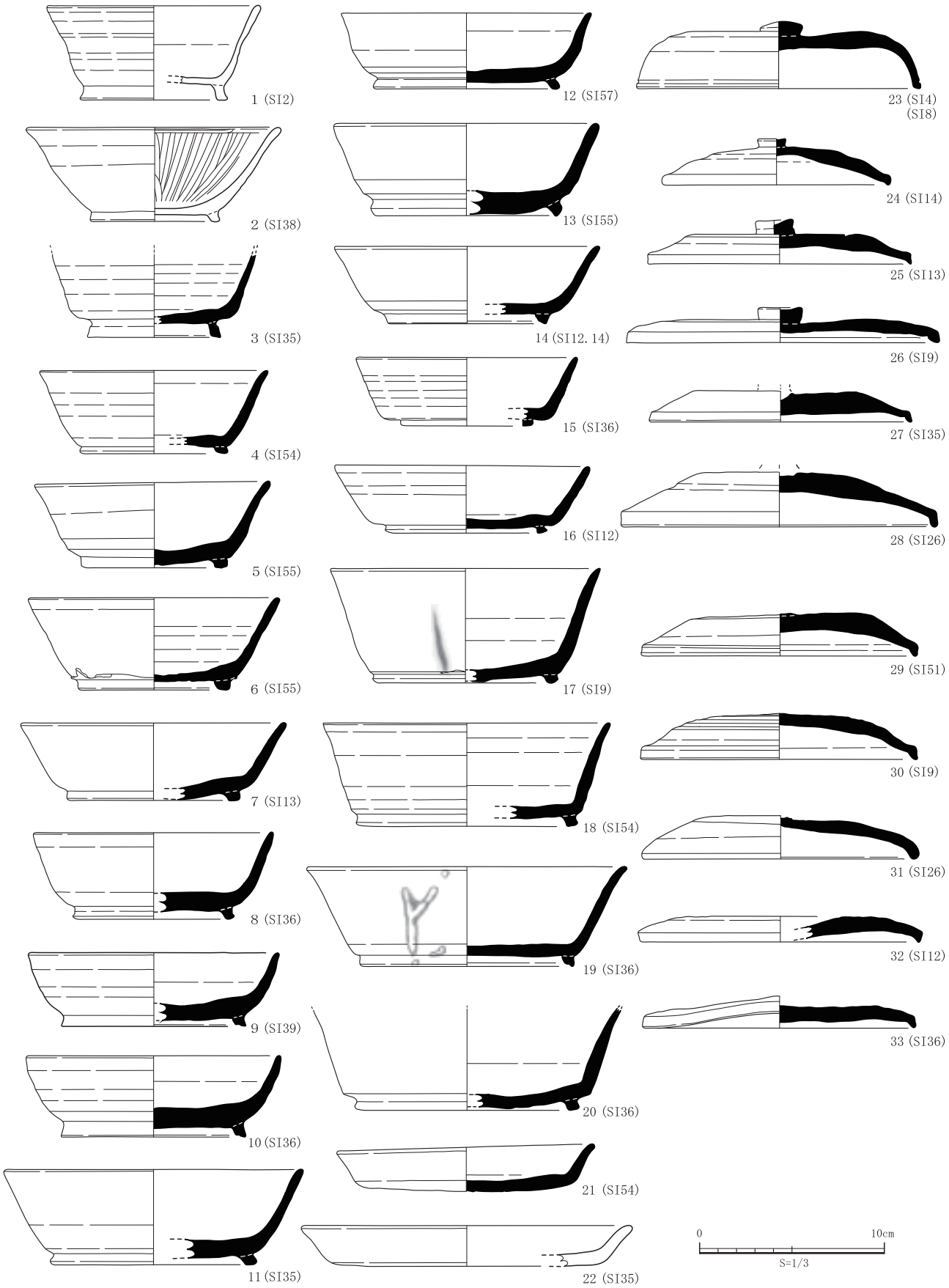
かまどの埋土は 4 層に分層できる。掘方時に深く掘り込み、機能面として使用している。かまど埋 4 層は燃焼部として使用していた。かまどは 72 ｃｍ× 80㎝の燃焼範囲を持ち、しっかり機能していたことがわかるが、粘土塊は検出できなかった。

遺物は埋土より土師器杯（第 57 図２）、須恵器杯（第 57 図 21）（第 57 図 23）、須恵器椀（第 58 図９）が出土した。57 －２は体部が開き気味で、口縁部がやや外反する。内外面に回転ナデが施され、赤彩が見られる。

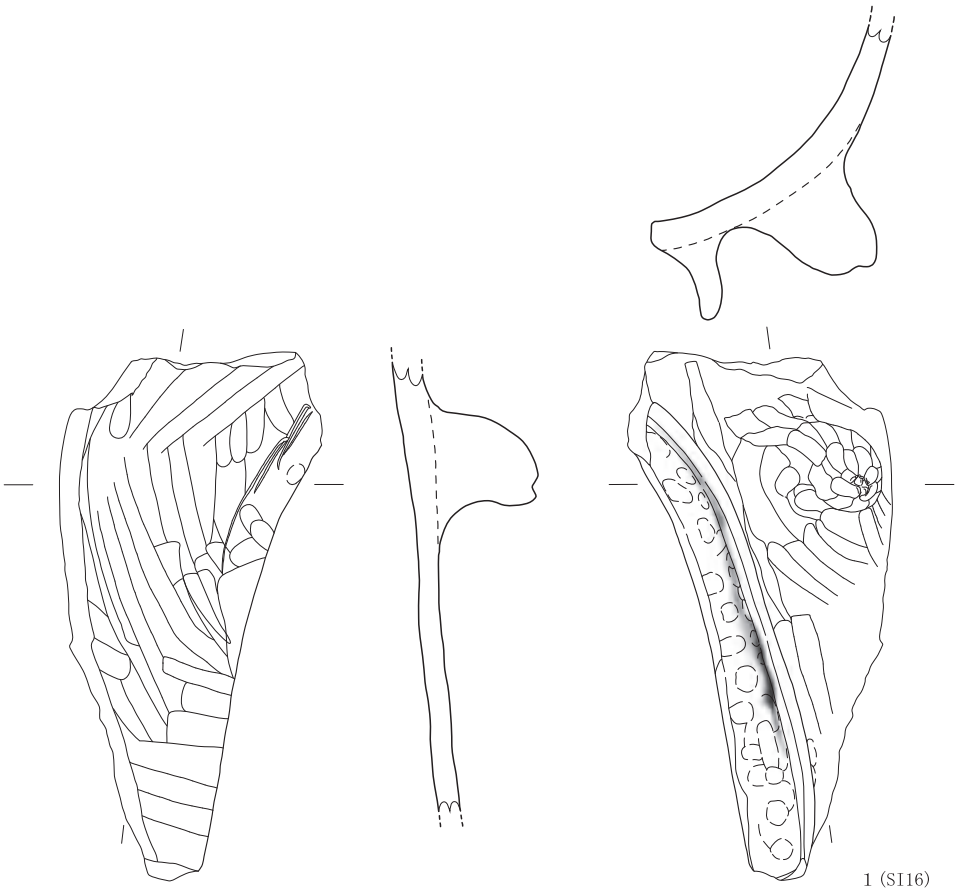
57 － 21 は体部が開き気味で、やや丸みを持つ。内外面にヒダスキ痕がある。57 － 23 は体部下部から底部にかけて丸みを持つ。口縁部がやや外反する。58 －９は体部は内湾し、高台が底部端に付く。高台の断面形は台形を呈している。外面体部下半から底部にかけて自然釉が付着する。

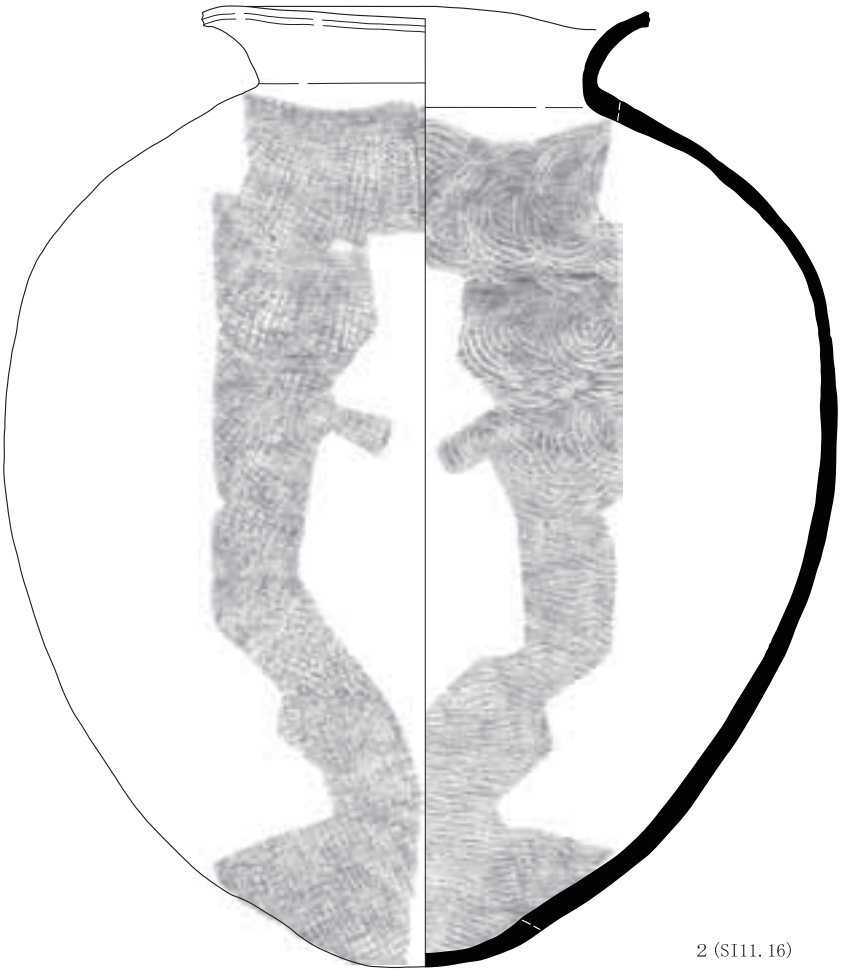


第 57 図　３Ｃ区出土遺物実測図（１）



第 58 図　３Ｃ区出土遺物実測図（２）





第 59 図　３Ｃ区出土遺物実測図（３）

溝跡

３Ｃ区ＳＤ１（第 25 図）

３Ｃ区で検出したＳＤ１は、３Ａ区の溝跡ＳＤ２の北西側への延長部である。詳細については３Ａ区ＳＤ２（第 25 図）での報告に譲り、ここでは出土した遺物について述べる。

第 62 図１は調査区北側のＳＤ１の下層から出土した土師器小型鉢で、体部が立ち口縁で外反する。回転台成形でナデが内外面に施される。祭祀用に使われた可能性もある。第 62 図 12 は須恵器杯で体部は直線的でやや開き気味である。内外面に回転ナデ調整が見られる。

３Ｃ区ＳＤ２（第 60・61 図）

22x ィ・23x ァ・ィ・ゥ・ェ、24w ァ・ィ・ゥ・グリッドに位置する。この調査区の南西部にあたり、白川と平行する。黒褐色砂質土が調査区壁に沿って南北に残存していた。ＳＤ３の堆積後に形成されたものと考える。そのため、ＳＤ３との交差部分では上端のラインが不明瞭になる。

検出できた長さは約 27 mで、幅は分からない。白川への落ち込みの可能性もあるが、調査区外にあたるためはっきりしない。

この溝の形成時期は明確でないが、埋土から糸切り離しの灯明皿が３点（第 62 図９）（第 62 図 10）（第 62 図 11）出土していることから、ＳＤ３より後になって形成されたものであると考える。

３Ｃ区ＳＤ３（第 60・61 図）

ＳＤ２と共に３層上面で検出した。23x ィ・ゥ・ェ、24x ェ・グリッドに位置する。この調査区の表土剥ぎの際、撹乱で壊された部分が多かった中にあって、この調査区の南側で２層包含層（黒褐色土）が多く残っていた。焼土やかまど跡などの確認から、建物跡を多く検出した。建物跡の調査を進めながら、その広がりを確認するためのトレンチで、ＳＤ３とＳＤ２を検出した。この調査区内に、南北約 12 m、東西約７mの半円形で入り込むような形状になっている。現在の白川側に向かって深くなり、その傾斜角は約 15°を測る。

埋土は 11 層からなり、埋５層まで土器の流れ込みが見られた。埋８層～ 11 層は自然堆積であり、埋７層から上位は人為的に埋められた可能性が高い。

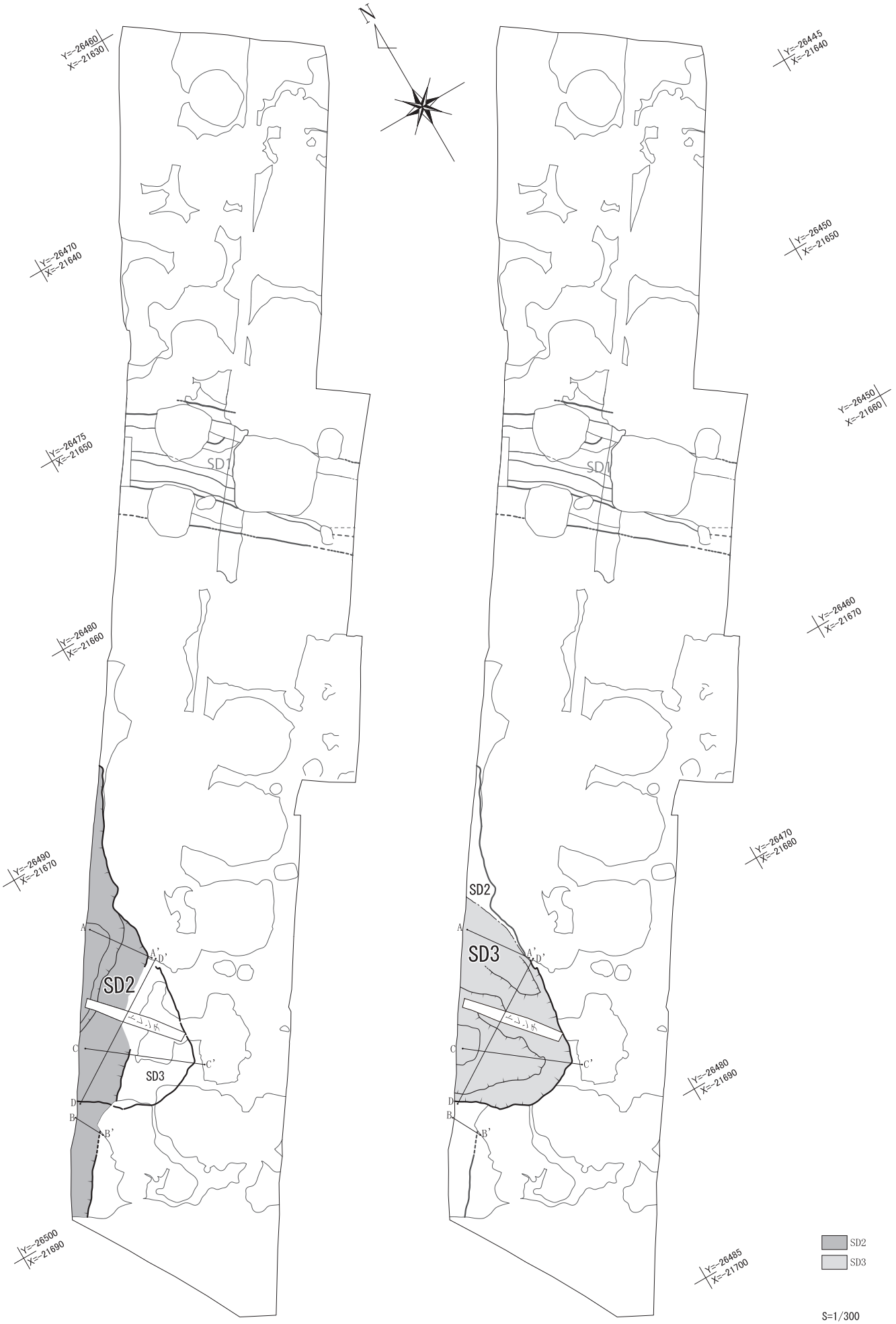
掘削当初は、白川の氾濫によって削られた場所であると考えていたが、氾濫によって削られた地形にしては、形状が不自然である。入り込みの断面形はなだらかなＶ字形になることから、人為的に掘り込まれた切り通しの可能性が高いと考えられる。

以下、ＳＤ２、ＳＤ３埋土内より検出した遺物について記す。

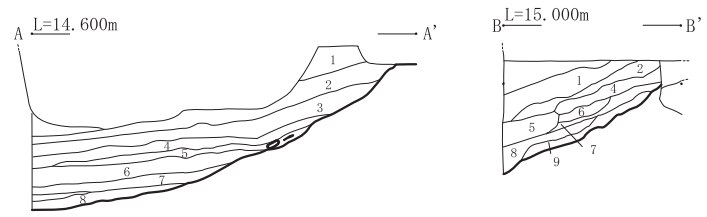
ＳＤ２出土遺物

第 62 図３、４、５、７は土師器杯である。３の体部は直線的に伸びる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、内外面に赤彩が見られる。体部内器面に油煙が付着している。４はＳＤ２のトレンチから出土した土師器杯で、反転復元口径は約 14.6㎝、底径約 12.2㎝、器高約 2.8㎝を測る。体部は内湾し、内外面にヘラミガキの調整が見られる。研磨土師器である。内外面にススの付着がある。５の反転復元口径は約 16.6㎝、底径約 14.0㎝、器高約 3.2㎝を測る。４より一回り大きくなる。体部はやや内湾し口縁に向かって細くなる。内外面に回転ナデ調整が施されている。７の底部は４分の１程度残存している。底部外面に線刻が見られる。第 62 図６は土師器皿で、反転復元口径約 17.2㎝、底径約 14.1㎝、器高約 2.3㎝を測る。体部は開き気味で口縁端部でやや外反する。内外面に回転ナデ調整が施される。内外面に赤彩が見られる。

第 62 図９、10、11 は土師器灯明皿で回転ナデ調整が施され、底部に回転糸切り痕が見られる。10 は体

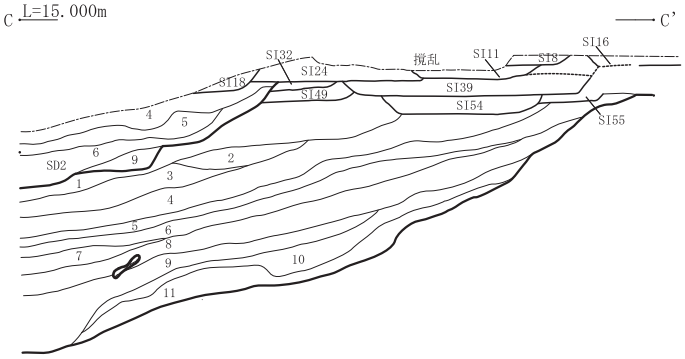


第 60 図　3 C 区 SD2・SD3 平面図



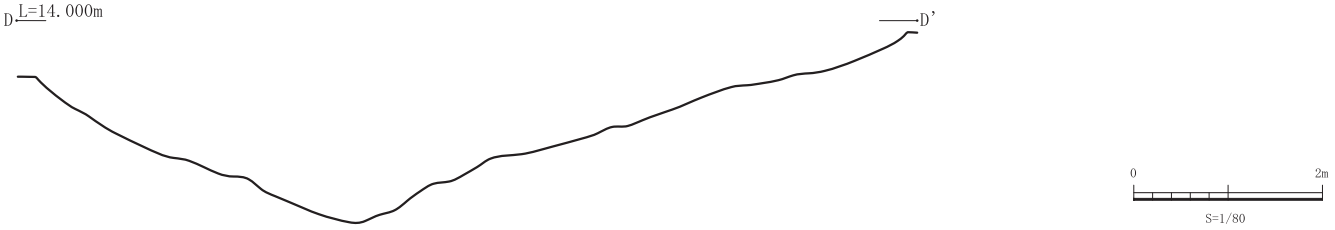
A-A'，B-B'

1．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
2．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
褐色土が少量混じる
3．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
1～2mm大の赤褐色粒少量含む
4．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
5．2.5YR3/3　暗オリーブ褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
6．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
褐灰色の細粒砂が多く混じり2～3mm大の粒が少量混じる
7．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
2～3mm大の粒が多く混じり　若干鉄分が沈着しはじめる
8．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い
オリーブ褐色の砂岩ブロック状のものを多く含む
9．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや弱い



C-C'

1．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
赤褐色粒を多く含む　土器を多く含む
2．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質ややあり　しまりやや強い
粘土粒を多く含む　赤褐色粒を少量含む　土器を多く含む
3．10YR3/2　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
粘土粒が2よりも少なく若干細粒砂を含みだす　土器を多く含む
4．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
2～3cm大の砂岩のブロック状のものを少量含む　土器を多く含む
5．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
砂を4よりも多く含みだしジャリジャリとした感じがする　土器を多く含む
6．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
7．10YR2/3　黒褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
オリーブ褐色土を少量含む
8．10YR3/4　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまり強い
0.5～1cm大のブロック状のものを含みだす　8の層で2～3cmで分層できそうだが、沈殿してたまっている様だったので1層として書いてある
9．10YR3/3　暗褐色土　砂質土　粘質なし　しまり強い
0.5～1㎝大のブロック状のものを8よりも少量含む
10．10YR4/4　褐色土　砂質土　粘質非常に弱い　しまりやや強い
3～5cm大の砂岩ブロックを含みだす
11．10YR4/2　灰黄褐色土　砂質土　粘質なし　しまり強い
2～3mm大の砂粒を少量含む



第61図　3C区SD2・SD3断面図

部と底部がより細く仕上げられている。口縁部に一部歪みがある。

第62図16は土師器甕で、4分の1以下の残存であるが外器面にハケメが施され、内器面には右下から左上にかけてヘラケズリ調整が見られる

第62図2、13は須恵器杯である。2の体部はやや内湾し口縁端部で細くなる。回転ナデが内外面に施されている。底部内面は回転ナデ痕で扁平している。底部は回転ヘラ切り離し後ナデが施されている。板状圧痕がある。13は体部は直線的でやや開き気味で、口縁端部がやや外反する。口縁部外面に自然釉が付着する。

第62図14は須恵器椀である。14は底部端に貼付高台が付き、断面形は三角形である。外面口縁部から体部にかけ自然釉が付着する。15は体部は直線的でやや開き気味である。底部端よりやや内側に低い四角形の高台が付く。第62図8は須恵器蓋で、天井部は回転ヘラ切り後にナデ調整が施される。天井径は大きく、平坦である。口縁部端の断面形は三角形を呈している。内器面は研磨が見られ転用硯の可能性がある。

ＳＤ３出土遺物

埋１～２層

第 62 図 17、18、20、24、26 は土師器杯である。17 は体部は内湾しつつ開いている。内外面は回転ナデ後回転ヘラミガキが施されている。内外面に赤彩が見られる。18､19､20 は内外面に回転ナデ調整が施される。また赤彩が見られる。24 は反転復元口径が約 15.2㎝、底径約 11.2㎝、器高約 3.0㎝を測る。体部は開き気味で口縁端部がやや外反する。内外面に赤彩が見られる。26 も 24 と同様に体部は開き気味であるが、一回り大きい。口縁端部の外反は 24 より小さい。

第 62 図 21、22、23、25 は須恵器杯で、土師質須恵器（赤焼け土器）と言える。21 の体部下部は丸みを持ち、口縁端部でやや外反する。内外面に回転ナデ調整が施され、底部外面に『×』と思われる線刻がある。22 の体部は立ちやや内湾する。体部下部はヘラケズリ後にナデ調整を施しているため丸みを持つ。23 の反転復元口径は約 14.4㎝、底径約 11.8㎝、器高約 3.6㎝を測る。体部は立ち気味である。内外面に回転ナデ調整が施される。25 はやや大きめの杯で、体部はやや内湾し下部に丸みを持つ。内外面の口縁から体部上位に油煙が付着する。

第 62 図 29、30、31 は須恵器椀で、29 は体部が直線的でやや開き気味である。底部端よりやや内側に低い四角の高台が付く。高台の中心と杯部の中心とのずれが見られる。また、口縁部に歪みが見られる。30 は雲母をやや多く含み緑灰色がかった色調である。高台は底部端に付き、低い四角の断面形態である。31 は体部は内湾し、下部から底部にかけてヘラケズリ痕が見られ、丸みを持つ。

第 62 図 27、28 は須恵器蓋である。27 は天井部に回転ヘラケズリ調整があり、つまみ接合後の回転ナデ調整が残る。口縁端部は三角形の断面形をしている。28 は天井は高く大きめの輪状つまみが付き、回転ヘラケズリ調整が残る。口縁端部は屈曲し三角形を呈している。

第 62 図 32 は須恵器高杯で、杯部の径は 22.2㎝で脚部径の細いところは 5.5㎝を測る。杯部の底部は丸みを持ち、ヘラケズリ調整が見られる。

埋３層

第 63 図 1 は土師器杯で、体部はやや開き、器高は 3.0㎝と低い。内外面にミガキが施され、口縁部には摩耗が見られる。

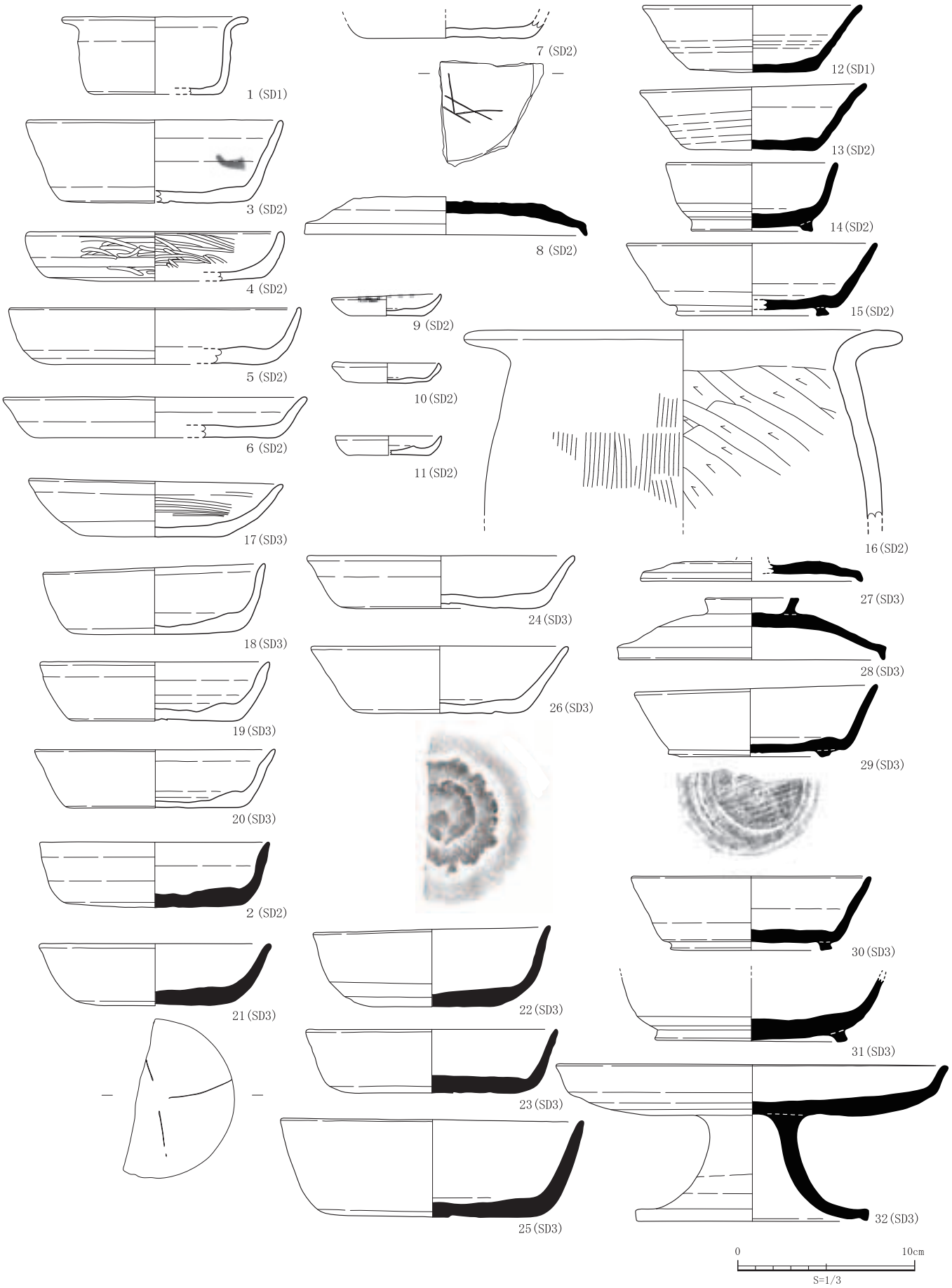
第 63 図 2 は須恵器杯で、体部は内湾し、下部から底部にかけてヘラケズリ痕が見られる。口縁部は欠損しているが、器高の低いものである。底部外面に『×』の線刻がある。

第 63 図 3 、 4 は須恵器椀である。3 の高台は底部端に付き、やや内湾する三角形の形状である。体部下部から自然釉が付く。「萩尾型」の椀である。4 の体部は下部で丸みを持ち、口縁端部はやや外反する。底部端に背の高い高台が付き、断面形は四角形を呈している。

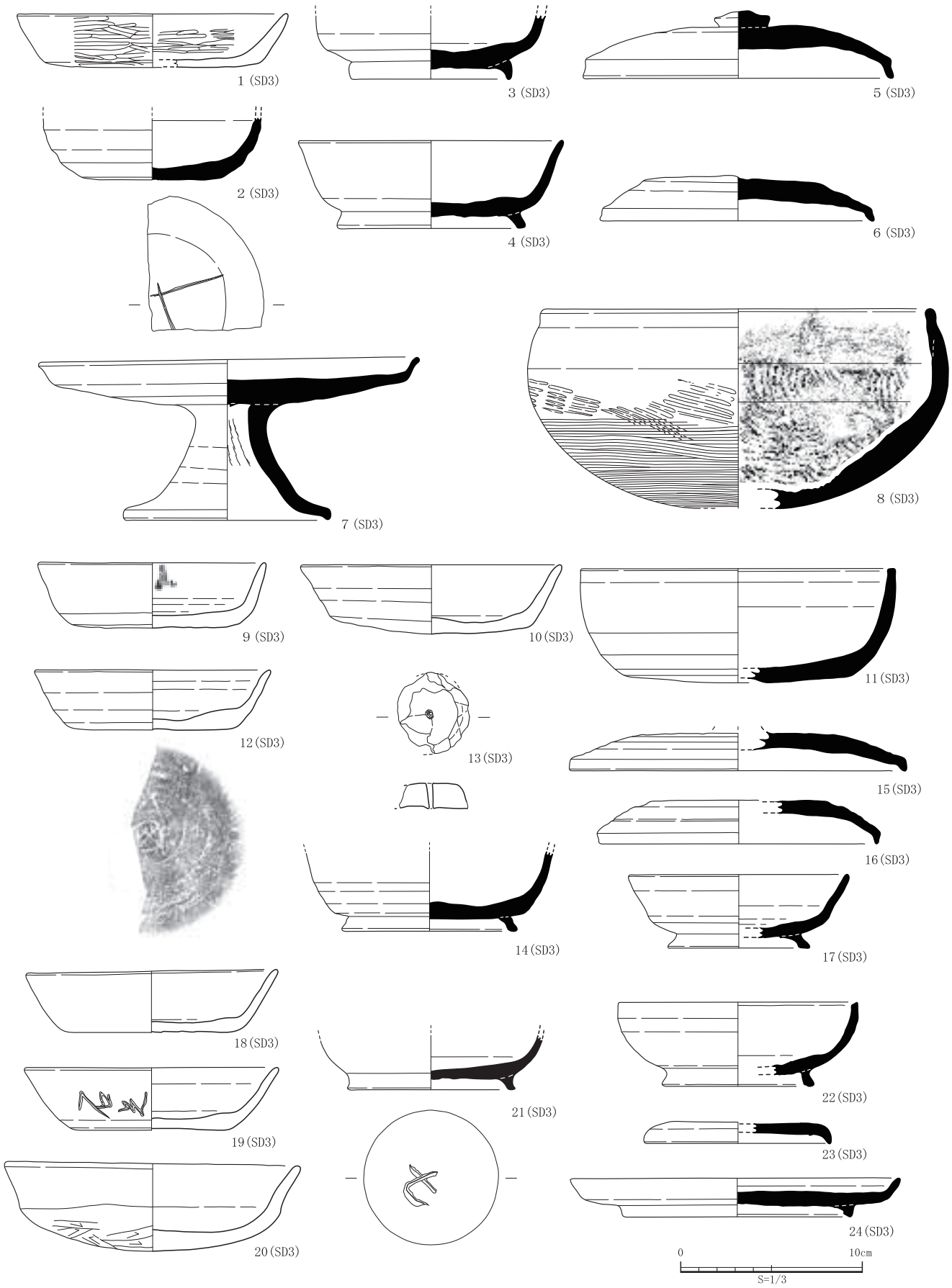
第 63 図 5 、 6 は須恵器蓋である。5 の天井は高く、天井径は小さい。口縁部はしっかり屈曲し先端は丸い。つまみは擬宝珠である。6 の天井は回転ヘラ切り後にナデ調整が施され、平坦である。口縁端部は屈曲し、断面形は三角形を呈する。内器面に研磨が見られ、転用硯の可能性がある。

第 63 図 7 は須恵器高杯で、杯部の径は 21㎝で脚部の細いところは 4㎝を測る。杯底部はヘラケズリ調整があり、体部は短く屈曲し口縁が外反する。脚部に絞り痕が見られる。

第 63 図 8 は須恵器鉢である。体部は厚く内湾し、底部にかけて丸くなっている。体部外面中位から底部にかけて、タタキ後のカキ目が見られ、内器面には当具痕が見られる。



第 62 図　３Ｃ区出土遺物実測図（４）



第 63 図　３Ｃ区出土遺物実測図（５）

埋３～４層

第 63 図９、10 は土師器杯で、９の体部は立ち、下部で丸みを持つ。内器面に一部油煙が付着し、体部外器面に一部赤彩残る。10 の体部は直線的でやや開き気味である。底部はヘラ切り後ナデ調整を施しているため平坦ではない。内外面に赤彩あり。

第 63 図 11 は須恵器鉢である。11 の体部は内湾し、下部は底部にかけて丸みを持つ。内外面に降灰が見られる。

埋４～５層

第 63 図 12 は土師器杯で、底面外部中央に刻書がある。

第 63 図 13 は土製の紡錘車で、最大径が 4.5㎝、厚みが 1.4㎝、重さが 23.6 ｇ、穿孔径は上部 0.4㎝、下部 0.2㎝を測る。

第 63 図 14 は須恵器椀である。体部は内湾し立ち上がる。高台は約 1㎝の長めの長方形が底部端よりやや内側に付き、外側に湾曲する。外器面に自然釉が付着する。

埋５～８層

第 63 図 15、16 は須恵器蓋である。15 は天井部の径が大きく平坦である。中心部につまみ接合の回転ナデ調整が残る。口縁端部は小さく屈曲し、断面形は三角形を呈する。16 は天井部の径が小さく平坦である。口縁端部は直角に屈曲し断面形は三角形を呈している。内器面に自然釉の付着がある。

第 63 図 17 は須恵器椀である。体部は直線的に伸び、下部から底部にかけてヘラケズリ調整が施される。高台は位置が中央に寄り、約 1㎝の長方形が外形に屈曲して付く。外面の一部は自然釉がかかっている。

ＳＤ３一括遺物

第 63 図 18、19、20 は土師器杯である。18 には一部ススが付着する。19 の体部は中位から下部にかけてやや丸みを持つ。体部内面に赤彩が施され、外面には『石足』と刻書がある。口縁部の歪みが著しい。20 は体部中位から底部にかけてヘラケズリ調整が見られ、丸みを持つ。体部中位から口縁部にかけヨコナデが施され、外反する。内外面に赤彩が見られる。

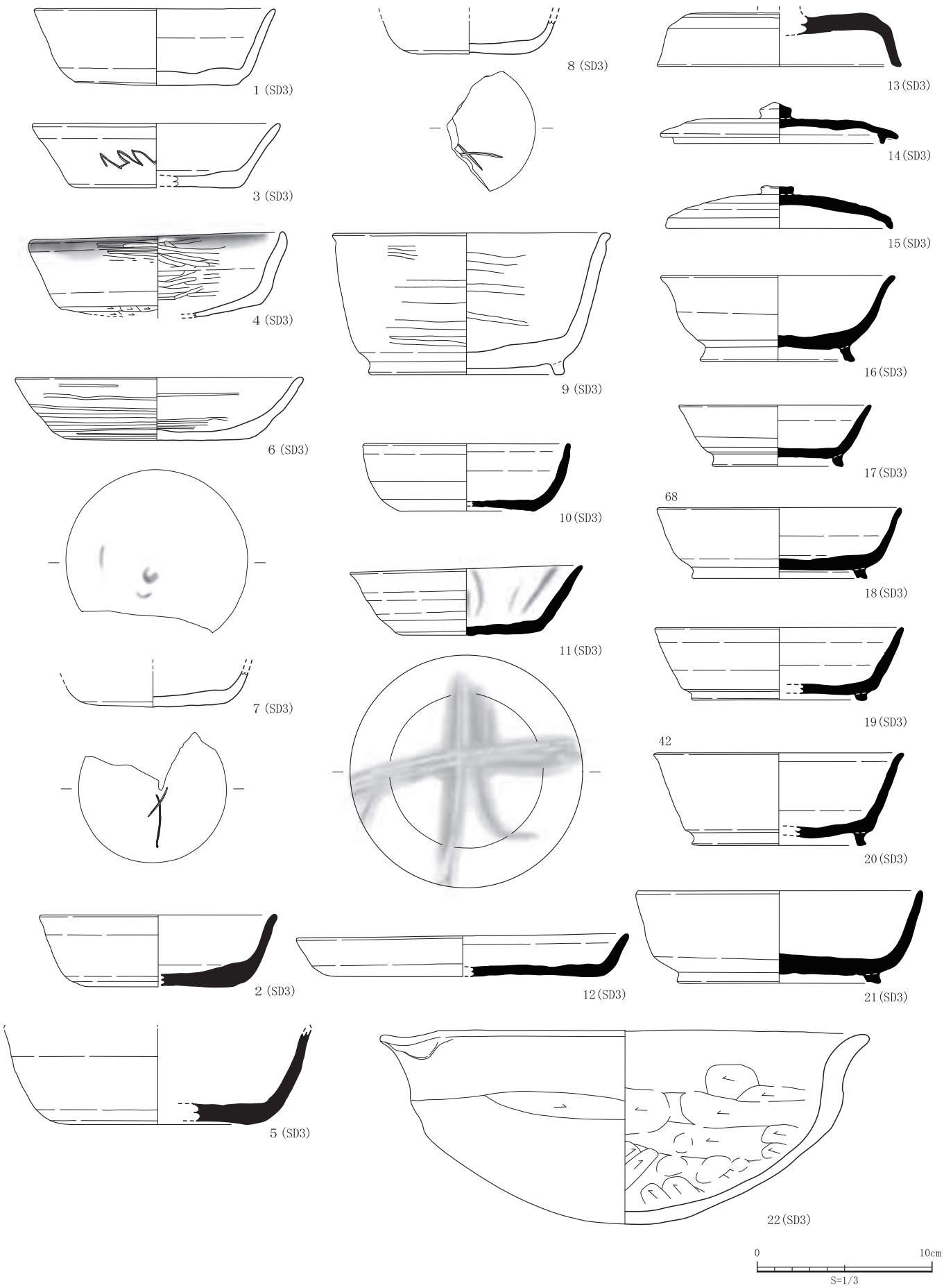
第 63 図 21、22 は須恵器椀である。21 の口縁部は欠損し、体部下部は丸みを持つ。高台は底部端に付き、断面形は三角形を呈する。外底面に『七』のヘラ書きがある。22 の体部は内湾し、下部から底部にかけ丸みを持つ。口縁端部は内器面をナデ調整で、角度を持たせて丁寧に仕上げている。高台は約 1㎝の長方形で底部端に付く。体部外面から高台部にかけて自然釉が付く。

第 63 図 23 は須恵器蓋である。天井部は平坦で、口縁部へ向かって丸みを持って屈曲する。内面に一部重ね焼きの痕跡が見られ、口縁付近と外部底面に自然釉の付着が見られる。

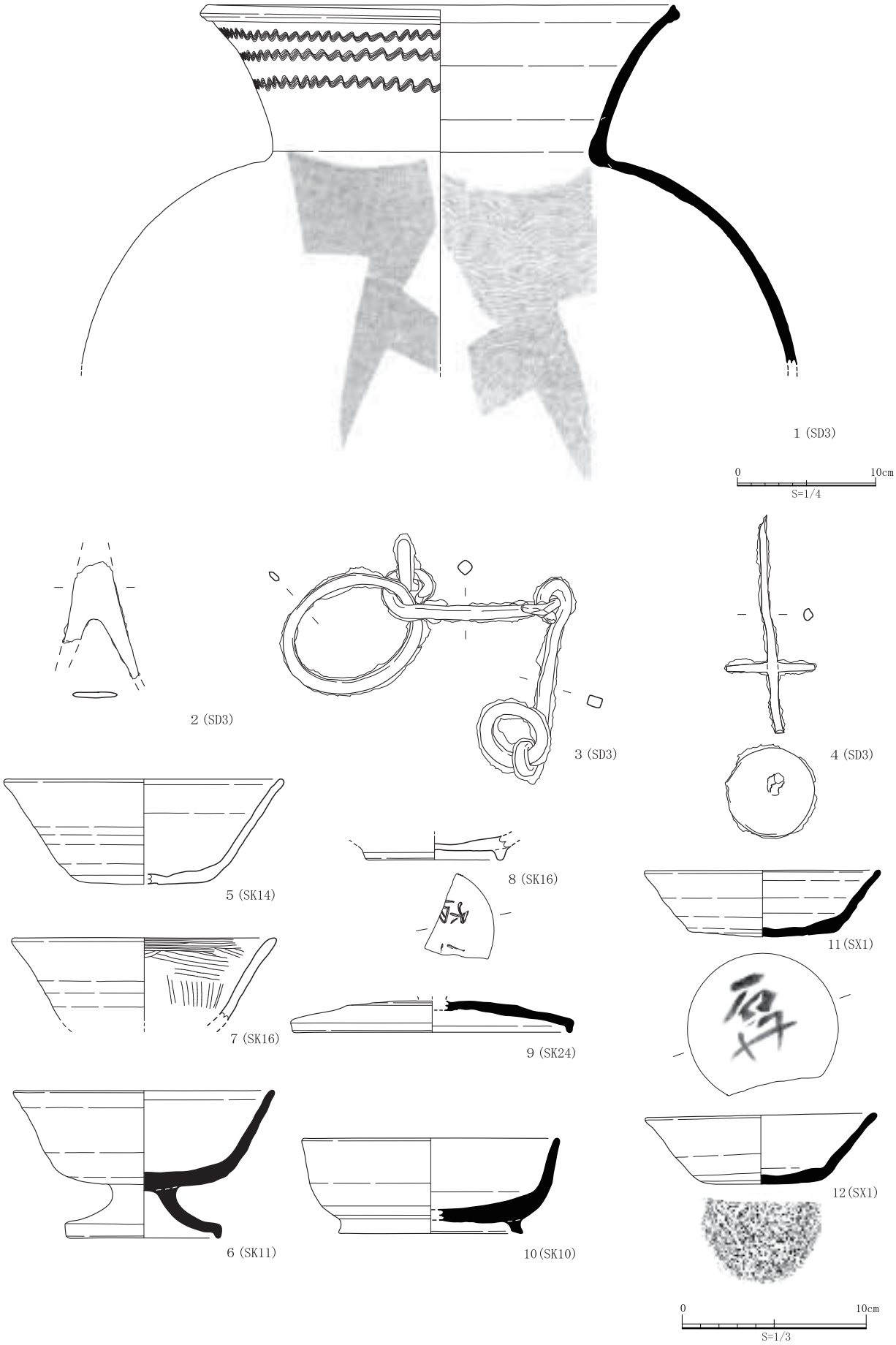
第 63 図 24 は須恵器高台付皿で、口縁が 18.2㎝、高台径 12.6㎝、器高 2.2㎝を測る。外面に自然釉が付着する。転用硯の可能性がある。

第 64 図１、３、４、６、７、８は土師器杯である。１の体部は直線的に伸び、やや立ち気味である。３の体部外面に 63 － 19 と類似する刻書が見られる。４の体部は中位でやや屈曲し、下部から底部にかけて手持ちヘラケズリにより丸みを持つ。内器面にミガキ調整が施される。口縁部の内外面に油煙が見られる。６の体部はやや開き気味である。内外面ともに回転ナデ後ヘラケズリ調整を施している。また、内外面に赤彩が見られる。７は底部のみの残存で、底部外面に刻書が見られる。８は底部のみの残存で、底部外面にヘラ書きが見られる。

第 64 図２、５、10、11 は須恵器杯である。２は土師質須恵器にあたる。体部は直線的に伸び、やや立ち



第 64 図　３Ｃ区出土遺物実測図（６）



第 65 図　３Ｃ区出土遺物実測図（７）

気味である。口縁端部ではやや外反する。５の体部はやや内湾し、体部下部でやや丸みを持つ。口縁端部が欠損しているが、やや外反する。10 の体部はやや内湾しながら立っている。体部下部から回転ヘラケズリが見られ、丸みを持っている。外面に自然釉がかかっている。11 の体部は直線的に伸び、底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施しているため、底部端がやや丸みを持つ。内外面にヒダスキ痕が見られる。

第 64 図９は土師器椀で、反転復元口径 15.9㎝、底径 11.2㎝、器高 8.1㎝を測る。体部は立っており、体部下部は丸みを持つ。口縁端部外面には沈線が入る。高台は底部端に付き、断面形は四角形を呈している。回転ナデ後にヘラミガキ調整が施されている。内外面に赤彩が見られる。

第 64 図 12 は須恵器皿で、口径 19.0㎝、底径 16.1㎝、器高 2.4㎝を測る。内器面に研磨が見られ、転用硯の可能性がある。

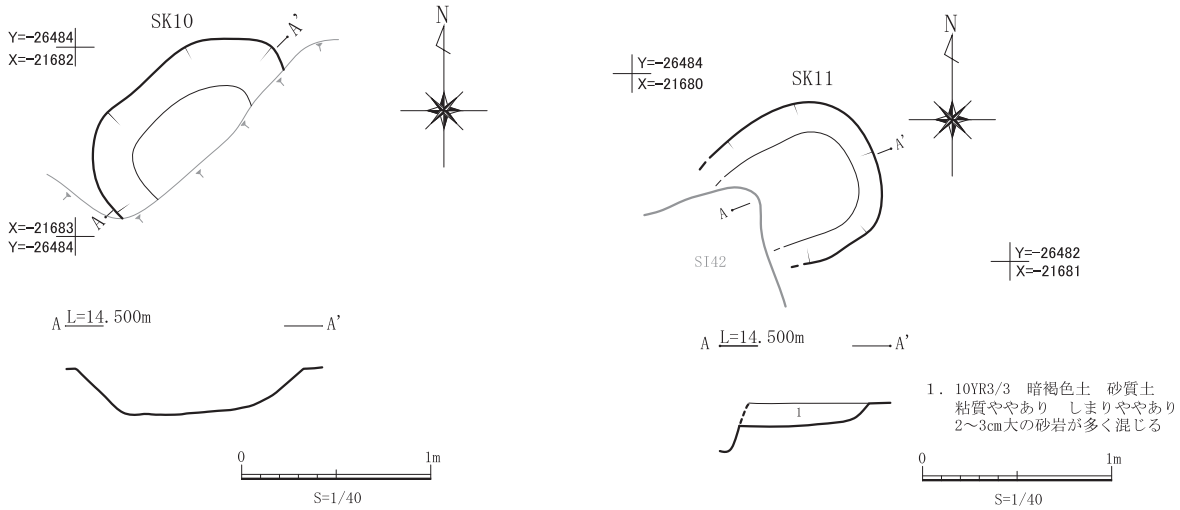
第 64 図 13 は須恵器壺蓋で、土師質須恵器である。天井中心部に回転ナデ調整が施され、つまみが接合されていたと思われる立ち上がりが一部残っている。

第 64 図 14、15 は須恵器蓋である。14 の天井部の径は大きく平坦である。しっかりした返しが付き、つまみは擬宝珠形である。15 の天井はやや高く、ボタン状のつまみが貼り付けられている。外面に自然釉が付着している。

第 64 図 16、17、18、19、20、21 は須恵器椀である。16 の体部は内湾し口縁部で外反する。約 1㎝の長方形の高台が低部端に付く。外面に赤褐色を呈する自然釉がかかる。17 は口径 11.0㎝、底径 7.5㎝、器高 3.5㎝を測る。底部に三角形の貼付高台が付く。全体的に浅黄橙色である。18 は口径 13.9㎝、底径 10.0㎝、器高 4.1㎝を測る。全体的が暗灰色で体部から底部にかけて黒褐色の自然釉がかかる。19 の体部は直線的に伸び底部端に低い四角形の高台が付くが、ナデ調整が粗いため、中心から歪みが見られる。20 の体部は直線的に伸び口縁端部で外反する。底部端に貼付高台が付くが、円形ではなく歪みが見られる。21 の反転復元口径は 16.4㎝、高台径 11.6㎝、器高 5.3㎝を測る。底部の厚みもあり、しっかりとした造りである。体部から底部にかけて自然釉の付着が見られる。

第 64 図 22 は土師器鉢で、ほぼ完形に近い残存である。内外面とも回転ナデ調整が見られるが、、体部外面中位に粗雑なケズリ調整が見られる。また、内器面には指ナデ痕が残る。体部中位から口縁にかけ外反し、厚みもある。

第 65 図２は鉄器で、鉄鏃と考えられる。先端が欠損しているため全長は分からない。



第 66 図　３Ｃ区 SK10（左）・SK11（右）平面・断面図

第65図３はＳＤ３から出土した馬具で、轡部分であると考えられる。右鏡板を欠損していたが、左鏡板と喰部と引手部が残存していた。鏡板は最大幅約5.2㎝で円環状になっている。喰部は約7㎝の２連で、大小の環を作り出し、大環は鏡板と引手に小環は片方の喰部に連結している。

第65図４は鉄製品で、紡錘車であると考えられる。中位に径3.2㎝を測る錘部の板状のものがある。上部には軸がつながり最大径は0.4㎝を測る。軸は少し歪みが見られる。錘部の下位端部は欠損している。重量はは15.4ｇである。

土坑

３Ｃ区ＳＫ10（第66図）

ＳＩ12、ＳＩ15の完掘後に検出した。24xァ・グリッドに位置する。ＳＩ26の掘方面を壊す。この遺構の３分の１を撹乱によって壊される。平面形は楕円形を呈する。測定可能な法量は、長軸約1.2ｍ、短軸約0.5ｍを測る。検出面からの深さは約24㎝を測る。主軸はＮ－47°―Ｅである。

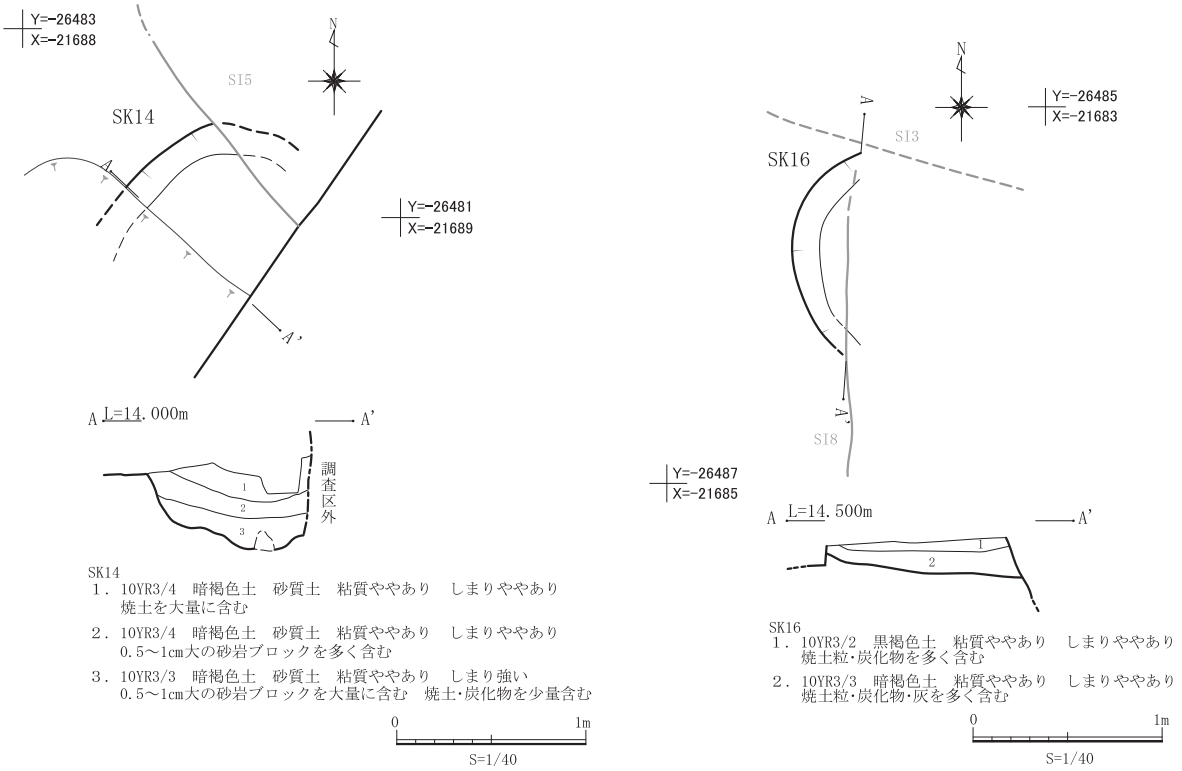
この土坑から須恵器椀（第65図10）が出土した。反転復元口縁が14.0㎝、底径10.0㎝、器高5.2㎝を測る。体部中位から底部にかけ丸みを持ち、口縁にかけ細くなっている。回転ヘラ切り後に底部端に四角形の高台が付く。その後回転ナデ調整を施している。

３Ｃ区ＳＫ11（第66図）

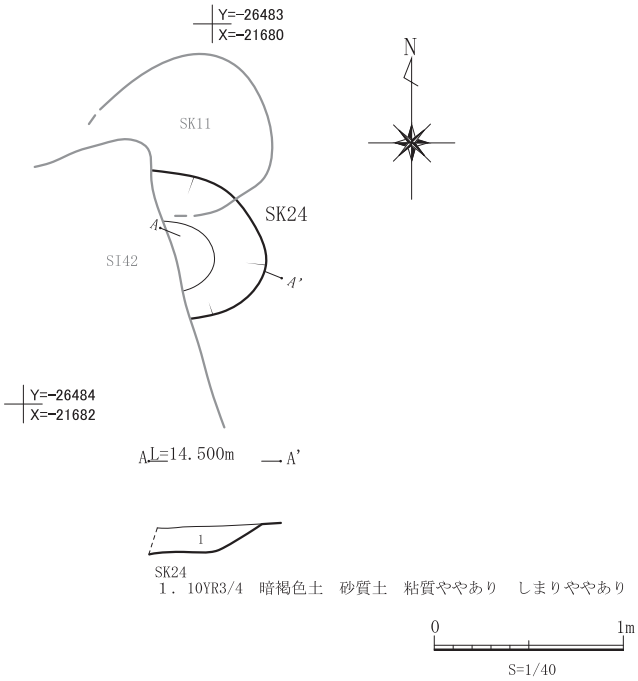
ＳＩ12、ＳＩ50の完掘後に検出した。24xェ・グリッドに位置する。ＳＩ26の掘方に壊される。ＳＩ26の検出面と同一検出面である。残存が少ないため平面形は分からない。測定可能な南北軸は80㎝、東西軸は66㎝を測る。

埋土は単層で２～3㎝大の砂岩を多く含む。主軸はＮ－21°―Ｗである。

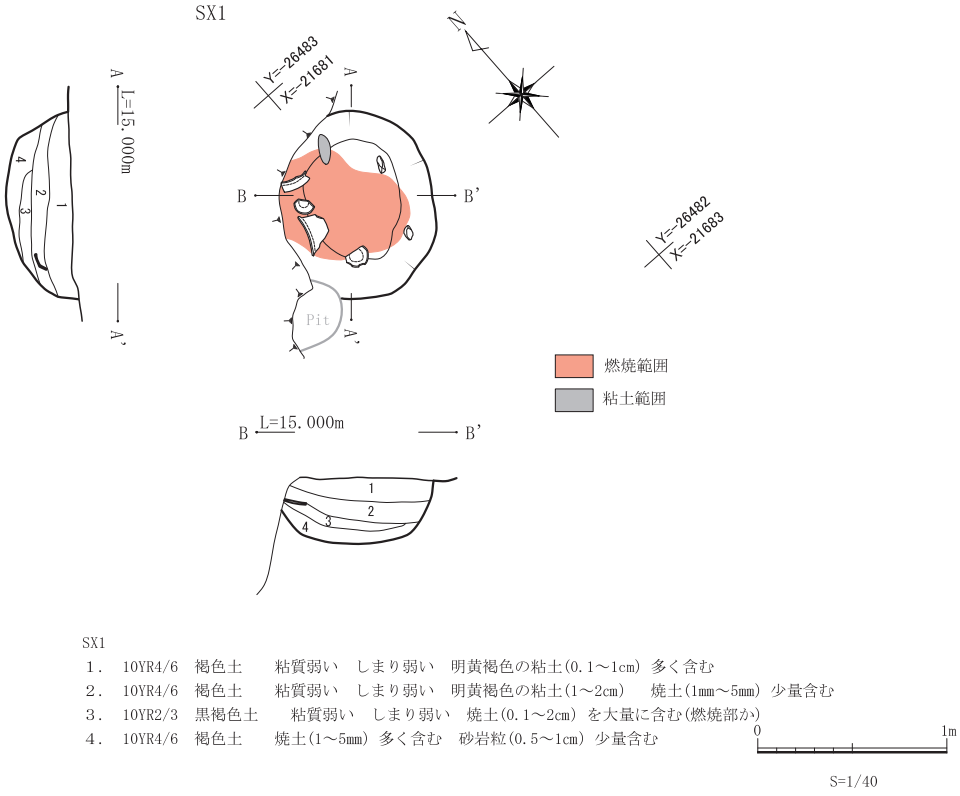
この土坑から須恵器高杯（第65図６）が出土した。杯底部が丸みを持ち、やや大型である。杯部と脚部の比率は５：３であり、脚部は下方への突出を持っている。外器面に赤彩が施され、この遺構内でも時代が遡る。



第67図　３Ｃ区SK14（左）・SK16（右）平面・断面図



第 68 図　３Ｃ区 SK24 平面・断面図



第 69 図　３Ｃ区 SX1 平面・断面図

３Ｃ区ＳＫ 14（第 67 図）

３層上面で検出した。24x ィ・グリッドに位置する。南側を撹乱に壊され、北側をＳＩ５に壊される。残存が少ないため平面形は分からない。東側は調査区外にあたるため、測定可能な軸は 80㎝を測る。主軸はＮ－52°―Ｗである。

この土地から土師器杯（第 65 図５）が出土した。体部はやや開き気味に立ち上がり、底部近くで丸みを持つ。口縁部はやや外反する。底部は回転ヘラ切りで、全体的にナデ調整を施している。内外器面に赤彩が見られる。

３Ｃ区ＳＫ 16（第 67 図）

近現代の撹乱下層から検出した。24x ェ・グリッドに位置する。ＳＩ 39 と同一検出面で検出した土坑である。大半が壊されているため形状は分からない。測定可能な軸は 108㎝を測る。

埋土は２層に分層でき、焼土粒や炭化物を多く含む。隣接するＳＩ 39 のかまど埋土の流れ込みの可能性もある。この土地から土師器椀（第 65 図７）（第 65 図８）が出土した。65 － 7 の残存率は 4 分の 1 しかなかったが、黒色土器Ａに分類でき、反転復元口径は 14.4㎝である。内器面はタテミガキ後ヨコミガキを施している。65 － 8 の残存部は底部の 4 分の 3 程度で、高台内側底部に『盃□』とヘラ書きが見られる。

３Ｃ区ＳＫ 24（第 68 図）

ＳＩ 26 の完掘後に検出した。24x ェ・グリッドに位置する。ＳＩ 42 に壊される。平面プランは分からないが、測定可能な南北軸は 76㎝、東西軸は 50㎝を測る。方向軸はほぼ真北である。この土地から須恵器蓋（第 65 図９）が出土した。天井部に回転ヘラケズリがあり、口縁部端の断面形は三角形を呈する。内外面に降灰が見られる。

不明遺構

３Ｃ区ＳＸ１（第 69 図）

３層上面で検出した。24x ィ・グリッドに位置する。近現代の撹乱除去時に断面で遺構を確認した。平面プランは、ほぼ楕円で、長軸 92㎝、短軸 80㎝を測る。検出面からの深さは約 34㎝を測る。検出時から表面に明黄褐色の粘土粒が広がっており、かまど跡として建物プランを探したが確認できなかった。

埋土は 4 層に分層できた。埋３層は焼土が広がり燃焼部を確認できた。かまどに伴うそで部分が見当たらず、粘土も少量検出できたに過ぎない。焼土坑の可能性もあるので不明遺構としている。

この遺構の埋２層から須恵器杯（第 65 図 11）（第 65 図 12）が出土した。65 － 11 の体部は直線的であるが、ナデが強く多少の歪みが見られる。底部は回転ヘラ切り後に『石□』の墨書が見られる。65 － 12 は 65 － 11 より一回り小さい杯で、体部下部にヘラ切り時のヘラ挿入による回転ヘラケズリ調整が見られる。口縁部はやや外反する。底部外面に平行線状痕が見られる。

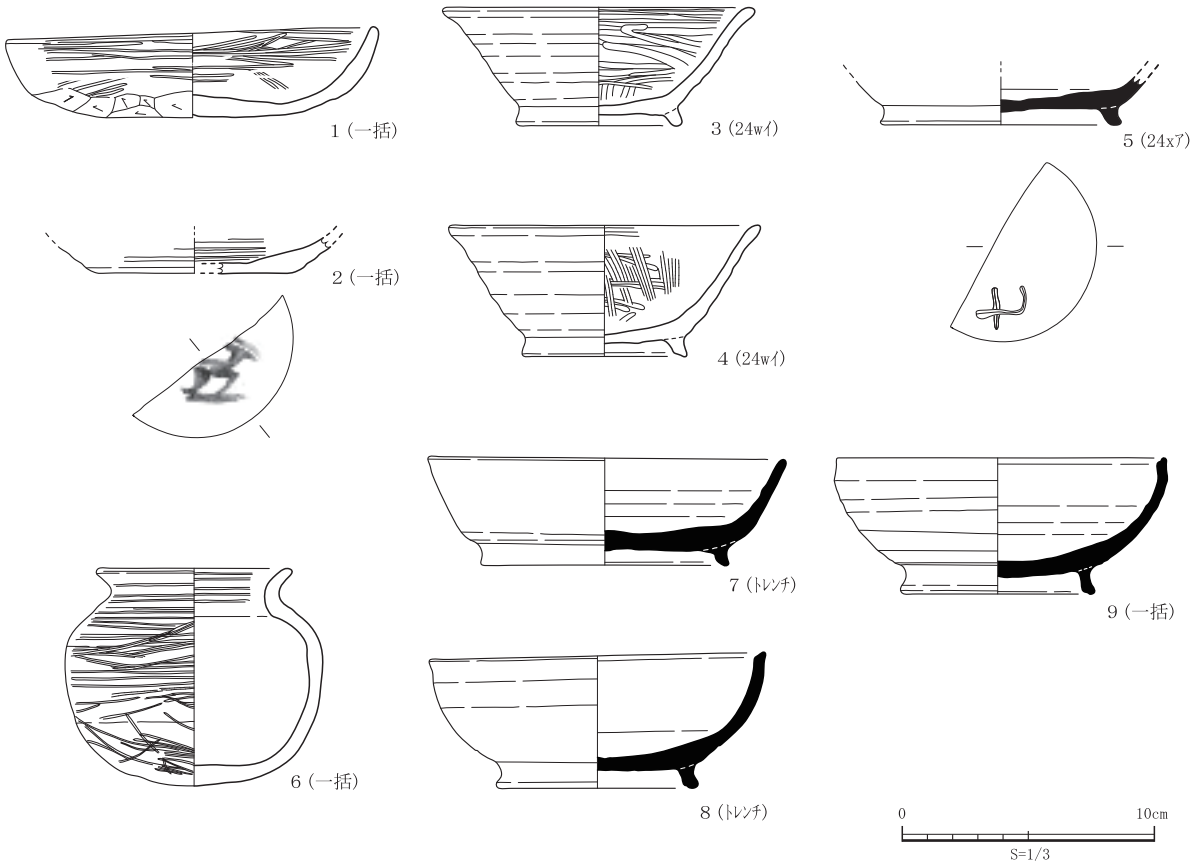
包含層出土遺物

第 70 図１、２は土師器杯である。１は体部は内湾し口縁に向かう。底部から体部下半にかけてヘラケズリ痕が見られ、体部内外面はヘラミガキ調整される。２は外底面に墨書が残るが内容は判別できない。内外面をヘラミガキ調整され、体部内外面、内底面に赤彩を施される。

第 70 図３、４は土師器椀である。３、４は２層 24w ィ・グリッドから出土した黒色土器Ａで、内面はヘラミガキ調整が施される。体部は開き気味で口縁部でやや外反する。高台は底部端に付く。高台形は、３は方形でやや丸みを持ち、４は台形で高台外端はやや角張る。

第 70 図５、７、８、９は須恵器椀である。５は２層 24x ァ・グリッドから出土した土師質須恵器で、外底

面に『七』とヘラ書きがある。７、８はSD ２、SD ３のトレンチであるが、どちらの遺構の遺物かわからなかったため包含層出土遺物とした。７は体部が直線的に口縁部に伸びる。高台は底部端に付き高台端内面が削られ、接地は線状である。外面に広い範囲で光沢のある黒色の自然釉が付く。また、斑上に灰オリーブ色の粗い付着物が見られる。８は底部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部でやや外反する。高台はやや外に開く。高台の下面内側が若干凹む。色調は灰褐色～明褐色である。９は８と色調、プロポーションが似ているが、８に比べ口縁部で内湾が強くなる。また、高台は細いが８と同様に下面内側が若干凹む。



第70図　３Ｃ区出土遺物実測図（８）

遺物観察表

第３表　出土遺物観察表

出土遺物観察表①

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（ｃｍ）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 23 図	1	土師器	杯	3A 区	SI2		No. 5	(12. 4)	(8. 8)	2. 8	1/3	良好	回転ナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面：赤彩	図 7
第 23 図	2	土師器	杯	3A 区	SI2 かまど			13. 6	8. 8	2. 7	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰褐 5YR5/2 黒 5YR1. 7/1	褐灰 10YR6/1 にぶい赤褐 5YR5/4 黒 5YR1. 7/1	内外面：スス付着	図 7
第 23 図	3	土師器	杯	3A 区	SI12		No. 1	(14. 6)	8. 7	3. 3	2/3	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6 黒褐 2. 5Y3/1	内面：黒斑あり	図 7
第 23 図	4	須恵器	杯	3A 区	SI16		No. 3	(12. 6)	10. 0	3. 5	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7. 5YR7/6	橙 7. 5YR7/6	—	図 7
第 23 図	5	土師器	杯	3A 区	SI11		No. 1 No. 3	14. 4	10. 8	3. 6	1/2	良好	ヨコナデ後 ヘラミガキ	ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ後 ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	橙 7. 5YR6/6 褐灰 7. 5YR4/1	橙 7. 5YR6/6	内外面：ヘラミガキは磨滅していてよくわからない	図 7
第 23 図	6	土師器	杯	3A 区	SI1 SP2 ～ 8			13. 4	(9. 2)	4. 2	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 2. 5YR6/6 橙 5YR6/6	明赤褐 2. 5YR5/6 にぶい橙 7. 5YR6/4	内外面：赤彩	図 7
第 23 図	7	須恵器	杯	3A 区	SI6			(14. 0)	(10. 3)	5. 4	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	—	図 7
第 23 図	8	須恵器	杯	3A 区	SI32			—	9. 0	(3. 1)	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7. 5YR6/6	橙 7. 5YR6/6	外面：赤彩	図 7
第 23 図	9	土師器	杯	3A 区	SI18	埋土一括		—	8. 0	2. 4	1/4 以下	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り 回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	にぶい橙 7. 5YR7/4 橙 5YR6/6	にぶい橙 7. 5YR7/4 橙 5YR6/6	内外面：赤彩	図 7
第 23 図	10	土師器	椀	3A 区	SI26	埋土一括		12. 3	7. 2	5. 1	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	明赤褐 2. 5YR5/6 にぶい橙 5YR6/4	橙 2. 5YR6/6	内外面：赤彩 貼付高台	図 7
第 23 図	11	土師器	椀	3A 区	SI11		No. 3	—	(12. 0)	(5. 0)	1/4 以下	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	—	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	—	橙 2. 5YR6/8	橙 2. 5YR6/8	内外面：赤彩 貼付高台	図 7
第 23 図	12	土師器	杯	3A 区	SI2	一括		(13. 2)	(8. 2)	2. 6	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	にぶい橙 10YR7/3 赤彩：橙 2. 5YR6/6	にぶい橙 10YR7/3 赤彩：橙 2. 5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：板状圧痕、墨書あり『男』か	図 7
第 23 図	13	土師器	杯	3A 区	SI7			(13. 7)	—	(4. 1)	1/4 以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	にぶい橙 7. 5YR7/4 橙 5YR7/6	にぶい橙 7. 5YR6/4	外面：ヘラ書きあり『七』の横向きか 焼成前に記銘	図 7
第 23 図	14	土師器	杯	3A 区	SI2			—	—	(0. 7)	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 未調整	—	回転ナデ後ナデ	にぶい橙 7. 5YR6/4 赤彩：明赤褐 2. 5YR5/6	にぶい橙 7. 5YR6/4 赤彩：明赤褐 2. 5YR5/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり『榎』か	図 8
第 23 図	15	土師器	椀	3A 区	SI5		No. 10	(11. 6)	(13. 0)	(2. 1)	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7. 5YR6/6	にぶい橙 7. 5YR6/4	外底面：ヘラ書きあり 貼付高台	図 8
第 23 図	16	須恵器	杯	3A 区	SI1			(1. 8)	(6. 8)	2. 8	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	灰オリーブ 5Y5/2	黄灰 2. 5Y5/1	—	図 8
第 23 図	17	須恵器	杯	3A 区	SI1		No. 7	(12. 6)	(7. 6)	2. 5	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y4/1	灰 N4/0	砂の混じりがある	図 8
第 23 図	18	須恵器	杯	3A 区	SI21		No. 1 No. 2	(13. 2)	9. 0	3. 3	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 2. 5Y7/1	灰白 2. 5Y7/1 にぶい黄 2. 5Y6/4	—	図 8
第 23 図	19	須恵器	椀	3A 区	SI21			(13. 4)	6. 8	4. 8	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰 2. 5Y6/1 黒褐 2. 5Y3/1	黄灰 2. 5Y6/1	外面：自然釉付着 粘土痕あり貼付高台	図 8

出土遺物観察表②

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第23図	20	須恵器	椀	3A区	SI2	一括		12.7	7.6	5.3	2/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	全体的に歪みあり 高台部分に工具痕数カ所あり 外底面：墨書あり磨滅していてよくわからない 貼付高台	巻頭図8
第23図	21	須恵器	椀	3A区	SI23	一括		(13.6)	8.0	4.4	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y6/1 オリーブ黒 5Y3/1	灰 5Y6/1	貼付高台	図8
第23図	22	須恵器	蓋	3A区	SI16		No.2	15.5	—	2.8	1/3	良好	回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	外面：粘土痕あり つまみ貼付	図8
第23図	23	須恵器	蓋	3A区	SI2		No.1 No.5	(17.3)	—	2.8	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	—	回転ナデ	—	灰黄 2.5Y7/2 黄灰 2.5Y5/1	灰白 2.5Y7/1 黄灰 2.5Y5/1	内外面：重ね焼きの痕あり つまみ貼付	図8
第23図	24	須恵器	蓋	3A区	SI21	一括		(17.0)	—	4.3	1/2	良好	回転ナデ ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰白 2.5Y8/1 灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y8/1 灰白 2.5Y7/1	転用硯の可能性あり つまみ貼付	図8
第23図	25	須恵器	蓋	3A区	SI5		No.11 No.12 No.13	(19.0)	—	3.4	2/3	良好	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	—	回転ナデ	—	明橙 7.5YR5/6 にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	内外面：スス付着	図8
第23図	26	須恵器	蓋	3A区	SI6			(13.6)	—	2.2	1/3	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR5/1	外面：自然釉付着	図8
第23図	27	須恵器	蓋	3A区	SI21			(13.0)	—	1.9	1/4	良好	ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰 5Y5/1 灰オリーブ 5Y4/2	灰 5Y5/1	—	図8
第23図	28	須恵器	蓋	3A区	SI11			(14.0)	—	1.1	1/2	良好	ヘラ切り後 不定方向のナデ 回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰 10YR5/1	灰 10YR5/1	—	図8
第23図	29	須恵器	蓋	3A区	SI17	一括		(13.4)	—	0.8	1/3	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰 N5/0	灰 N5/0	蓋の中心部分がかなり歪んでいる	図8
第24図	1	土師器	甕	3A区	SI5		No.16	(15.8)	—	(5.1)	1/4 以下	良好	回転ナデ ハケメ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	橙 5YR6/6 黒褐 5YR2/1	にぶい褐 7.5YR5/4 黒褐 7.5YR3/1	内外面：スス付着	図8
第24図	2	土師器	甕	3A区	SI2		No.6	(17.4)	—	(12.2)	1/4 以下	良好	ヨコナデ後 ハケメ	—	ヨコナデ、ナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内面：指頭圧痕、粘土痕あり	図9
第24図	3	土師器	甕	3A区	SI5		No.10	(24.6)	最大胴径 (24.9)	(13.6)	1/4	良好	ヨコナデ指頭圧痕 ヨコナデ後ミガキ	—	ヨコナデ ヨコナデ後ナデ ケズリ後ナデ 工具痕	—	明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/6	内外面：口縁部にスス付着 外面：黒斑あり	図9
第24図	4	須恵器	蓋	3A区	SI3		No.5	16.0	—	1.5	1/3	良好	回転ナデ ヘラケズリ	—	ナデ	—	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	内外面：ヒダスキあり	図9
第24図	5	須恵器	小鉢	3A区	SI5		No.15	—	4.4	(3.2)	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	—	図9
第24図	6	土師器	鉢	3A区	SI2		No.10	(27.4)	—	(5.8)	1/4 以下	良好	ヨコナデ ハケメ後ナデ ハケメ	—	ヨコナデ、ハケメ ヘラケズリ	—	黒褐 7.5YR3/1 赤黒 10R2/1	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面：スス付着	図9
第24図	7	土師器	鉢	3A区	SI23	一括		(29.0)	—	(8.4)	1/4 以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面：赤彩	図9
第24図	8	土師器	鉢	3A区	SI23	一括		(30.8)	—	(8.9)	1/4 以下	良好	回転ナデ ハケメ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	明赤褐 5YR5/6 橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4 橙 7.5YR6/8	内外面：スス付着 内面：指頭圧痕あり	図9

出土遺物観察表③

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（ｃｍ）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 28 図	1	土師器	杯	3A 区	SD2	1 層		(13.0)	(7.5)	2.6	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	内外面：赤彩	図 9
第 28 図	2	土師器	杯	3A 区	SD2	2 層		(13.0)	(9.7)	3.3	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	—	図 9
第 28 図	3	須恵器	杯	3A 区	SK7	埋土一括		(11.0)	7.3	4.0	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	外底面：粘土痕あり	図 9
第 28 図	4	土師器	杯	3A 区	SD2	2 層一括		—	(8.4)	(1.1)	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	外底面：墨書あり『榎』か	図 9
第 28 図	5	土師器	杯	3A 区	SD2	1 層		—	(7.5)	(2.2)	1/4	良好	回転ナデ	切り離し不明後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 7.5YR6/6 赤彩：明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6 赤彩：明赤褐 5YR5/6	外底面：板状圧痕、墨書あり 2 文字か 1 文字目は「きへん」か 内外面：赤彩	図 9
第 28 図	6	土師器	杯	3A 区	23zイ	一括		—	(7.6)	(2.3)	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	橙 5YR6/6 にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6	外底面：墨書あり 「きへん」の文字か	図 9
第 28 図	7	土師器	杯	3A 区	23zア	2 層		(12.0)	6.8	3.3	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	浅黄橙 10YR8/4 赤彩：橙 5YR6/6	浅黄橙 10YR8/4 赤彩：橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：板状圧痕、墨書あり 2 文字か	図 10
第 28 図	8	土師器	杯	3A 区	24zエ			—	—	(1.0)	1/4 以下	良好	—	回転ヘラ切り後ナデ	—	回転ナデ	橙 7.5YR6/6 赤彩：明赤褐 2.5YR5/6	橙 7.5YR6/6 赤彩：明赤褐 2.5YR5/6	外底面：墨書あり『東』 内外面：赤彩あり 外底面：墨書部分は赤彩なし	図 9
第 28 図	9	須恵器	杯	3A 区	24zア	2 層		—	(6.8)	(1.4)	1/4 以下	やや良	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	外底面：墨書あり２文字か 1 文字目は「きへん」の文字か	図 10
第 28 図	10	土師器	杯	3A 区	26xア	2 層		12.4	8.4	3.1	完形	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 2.5Y8/2 橙 5YR6/6	灰白 2.5Y8/2 橙 5YR6/6	内外面：赤彩あり 外底面：墨書あり磨滅していてよくわからない	図 10
第 28 図	11	須恵器	杯	3A 区	SK5			(13.4)	(7.6)	2.9	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	—	図 10
第 28 図	12	須恵器	杯	3A 区	24zイ	2 層		(14.4)	(9.9)	3.5	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内底面：ヘラ書き『榎』あり 焼成前に記銘	図 10
第 28 図	13	土師器	椀	3A 区	SD2	1 層		(12.4)	(7.4)	5.1	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 工具による調整	回転ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/4 橙 5YR6/8	浅黄橙 10YR8/4 橙 5YR6/8	内外面：赤彩 外底面：板状圧痕 貼付高台	図 10
第 28 図	14	土師器	椀	3A 区	SK8		No.1	(11.6)	6.8	5.2	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後 ヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR6/4 明褐 7.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4	外底面：板状圧痕あり 口縁：スス付着 貼付高台	図 10
第 28 図	15	土師器	椀	3A 区	SK8		No.2	(13.2)	7.0	5.2	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後 ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR6/6	底部：板状圧痕あり 高台部分に工具痕あり 貼付高台	図 10
第 28 図	16	土師器	椀	3A 区	SD2	1 層		12.0	6.8	4.8	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/3 橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3 橙 2.5YR6/6	内外面：赤彩 貼付高台	図 10
第 28 図	17	土師器	椀	3A 区	26xア	2 層		(14.4)	7.4	6.5	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ後 ヘラミガキ	回転ナデ後 ヘラミガキ	橙 7.5YR6/6	黒 N2/0	黒色土器 A 貼付高台	図 10
第 28 図	18	土師器	椀	3A 区	SK8			—	6.2	(1.9)	1/4 以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	貼付高台	図 10
第 28 図	19	土師器	椀	3A 区	22Aウ	1 層		—	(6.8)	(3.2)	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 赤彩：橙 2.5YR6/8	にぶい黄橙 10YR7/3 赤彩：橙 2.5YR6/8	外底面：墨書あり『榎本』か 内外面：赤彩	図 10

出土遺物観察表④

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げ№	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第29図	1	土師器	杯	3A区	SP121			(13.0)	(7.1)	2.4	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面：赤彩	図10
第29図	2	土師器	杯	3A区	SP82			(10.8)	6.4	4.9	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい赤褐 2.5YR5/4 明赤褐 2.5YR5/6	橙 2.5YR6/6 明赤褐 2.5YR5/6	—	図10
第29図	3	土師器	杯	3A区	SP211			11.6	6.2	4.7	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	外面：工具痕あり	図11
第29図	4	土師器	杯	3A区	SP169			—	(10.7)	(1.3)	1/4以下	良好	—	回転ヘラ切り後 ナデ	—	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内底面：刻書あり『十』 焼成前に記銘	図11
第29図	5	土師器	杯	3A区	SP121			(13.8)	(8.8)	3.5	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 赤彩：橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4 赤彩：橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり『榎本』か 内底面：線刻あり	図11
第29図	6	土師器	杯	3A区	ｶｸﾗﾝ			—	(7.6)	(2.0)	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4 橙 2.5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり磨滅していてよくわからない	図11
第29図	7	土師器	杯	3A区	ｶｸﾗﾝ			—	—	(1.0)	1/4以下	良好	—	回転ヘラ切り後 ナデ	—	回転ナデ	明黄褐 10YR6/6 赤彩：明赤褐 5YR5/6	明黄褐 10YR7/6 赤彩：明赤褐 5YR5/6	外底面：墨書あり 「きへん」の文字か 内外面：赤彩	図11
第29図	8	土師器	椀	3A区	SP12			(12.2)	7.0	5.9	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい褐 7.5YR6/3 橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	貼付高台	図11
第29図	9	土師器	椀	3A区	SP66			(12.0)	(6.8)	5.6	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	貼付高台	図11
第29図	10	土師器	椀	3A区	SP21			12.2	6.1	5.1	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ後 ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	橙 7.5YR6/6	黒 10YR2/1	黒色土器A 外面：粘土痕あり 貼付高台	図11
第29図	11	土師器	高台付皿	3A区	SP135			13.4	7.6	3.5	ほぼ完形	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	明赤褐 2.5YR5/6 にぶい橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR7/6	明赤褐 2.5YR5/6 にぶい橙 7.5YR7/4	内外面：赤彩 底部：爪跡痕あり 貼付高台	図11
第29図	12	土師器	高台付皿	3A区	SP116			12.4	6.8	3.0	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 2.5YR6/8 にぶい橙 7.5YR6/4	橙 2.5YR6/8	内外面：赤彩 貼付高台	図11
第29図	13	土師器	椀	3A区	SP43			(14.2)	6.8	3.5	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後回転 ナデ	回転ナデ ヘラミガキ	回転ナデ ヘラミガキ	橙 7.5YR6/6	黒 N1.5/0	黒色土器A 貼付高台	図11
第29図	14	土師器	高台付皿	3A区	SP122			(18.0)	(10.5)	4.6	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	内外面：赤彩 貼付高台	図11
第29図	15	土師器	蓋	3A区	22Aｱ			(16.7)	つまみ径 2.4	2.9	1/4	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り後 ナデ	—	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	—	橙 7.5YR7/6 赤彩：橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6 赤彩：橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外面：天井部に墨書あり 『榎本』か	図11
第29図	16	須恵器	蓋	3A区	SP124			(14.2)	—	(1.8)	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	黄灰 2.5Y6/1 灰 N4/0	灰オリーブ 5Y5/3 灰 N4/0	つまみ貼付痕あり	図11
第29図	17	須恵器	杯	3A区	SP50			(9.0)	(5.4)	3.0	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	ヘラ切り後回転 ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	—	図12
第29図	18	須恵器	杯	3A区	SP104			12.1	7.5	3.9	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	かなり湾曲している	図12

出土遺物観察表⑤

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第29図	19	須恵器	皿	3A区	SP194			13.4	10.6	2.4	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	暗灰黄 2.5Y5/2	灰オリ―ブ 7.5Y5/2	転用硯の可能性あり 外底面：粘土痕、工具痕あり	図12
第29図	20	須恵器	高杯	3A区	23zウ	2層		(12.8)	(9.8)	8.0	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰 5Y6/1	灰白 5Y7/2	—	図12
第29図	21	須恵器	壺	3A区	24zア	2層		—	—	(4.7)	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	内面：絞り痕あり	図12
第29図	22	土師器	甕	3A区	SP115			(20.0)	—	(8.6)	1/4以下	良好	回転ナデ後ハケメ	—	回転ナデ後 ヘラケズリ	—	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面：スス付着 内面：粘土痕あり	図12
第29図	23	土師器	鉢	3A区	SP42			(28.0)	—	(5.5)	1/4以下	良好	回転ナデ ハケメ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	にぶい橙 7.5YR7/4 褐灰 7.5YR4/1	にぶい橙 7.5YR7/4 褐灰 7.5YR4/1	外面：ハケメは磨滅していてよくわからない 内面：赤彩	図12
第34図	1	土師器	杯	3B区	SI3	2層	No.6	(12.8)	(7.2)	2.2	1/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 明赤褐 5YR5/8	にぶい黄橙 10YR7/4 明赤褐 5YR5/8	内外面：赤彩	図12
第34図	2	土師器	杯	3B区	SI4		No.7	(12.6)	(8.4)	3.0	1/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 2.5YR6/8 赤褐 2.5YR4/6	明赤褐 5YR5/6 橙 7.5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり磨滅していてよくわからない	図12
第34図	3	土師器	杯	3B区	SI4		No.12	—	—	(1.4)	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	明赤褐 2.5YR5/6 橙 5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6 橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり磨滅していてよくわからない	図12
第34図	4	土師器	高杯	3B区	SI1	2層	No.1	13.9	—	(4.6)	1/2	良好	回転ナデ後 ヘラミガキ	—	回転ナデ後 ヘラミガキ	—	にぶい橙 7.5YR6/4 赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6 にぶい橙 5YR6/4	内外面：赤彩	図12
第34図	5	土師器	甑	3B区	SI2	2層	No.25	(18.2)	—	15.1	1/2	良好	ヨコナデ ハケメ後ヨコナデ ハケメ	ハケメ	ヨコナデ ケズリ後ヨコナデ ケズリ ケズリ後部分的にミガキ	ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/3 赤彩：橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	外面：赤彩、黒斑あり底部に穿孔6個あり、穿孔時の工具痕あり	巻頭 図12
第34図	6	土師器	甑	3B区	SI2	2層	No.11	—	12.7	(17.2)	1/4	良好	ハケメ	桟部分：丁寧なナデ	ケズリ後粗いミガキ ナデ後工具ナデ	桟部分：ナデ後工具ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	外面：スス付着、黒斑あり 筒抜けの底部中央に1条の桟が貼り付けられている	巻頭 図12
第34図	7	土師器	甑	3B区	SI2	2層	No.9	(32.0)	—	(22.3)	1/4以下	良好	ヨコナデ ハケメ後ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヨコナデ後部分的に粗いミガキ ヨコナデ後 ケズリ後 粗いミガキ ケズリ後 粗いミガキ	—	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	—	巻頭 図12
第34図	8	須恵器	蓋	3A区	SI10	埋土		(16.0)	—	(1.5)	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ	—	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	—	図12
第35図	1	土師器	甕	3B区	SI2		No.4	14.2	最大胴径(15.5)	15.1	ほぼ完形	良好	ヨコナデ ヨコナデ後刻み目状の凹み ハケメ	—	ヨコナデ ヨコナデ後ケズリ ナデ ケズリ後ナデ 工具痕	—	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6	内外面：スス付着 口縁部に刻み目状の凹みあり	巻頭 図12
第35図	2	土師器	甕	3B区	SI2	2層	No.63 No.65	(14.2)	最大胴径(16.5)	17.2	4/5	良好	ヨコナデ ハケメ後ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ケズリ	—	橙 7.5YR7/6 赤変部分：橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3	外面：スス付着口縁部から胴部上半分受熱のため赤変か 内面：スス付着	巻頭 図13

出土遺物観察表⑥

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第35図	3	土師器	甕	3B区	SI2	2層	No.19	(17.0)	—	21.9	1/2	良好	ヨコナデ ヨコナデ後 刻目状の凹み ハケメ後ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ケズリ ケズリ後ナデ	—	にぶい橙 7.5YR6/4 赤変部分：橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	外面：スス付着、胴部中位 受熱のため赤変か 内面：スス付着口縁部に刻み 状の凹みあり	巻頭 図13
第35図	4	土師器	甕	3B区	SI3	2層	No.7	(27.6)	—	(15.9)	1/2	良好	ヨコナデ ハケメ後ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ヨコナデ後 ケズリ後ナデ ケズリ後ナデ	—	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	外面：スス付着	図13
第35図	5	土師器	甕	3B区	SI2	2層	No.21	(18.7)	—	(23.0)	1/3	良好	ヨコナデ ハケメ後ヨコナデ ハケメ	—	ヨコナデ ケズリ後ナデ	—	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	外面：黒斑あり 内面：口縁から頸部にかけ 工具痕あり	図13
第35図	6	土師器	甕	3A区	SI10	2層	No.1	—	—	15.2	1/4以下	良好	ハケメ	—	ヘラケズリ	—	にぶい橙 10YR6/3	橙 7.5YR6/6	内面：指頭圧痕あり	図13
第40図	1	土師器	杯	3B区	SD4	1層	No.4	12.6	7.0	3.7	ほぼ完形	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2 橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/2 橙 5YR6/6	内外面：赤彩	巻頭 図13
第40図	2	土師器	杯	3B区	SD4	1層一括		13.0	8.3	3.3	2/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 5YR7/4 橙 2.5YR6/6	にぶい橙 5YR7/4 橙 2.5YR6/6	内外面：赤彩	図13
第40図	3	土師器	杯	3B区		1層一括		—	(8.8)	(1.1)	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	内外面：赤彩	図13
第40図	4	土師器	杯	3B区	SB1	埋土一括		(12.9)	7.7	3.0	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3 赤彩：橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3 赤彩：橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり『口本』 釈読出来ず	図13
第40図	5	土師器	高杯	3B区	SK42	1層	No.1	14.3	—	(5.0)	1/2	良好	回転ナデ後 ヘラミガキ	—	回転ナデ後 ヘラミガキ	—	にぶい黄橙 10YR7/3 明赤褐 2.5YR5/8	にぶい黄橙 10YR7/3 明赤褐 2.5YR5/8	内外面：赤彩	図13
第40図	6	土師器	高台付皿	3B区	SD1			—	(14.0)	(3.6)	1/4以下	良好	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	にぶい橙 5YR4/3	橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外面：スス付着 貼付高台	図13
第40図	7	須恵器	蓋	3B区	SK57		No.1	—	—	(3.8)	1/4	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	つまみ貼付	図13
第40図	8	須恵器	高杯の脚部	3B区	SD3	1層一括		—	—	(4.8)	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ 絞り痕	—	にぶい黄褐 10YR5/3 黒褐 10YR3/1	褐 7.5YR4/4	外面：スス付着	図13
第40図	9	須恵器	壺の口頸部	3B区	SK38		No.2	—	—	(5.8)	1/4以下	良好	回転ナデ	—	回転ナデ 工具ナデ	—	灰 N6/1 灰 N4/1	灰 N6/1	—	図13
第57図	1	土師器	杯	3C区	SI9		No.14 No.22	12.6	9.1	3.5	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外底面：板状圧痕あり	図13
第57図	2	土師器	杯	3C区	SI39	埋土一括		(14.0)	(9.8)	3.2	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6 にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6 にぶい橙 7.5YR7/4	内外面：赤彩	図13
第57図	3	土師器	杯	3C区	SI30	埋土一括		(14.0)	(8.6)	3.6	1/4以下	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	橙 2.5YR6/8 橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	内外面：赤彩	図14
第57図	4	土師器	杯	3C区	SI16		No.23	13.7	8.1	3.8	4/5	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	不定方向のナデ後 回転ヘラミガキ	赤 10R5/6 にぶい褐 7.5YR6/3	赤 10R5/6 にぶい褐 7.5YR6/3	内外面：赤彩	巻頭 図14

出土遺物観察表⑦

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第57図	5	土師器	杯	3C区	SI57	埋土1層		(15.0)	(9.7)	3.2	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面：赤彩	図14
第57図	6	土師器	杯	3C区	SI9 SI12		No.25 No.7 No.8	(18.6)	(10.0)	4.4	1/3	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ 回転ヘラケズリ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り後 ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	にぶい橙 2.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/6	にぶい橙 2.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR7/6	—	巻頭 図14
第57図	7	須恵器	杯	3C区	SI35		No.1	(14.6)	11.5	4.0	1/2	良好	回転ナデ	ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/2	橙 7.5YR7/6	—	図14
第57図	8	須恵器	杯	3C区	SI26		No.10	15.0	12.0	3.6	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR7/6 灰褐 7.5YR4/2	橙 7.5YR7/6 にぶい褐 7.5YR5/4	外面：口縁部の一部が 黒色化している	図14
第57図	9	須恵器	杯	3C区	SI26	埋土一括	No.2	(17.0)	(13.0)	5.2	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6 橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	—	図14
第57図	10	須恵器	杯	3C区	SI36		No.22	15.6	13.1	3.8	3/4	良好	回転ナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転ナデ 工具痕	回転ナデ	赤 10R5/6 灰白 10YR8/3	赤 10R5/6 灰白 10YR8/3	—	図14
第57図	11	須恵器	杯	3C区	SI11		No.27	(12.0)	7.9	5.0	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	灰白 N8/0 灰白 N6/0	灰白 N8/0	内外面：ヒダスキあり	図14
第57図	12	土師器	杯	3C区	SI36	埋土2層		—	(7.8)	(1.5)	1/4	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 5YR7/6 橙 5YR6/6	橙 5YR7/6	外底面：ヘラ書き『七』あり 焼成前に記銘	図14
第57図	13	土師器	杯	3C区	SI47	埋土一括		—	(10.0)	2.3	1/4以下	良好	回転ナデ ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	外底面：刻書『×』あり	図14
第57図	14	土師器	杯	3C区	SI8	埋土2層 一括		11.5	6.8	5.1	2/3	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3 橙 5YR6/6	全体的に歪みがみられる	巻頭 図14
第57図	15	土師器	杯	3C区	SI4	埋土一括		(10.8)	(6.8)	4.9	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	—	図15
第57図	16	土師器	杯	3C区	SI26	埋土一括		—	—	(1.9)	1/4以下	良好	ナデ	切り離し不明	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内面：刻書『大』あり 外底面：圧痕あり	図15
第57図	17	土師器	杯	3C区	SI36	埋土1層		—	—	(2.2)	1/4以下	良好	ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	外底面：ヘラ書き『七』あり	図15
第57図	18	須恵器	杯	3C区	SI22	埋土1層		(11.4)	(6.4)	3.7	1/3以下	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ 不定方向のナデ	灰黄 2.5Y6/2 黄灰 2.5Y5/1 灰 N6/0	灰黄 2.5Y6/2 灰 N6/0	外底面：板状圧痕あり	図14
第57図	19	須恵器	杯	3C区	SI35	埋土一括		(11.4)	(8.1)	3.8	1/3	良好	回転ナデ	ケズリ後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y6/1 灰 N4/1	灰 5Y6/1 灰 N4/1	内外面：ヒダスキあり 外底面：圧痕あり	図15
第57図	20	須恵器	杯	3C区	SI35	埋土一括		(13.0)	(8.4)	3.9	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y6/1 灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	—	図15
第57図	21	須恵器	杯	3C区	SI39	かまど 埋土1層		13.1	8.6	4.0	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 7.5Y7/1 灰 N4/0 ヒダスキ：灰 N4/0 灰白 N8/0	灰白 7.5Y7/1	内外面：ヒダスキあり	図15
第57図	22	須恵器	杯	3C区	SI9		No.28	(12.4)	(7.0)	4.0	1/4以下	良好	回転ナデ	ヘラケズリ ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	灰 5Y6/1 灰 5Y5/1	灰 5Y6/1 灰 5Y5/1	外面：ヒダスキあり	図15
第57図	23	須恵器	杯	3C区	SI39	ﾄﾚﾝﾁ一括		(13.0)	3.6	(8.3)	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 N6/0 灰白 N4/0	灰白 N6/0 灰白 N4/0	—	図15

出土遺物観察表⑧

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第57図	24	須恵器	杯	3C区	SI14		No.14	(13.0)	(8.8)	4.1	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰5Y6/1 灰オリーブ5Y6/2	灰5Y6/1 灰オリーブ5Y6/2	—	図15
第57図	25	須恵器	杯	3C区	SI35	埋土一括		13.0	8.9	4.5	2/3	やや不良	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰白5Y7/1	黄灰2.5Y4/1	内外面：ヒダスキあり	巻頭図15
第58図	1	土師器	椀	3C区	SI2	埋土2層		(11.6)	(8.0)	5.1	1/4	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6 浅黄橙7.5YR8/4	内外面：赤彩 貼付高台	図15
第58図	2	土師器	椀	3C区	SI38		No.4	13.8	7.0	5.1	3/4	良好	回転ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙7.5YR6/4	黒N1.5/0 黄灰2.5Y5/1	貼付高台	巻頭図16
第58図	3	須恵器	椀	3C区	SI35	埋土一括		(11.0)	(7.2)	(4.5)	1/2以下	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	不定方向のナデ	黄灰2.5Y4/1 灰白N7/0	黄灰2.5Y4/1	外面：一部自然釉付着 端部はほとんど欠損 貼付高台	図16
第58図	4	須恵器	椀	3C区	SI54	埋土1層一括		(12.4)	(8.0)	4.5	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	暗灰N3/0	灰N5/0	貼付高台	図16
第58図	5	須恵器	椀	3C区	SI55	かまど一括		12.8	7.9	4.7	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰N6/0	灰N6/0	貼付高台	巻頭図16
第58図	6	須恵器	椀	3C区	SI55	ﾄﾚﾝﾁ一括		(13.6)	8.2	5.0	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り後粗いナデ	回転ナデ	回転ナデ後 不定方向のナデ	にぶい黄橙10R7/3 褐灰10YR5/1	灰オリーブ5Y6/2 にぶい黄橙10YR7/4	高台部貼付の調整がやや粗く体部に粘土のはみ出し部分が見られる	図16
第58図	7	須恵器	椀	3C区	SI13	埋土一括		(14.4)	(9.4)	4.2	1/3	良好	回転ナデ ヘラケズリ	磨耗により不明瞭	回転ナデ	ナデ	黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y6/1	貼付高台	図16
第58図	8	須恵器	椀	3C区	SI36	一括		(13.0)	(8.8)	4.7	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	青灰5PB5/1	灰N5/0	外底面：板状圧痕あり 貼付高台	図16
第58図	9	須恵器	椀	3C区	SI39		No.5	(13.6)	(10.0)	4.0	1/2以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後粗いナデ	回転ナデ	ナデ	灰N5/0 暗灰3N/0	灰N5/0	外面：体部上位～底部に自然釉の付着あり 貼付高台	図16
第58図	10	須恵器	椀	3C区	SI36		No.14	(13.8)	(10.0)	4.4	1/2以下	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰N5/0 灰N6/0 自然釉　黒N2/0	灰N5/0	外面：自然釉付着 外底面：圧痕あり、底部に焼成時の膨らみによる変形あり 貼付高台	図16
第58図	11	須恵器	椀	3C区	SI35	一括		(16.2)	(11.2)	5.1	1/3	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	灰白N7/0	灰白N8/0	貼付高台	図16
第58図	12	須恵器	椀	3C区	SI57	埋土1層		(13.5)	(10.1)	4.1	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	不定方向のナデ	灰10Y6/1	灰10Y6/1 浅黄2.5Y7/4	外面：体部にヘラ挿入痕か 貼付高台	図16
第58図	13	須恵器	椀	3C区	SI55	埋土一括		(14.4)	(10.4)	5.0	1/2以下	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰白N7/0	灰白N7/0	内外面：降灰あり 貼付高台「萩尾型」	図16
第58図	14	須恵器	椀	3C区	SI12 SI14	ﾄﾚﾝﾁ一括		(14.4)	(8.6)	4.2	1/3	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ ナデ	ナデ	灰N4/0	灰N4/0	貼付高台	図16
第58図	15	須恵器	椀	3C区	SI36	埋土2層		(12.0)	(7.2)	3.7	1/4以下	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	灰N4/0	灰5Y5/1	貼付高台	図16
第58図	16	須恵器	椀	3C区	SI12		No.4	(13.8)	8.8	3.7	2/3	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	灰N6/0 灰N5/0	灰N6/0	外底面：板状圧痕あり 貼付高台	図16

出土遺物観察表⑨

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第58図	17	須恵器	椀	3C区	SI9		No.8	(14.6)	(10.0)	6.2	1/3	良好	回転ナデ	ナデ ヘラケズリ 回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰 7.5YR4/1	灰 7.5YR4/1 ヒダスキ：暗灰 N3/0	外面：体部下位にヒダスキあり 貼付高台	図16
第58図	18	須恵器	椀	3C区	SI54		No.4	(15.6)	(12.0)	5.6	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	口縁部に歪みあり 貼付高台	図16
第58図	19	須恵器	椀	3C区	SI36		No.10	(17.4)	11.6	5.4	1/2	良好	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0 灰 N4/0 ヒダスキ：灰 N6/0	灰 N5/0	外面：底部～体部にヒダスキ 貼付高台	図16
第58図	20	須恵器	椀	3C区	SI36		No.12	(16.6)	(12.2)	(5.5)	1/4 以下	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラ切り	ヘラケズリ	ヘラケズリ 不定方向ナデ	灰 N6/0 灰赤 2.5YR4/2 暗紫灰 5P3/1	褐灰 7.5YR5/1	貼付高台	図17
第58図	21	須恵器	皿	3C区	SI54	埋土2層一括		14.0	12.0	2.6	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 10Y6/1 灰 10Y5/1	灰 10Y6/1 灰 10Y5/1	—	図17
第58図	22	土師器	皿	3C区	SI35	かまど一括		(9.0)	(14.8)	2.2	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 2.5YR6/8	橙 7.5YR7/6	外面：赤彩	図17
第58図	23	須恵器	壺蓋	3C区	SI4 SI8			(15.4)	つまみ径 2.3	3.6	1/2	良好	回転ナデ 沈線が巡る	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N4/0 灰白 2.5Y7/1 灰黄 2.5Y7/2	黄灰 2.5Y5/1	外面：自然釉付着 つまみ貼付	図17
第58図	24	須恵器	蓋	3C区	SI14		No.10	(12.4)	—	2.5	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り後 回転ナデ	—	回転ナデ 不定方向のナデ	—	灰白 N7/0 暗灰 N3/0	灰白 N7/0	つまみ貼付 降灰あり	図17
第58図	25	須恵器	蓋	3C区	SI13	埋土一括		(14.3)	—	2.4	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り	—	回転ナデ 不定方向ナデ	—	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4 灰 N4/0	—	図17
第58図	26	須恵器	蓋	3C区	SI9	埋土2層		(17.3)	—	1.9	1/3	良好	回転ヘラケズリ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	にぶい黄橙 10YR7/2 灰 N4/0	にぶい黄橙 10YR7/2 灰 N4/0	口縁部に重ね焼きによる変色 つまみ貼付	図17
第58図	27	須恵器	蓋	3C区	SI35	埋土1層一括		(14.2)	—	(1.7)	2/3	良好	ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N5/0 暗灰 N3/0	灰 N5/0	外面：上部に自然釉付着 上部につまみ欠損の痕跡あり、転用硯の可能性あり	図17
第58図	28	須恵器	蓋	3C区	SI26		No.9	(17.2)	—	3.0	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り後 やや粗いナデ	—	回転ナデ 不定方向のナデ	—	灰 N6/0	灰白 N7/0 灰 N5/0	つまみ部欠損か	図17
第58図	29	須恵器	蓋	3C区	SI51		No.1	15.0	—	2.3	完形	良好	回転ヘラ切り後 ナデ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰白 5Y7/1 灰 5Y6/1 黄灰 2.5Y5/1	灰白 5Y7/1	外面：粘土痕あり 転用硯の可能性あり	図17
第58図	30	須恵器	蓋	3C区	SI9		No.32	(15.0)	—	2.5	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ 不定方向のナデ	—	灰 N6/0 暗灰 N3/0	灰 N6/0	外面：自然釉付着 口縁内部端部自然釉 内面：転用硯としての使用でところどころ平滑となる	図17
第58図	31	須恵器	蓋	3C区	SI26		No.1	15.0	—	2.3	3/4	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り	—	回転ナデ 回転ナデ後 不定方向のナデ	—	灰 N6/0	灰 N6/0 灰 N5/0	—	図17
第58図	32	須恵器	蓋	3C区	SI12		No.6	(15.4)	—	1.4	1/2	良好	回転ナデ	—	ナデ	—	灰 N4/0 黒 N2/0	灰 N4/0 暗灰 N3/0 灰白 5Y8/1	内面：自然釉付着、口縁部内部に重ね焼きの痕あり	図17
第58図	33	須恵器	蓋	3C区	SI36		No.5	14.8	—	1.7	2/3	良好	ナデ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N5/0	灰 N5/0	口縁部に歪みあり 転用硯の可能性あり	図17

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 59 図	1	土師質	かまど（庇、把手の一部）	3C 区	SI16		No. 16	横 (19.9)	—	縦 (28.0)	1/4 以下	良好	ナデ	ナデ	ケズリ後ナデ	—	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/4 褐灰 10YR5/1 黒 10YR2/1	外面：指頭圧痕あり	図 17
第 59 図	2	須恵器	大甕	3C 区	SI11 SI16	—	No. 11 No. 21 No. 24 No. 18	(23.7)	最大胴径 (44.1)	50.9	1/2	良好	沈線 回転ナデ 格子目タタキ 格子目タタキ後ナデ	—	回転ナデ 工具痕 同心円文当具痕 平行当具痕後 同心円文当具痕 平行当具痕	—	灰黄 2.5Y6/2 暗赤褐 5YR3/4	灰 5Y6/1	内外面：口縁から胴部下位に自然釉付着	巻頭カラー
第 62 図	1	土師器	鉢	3C 区	SD1	下層	No. 1	(10.6)	(7.6)	4.4	1/3	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 2.5YR6/6 灰 N6/0 暗灰 N3/0	橙 2.5YR6/6 灰 N6/0	—	図 17
第 62 図	2	須恵器	杯	3C 区	SD2		No. 28	(13.0)	10.3	3.7	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	底部に板状圧痕あり	図 17
第 62 図	3	土師器	杯	3C 区	SD2		No. 29	(14.6)	(10.8)	4.7	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6 にぶい黄橙 10YR6/3	橙 7.5YR6/6 にぶい黄橙 10YR6/3	内外面：赤彩 内面：体部に油煙あり	図 18
第 62 図	4	土師器	杯	3C 区	SD2	ﾄﾚﾝﾁ一括		(14.6)	(12.2)	2.8	1/3	良好	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR7/3 褐灰 10YR4/1 黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR7/3 灰黄褐 10YR5/2 黒 10YR2/1	内外：口縁部にスス付着	図 18
第 62 図	5	土師器	杯	3C 区	SD2		No. 10	(16.6)	(14.0)	3.2	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	—	図 18
第 62 図	6	土師器	皿	3C 区	SD2		No. 9	(17.2)	(14.1)	2.3	1/4	良好	回転ナデ	ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6 橙 2.5YR6/8	橙 5YR6/6 橙 2.5YR6/8	内外面：赤彩	図 18
第 62 図	7	土師器	杯	3C 区	SD2	ﾄﾚﾝﾁ一括		—	(9.8)	1.0	1/4 以下	良好	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 7.5YR6/4	外底面：線刻あり 底部切り離しはヘラ切りか	図 18
第 62 図	8	須恵器	蓋	3C 区	SD2		No. 4	16.0	—	2.2	ほぼ完形	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰白 5Y7/1 灰 N6/0	灰白 5Y7/1	転用硯の可能性あり	図 18
第 62 図	9	土師器	灯明皿	3C 区	SD2	埋土一括		6.2	4.3	1.2	3/4	良好	回転ナデ	回転糸切り ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面：口縁端部に黒色の油煙が付着	図 18
第 62 図	10	土師器	灯明皿	3C 区	SD2	埋土一括		6.2	4.8	1.2	3/4	良好	回転ナデ	回転糸切り ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部に一部歪みあり	図 18
第 62 図	11	土師器	灯明皿	3C 区	SD2	埋土一括		(6.0)	(4.6)	1.1	1/3	良好	回転ナデ	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	—	図 18
第 62 図	12	須恵器	杯	3C 区	SD1	下層	No. 3	(12.4)	3.8	7.2	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	外底面：板状圧痕あり	図 18
第 62 図	13	須恵器	杯	3C 区	SD2		No. 31	12.8	3.8	7.3	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0 暗灰 N3/0	灰 N5/0	外面：口縁部に自然釉付着	図 18
第 62 図	14	須恵器	椀	3C 区	SD2	ﾄﾚﾝﾁ一括		(9.7)	(6.9)	3.9	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	橙 2.5YR6/6 灰褐 7.5YR6/2	にぶい橙 7.5YR6/4 灰褐 7.5YR5/2	外面：口縁部～体部自然釉あり 内面：口縁部～見込み部自然釉付着 貼付高台	図 18
第 62 図	15	須恵器	椀	3C 区	SD2	中層一括		(14.2)	4.1	8.6	3/4	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 2.5Y7/1 黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y7/1	貼付高台	図 18

出土遺物観察表⑪

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 62 図	16	土師器	甕	3C 区	SD2	トレンチ一括		(24.8)	—	(10.8)	1/4 以下	良好	回転ナデ ハケメ ナデ	—	回転ナデ ヘラケズリ	—	浅黄橙 7.5YR8/3 褐灰 7.5YR5/1	浅黄橙 7.5YR8/3 黄灰 2.5YR6/1	—	図 18
第 62 図	17	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(14.4)	8.0	3.3	2/3	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラケズリ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 不定方向のナデ後 回転ヘラミガキ	にぶい橙 5YR7/4	赤 10R5/6 にぶい橙 5YR7/4	内外面：赤彩	図 18
第 62 図	18	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		12.6	10.1	4.0	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	内外面：赤彩	巻頭 図 18
第 62 図	19	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(13.0)	(9.8)	3.4	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内面：赤彩	図 19
第 62 図	20	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(13.6)	10.2	3.3	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面：赤彩 外面：殆ど剥れわずかに 痕跡を残す	図 19
第 62 図	21	須恵器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(13.2)	(9.0)	3.5	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	外底面：『×』と思われる 線刻あり	図 19
第 62 図	22	須恵器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		13.4	9.7	4.6	3/4	良好	回転ナデ ヘラケズリ後ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	—	巻頭 図 19
第 62 図	23	須恵器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(14.4)	11.8	3.6	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	—	図 19
第 62 図	24	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(15.2)	11.2	3.0	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	内外面：赤彩	図 19
第 62 図	25	須恵器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		17.2	12.3	5.6	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6 橙 2.5YR6/8	橙 5YR6/6	内外面：口縁～体部上位に 油煙（褐灰色）付着	図 19
第 62 図	26	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(14.6)	(10.0)	3.8	1/2	やや 不良	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	明赤褐 5YR5/6 橙 5YR6/6 褐灰 10YR4/1	明赤褐 5YR5/6 黒褐 5YR3/1	内面：赤彩	図 19
第 62 図	27	須恵器	蓋	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(12.6)	—	1.1	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N6/0 灰 N4/0	灰 7.5Y6/1	—	図 19
第 62 図	28	須恵器	蓋	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(15.2)	3.5	5.3	2/3	良好	回転ヘラ切り後 ナデ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N6/0	にぶい褐 7.5YR5/4 灰 N6/0	環状つまみの接合 転用硯の可能性あり	図 19
第 62 図	29	須恵器	椀	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(13.8)	9.2	4.1	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y6/1 灰 N4/0	灰 5Y6/1	口縁部に歪みあり 高台中心と杯部中心がずれている 外底面：板状圧痕あり 貼付高台	図 19
第 62 図	30	須恵器	椀	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		(13.6)	9.1	4.2	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 5Y5/1 灰 N4/0 灰 5Y4/1	灰 5Y5/1 灰 N4/0 灰 5Y4/1	貼付高台	巻頭 図 19
第 62 図	31	須恵器	椀	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		—	10.9	(3.6)	2/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	口縁部に歪みあり 貼付高台	図 19
第 62 図	32	須恵器	高杯	3C 区	SD3	埋土 1 ～ 2 層一括		22.2	(13.2)	8.9	2/3	やや 不良	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	浅黄 2.5YR7/4 灰 N6/ にぶい黄褐 10YR5/3	浅黄 2.5YR7/4 灰 N6/ にぶい黄褐 10YR5/3	—	巻頭 図 19

出土遺物観察表⑫

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第63図	1	土師器	杯	3C区	SD3	埋土3層一括		(15.0)	(12.0)	3.0	1/4	良好	ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	ミガキ	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	—	図20
第63図	2	須恵器	杯	3C区	SD3	埋土3層一括		(12.0)	(7.8)	(3.4)	1/4	良好	回転ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	にぶい赤褐 5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/3	外底面：『×』の線刻あり	図20
第63図	3	須恵器	椀	3C区	SD3	埋土3層一括		—	8.8	(3.5)	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N6/0 灰 N4/0	灰 N6/0	外面：体部一部に自然釉付着 貼付高台「萩尾型」	図19
第63図	4	須恵器	椀	3C区	SD3	埋土3層一括		(14.6)	10.4	4.9	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ 粗いナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0	灰 N5/0	外底面：切り離し方は不明 貼付高台	図20
第63図	5	須恵器	蓋	3C区	SD3	埋土3層一括		(17.1)	3.7	3.0	3/4	良好	ナデ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N6/0 灰 N5/0 灰 N4/0	灰 N6/0	つまみ貼付	図20
第63図	6	須恵器	蓋	3C区	SD3	埋土3層一括		15.1	—	2.5	ほぼ完形	良好	回転ヘラ切り後 ナデ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰白 2.5Y7/1 黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y7/1	転用硯の可能性あり	図20
第63図	7	須恵器	高杯	3C区	SD3	埋土3層一括		(21.0)	(11.4)	9.0	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N4/ 暗灰 N3/	灰 N5/0 灰 N4/0	内底面：絞り痕あり 外面：一部に自然釉が付着	巻頭 図20
第63図	8	須恵器	鉢	3C区	SD3	埋土3層一括		(21.8)	—	11.0	1/2	良好	回転ナデ	カキ目	回転ナデ タタキ	粗いナデ	橙 7.5YR7/6	橙 5Y7/6	内面：当具痕 外面：タタキ（一部ナデ消されている）	図20
第63図	9	土師器	杯	3C区	SD3	埋土3～4層一括		(12.6)	9.3	3.6	1/2	良好	回転ナデ ケズリ？	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4 橙 5YR7/6	内面：油煙あり 外面：体部に一部赤彩あり	図20
第63図	10	土師器	杯	3C区	SD3	埋土3～4層		(14.4)	11.0	3.8	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR7/6	橙 2.5YR6/6	内外面：赤彩	図20
第63図	11	須恵器	鉢	3C区	SD3	埋土3～4層一括		(17.4)	(12.6)	6.3	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	回転ナデ	不定方向ナデ	灰褐 7.5YR5/2	黄灰 2.5Y4/1	内外面：降灰あり	図20
第63図	12	土師器	杯	3C区	SD3	埋土4～5層一括		(13.0)	(9.8)	3.3	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6 橙 7.5YR6/8	橙 5YR6/6 橙 7.5YR6/8	内外面：赤彩 外底面：外面中央に刻書あり	図20
第63図	13	土製品	紡錘車	3C区	SD3	埋土4～5層一括		全長 4.5	全幅 4.0	厚み 1.4	ほぼ完形	良好	工具ナデ ナデ	—	工具ナデ	—	にぶい橙 7.5YR6/4 褐灰 7.5YR4/1	にぶい橙 7.5YR6/4	重さ（23.6g）	図20
第63図	14	須恵器	椀	3C区	SD3	埋土4～5層一括		—	(9.7)	(4.4)	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ 不定方向のナデ	灰 N5/0 灰白 N7/0	灰 N5/0	外面：自然釉付着 貼付高台	図20
第63図	15	須恵器	蓋	3C区	SD3	埋土5～8層一括		(18.6)	—	2.1	1/3	良好	回転ヘラケズリ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰黄 2.5YR6/2 にぶい赤褐 5YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	—	図20
第63図	16	須恵器	蓋	3C区	SD3	埋土5～8層一括		(15.6)	—	2.4	1/3	良好	回転ヘラ切り後 ナデ 回転ナデ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N5/0	灰 N5/0 灰 N4/0	内面：自然釉付着 転用硯の可能性あり	図21
第63図	17	須恵器	椀	3C区	SD3	埋土6層一括		(12.2)	4.1	(7.8)	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	暗灰 N3/0	暗灰 N3/0	外面：一部自然釉付着 黒 N2/1 がかかる 貼付高台	図21
第63図	18	土師器	杯	3C区	SD3	ﾍﾞﾙﾄ一括		13.9	9.8	3.4	ほぼ完形	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい赤褐 5YR5/4	内外面：スス付着	巻頭 図21
第63図	19	土師器	杯	3C区	SD3	ﾍﾞﾙﾄ一括		(14.0)	(9.0)	3.5	1/2	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ 若干ナデありか？	黒褐 10YR4/2 暗赤褐 5YR4/4	明赤褐 5YR5/6 にぶい橙 7.5YR6/4	外面：刻書『石足』あり 内面：赤彩 口縁部の歪みが著しい	図21

出土遺物観察表⑬

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（ｃｍ）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 63 図	20	土師器	杯	3C 区	SD3	ﾍﾞﾙﾄ一括		16.3	—	5.0	ほぼ完形	良好	回転ナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	明褐灰 7.5YR7/1 明褐灰 7.5YR7/2	にぶい橙 7.5YR7/4 褐灰 7.5YR6/1	内外面：赤彩	巻頭 図 21
第 63 図	21	須恵器	椀	3C 区	SD3	ﾍﾞﾙﾄ一括		—	9.2	3.0	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	外底面：ヘラ書き『七』あり 貼付高台	図 21
第 63 図	22	須恵器	椀	3C 区	SD3	ﾍﾞﾙﾄ一括		(13.2)	4.6	(8.2)	1/4	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り後 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	黄褐 2.5YR5/3	暗灰黄 2.5Y4/2	外面：体部～高台部にかけて 自然釉 2.5YR4/4 （にぶい赤褐）付着 貼付高台	図 21
第 63 図	23	須恵器	蓋	3C 区	SD3	ﾄﾚﾝﾁ一括		10.3	—	1.2	2/3	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り後 回転ナデ ナデ	—	回転ナデ 不定方向のナデ	—	灰 N5/0 暗灰 N3/0	灰 N5/0	外面：口縁部付近自然釉付着 内面：一部重ね焼きの痕跡あり、口縁部付近自然釉付着	図 21
第 63 図	24	須恵器	高台付皿	3C 区	SD3	ﾄﾚﾝﾁ一括		18.2	12.6	2.2	3/4	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	灰 7.5Y6/1 灰 N4/0	灰 7.5Y6/1	外面：自然釉付着 転用硯の可能性あり 貼付高台	図 21
第 64 図	1	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		(13.8)	9.5	4.4	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6 橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6 橙 2.5YR6/6	—	図 21
第 64 図	2	須恵器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		(13.6)	4.1	(9.9)	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	—	図 21
第 64 図	3	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		(14.2)	3.7	(10.0)	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3 橙 2.5YR6/8	内面：赤彩 外面：体部に刻書	図 21
第 64 図	4	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		14.8	11.6	5.0	3/4	良好	回転ナデ後 やや粗いミガキ ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	ミガキ	ミガキ	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	口縁部：内外に油煙が見られる	巻頭 図 21
第 64 図	5	須恵器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		—	(5.4)	(12.3)	1/2 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	—	図 21
第 64 図	6	土師器	杯	3C 区	SD3	一括		(16.5)	10.4	3.6	1/2	良好	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	回転ヘラ切り後 ナデ 回転ヘラミガキ	回転ナデ後 回転ヘラミガキ	不定方向のナデ後 回転ヘラミガキ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	内外面：赤彩 外底面：油煙あり	図 21
第 64 図	7	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		—	8.4	(2.1)	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6 橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	外底面：刻書あり	図 21
第 64 図	8	土師器	杯	3C 区	SD3	埋土一括		—	(7.5)	1.9	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 褐灰 7.5YR6/1 橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	外底面：ヘラ書きあり	図 22
第 64 図	9	土師器	椀	3C 区	SD3	一括		(15.9)	11.2	8.1	2/3	良好	回転ナデ ヘラミガキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ヘラミガキ	回転ナデ ヘラミガキ 不定方向のナデ	赤 10R5/6 橙 7.5YR7/6 褐灰 10YR5/1	赤 10R5/6	内外面：赤彩 貼付高台	図 21
第 64 図	10	須恵器	杯	3C 区	SD3	一括		(11.9)	(7.6)	3.9	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0 にぶ赤褐 2.5YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	外面：体部に自然釉付着	図 22
第 64 図	11	須恵器	杯	3C 区	SD3	一括		13.3	8.5	4.0	完形	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 2.5Y7/1 灰 N5/0	灰白 2.5Y7/1 灰 N5/0	内外面：ヒダスキあり	巻頭 図 22
第 64 図	12	須恵器	皿	3C 区	SD3	一括		19.0	16.1	2.4	2/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0　灰 N6/0 暗灰 N3/0	灰 N5/　灰白 5Y7/1 暗灰 N3/	転用硯の可能性あり	巻頭 図 22
第 64 図	13	須恵器	壷蓋	3C 区	SD3	埋土一括		(14.0)	—	(3.1)	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り	—	回転ナデ ナデ	—	橙 5YR6/6 褐灰 5YR5/1	橙 5YR6/6	つまみが接合されていたと思われる	図 22

出土遺物観察表⑭

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げ№	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 64 図	14	須恵器	蓋	3C 区	SD3	埋土一括		13.6	—	2.3	完形	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ ナデ	—	灰 N5/0 灰 7.5Y5/1	灰 N4/0	つまみ貼付	巻頭 図 22
第 64 図	15	須恵器	蓋	3C 区	SD3	埋土一括		(13.0)	—	2.4	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラ切り	—	回転ナデ ナデ	—	褐灰 10YR5/ にぶい黄褐 10YR5/3 黒 10YR2/1	灰 N6/0	外面：自然釉付着 内面：黒斑あり 口縁部は湾曲している つまみ貼付	図 22
第 64 図	16	須恵器	椀	3C 区	SD3	埋土一括		(13.4)	8.9	4.9	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ヘラケズリ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰黄褐 10YR5/2 灰 N5/0 にぶい赤褐 2.5YR4/4	褐灰 10YR5/1	外面：赤褐色を呈する 自然釉付着 貼付高台	図 22
第 64 図	17	須恵器	椀	3C 区	SD3	一括		11.0	7.5	3.5	3/4	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	回転ナデ 不定方向のナデ	灰 5Y5/1 浅黄橙 7.5YR8/6	灰 5Y5/1 浅黄橙 7.5YR8/6	貼付高台	巻頭 図 22
第 64 図	18	須恵器	椀	3C 区	SD3	埋土一括		13.9	10.0	4.1	3/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 粗いナデ 回転ナデ	回転ナデ	不定方向のナデ	暗赤灰 2.5YR3/1	暗灰 N3/0	外面：体部の一部～底部にかけて 5YR2/1（黒褐）の 自然釉付着 貼付高台	巻頭 図 22
第 64 図	19	須恵器	椀	3C 区	SD3	埋土一括		(14.2)	4.2	(10.0)	1/2	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 粗いナデ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ後 不定方向のナデ	灰 7.5Y5/1 オリーブ黒 7.5Y3/1	灰 7.5Y4/1	貼付高台	図 22
第 64 図	20	須恵器	椀	3C 区	SD3	一括		(14.4)	(10.0)	5.3	1/4 以下	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0 暗灰 N3/0	灰 N4/0	貼付高台、高台に歪みあり	図 22
第 64 図	21	須恵器	椀	3C 区	SD3	一括		(16.4)	11.6	5.3	1/2 以下	良好	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0 灰 N4/0	灰 N5/0	外面：全体に自然釉付着 貼付高台	図 22
第 64 図	22	土師器	鉢	3C 区	SD3	一括		28.0	—	11.1	3/4	良好	回転ナデ 粗雑なケズリ ナデ	ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	外面：スス付着	図 22
第 65 図	1	須恵器	大甕	3C 区	SD3	埋土一括		43.4	—	(32.5)	胴部上半 1/4	良好	回転ナデ 櫛描き波状文 格子目タタキ	—	回転ナデ 同心円文当具痕	—	暗灰 N3/0 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY4/1	暗灰 N3/0	外面：口縁から胴部中位に 自然釉付着 内面：口縁から頸部に自然釉 付着	巻頭 カラー
第 65 図	5	土師器	杯	3C 区	SK14	ﾄﾚﾝﾁ一括		(15.2)	(8.0)	5.7	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	内外面：赤彩	図 22
第 65 図	6	須恵器	高杯	3C 区	SK11	埋土一括		(14.2)	8.6	8.0	1/2	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ ナデ	橙 7.5YR7/6 明赤褐 7.5YR5/6	橙 7.5YR7/6	外面：赤彩	図 22
第 65 図	7	土師器	椀	3C 区	SK16	埋土一括		(14.4)	—	(4.5)	1/4 以下	良好	回転ナデ	—	ヘラミガキ	—	にぶい橙 7.5YR6/4	黒 N2/0	黒色土器 A 内器面：タテミガキ後 ヨコミガキ	図 23
第 65 図	8	土師器	椀	3C 区	SK16	埋土一括		—	(7.5)	(1.3)	1/4 以下	良好	—	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6 橙 7.5YR6/6	外底面：ヘラ書き『盃口』あり 貼付高台	図 23
第 65 図	9	須恵器	蓋	3C 区	SK24	一括		(15.2)	—	1.7	1/2 以下	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	—	回転ナデ 不定方向ナデ	—	灰 N4/0	灰 N4/0	内外面：降灰あり	図 23
第 65 図	10	須恵器	椀	3C 区	SK10	一括		(14.0)	(10.0)	5.2	1/3	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰 N5/0	灰 N5/0	口縁部の歪みが著しい 外底面：板状圧痕あり 貼付高台	図 23
第 65 図	11	須恵器	杯	3C 区	SX1	埋土 2 層	№3	(13.6)	8.2	3.6	3/5	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰 7.5YR6/1	灰 7.5YR6/1	外底面：墨書『石口』	図 23
第 65 図	12	須恵器	杯	3C 区	SX1	埋土 2 層	№2	12.6	6.6	3.9	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラ切り後 タタキ	回転ナデ	ナデ	黄灰 2.5Y6/1 黄灰 2.5Y4/1	浅黄 2.5Y7/3 黄灰 2.5Y6/1	外底面：タタキ （平行線状痕）	図 23

出土遺物観察表⑮

図版番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			残存率	焼成	調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高			外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 70 図	1	土師器	杯	3C 区		清掃一括		14.8	3.6	11.9	3/4	良好	ミガキ	ヘラケズリ	ミガキ	ミガキ	にぶい橙 7.5YR6/4 明赤褐 2.5YR5/6 赤黒 2.5YR1.7/1	明赤褐 2.5YR5/6 明赤灰 2.5YR3/1 赤黒 2.5YR1.7/1	内外面：口縁部は黒色化、外底面を除き赤彩あり	図 23
第 70 図	2	土師器	杯	3C 区		一括		—	(7.7)	(1.4)	1/4 以下	良好	ミガキ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ミガキ	ミガキ	橙 7.5YR7/6 明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR7/6 明赤褐 5YR5/6	内外面：赤彩 外底面：墨書あり	図 23
第 70 図	3	土師器	椀	3C 区	24wｲ	2 層直下		(12.4)	6.6	4.7	2/3	良好	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 5YR7/4 にぶい黄 2.5Y6/4	黒 N1.5/0 灰白 2.5Y7/1	黒色土器 A 貼付高台	図 23
第 70 図	4	土師器	椀	3C 区	24wｲ	2 層直下		(12.4)	6.5	5.2	1/3	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	ミガキ ハケメ	ミガキ	にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい褐 7.5YR6/3 灰黄 2.5Y6/2	黒 N2/0	黒色土器 A 貼付高台	図 23
第 70 図	5	須恵器	椀	3C 区	24xｱ	清掃一括		—	(9.6)	1.9	1/4	良好	回転ナデ	回転ヘラ切り後 ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6 橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6 橙 5YR7/6	外底面：ヘラ書き『七』あり 貼付高台	図 23
第 70 図	6	土師器	小壺	3C 区		清掃一括		7.8	—	8.6	ほぼ完形	良好	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	赤褐 2.5YR4/6 明赤灰 2.5YR3/1 赤黒 2.5YR1.7/1	にぶい黄橙 10YR6/3 赤褐 2.5YR4/8	内面：口縁部に赤彩あり 外面：赤彩	図 23
第 70 図	7	須恵器	椀	3C 区		ﾄﾚﾝﾁ一括		14.2	9.8	4.3	2/3	良好	回転ナデ	粗いナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	灰 7.5Y4/1 灰 7.5Y5/1 青黒 10BG2/1	灰 7.5Y4/1 灰 7.5Y5/1	口縁部の歪みが著しい 内面：ふき出しあり 外面：一部自然釉による黒色化あり 外底面：板状圧痕あり 貼付高台	図 23
第 70 図	8	須恵器	椀	3C 区		ﾄﾚﾝﾁ一括		(13.3)	(8.0)	5.4	2/3	良好	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰 2.5Y4/1 暗灰黄 2.5Y5/2 赤褐 10R4/4	黄灰 2.5Y4/1 暗灰黄 2.5Y5/2	外面：一部自然釉による赤色化あり 貼付高台	図 23
第 70 図	9	須恵器	椀	3C 区		一括		(13.1)	7.7	5.4	1/2	良好	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	褐灰 7.5YR5/1 にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい褐 7.5YR6/3	外面：自然釉付着 貼付高台	図 23

鉄器

実測番号	挿図番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				区	番号	層位	取り上げNo.	口径	底部径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
第 28 図	20		刀子	3A 区	SK5			(全長) (7.9)	(全幅) 1.5	0.3	—	—	—	—	—	—	先端部に木片付着	巻頭カラー
第 28 図	21		不明	3A 区	SD2			(全長) (7.7)	(全幅) (3.2)	—	—	—	—	—	—	—		—
第 28 図	22		鉄鏃	3A 区	23zｳ			(全長) 11.6	(全幅) 1.9	0.25(刃部) 0.4（基部）	—	—	—	—	—	—		—
第 28 図	23		雁又鏃	3A 区	SK5			(全長) 19.0	(全幅) 5.0	0.2（刃部） 0.4（基部）	—	—	—	—	—	—		—
第 65 図	2		鉄鏃	3C 区	SD3		No.3	(全長) (4.2)	(全幅) (2.8)	0.2	—	—	—	—	—	—		—
第 65 図	3		轡	3C 区	SD3			(全長) —	(全幅) —	—	—	—	—	—	—	—		—

第５章　まとめ

（１）３Ａ・Ｂ区の古代遺構

検出遺構は主に古代の遺構で、８世紀～９世紀に位置づけられる。ここでは、竪穴建物、掘立柱建物、溝の主要な遺構に関して、遺物から推定される時期を記す。

【３Ａ区】

竪穴建物	ＳＩ１	：８世紀末～９世紀初頭	ＳＩ２	：８世紀末～９世紀初頭
	ＳＩ３	：８世紀末～９世紀初頭	ＳＩ５	：８世紀後半～９世紀初頭
	ＳＩ６	：８世紀後半	ＳＩ７	：８世紀後半
	ＳＩ11	：８世紀後半～９世紀初頭	ＳＩ16	：８世紀後半
	ＳＩ17	：８世紀末～９世紀初頭	ＳＩ18	：８世紀後半～９世紀初頭
	ＳＩ21	：８世紀末～９世紀初頭	ＳＩ26	：９世紀中葉・後半
	ＳＩ32	：８世紀後半		
溝跡	ＳＤ２	：８世紀後半～９世紀初頭		

【３Ｂ区】

竪穴建物	ＳＩ２	：８世紀後半	ＳＩ３	：８世紀後半～９世紀初頭
	ＳＩ４	：８世紀後半～９世紀初頭	ＳＩ７（３Ａ区ＳＩ10）：	８世紀後半
掘立柱建物	ＳＢ１	：９世紀中葉・後半		
溝跡	ＳＤ１	：９世紀中葉・後半	ＳＤ３	：８世紀後半
	ＳＤ４	：９世紀中葉・後半		

次に関連遺構の重複を列記する（旧→新）

【３Ａ区】

ＳＩ６→ＳＩ７→ＳＩ５→ＳＩ11　　ＳＩ32→ＳＩ16→ＳＩ２

ＳＩ25→ＳＩ17→ＳＩ21→ＳＩ19→ＳＩ18　　ＳＩ27→ＳＩ26→ＳＩ29→ＳＩ28

【３Ｂ区】

ＳＩ７（３Ａ区ＳＩ10）→ＳＩ11･ＳＩ４→ＳＩ３　　ＳＢ２→ＳＢ１

ＳＤ１とＳＤ３については遺物の時期が異なるが、その方向と、掘られた深さから同時期の遺構と思われる。遺物と遺構の重複から遺構の時期的な位置づけを行う。

８世紀後半	３Ａ区ＳＩ６	３Ａ区ＳＩ32	３Ａ区ＳＩ７	３Ａ区ＳＩ16
	３Ｂ区ＳＩ２	３Ａ区ＳＤ２		
８世紀後半（末）	３Ａ区ＳＩ５	３Ａ区ＳＩ２	３Ａ区ＳＩ17	３Ａ区ＳＤ１
～９世紀初頭	３Ａ区ＳＩ１	３Ａ区ＳＩ11	３Ａ区ＳＩ21	３Ａ区ＳＩ19
	３Ａ区ＳＩ18	３Ａ区ＳＩ27	３Ｂ区ＳＩ11	３Ｂ区ＳＩ４
	３Ｂ区ＳＩ３			
９世紀中葉・後半	３Ａ区ＳＩ26	３Ａ区ＳＩ29	３Ａ区ＳＩ28	３Ｂ区ＳＢ２
	３Ｂ区ＳＤ１	３Ｂ区ＳＤ３	３Ｂ区ＳＤ４	３Ｂ区ＳＢ１

このことから、３Ａ・Ｂ区は８世紀後半から竪穴建物群が営まれ、生活域となり、９世紀中葉から掘立柱建物が造られていく。しかし、新屋敷遺跡で検出された掘立柱建物は数が少ないことから、掘立柱建物が作られ始めた時期からは、集落は減退していくものと思われる。

（２）３Ｃ区の古代遺構

３Ｃ区の竪穴建物の時期については、あまりにも建物の重複が多く建物の作成前の整地の際の遺物の流れ込みが多かったのではと推察される。遺物から推定される遺構の時期が不明確になっていると思われるため、建物の時期的な位置づけは控えさせていただきたい。しかし、「萩尾周辺」で生産されたと思われる須恵器椀（第58図13)、高台が底部端からやや中央に寄った位置から、細長くやや高い高台を持つ須恵器椀（第58図３)、外面に自然釉がつく須恵器、黒色土器Ａ椀、（第58図２)、底部内面端から体部が伸びている土師器杯（第57図14、15）など、８世紀前半の時期の遺物から、９世紀中葉・後半の遺物まで出土する。24x・グリッドでは、ＳＤ３が埋まってから建物が何度も建てられる。後述するが、ＳＤ３が埋まった時期が８世紀後半と思われるため、８世紀後半よりも前の遺物に関しては、ＳＤ３を埋める際に、他の場所から持ち込まれた土に含まれていた遺物なのではと考えられるが断言はできない。

ＳＤ３は、調査の成果の遺構・遺物に報告があるが、ここでは、人為的に埋められた埋土の主な遺物を層位ごとに見ていく。

埋１～埋２層の遺物は第62図17～32である。杯の体部が直線的でやや立ち気味であることや、椀の高台の付き方から８世紀後半の遺物が多い。埋３層の遺物は第63図１～８である。３は「萩尾型」椀である。５は擬宝珠つまみがつき、口縁端部が短く折れている。

埋３～埋４層の遺物は第63図９～11である。11は灰褐色の鉢で、底部に丸みを持ち、体部はほぼ直立している。

埋４～埋５層の遺物は第63図12～14である。14は外面に灰釉が多くつく。上下するものもあるが、埋３～埋５層は８世紀前半から８世紀後半の遺物が多い。

埋６層の遺物は須恵器椀（第63図17）であり、高台の付き方から７世紀後半から８世紀初頭のものと思われる。埋１層から埋６層までの遺物を見てみると、時期的には、７世紀後半から８世紀後半までの遺物が出土することから、人為的に埋められた時期は８世紀後半の可能性が高い。

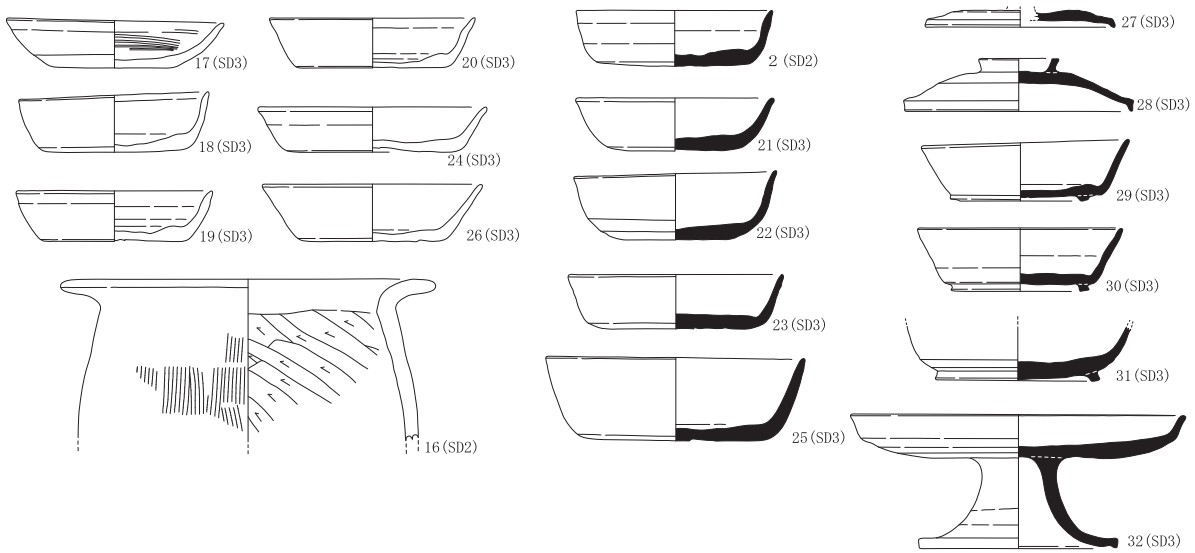
ＳＤ３が切り通しとして機能していた時期を考えてみると、埋８層より下位の層は自然堆積であることから、その直上層の埋６層（埋７層は下部の部分的な層のため）が硬化面ではないかと考えられる。埋６層からは上述の７世紀後半から８世紀初頭の須恵器椀（第63図17）が出土する。また、層位は不明であるが、埋土一括として身受けの返しがつく須恵器蓋（第64図14）もあり、この遺物も７世紀後半から８世紀初頭のものである。このことから溝が切り通しとして使われ始めた時期は、７世紀後半から８世紀初頭ではないかと思われる。しかしながら、須恵器椀（第63図17)、須恵器蓋（第64図14）も明確に硬化面の遺物とは言えないため推定の域を超えない。

ＳＤ３が埋められた後、そこに何度も竪穴建物が建てられる。３Ｃ区はその多くを撹乱で壊されているため、他の箇所も24x・グリッドと同じように建物が集中しているのかは不明である。

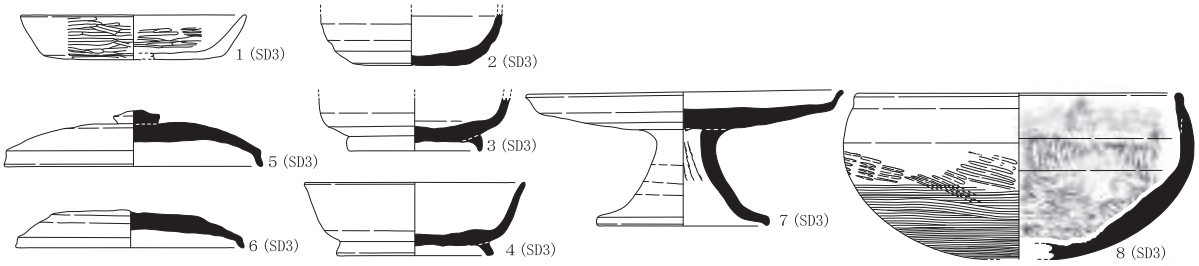
これらのことから、３Ｃ区は、７世紀後半から８世紀初頭に西側に傾斜する切り通しが造られるが、８世紀後半に人為的に埋められ、その上に竪穴建物が建てられる。そこで、何度も建替えが行われるが、その西側にＳＤ２が掘られる。ＳＤ２が埋められた後、再び竪穴建物が建てられていくと思われる。

３区竪穴建物集中区出土遺物《抽出》（第 57 図 14、15、第 58 図２、３、13）

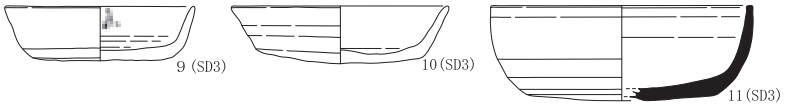
３C 区ＳＤ３ 埋１～埋２層（第 62 図 17 ～ 32）



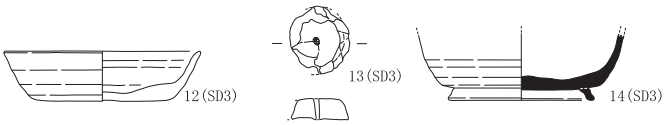
３C 区ＳＤ３ 埋３層（第 63 図１～８）



３C 区ＳＤ３ 埋３～埋４層（第 63 図９～ 11）



３C 区ＳＤ３ 埋４～埋５層（第 63 図 12 ～ 14）



３C 区ＳＤ３ 埋６層（第 63 図 17、第 64 図 14）

（3）墨書、刻書土器について

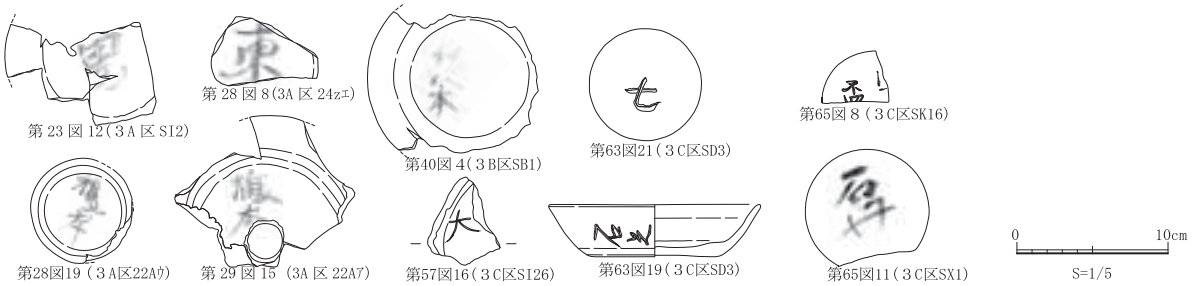
３区では、墨書・刻書土器がこれまで報告してきた４区、５区、６区、７区と比べ、比較的多く出土した。特に遺構内、また包含層中で『榎本』または『複本』と思われる文字が入る墨書土器が、土師器で８点、須恵器で１点、刻書で入る土器が須恵器で１点出土した。『榎本』または『複本』で熊本県内の旧地名、寺社等を探してみたが見つからず、その意図、意味はよく分からない。しかし須恵器杯に刻書で『榎』または『複』の文字が入っているものもあることから、生産地でその文字の意図、意味を認識していることになる。

他に、墨書土器『男』、『東』、『石□（井？）』、刻書土器『石足？』、ヘラ書き土器『七（鏡字のものもある）』、『盃□』の物も出土した。

墨書・刻書土器は土師器、須恵器ともに８世紀末から９世紀のものが大半を占める。破損しているものが主でその破損は人為的打ち欠きに因るものか、廃棄時の破損なのかは判断がつかなかった。

これらの遺物出土は、識字者層の存在を示唆できるものである。３区では、掘立柱建物が２軒検出でき、SB１の柱穴Ｐ４内から土師器杯（第40図４）が出土したことから、何らかの地鎮に使われていたものとも考えられる。

調査区出土 墨書、ヘラ書き、刻書《抽出》



今回の報告でも多くの不明な点、疑問点が残った。過去の調査報告を振り返り、また、今後の調査報告を待ち、改めて検討したい。

区	遺構	書種	種別	器種	場所	内容	図版
3A	SI 2	墨書	土師器	杯	外底面	男	23-12
	SI 2	墨書	土師器	杯	外底面	榎	23-14
	SI 2	墨書	須恵器	椀	外底面	?	23-20
	SI 7	刻書	土師器	杯	外面	七	23-13
	SI 5	刻書	土師器	椀	外底面	裏返しの七	23-15
	SD 2	墨書	土師器	杯	外底面	複？	28-4
	SD 2	墨書	土師器	杯	外底面	榎本？	28-5
	23zイ	墨書	土師器	杯	外底面	１文字きへん	28-6
	23zア	墨書	土師器	杯	外底面	２文字	28-7
	24zエ	墨書	土師器	杯	外底面	東	28-8
	24zア	墨書	須恵器	杯	外底面	榎本？	28-9
	26xア	墨書	土師器	杯	外底面	?	28-10
	24zイ	刻書	須恵器	杯	内底面	榎	28-12
	22Aウ	墨書	土師器	椀	外底面	榎本	28-19
	SP 169	刻書	土師器	杯	内底面	＋	29-4
	SP 121	墨書 線刻	土師器	杯	外底面 内底面	榎本 ×	29-5
	撹乱	墨書	土師器	杯	外底面	?	29-6
	撹乱	墨書	土師器	杯	外底面	榎	29-7
	22Aア	墨書	土師器	蓋	天井部	榎本	29-15
3B	SI 4	墨書	土師器	杯	外底面	?	34-2
	SB 1	墨書	土師器	杯	外底面	口本	40-4
3C	SI 36	刻書	土師器	杯	外底面	七	57-12
	SI 47	刻書	土師器	杯	外底面	×	57-13
	SI 26	刻書	土師器	杯	内底面	大	57-16
	SI 36	刻書	土師器	杯	外底面	七	57-17
	SD 2	線刻	土師器	杯	外底面	?	62-7
	SD 3	線刻	須恵器	杯	外底面	×	62-21
	SD 3	線刻	須恵器	杯	外底部	×	63-2
	SD 3	刻書	土師器	杯	外底面	○に×	63-12
	SD 3	刻書	土師器	杯	外面	石足	63-19
	SD 3	刻書	須恵器	椀	外底面	七	63-21
	SD 3	刻書	土師器	杯	外底面	×	64-7
	SD 3	刻書	土師器	杯	外底面	×	64-8
	SK 16	刻書	土師器	椀	外底面	盃口？	65-8
	SX 1	墨書	須恵器	杯	外底面	石口？	65-11
	24xア	刻書	須恵器	椀	外底面	七	70-5
	調査区内	墨書	土師器	杯	外底面	?	70-2

参考文献

建設省河川局　２０００　「白川水系河川整備基本計画」

熊本市新熊本市史編纂室　１９９６　「新熊本市史　史料編　第一巻　考古資料」

網田龍生　１９９４　「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

網田龍生　１９９４　「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究Ⅳ－熊本大学文学部考古学研究室創設２０周年記念論文集－』　龍田考古会

網田龍生　２００３　「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ－熊本大学文学部考古学研究室創設３０周年記念論文集－』龍田考古会

網田龍生　１９９３　「古代肥後の土器」『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　１９９４　「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会

木村元浩　２００２　「大江遺跡群」　熊本県文化財調査報告第２１１集

馬場正弘　２００６　「大江遺跡群Ⅲ」　熊本県文化財調査報告第２３２集

松本健郎他　１９８０　「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県調査報告第４８集　熊本県教育委員会

美濃口雅朗・諸富国博　２００７　「大江遺跡群Ⅵ」　熊本市教育委員会

網田龍生・美濃口雅朗・金田一精・林田和人・岩谷史記　２００７　「二本木遺跡群Ⅱ」　熊本市教育委員会

網田龍生・美濃口雅朗　１９９９　「新屋敷遺跡第１次調査区」「新屋敷遺跡第４次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１０年度―』熊本市教育委員会

林田和人　２００３　「新屋敷遺跡第１１次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１３・１４年度―』熊本市教育委員会

網田龍生　２００４　「新屋敷遺跡第２次調査区」「新屋敷遺跡第１２次調査区」「新屋敷遺跡第２７次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１５年度―』熊本市教育委員会

松村真紀子　２００５　「新屋敷遺跡第１３次調査区」「新屋敷遺跡第１６次調査区」「新屋敷遺跡第３４次調査区」「新屋敷遺跡第３５次調査区」「新屋敷遺跡第３６次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１６年度―』熊本市教育委員会

岩谷史記　２００６　「新屋敷遺跡第４１次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１７年度―』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　２００７　「新屋敷遺跡第２６次調査」「新屋敷遺跡第３３次調査」「新屋敷遺跡第４２次調査」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１８年度―』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　２００８　「新屋敷遺跡第１５次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成１９年度―』熊本市教育委員会

美濃口雅朗　２０１０　「新屋敷遺跡第４７次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成２１年度―』熊本市教育委員会

豊崎晃一　２０１２　「新屋敷遺跡第４８次調査区」『熊本市の文化財　第１２集　熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成２３年度―』熊本市教育委員会

文化庁編　２０１０　『発掘調査のてびき』　同成社

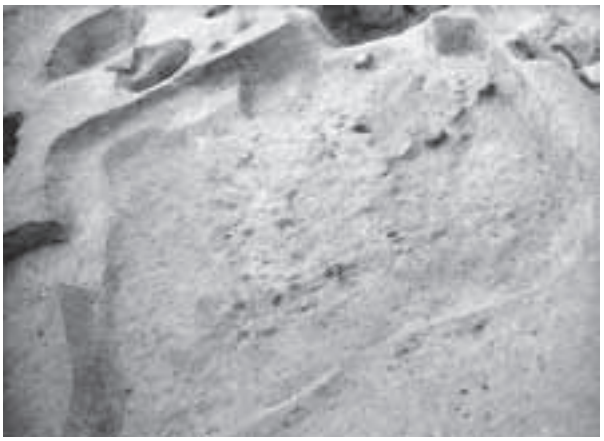
荒木志伸　１９９９　「墨書土器にみえる諸痕跡について」『墨書土器の基礎的研究』お茶の水史学 43 号

伏見沖敬編　「書道大辞典」上、下　角川書店

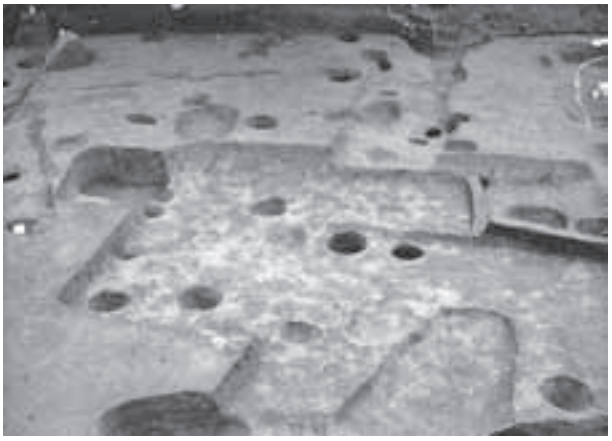
写真図版

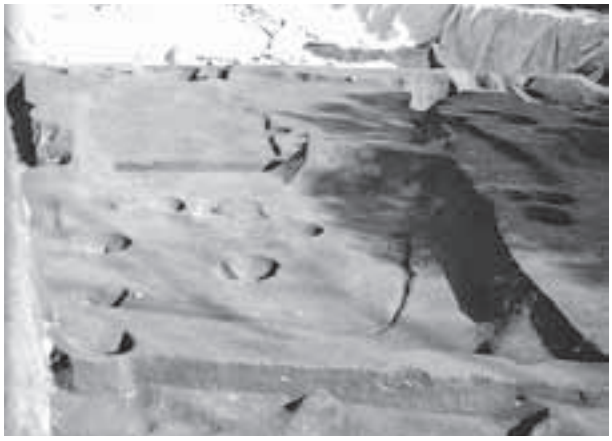
図版 1

3A区 SI1 完掘状況


3A区 SI2 硬化面出土状況

3A区 SI2・SI6 完掘状況


3A区 SI5・SI6・SI7 完掘状況


3A区 SI17 完掘状況

3A区 SI18 完掘状況

3A区 SI19 完掘状況

3A区 SI21 完掘状況

3A区 SI25 完掘状況

3A区 SI26・SI27・SI28 完掘状況

3A区 SI32 完掘状況

3A区 SD2 完掘状況

3B区 SI2 かまど遺物出土状況

3B区 SI2 硬化面範囲

3B区 SI2 完掘状況

3B区 SI2 かまど支柱残存状況

図版 3

3B区 SI3 遺物出土状況

3B区 SI3 完掘状況

3B区 SI4 遺物出土状況

3B区 SI4 完掘状況

3B区 SI7（3A区 SI10）遺物出土状況

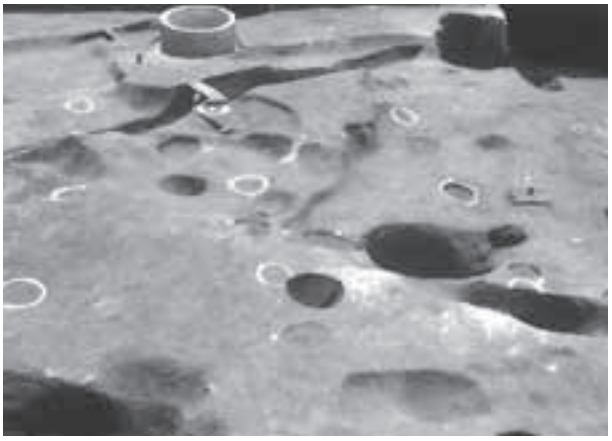
3B区 SI7（3A区 SI10）遺物出土状況

3B区 SI7（3A区 SI10）完掘状況

3B区 SI11 完掘状況

3B区 SB1 検出状況

3B区 SB1 P4 遺物出土状況


3B区 SB2 検出状況

3B区 SK5 鉄鏃出土状況

3B区 SD1 完掘状況（北東から）

3B区 SD2・SD3 完掘状況（北東から）

3B区 SD4 遺物出土状況（北西から）

3C区 SI1 かまど検出状況

3C区 SI6 かまどそで・燃焼部出土状況

3C区 SI2・SI6 完掘状況

3C区 SI9 土層断面

3C区 SI14 遺物出土状況

3C区 SI26 かまど遺物出土状況

3C区 SI36 土層断面

3C区 SI30 かまど粘土出土状況

3C区 SI16 遺物出土状況

3C区 SI11 遺物出土状況

3C区 SI35 かまど内遺物出土状況

3C区 SD3 鉄製品出土状況

3C区 SD3 完掘状況

3C区 SD2 完掘状況

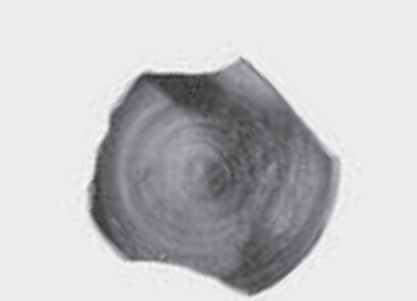
3C区 SK6 土層断面

3C区 SK14 土層断面

図版 7

23-1

23-2



23-3

23-4

23-5

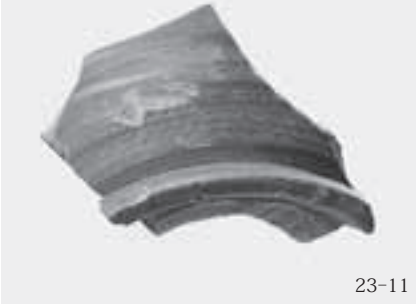
23-6

23-7

23-8

23-9

23-10


23-11

23-12

23-13

23-14

23-19

23-25

23-15

23-20

23-26

23-21

23-27

23-16

23-22

23-28

23-17

23-23

23-29

23-18

23-24

24-1

図版 9

24-2

24-6

28-4

24-3

24-7

24-8

28-5

28-1

28-8

24-4

28-2

24-5

28-3

28-6

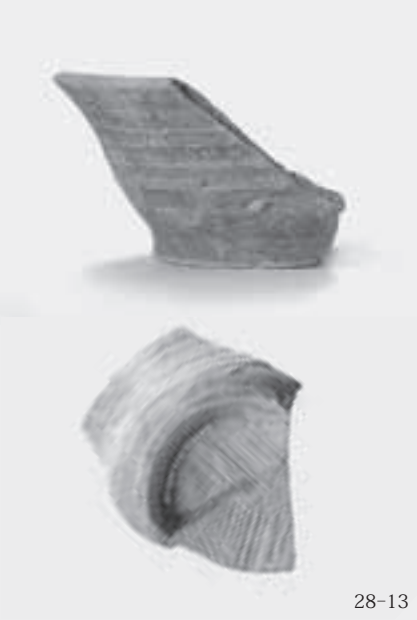
28-7

28-12

28-17

28-18

28-9


28-13

28-19

28-10

28-11

28-15

29-1

28-14

28-16

29-2

29-3

29-7

29-12

29-4

29-8

29-13

29-9

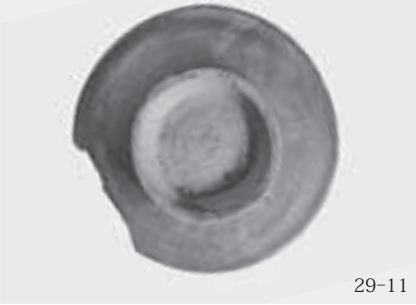
29-14

29-10

29-5

29-15

29-6


29-11

29-16

29-17

29-23

34-4

29-18

34-1

29-19

34-2

34-6

29-20

34-3

34-7

29-21

34-8

29-22

34-5

35-1

図版 13

35-2

40-2

35-3

40-3

40-6

35-4

40-8

35-5

40-4

40-9

35-6

40-5

57-1

40-1

40-7

57-2

57-3

57-7

57-11

57-4

57-8

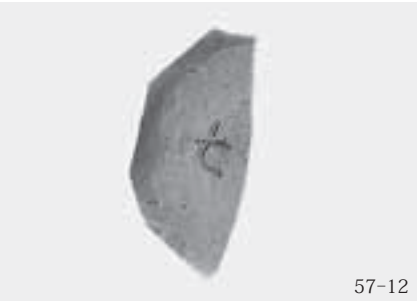
57-9

57-5

57-10

57-13

57-6


57-12

57-14

57-18

57-15

57-19

57-22

57-23

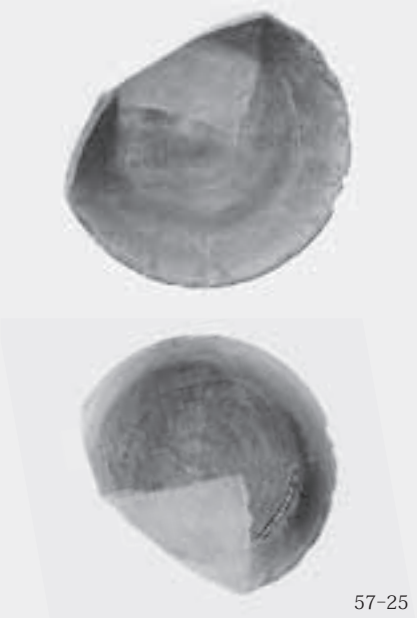
57-16

57-20

57-24

57-17

57-21


57-25

58-1

58-2

58-8

58-14

58-3

58-9

58-15

58-4

58-10

58-16

58-5

58-11

58-17

58-6

58-12

58-18

58-7

58-13

58-19

58-20

58-26

58-32

58-21

58-27

58-33

58-22

58-28

59-1

58-23

58-29

58-24

58-30

62-1

58-25

58-31

62-2

62-3

62-8

62-14

62-9

62-15

62-4

62-10

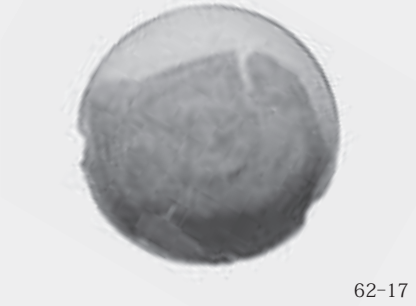
62-16

62-5

62-11

62-6

62-12


62-17

62-7

62-13

62-18

62-19

62-24

62-20

62-25

62-29

62-30

62-21

62-26

62-31

62-22

62-27

62-32

62-23

62-28

63-3

63-1

63-6

63-11

63-7

63-12

63-2

63-8

63-13

63-4

63-9

63-14

63-5

63-10

63-15

63-16

63-22

64-4

63-17

63-23

64-5

63-18

63-24

63-19

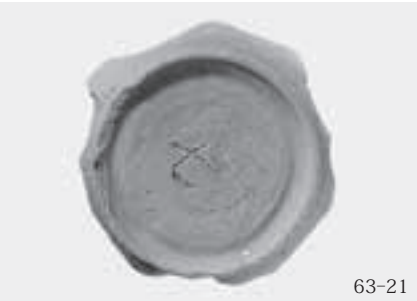
64-1

64-6

63-20

64-2

64-7


63-21

64-3

64-9

64-8

64-13

64-14

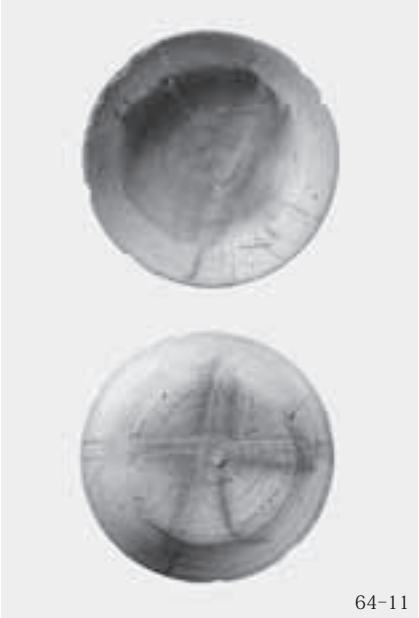
64-19

64-20

64-10

64-15

64-21


64-11

64-16

64-22

64-17

65-5

64-12

64-18

65-6

65-7

65-8

65-9

65-10

65-11

65-12

70-1

70-2

70-3

70-4

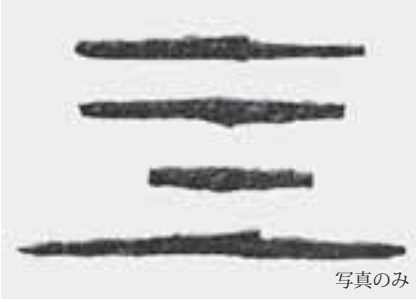
70-5

70-6

70-7

70-8

70-9


写真のみ

あとがき

新屋敷遺跡３の報告書が完成しました。

今回の調査箇所は、私の初めての現場調査で、多くの方々に調査の難しさを教えてもらった場所です。多くの方々にいろいろなご助言をいただき調査することができました。

今回の報告書作成では、改めて埋蔵文化財の現場での調査の大切さを感じました。また、３Ｃ区は現場を調査した上村文化財保護主事が調査の成果を執筆し、水上が全体のまとめを行ったのですが、調査者の思い、また遺跡を十分に伝えることができたのか不安であります。

この報告書が、地域の歴史を探るための基礎資料として、埋蔵文化財に対する理解と保護に役立てれば幸いです。

発掘調査時、整理報告書作成時とたいへん多くの方にご指導、ご協力をいただきました。おかげで何とか調査から報告書の作成まで行うことができました。本当にありがとうございます。

最後に、本文中で触れることができなかった実際の作業に携わられた方々の名前を記して、感謝の意を表したいと思います。（敬称略・五十音順）

発掘調査

石倉武夫　井手美幸　今村明美　江藤恵子　岡本久三夫　小田須磨子　川口哲男　河野義勝
河原良江　栗崎強　児玉洋平　後藤まや　笹木薫　白石美枝子　柴田やよひ　新福克也　田上次敏
田上利子　田上文男　土島安臣　鐵戸亮子　永溝久　中村孝昭　西本裕　林毅暢　早田咲百合
外尾和之　増田由美　松下義章　松本晋治　三宅幸生　宮嶋徹　宮本厚　森川征子　森川護　森田登
森本敏夫　米光司朗　羅美鳳

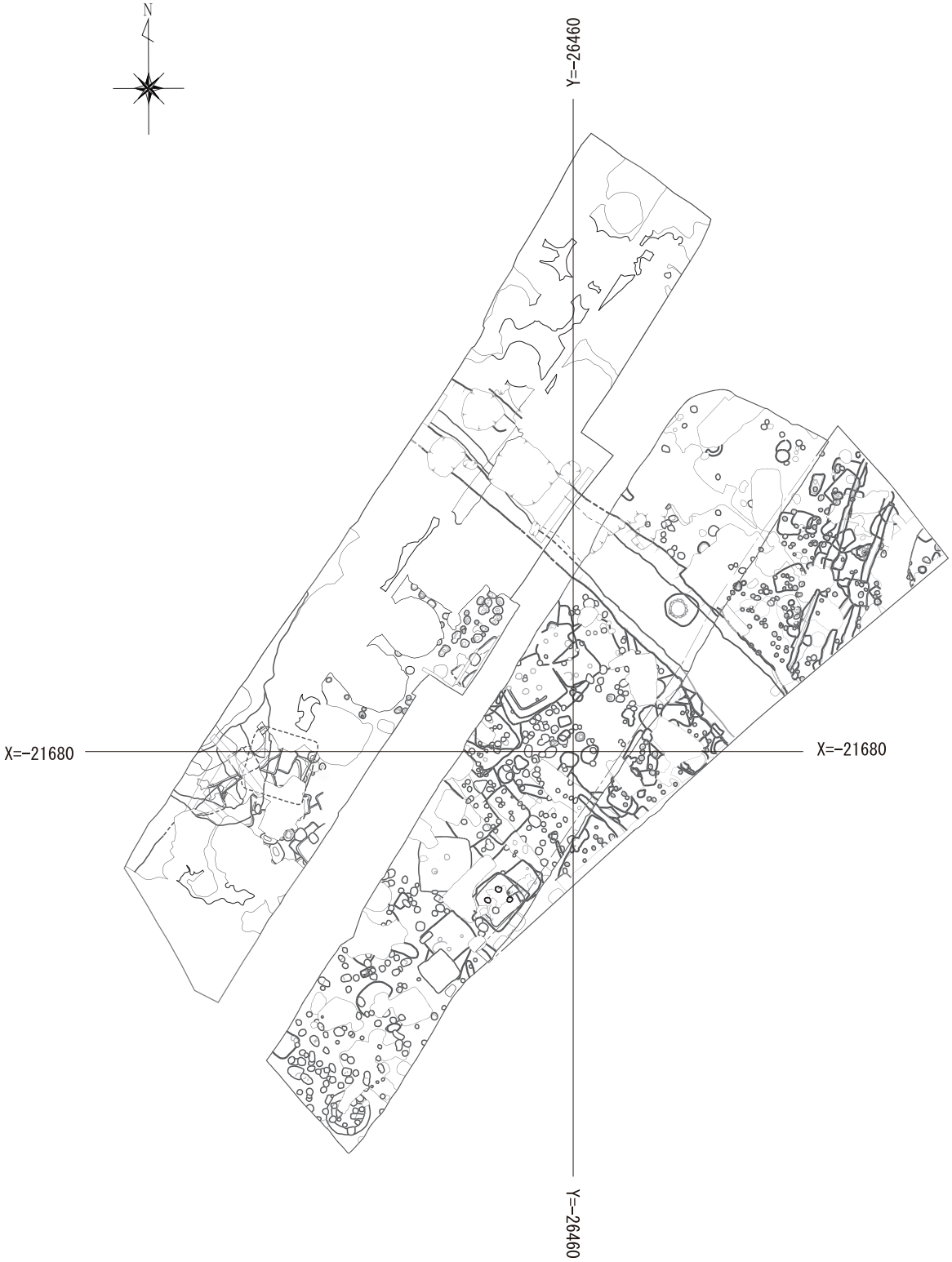
整理報告書作成

（1 次整理）

愛甲貴子　井王直厳　栗崎香代子　古閑知子　田中さつき　永山邦子　橋本英子　溝口健造

（2 次整理）

川上薫　坂本貴美子　立石美代子　本田美咲　村田千穂　結城あけみ



第 71 図　座標測地点図

報告書抄録

ふりがな	しんやしきいせき
書名	新屋敷遺跡３
副書名	国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 298 集
編著者名	水上正孝・前田佳代子・唐木ひとみ
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒８６２－８６０９　熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号 ℡０９６―３８３―１１１１（代）
発行年月日	２０１４年３月３１日
資料の保管場所	熊本県文化財資料室　〒 861-4215 熊本県熊本市南区城南町沈目1677 ℡ . 0964-28-4933

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しんやしきいせき 新屋敷遺跡	くまもとけんくまもとし 熊本県熊本市 ちゅうおうくしんやしき 中央区新屋敷 １丁目	201	282	32° 48′ 15. 030222″	130° 43′ 02. 84999″	〈３Ａ区〉 2006．8.28 ～ 2007．1.18 〈３Ｂ区〉 2008．5.14 ～ 2008．10.3 〈３Ｃ区〉 2010．8.2 ～ 2010．11.18	〈３Ａ区〉 約 756 ㎡ 〈３Ｂ区〉 約 320 ㎡ 〈３Ｃ区〉 約 980 ㎡	国土交通省 白川河川 改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新屋敷遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構	古代須恵器 古代土師器	

要約

新屋敷遺跡は白川中流域左岸に位置する。今回の調査は自然堤防上に立地する。白川河川改修工事に伴い、平成１８年、２０年、２２年度に熊本県教育委員会が発掘調査を実施した。

主に古代の竪穴建物９８軒、掘立柱建物２軒を検出した。竪穴建物の時期は８世紀～９世紀に位置づけられる。出土遺物から、特に８世紀半～９世紀中葉の建物が多い。掘立柱建物の時期は９世紀中葉の建物である。調査区を横断する溝、切り通しの溝を検出した。

平成２６年３月３１日　印刷
平成２６年３月３１日　発行

新　屋　敷　遺　跡　3

熊本県文化財調査報告第２９８集

国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

編集・発行　熊本県教育委員会

〒868-0015　熊本県人吉市下城本町1426-1
印刷　有限会社　ソーゴーグラフィックス

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 298 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 新屋敷遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日